

立命館百年史紀要

第 二十一 号

私立大学　これまでと　これから　歴史との対話

西園寺公望が私塾立命館を創始したのが一八六九年である。中川小十郎が京都法制学校を創立したのが一九〇〇年である。二〇〇〇年に立命館アジア太平洋大学が開設された。

立命館創始一三〇年学園創立一〇〇周年を記念しての学園の式典は、大分県別府市のビーコンプラザを会場にして学園関係者と全国の校友、父母教育後援会の皆さん、自治体をはじめ地域の方々と学園を理解し共感し応援をしてくださる関係機関や経済界の方々を含め多くの参加者を得て、二〇〇〇年五月二〇日に盛大に意気高く開催された。

この立命館の百年の歴史を記録し記憶にとどめておくことを目的として、一九九一年より立命館百年史の編纂事業が開始された。『立命館百年史』は、学園創生期から一九四五年までを『通史一』として一九九九年に刊行し、一九四五五年の終戦の時期から一九七〇年代に至るまでの時期を『通史二』として二〇〇六年に刊行した。そして一九八〇年代から二〇〇六年の時期を『通史三』として二〇一三年に刊行することとなった。

立命館百年史の編纂事業は、『通史三』の刊行をもって一応の区切りをつけることができる。なお残された『資料編』などの編纂の業務が引き続き二〇一三年度から取り組まれることになる。

この『立命館百年史』全三巻の対象となった時期は、日本と世界の大激動の時代でもあった。『百年史』それぞれの巻には、時代の状況をつかみ取って格闘しながら学園創造の営みを連綿と積み重ねてきたことが記述されている。学園の百周年が盛大に意気高く開催されたと前述したが、どのような組織であっても歴史の節目を盛大に発展の中で迎えることができる喜びほど大きいものはないであろう。立命館にはそれを可能にしてきた歴史の土壌がある。

もちろんその学園発展の過程は時には苦渋を味わう時期もあったし、学園を取り巻く環境や条件の苛烈さの中で学生、教職員が翻弄されながらも呻吟し、前進しようと懸命な努力を払ってきた時期も多くあった。むしろ私学立命館の百周年の歴史の大半が立命館関係者の苦闘の歴史でもあったと言えるかもしれない。我が国の私学政策の歴史は、最近もOECDの二〇一二年のレポートで強調されているように、諸外国との比較において教育費の私的負担が高すぎることで、その上さらに「官尊民卑」とも揶揄されるような私学軽視の予算配分とが重なるという意味で二重の制約状況に特徴がある。このような状況を背景にして私学立命館の百年の学園創造の成果や、それを支えた学園財政の基盤強化があるのである。それらは何も易々と仕事を片付けてできたのでもなく、たんなる僥倖としての「時の利」や「地の利」や「人の利」によってできたものでもない。

この立命館関係者の学園創造の取り組みの営為についていえば、それはやはり時々の時代状況の中で、

その時代の制約を受け、時代性を刻印されながらの学園の自主的、能動的取り組みの営為であった。したがって、成果とともにその成果を帰結させた学園関係者の取り組みの営為それ自体をも時代性を刻印されたものとして、客観的に時間の経過の中で評価され、次の歴史的な環境の中の学園創造の営為としての教訓としなければならぬものであろう。まさに歴史は「現代と過去との対話」なのであろう。

たとえば『通史二』の時代では、いわゆる学園紛争の時期がそうであろう。この時期には、学園破壊の全国的な嵐の中で、多くの学園構成員が繰り返し繰り返し学園のあり方について議論し、日夜を分かたず身命を賭すかのように学園を守り創造してゆくためにそれぞれに奮闘した経験を持っている。また、学園紛争を経過した後でも立命館の歴史の中で疑いもなく誇りうることは、学ぶ主体たる学生諸君の代表と大学の機関を代表する者たちが、多くの教学課題や学園課題に関して各学部で現場で、また全学協議会や学園振興懇談会などの場で、議論し、政策を固め、全学で実践し、そして実践過程を振り返って不十分さや予想通り達成できた面などを確認し合いながらさらに前進への取り組みを継続していった経験であろう。この学生との議論の経験でも必ずしも順風満帆であった側面ばかりではない。研究を担わなければならない教員や、教育にもっと時間を割かなければならないクラスからは、学園挙げての熟議のために多くの時間を費やすことに対する強い批判が繰り返されてきたこともある。確かに研究者としての大学教員にとっては時間が何よりの希少な資源である。学園運営の効率のよさという基準、民主主義を徹底させようという基準、研究者にとっての希少な資源である時間効率という基準などを、すべてバランスよく満たす学園運営はなかなか困難である。あるいは不可能なのかもしれない。こうした経過の中で、学園の常

任理事会に相当する代表と教職員組合とが激論を交わして学園のありようを固めていった経験も持っている。

同じ『通史二』の時代には、学園の学費のあり方を巡っての全学挙げての議論の結果として、一九七九年の全学協議会で学生、院生、教職員組合と、また生活協同組合を加えて学内理事会との間で長く厳しい議論を展開した経験がある。この天野和夫総長の時代に学園の新しい基本のあり方について、言わばスライド制学費方式に定式化された立命館方式が生まれ、大きな転機となった。この七九全学協当時の時代状況は世界的なインフレーションの時代であり公的な領域での料金にもインデクレーションが支配する時期であった。現代のデフレーションの時代とは大きな差がある。

『通史三』にはそれまでの立命館の歴史には見られなかった特徴がある。それは滋賀県と草津市、そして大分県と別府市などの自治体との連携である。これは私学関係者が取り組んできた国庫負担増の取り組みの、日本が失われた一〇年と呼ばれていた一九九〇年代における立命館独自の展開形態である。こういった私立大学と自治体との大型の公私協力は、二一世紀に入った今日の地方自治体の状況では実現可能な取り組みである。もう一つ、立命館が国の私学政策の貧困な状況下で工夫して取り組んだのは、校友の活躍されている経済界との連携による立命館支援策を打ち立ててきたことである。これらの時代性を帯びた取り組みの姿・形も歴史的な評価の対象となるであろう。

『通史三』の編纂過程では、記述のあり方を巡って右のような議論があり、編纂室会議や編纂委員会

常任委員会の場合でも、執筆担当の教職員の皆さんとの間でも、編纂委員会の関係者の方々とも多くの意見が交わされてきた。『通史三』の場合は時間経過から見ると、言わば「同時代史」とも言えるような二〇〇六年までの学園の取り組みが対象となっているからである。

『通史二』の総長の序には次のような一文がある。すなわち、「一般に学園の正史という名のもとに、こうした戦後史を生きてきた当事者が、現在の関心から未来への展望をもちつつ過去を振り返り語ることは、歴史の語り手がこちら側にいて傍観者的に歴史を向こう側において、それを単なる対象として客観的にみることはないし、また学園を愛するあまりその熱情を吐露して、主観的に歴史を正当化するものでもない。単に客観的な歴史は歴史ではなく歴史として存在しないし、単に主観的な歴史は独善と誤謬に満ちている。歴史のなかに生きるものがどのように歴史を記述できるのかという問いは、歴史の記述と理解に固有の避けることのできないアポリアである。もちろんこの『通史二』がその難問を解決したという自負はない。しかし、学園が絶えず戦後社会と真摯に向き合ってきたという姿勢と同じように、この『通史二』もまた、歴史記述のそうしたアポリアを真剣に引き受けた多くの人の手による共同作業へて、ここに上梓することができたこと、このことは学園の誇りとしたい。」といった記述である。

ここに引用した文言は歴史家としての当時の長田豊臣総長によるものであり、含蓄のある文言である。『通史三』の場合は、このような難問に『通史二』の場合以上に、妥当する条件がある。それは、多くの執筆者は歴史事象と同時代であるだけでなく当事者そのものであるからである。学園の創造に取り組んできた多くの当事者からなる執筆陣の記述は、この意味でどうしても客観的なものにはなりえようもない

ものもあろう。したがって、主観的・独善的な記述に陥る危険性のほうがよほど大きいことであろう。このことを百年史編纂室は十分に理解をして仕事に励んできたつもりである。結果がいかなうものに映るのかはこれを評するものに委ねざるを得ない。

百年史編纂室がその職務のおおかたを終えるにあたって以上のような自己弁明を残しておきたい。

そのようなわけで、この『百年史紀要』も本二十一号をもってその紀要としての使命を大方終えることになる。そこで、『通史三』の刊行と同時期に出来上がることになるこの『百年史紀要』二十一号では、学園の「これまで　これから」を現在の学園のいくつかの重要な部署でそれぞれの課題に注力されている方々の目から見てどのようなものになるかを語っていただくことにした。御多忙な業務を割いて出席して語ってくださった皆さんにこの場で厚く御礼を申し上げたい。

また、この百年史編纂室で膨大な資料を整理・管理し、執筆活動もし、原稿の依頼から始まって最終校正に至るまで随分と御苦労の多かった『通史一』から『通史三』までの業務を担ってきた歴代の編纂室の課長の経験者の方たちにそれぞれの苦労話を纏めていただいた。これはこれで百年史の貴重なひとこまであり記録である。編纂事務の御苦労に改めて感謝の意を表し、同時に原稿を執筆くださったことに対して御礼を申し上げたい。

また、立命館が誇る学生諸君の課外活動の中でも特筆に値するものの一つに、体育会のアメリカンフットボール部の活動がある。もちろん全日本大学女子駅伝で三連覇を経験し、通算二九回中六回の優勝経験

のある女子陸上部の活躍がすごいことは言うまでもない。他にも陸上ホッケー部など多くの優れた実績を残す課外活動があるが、ここでは長年にわたってパンサーズの指導を担当して大学日本一という大きな戦績を残し、社会人チームにも勝利し日本一の成績を記録し、その後の活躍の大きな礎にもなっている活動を記録しておくために、平井英嗣氏に特別寄稿をしていただいた。御苦労に敬意を表し、御礼を申し上げます。

「私立大学 これまで これから」と「附属校 これまで これから」の二つの座談会では、『通史三』が対象とした時代の立命館学園の改革について大いに語っていただいた。これらの座談会の背景的な事情についてこの巻頭言でも少し言及をしておくことにする。

高等教育の問題では、文部科学省が中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」（二〇一二年八月二八日）を出し、また国家戦略会議も「社会の期待に応える教育改革の推進」、「グローバル人材育成戦略」（いずれも二〇一二年六月四日）を発表した。最初の中央教育審議会答申では、これからの時代が個人にとっても社会にとっても、予測困難な時代に入ると考えている。そしてこの二〇年間の大学改革の経験を踏まえ、これからの大学のあるべき姿を求めようとしている。そして結論は、大学改革は待ったなしの改革であり、四年制大学の質的な転換が必要であるとし、学士課程教育の質を改革しなければ日本社会は前進できないという認識が示されている。待ったなしの迅速な改革で育成すべき人材すなわち教育の目標は四点挙げられている。予測困難な社会の中で、一、答えのない問題を

解く批判的合理的な思考力としての認識する力。二、人間としての自らの責務を果たし、他者に配慮することができ、チームワークを発揮できる力、リーダーシップ力。三、総合的かつ持続的な学習経験からくる力としての想像力と構想力。四、想定外の困難に際して的確な判断をする基礎としての教養力、知識力、経験力、などである。

これらはいずれも尤もであるが何人かの人々の考える重要な人間としての力を纏めて抽象的に示せばそのようなのであろう。だがこれを四年間でミニマム一二四単位を卒業要件とする学士課程教育でどのように修得させるのかに関する具体的な提言は見られない。具体的に示されているのは、学生の授業以外での学習時間を増やすことがカギとなるということだけである。今日の学生が置かれている状況の中でどのようにして学習時間を増大させるかについて具体策はない。当の学生自身は、アルバイトや課外活動やインターシップやアクティブ・ラーニングや三回生からの就活などで忙しすぎるといわれる現状がある。あるいは学生生活の送り方について工程表に従って勤勉に着々と学びの過程を進めていくような側面と、自分の頭で考えて変化に対応して判断し構想し決断していくような学習の側面とが共存しているようである。

答申の大学への期待にはもう一つの側面がある。これからの日本と世界の予測困難な状況の中で我が国の未来について確かなことが語り得ないでいる。我が国固有のイノベーションであるとか、我が国固有の価値などに依拠して、世界に発信しアイデンティティを形成しようと考えている。言わばクールジャパンを探索、創れというわけである。大学は地域社会のコアになって社会の前進のエンジンたれとも言っている。

る。

これらの答申を眼光紙背に徹して読んでみても何か改革のヒントが明らかになるとは思えない。しかし尤もなことが多く書かれてはいるので議論に値するものではあろう。これまでの文部科学省の政策の変遷は、きつい規制による許認可行政の時代から、規制緩和、自由競争促進的な政策へと推移してきた。高等教育機関の基礎的条件確保充実のために必要な経費に対して、ごく一部に限り助成してきた私学経常費助成の予算を非効率だと判断し、薄くしてきた。私学への国の経常費助成は削られ続けてきた。その代替策として科学技術振興策、大学での知的所有権の獲得につながる研究、あるいは大型のイノベーションを創成できそうな研究などについて二一世紀COEだとか、グローバルCOEなどと呼ばれる少数精鋭型の競争的資金配分型プログラムを推進し、ここに予算配分をシフトさせてきた。教育については、グッド・プラクティス(GP)や、グローバル人材育成プログラムなどのユニークな教育上の取り組みを支援するということで教育面でも競争的な予算配分にシフトしてきた。これらに関するこれまでの政策の評価や反省は今回の答申では述べられていない。それがよい政策としての側面を有してはいても、場当たり的ではなかったのか、あるいは系統性があつたのかどうか、アウトカムはいかなるものであつてどのように測つたのかも分からない。それで大学教育の質的転換を大急ぎの課題であるとして、大学関係者に一刻の猶予も許さない構えだけが見える。日本の財政が世界でも類のない高い比率で国債残高を抱え、税収が増えない状況下で大学人に教育予算と私学への国庫負担の増大を期待できなくさせている。この組み立ては初等・中等教育でも同じである。

大学の教育・研究の行政あるいは政策は短期的・即効的なものばかりを追い求めて市場競争原理で誘導するような内容ばかりではないはずである。国の将来のありようにとつて初等・中等教育から高等教育までの教育のありようが大きな意味を持つ。それは国の経済成長や狭義の国力に従属し奉仕すべき性格のものではないのかもしれない。よい教育をし、人が育つこと自体が目標にならなければならないのかもしれない。かつてイギリスの首相が国の重点政策として三つあると述べた事があり、それは第一に教育、第二に教育、第三に教育だ、というのである。日本でも政治家は、この姿勢から学ぶべきことがあると言えよう。国のあり方を問い直すような財政危機の時代こそ、この見地が必要なのであらう。

立命館での大学における教育・研究の取り組みは、中教審答申に書かれていることのほとんどを主体的・先行的に実践してきているともいえる。初等・中等教育でもそうである。立命館にとつての問題はそういう改革の実践を着実に定着させる取り組みを力強く継続させることであり、より多くの成果を上げていくことであらう。文部科学省の短期的・即効的な政策を超えて、いまこそ系統的で着実な教育・研究の実践が求められているのではないだろうか。そうした内容が今号の座談会では語られた。

『百年史紀要』は前述の通り二十一号でその使命を終えることになるであらう。これまでこの紀要の編纂に携わってくださった多くの方々に感謝を申し述べたい。先ず何よりも立命館学園の歴史をつくる実践渦中にあつて歴史をつくつてこられた多くの教職員と学生諸君に謝辞を申し上げる。そして歴代編纂室の皆さん、室長の皆さん、そして執筆し、寄稿してくださった方々、そして愛読下さった皆さんに心から感謝申し上げたい。

まだ未確定ではあるが、本紀要は、百年史編纂室の立命館 史資料センター（準備室）としての新たな出発に伴い、立命館学園のアーカイブスの紀要として新たな装いと使命で再出発することになるかと思っている。引き続きご支援を賜りますようお願い申し上げます次第である。

立命館百年史編纂室長 甲 賀 光 秀

目次

卷頭言

立命館百年史編纂室長

甲賀 光秀

座談会

「私立大学 これまで これから」

服部 健二、飴山 恵、松宮 孝明、

1

桂島 宣弘、田尻 実、三並 高志、

石坂 和幸、淺野 昭人

甲賀 光秀、奈良 英久、久保田 謙次

「附属校 これまで これから」

上杉 兼司、西川 隆史、江川 順一、

81

小山 寛一

甲賀 光秀、佐々木 雅美、奈良 英久

随想

立命館大学アメリカンフットボール部の歩み（一九七〇～二〇〇一年）

平井 英嗣

147

「百年史編纂を振り返って」――歴代編纂室課長の随想――

西岡 成幸、西川 賢、伊藤 昇、

橋本 弘之、齋藤 重

佐々木 雅美

研究ノート

衣笠キャンパス略史――校地・校舎の変遷について――

久保田 謙次

中川小十郎の休暇観と立命館

田中 有美

研究会記録

中川小十郎研究会活動報告

山崎 有恒

資料紹介

「中川家資料」について――資料調査・整理報告――

田中 有美、寺澤 優、長谷川 澄夫

「立命館史資料センター」（仮称）設置について

百年史編纂室

百年史写真展「懐かしの立命館」

百年史編纂室

資料 『年史』編纂等にかかわる留意点について

百年史編纂室

――『立命館百年史 通史三』の編纂等の備忘録から――

399

397

387

367

351

333

287

197

記録

『立命館百年史 通史三』 編纂記録

二〇二二年度（四月～一月） 史資料受入一覧

百年史編纂室
百年史編纂室

428 426

彙報

二〇二二年度 百年史編纂委員会関係委員等一覧

二〇二二年度 百年史編纂室日誌（抄）

二〇二二年度 百年史編纂室事務局会議開催日

二〇二二年度 『立命館百年史 通史三』 検討会開催日

あとがき

立命館百年史編纂室部長

伊藤

昇

462

座談会

「私立大学　これまで　これから」

日時　二〇一二年一〇月五日（金）九時三〇分～一二時三〇分

場所　立命館朱雀キャンパス　七階七〇三会議室

司会　立命館百年史編纂室長　甲賀光秀

出席者　服部　健二（学校法人立命館　副理事長）

　　鮎山　恵（立命館大学国際部長／国際教育推進機構担当）・理工学部教授）

　　松宮　孝明（立命館大学大学院法務研究科長）

　　桂島　宣弘（立命館大学文学部長）

　　田尻　実（学校法人立命館　総務部長）

　　三並　高志（立命館アジア太平洋大学　事務局長）

　　石坂　和幸（立命館大学　教学部次長）

　　浅野　昭人（立命館大学　学生部次長）

事務局　奈良　英久（百年史編纂室　課長補佐）

久保田　謙次（百年史編纂室）

甲賀 皆さん、それぞれお忙しい中、時間を割いていただきましてありがとうございます。

この座談会のご案内にも書かせていただきましたように、『立命館百年史』の三巻が本年度中に発刊予定です。これで『立命館百年史』もようやく完了を迎えます。今回の『百年史紀要』はこれを記念して、「私立大学の これまで とこれから」について中身のあることをお話いただいたらどうかと思っています。

特に「これから」ということに、ウエイトを置いて語っていただければありがたいと。

その際、これは行政機関のプランを策定するための座談会ではありませんから、日常の実践を俯瞰するようなおつもりで、いろいろとご発言願えればと思っております。

文部科学省・中央教育審議会でも、矢継ぎ早に大部の資料が出て、議論が始まっていますし、やがてもっと展開されるのだらうと思います。

それはそれで念頭に置いて、それを客観的に見るようなかたちで、座談会でいろいろとお話をしていただければありがたいと思います。



問題提起——大学教育の使命が問われている——



甲賀 まず、私からいくつかの問題提起をさせていただきます。

最初に、アメリカやヨーロッパ、カナダでも大きな問題になっている大学経営、財政運営を念頭におきながら、大学の経営や財政ということです。

とりわけアメリカでは、学生ローンの負担が非常に大きくなっていて、それによって正規就業ができずに失業している人が多いです。非正規ないし、派遣的なパートが多いという状況になっているのですね。そのため学生ローンが返せないということがだいたい問題になっていますね。アメリカ大統領選のオバマとロムニーとの間でイシューにもなっています。一方で、アメリカの大学で働く人では、六七%のユニバーシティの教員スタッフがパートタイムで、だいたい年二、一〇〇ドル程度しかもらっていない。この人たちが、アメリカの教育を支えているのですね。これはこれでまたアメリカの大問題になってきています。それで、「大学の使命」とはいったい何なのだと、大学の教育の使命とは何なのだという提起が改めて出されています。

これまででしたら、親たちの世代の社会階層が低い、あるいは高等教育を受けていないために、せめて子どもには高等教育を受けさせたい、そして、社会的ステータスを上げたい、上げさせたいと思うのが当たり前の親としての願いだっただし、実際に社会階層の流動化の機会を提供するのが大学の機能だったわけです。ところが現在は高学歴の親、それから、高所得者階層の子弟ほどいい大学に行って、そうでない人

はそれ以外の大学に行くというような状況が出てきている。親たちの世代を超えるのではなく、親たちのコピーになってしまふ。これも格差の問題ですけれども拡大しています。

わが国の社会も所得の二極分化が見え始めています。アメリカ社会のような問題はこれから顕在化してくる状況だと思うのです。私たちの世代までは、まだ社会階層の流動化としての大学が機能していたと思いますが、これからの子どもたちの世代では、高等教育に送る理由が問題になってくると思うのです。

アメリカでは四年制大学の学費は高くてもつたいたないので、大学をやめてビジネスを起こすというようなキャンペーンも一部に見られます。大学を中退しても社会で成功できるのだというような、アップルのスティーブ・ジョブスもそうだというような話も出だしているということです。そのことが、高等教育の使命、役割というのはいったい何なのだということを、あらためて高等教育関係者や社会に突き付けていると私は思っています。

それで、大学は何をしてきて、何をしなければならないかということですが、これからの社会は一層知識社会化が、ナレッジソサエティー化が進むと言われますが、これからの社会の展望とこれまでの大学教育の間に何かギャップがありはしないかと思っています。測ることができない非認知的スキル、例えば、リーダーシップとか、構想力、そういうことが求められているけれども、いまの高等教育では、測定できる認知的スキルさえ十分に付けられていないということも指摘されていると思うわけです。

中教審答申（二〇一二年八月二八日）が求めているもの

ではこういう中で、どうしたらいいのか。

中教審答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」(答申) (二〇一二年八月二八日中央教育審議会) が言う大学のこれからは、社会そのもの、新たな未来を築くために大学がエンジンの役割とか、ポジティブな役割を果たさなければ、この社会は駄目になると言っています。

大学は新しい未来社会創造にエンジンとして貢献せよという基調の下に、いろんなことが言われています。しかも答申の当初のタイトルにありましたように、「予測困難な時代」の教育というフレーズを使うというのは、どうも初めてだろうと思います。

高等教育というと、答申は、学部教育と言わないで、学士課程教育の質的転換が必要だといっているのです。未来社会を生き抜く力を習得するとか、大学がわが国と世界の安定的、持続的な発展に重要な役割を担うために人材を育成するとか、そういう意味なわけです。答えのない問題を解く力とか、自らの責務を果たす、他者に配慮するチームワーク、リーダーシップ力、想像力、構想力、想定外の困難に際して、的確な判断をするための基礎となる教養力、知識力、経験力、これらが学士力として求められる力だと言っているんですね。

具体的には、研究の側面としてわが国固有のイノベーションを創成することで固有の価値をつくりだし、また教育・人材育成の目標としては新規のものも、既知のものもブラッシュアップして、他の国の異

文化のところへ発信することができるとかですね。あるいは、人材育成の方向として、マネジメント能力とかチームワーク力とか想定外に対応できる判断力の育成、外国の異文化環境での対人業務が重要だとか、海外人材が重要だとか、そういうことを言っています。

それで、これからの大学を考えると、立命館がこれまで取り組んできたことと照らし合わせてみますと、この答申で言われているようなことは、これまで相当議論をし、取り組まれてきています。

教育学部では、基幹時間割の工夫や小集団教育改革、一般教育と専門教育の関係などについての楔形のリキウム編成の取り組み、社会に通用する学力形成とか学ぶ主体の形成の取り組み、学部教授会と学生の五者懇談会や全学協議会制度などの教学上の合意形成の仕組みなどをやっていますね。さらに、既存学部の専門カリキュラムの改革は不断に取り組まれていますし、新学部・新学科の開設では新たな学問領域の創成や新しい教育システムの工夫などが多いに具体化されてきています。就職部では、キャリア形成支援のための取り組みを、学生部では、学生相談業務や課外活動を通じた学生の成長という視点で大きな議論をし取り組んできました。中教審答申では、課外活動を通じた人間的成長にはあまり目が向けられてはいませんが、私は、課外活動に参加する学生数が立命館の場合には他の大学に比して多いことや全国レベルの高い成果を上げているクラブ活動も出てきていることに対して、高等教育機関はもっと注目してもいいと思いますし、課外活動の単位認定なども検討していいと思っています。

また、いま中教審で非常に重視されている「学ぶ主体」という議論は、立命館でも一九八〇年代に非常に強く議論されましたね。¹⁾先ほど述べたようなこれまでの立命館の取組みも、そのベースに「学ぶ主体」

形成の視点が据えられてきました。外部からの要請にも、環境の変化にも、学問の進化からの要請にも常に学ぶ主体の形成という見地からカリキュラムや教学システムと呼ばれるものを自主的に考えて取り組み、学生との議論などを通じて点検・総括しさらに前進していくという取り組みでした。

われわれが主体的に取り組んでできたことが、答申で改めて強調されている。そういう自負を歴史の中から持つておくのは重要だと思います。しかし、こうした取組みの成果が十分に出てきているかという、必ずしもそうとは言えないとも感じるのです。

答申が指摘している社会の環境の変化、これからの学生やその学資負担者である国民の仕事や生活の変化の展望からすれば、立命館も自己満足しているわけにはいかないですし、これまでの取り組みの一層の内実化が求められるとともに新機軸も打ち出していかなければならないと感ずるのです。

それでは次に、これからのわが国の社会の労働人口や産業の動態を見ますと、深刻で大きな問題は四年制の大学生がすんなりと正規就職できるのかどうかということです。社会の高等教育に対する従来型の需要というのが、やはり減ってきている状況ですし、就職についても非常に困難が増していくと。

そのような中で、社会が大学に期待するところでもあり、学ぶ主体としての高等教育の対象たる学生の力の伸び代は、非認知的スキルと呼んでいるところですね。企業が海外に展開するためには絶対にそういう力が必要だということを答申でも言っています。

他方、国内でどのような職種の労働が必要なのかは答申ではあまり書かれていません。人へのサービスをやる労働というのが必要だろうというくらいです。大学特に私学の存立基盤は学生の確保にありますか

ら、こういった社会の期待を答申だけでなく、独自に捉えていくことは重要です。

答申には掲げられていない女子の可能性

私は、これからは大学に学生を送り出す世代に共通してくるのは、女子の成長に対する期待が大きくなるということではないかと思います。両親ともに大卒という比率が多いでしょうし、大学院を含む高等教育への需要としては女子の伸び代が大きいんじゃないかと思うのです。

あくまでも個人の意見ですが、女子の場合は、まだまだ日本では主婦のイメージがあると思うのです。アメリカも韓国も主婦という言葉が多い印象を受けます。ところがその他の国では主婦という概念さえ薄くなっている。女の人がどんどん社会に出て、出産して、非婚であっても子どもを育てている、そういう人が増えている国や、高等教育、大学院の進学率も女子の方が高い国もあります。日本の母親たちが、私たちのような苦労とか、私たちができなかったことを、もつとさせてあげたいというのは、女子に対する期待としては続くんじゃないかと思っています。日本の場合は、この点を見ておくというのが非常に重要ではないかと思うのです。

こういう女子の可能性は中教審の答申ではあまり触れていないのですね。このことをエスピノーアンデルセン²は女子革命と言って、それが未完に終わっているということを非常に強調していますね。アンデルセンは、福祉社会についても書いているんですが、これは子どもに投資することを中心とする社会にしな

いといけないということを、北欧の経験から言っているのですね。高等教育も生涯教育も社会人教育も。中教審の答申でも「予測困難な時代」と言わずに、「こういう社会をつくる」というふうに、なぜ建設的な展望を示さないのかがよくわかりません。そこまで言い切れないと思っているのかもしれないですね。だから政策的な重点が見えない。

学士力は、どのような教育の仕組みを通して身に付けていくのか。そして国の役割は

こういうことを踏まえた上で、これからの教学創造の在り方で、中教審の答申の中から抽出して批判的に考えてみたかどうかと思うテーマは、一つは教養教育か専門教育かということです。これは松宮先生に、ロースクールと法学部教育との関わりで、ぜひご発言願えればと思います。

教養教育を非常に重視すると答申では言っています。現状の一般教育課程の教養教育が答申が言っている教養教育ではないと思うのですが、教養教育というのはどう定義づけるのか。

例えば、江原武一先生（百年史編纂室副室長）は、『転換期日本の大学改革 アメリカとの比較』（東信堂、二〇一〇年）で教養教育と専門教育に多くの紙数を割いて論じています。日本の大学でもアメリカの大学でも、それまでの学習歴や社会の変化の過程から未成熟なまま高等教育に参加してることが共通であるから、学ぶ主体の形成のために導入期教育や補習教育が必要となる。さらに教養教育が専門教育と共に学士教育としてカリキュラムが構成されているから両国とも教養教育の比重が縮小傾向にあり専門教

育志向が見られるのが特徴だと指摘されている。

中教審が求める学士力の四つの要素をやろうと思ったら、江原先生が著書で指摘されているような教養教育が重要だと言えるのかもしれないですね。「教養教育では特定の専門分野や職業にとって不可欠な幅広い学問領域を体系的に学ぶことにより、幅広さと一貫性を備えた知識や技能、価値観、態度を基礎的な学力や教養として修得」することだと言っておられます。

ところが、もう一方では、専門教育をアメリカもヨーロッパも日本もものすごく重視し出して、即戦力という力を育成することを期待されているということがありますが、一二四単位というカリキュラム枠の量的な制約の中で、これはどう考えたらいいのでしょうか。

最近の『教育学術新聞』という中で、金沢大学や奈良女子大学や、広島大学の教育学関係者、教育哲学者が今回の答申に関して批評を書いているのですが、答申の中には工業化社会の教育とポスト工業化社会の教育が混在しているという指摘があります。

何かがんじがらめに鍛え上げるといふのと、人間としての応用力や主体的に考える力が必要だということとを、あまり考えずにばらばらに言われていると。確かにそうだし、われわれもちょっと分からないので、そういうことをもう少し考えてみたかどうかと思うのです。学部教育として、シラバスや工程表やカリキュラムや、こういうことはだいたい工業社会的発想だと書いてある。本当にこれでいま求められている学士力の基本的な要素が修得できるのかと。

それから、いままで何年間か文部科学省がやってきた高等教育改革、大学教育改革について、大学人が

閉塞感、失望感を持っているといっている。もっと大学というのは、自由な知的教材で、そもそも大学の出発点にあった学生と教授の共同のコミュニティーというような大学の実態をもっとつくる必要があるんじゃないかというのが、この人たちの批判的意見です。

大学は官僚組織や企業組織などとは違い、法人化の下でも昔ながらの組織的な要素があるのだという見地ですね。私は、こういう大学像だけではなくて、これからの問題は大学にとつての意思決定機構のありよう一般と、教育のありようの議論、そして研究のありようの議論について、すべてをくくる単一の決定ルールで思考するよりも、少し階層的に分離して議論すべきだとも思います。

実際に中教審の答申も、今度幾つかの大学で、どんな大学（院）がいいのか、学生にも直接ヒアリングしています。われわれもこれから何かヒントを得なければならないのではないかと思うわけです。

それから、今回は学士課程教育を重視していますが、大学院だったら、研究大学としての大学の営為、これは未来社会創造のために絶対不可欠だと、あるいは地域社会との関係でも大学・大学院は不可欠だと言われていますので、これについては特にイノベーション絡みで飴山先生などにお話し願えればと思います。

また、答申は学生に自主的な学習時間の拡充が必要だと言っているのですが、自主的に学習時間を拡充するというのはどういうことでしょうか。

要するに大学をもっと知的に鍛錬するとか、指示や強制によらずに、自ら判断し行動するとか、授業時間にとどまらず、授業の事前事後にも学習するとか、授業において能動的であるとかいうように、そうい

う仕組みにせよといっているわけです。

それで、このことについても、われわれは両方やってきたように思うのですが、これはいったい、一二四単位プラスアルファの中でどういうふうに考えているか。

文学部ではまだ卒論を必修にしていますよね。他学部ではなかなかできないようですが、どう工夫したらいいいのかというようなことを、考えてみたらどうかと思うのです。

それから、最近、OECDのリポートが出ました。日本の高等教育について、引用した資料をお手元にお示ししていますが、要するに、日本は教育費の国の負担が低くてチリと韓国に次いで三番目です。私（個人）の負担が大きい。このリポートでは国立と私学が一緒になっていますから、私学だけで見るとその割合はもっと大きくなると思います。

このことを改めて問わないといけないと思うのです。答申で大学の役割を期待しておきながら、誰が学費を払うのか、どうやって大学を支えるのかについて、この答申ではほとんど示されていないのです。ちよつとしたインセンティブで改革を誘導するという、従来のパターンしか出ていないと思います。

以上が問題提起ということで、それではみなさんからご発言をお願いします。

一九八〇～二〇〇〇年代の立命館の発展と財政

服部

私はこの座談会の準備をするときに、学生の進学率の推移についての資料を見ながら、大綱化の時⁽³⁾



点や立命館の財政推移などを書き込んでいって、それに『国民生活白書』の経済実態などを書きこんでいったのです。

それを見ながらいろいろと考えさせられました。一九八〇年代以前、一九七〇年代後半の立命館の第二次長期計画のときは衣笠一抛点化という大きな事業があったわけで、その時は借入金を半分ほど使いながらやったのです。ところが一九八〇年代に入ってきましたと、このころは日本も新しい産業の構造改革に成功

しだして、それがバブル経済と続いていって、実質賃金、名目賃金が上昇し続けていくのです。日本がナンバーワンになっていくという、そういう機運が起こってきて、一九八六年から一九九一年のバブル経済と第三次長期計画の時期が重なるのですね。第三次長期計画の時期に、そういう日本全体の経済的な発展を受けるかたちで国際化、情報化という新しい方針のもとで、国際関係学部とか理工学部情報工学科を設置していった。附属校の男女共学化やキャンパス移転もありましたね。これまでにない大事業をやったわけです。

こうした展開を支えたのは、やはり一九七九年の全学協議会での新しい学費方式⁽⁴⁾でしたし、経済の好調も受けて、九〇周年の記念事業の募金も寄付金も目標が三五億だったのが、四七億円と大幅に目標を達成しましたね。ですから、第三次長期計画というのは自己資金だけで賄うことができた。その後の一九九〇年代に入って、バブル経済が崩壊し、一八歳人口が減少していく。ちょうど一九九二年がピークでしょうか、そこからどんどん減っていくわけです。

けれども、一九九一年の大学設置基準の改正もあって大学や学部の新設、増設が急に伸びていくし、進学率も伸びていくのです。それはバブル経済が崩壊して、その一八歳人口の親たちが、もっと安心できる企業に就職させたいとか、あるいは、これも東西の冷戦構造が終わって一極体制になって、そして社会的・経済的な構造変革が大々的に進んだので、そういう新しい変化に対応できるような学部、学科の増設が進んできたとか、新しい動向に乗り遅れないようにして、進学熱が一層高まっていくのです。

このバブル経済が崩壊した後は、ある意味でいうと一八歳人口が減っていくにもかかわらず、大学にとってはバブル的な状況が一九九〇年代には続くのですよ。その時期立命館の場合は、第三次長期計画を自主財源で賄って、新しいことを打ち出し、その勢いがさらに一九九〇年代には大幅な公私協力という、これまでにない資源を手に入れることによって、バブル以降の二〇〇〇年代に入ってからずっと消費収支の黒字が続くのです。二〇一〇年には大規模な基本金の組み入れを行ったことによって、そこで初めて赤字になりますけれども、それも大きな事業をしたからこその赤字であって、基本的な消費収支が黒字の基調が続きました。

立命館の継続した発展と財政基盤の拡充

だから、そういうことを見てくると、立命館の場合は経済的なバブル崩壊や大学でのバブルの時期、それが崩壊し始めた後も引き続き好調を維持していったという状況だと思っています。

二〇〇〇年以降、学部や大学院の新設や拡充、附属校の拡充、研究基盤の充実などがそれまでにないスピードで続き、そのための大きな投資をやってきました。第四次長期計画のときの立命館の附属収入が三〇一億円（一九九一年度）だったものが、二〇〇〇年度には五四八億円になって、二〇一〇年度には七六四億円で急速に拡大して、第四次長期計画の当初に比べると倍以上の附属収入を得るようになった。そういう財政基盤が非常に大きくなって、総合大学を支えることができている状況になってきたという特徴があるのです。これからより一層一八歳人口低減と大学淘汰が進む中で、魅力ある内容づくりが必須の課題になっていくので、今、R二〇二〇で教育と研究の質の向上を前面に出して進めていこうとしているのは基本的に正しい方向にあると思います。

甲賀先生が最初にお話しになられた経済状況、特に、大学に入学する人たちの経済的な基盤が非常に問題となってきたという状況は、公的補助金の大幅な削減が進められるなかで深刻な問題になっていきます。アメリカ西部の大学などでは、経済的困窮度に応じて、平均して学費の五割から六割の奨学金を受けていて、富裕層の学生や留学生や州外の学生は高い学費を払っているのですね。それは富裕層と、そうじゃない学生たちという二極化に、アメリカの場合は早くから対応しているということなのです。国内の貧困な層で勉強したいという人たちの要望に応えながら、同時に海外や州外からも学生が学ぶことができるような魅力ある教学とそれを支える財政的な構造をつくりだすことに成功しているところがあって、遅かれ早かれ日本でもこういうことに対応していかないといけない時代が来るのではないかなという気がしています。

マルチバーシティーのサービス機能と幅広いサービスラーニングへ

一九九一年六月に大学の設置基準が改正されたわけですが、このときに「大学教育の改善について」という大学審議会の答申が出されました。その趣旨をいまから振り返って見てみますと、一般教育と専門教育の区分とか、一般教育内の科目区分の廃止とか、教育研究活動の自己点検と自己評価といったことでした。この大学審議会の答申の趣旨は、教養教育を重視しないといけないという方向だったと思うのですが、それが大学関係者や世間一般ではそう受け止められなくて、むしろ専門教育重視の方向に走ったというように、私自身は思っています。ですから、その後、引き続き幾つかの答申で、教養教育の理念を再定義したものが出されます。例えば一九九八年の「二一世紀の大学像と今後の改革方策について」、二〇〇〇年の「グローバル化時代に求められる高等教育の在り方について」において、教養教育ということの重要性が、ずっと言われ続けてきました。

それが今回の資料にある最近の答申になってくると、問題は先ほど専門教育か教養教育か、工業社会の教育モデルか、そのポスト工業社会の教育モデルかという問題指摘がありましたけれども、かなり教養教育の中身に踏み込んだ新しい方向を打ち出しています。

そういう点で私が一番着目しているのは、サービスラーニングとか、アクティブ・ラーニングとか、あるいはCOC、Center of Communityの構想とかいうことです。そういうことに私自身も関心がありまし

て、この間ずっと大学のバブル以降も発展してきた立命館の良さというのは、社会貢献や地域貢献の部分だと思っっているのです。もちろん、教育、研究と社会貢献の三つは、中央教育審議会の平成一七年の「高等教育の将来像」という答申で出されていて、答申ではクラーク・カーという人の名前が後ろの方に出てくるのです。『大学の効用』という一九六三年の本で、私も学生時代に読んだ覚えがあつて、また出てたのかと驚きました。内容はユニバーシティからマルチバーシティへという主旨です。いままでの大学の機能というのは、研究だったり、教育だったり、目的が一つだった。だから、ユニバーシティとあった。だけど、これからの大学の機能というのは多様化するのだと。大学もまた一つの大学じゃなくて、幾つかの大学が協力したり、単科大学が幾つか連合したりとか、そういう意味でのマルチという意味も持ちながら、マルチバーシティへとなっていく。そのときに彼が一番重視した大学の機能は何かといえば、まさにそれはサービスなのだというわけです。

私自身は、サービスという部分は、教育と研究という部分に重なっていくべきだと思いますし、これが恐らく大学の将来像にとつて、ものすごく重要になるのじゃないかと思っっているのです。

ところが、今回も幾つかの答申を見ていきますと、そういうサービスとか社会貢献の部分は、大学の研究と教育と分かれたところに置かれています。つまりボランティア活動の意味なのです。だとするとボランティアは学生が個人的に自主的にやるだけです。大学にとっては、そんなに関係がないという意見を助長しかねない。だから、そういう部分を大学の教育とか研究の部分にどう重ねていくか、ラーニングをどのように組み込むかということが大切だと思うのです。サービスラーニングですね。

例えば、フルコという人ですが、この人は非常に幅の広いサービスマーケティングのイメージを持っています。もちろん、狭い意味でのボランティアというのもサービスですが、ラーニングの方に重点を置いていくと、授業でのさまざまな実習、研修活動、あるいは中間的なものとして、例えば、図書館であるとか、福祉施設、美術館、博物館、そういうさまざまな公共的な施設でのサービス、こういうのはラーニングの機能を持っていると考えるわけです。非常に幅広いサービスマーケティングのイメージを持っていて、そういうものを先ほど言いましたような、教育と研究という部分に重ねていく。そこに一つ、立命館のこれまでの特色を生かした将来が、ちよつと見えてくるのじゃないかなと思っています。

甲賀 ありがとうございます。次に松宮先生、お願いします。

多様化する学生の質と法科大学院の教育の在り方

松宮 座談会でお話するように言われておりましたのは、教養教育と専門教育の在り方の変化という話だったのですけれども、いま、法科大学院の教育ばかり頭にあるものですから十分なお話ができるかどうかわかりませんが。

甲賀 ぜひその法科大学院での教育と教養教育との関係をお願いします。

松宮 今、全国的に法科大学院は受験生がどんどん減っています。立命館でも減っているという状況で、一般的に言えば、法科大学院に入ってくる院生や修了



して司法試験に合格する人の学習の質が低下しているのではないかということが言われております。

私は司法試験に合格したメンバーの学習の質というのは、そんなに低下しているというものではないし、法科大学院では、院生が実務家や研究者の両方の教員と接する機会があるので、旧来の司法試験合格者と比べて、とりわけコミュニケーション等の点で違った能力も備わっていると思っています。立命館の場合、リーガル・クリニックとか、エクスターンシップというように、現場に行つて直接相談を受けたり、あるいは事務所に行つて実務を通じて勉強させてもらったりといういわゆるアクティブ・ラーニングを必修化しておりますので、旧司法試験の合格者に比べれば別の力を持っていると自負はしているのです。

ただ、一つ困っていることは、志願者が減ると、入ってくる学生の学力の質が多様化することですね。いろんな学生を相手にしなければならない。今日のお話の中で言うと、答えのない問題に対して自分で考えて、プランニングして決断して行動できるような学生は、司法試験も一発で合格できることになります。

逆に入学してきたはいいけど、何をどのように勉強していいか分からないという学生が増えてきています。甲賀先生のお話の中にもありますが、工業化社会での教育課程の典型で、法学部が「学びマップ」というのをつくりました。学習過程の工程表というようなものです。法科大学院では学部がそういうものをつくったなと思って見ていたのですが、大学院でも必要なかもしれないと思いました。合格を目指して何を勉強したらいいかイメージできないという、そういう院生が増えてきたからです。中には、司法試験にどういふ科目が出るのかすら知らなかったという院生もいて驚いています。

それで、実はロースクール版の「学びマップ」というのを作成中でして、現在、ほぼ完成しております。

この工程表づくりに携わったメンバーはうちのOBで、弁護士になりたての若手なのですが、これはまたこれで非常に創造的な力を持っている人たちですので、どういうふうにしたらいかと月に一回ぐらい会議をして、非常に活発な議論をやって、いいアイデアをどんどん出してきています。そういう力のあるOBがいるということ、そういうOBが今の大学院生のために工程表をつくらなければならないという、矛盾した状況があるわけです。工程表などいろいろな優秀なOBが、優秀な後輩を育てるために工程表をつくっている、という矛盾ですね。

とはいえ、教養力や学士力という点で言うと、入学時の理解力や知識が多様化していますので、一方で最低限の知識とかスキルとか、こういうものはきっちり付けるようにしなければいけないと、それはそれで思っているのです。

他方の伸びる学生については、どんどん伸ばしていかないといけませんので、伸びるための基礎的な力は、きっちりと付けていくことをやっています。伸びる学生も放ったらかしにしないで基礎力をつける。その上で伸びる学生は、さらに伸ばしていけるような仕組みをつくる。工程表のようなものをあまり強調すると、今度はそれに縛られて嫌だという学生が出てくるのです。とくにできる学生はそういうことになります。だからそういう学生にも応えられるようなものを用意することが必要で、われわれ教員が空いた時間に、そういう学生と議論するなどということがあるわけですね。

それで両局面と言いますが、工程表と自由な学習という二正面作戦でやらないと、うちの大学はなかなかそのよさを発揮できないなと思っています。これがうまくいけば、両方でいい学生が育つと思っています。

次第ですけれども。

甲賀 ありがとうございます。次に田尻さんから情報人材とか、情報化時代の高等教育とかに関わってお願いできますか。

情報教育の要は、分類・分析できる力を養うこと。場を共有する視点も不可欠



田尻 私は、これまで情報環境や情報システムの開発に加えて情報スキルの修得に携わってきました。一九九〇年代の情報教育は、情報機器を使うことに終始してきましたが、Windows95 がリリースされた頃から、パソコンが広く利用され始め、産業界でも工業用ロボット等も数多く使われるようになりました。更に、今日ではスマートフォン等のようにコミュニケーションの道具として使われるようになってきています。

情報機器の利用方法が多様化される中であらためて、情報教育の目的を考えると、当然、情報機器やソフトの操作自体が目的とされているわけではありません。情報を処理する流れに則して考えてみると、情報を収集、分類・分析し、そして加工や編集をして発信する。そういうプロセスになっています。私はこのプロセスの中で、分類して分析していく力が一番大事だろうと思っています。分類と分析の繰り返しは、仮説を立てて検証することの繰り返しのような作業です。情報処理技法を修得することを通して、

様々な問題解決を図る力を身に着けていくことが情報教育の中心的なテーマだと考えています。

更に分類や分析をする力の養成は、結果として物事を俯瞰する力や構造的・体系的に物事を捉える力にもつながるものと思います。また、情報教育は単に情報関連の教育にとどまらず、問題解決する力を付けることで他の学習にも良い影響をもたらすものと考えています。

もう一方で、実社会においては、机上で考える程、綺麗に分類できない課題や問題が非常に多いものですから、大学生活を通じて現実の社会を体感することが重要です。解決が困難なように見られることも、体系的に捉えることで解決の糸口を手さぐりで見つけ出す経験を積んでほしいと思います。

甲賀 一時期ね、われわれも考えたことがあるんですけども、何かバーチャルユニバーシティという発想がありましたね。具体的には東京で一橋大学と東京工業大学が、キャンパス間をケーブルで結んで、受講して単位を出すという試みをやっていましたね。情報化が進むことによって、大学は必要なくなるのではないかという、極端な説まで出てきましたね。ICT（情報通信技術）を使って、全部自分で勉強できるじゃないかと。

実際にいまの若い人たちはわれわれの時代と全然違いますよ。青焼きコピーや手回しの計算機を使っていた時代から、どこでもインターネットで情報がとれる時代ですから。ネットで会話もできる、Twitterもあるし、ブログもあるし、いろんな情報収集ができるから、大学は必要ないのじゃないかとまで言われた時代です。この技術的な基盤の上に、株式会社が設立する学校だとか、いろんなタイプの大学もできています。アメリカでほとんど成功はしていませんが。

何か大学というのは、いくら情報機器を使っても、インターネットを使っても、フェース・トゥー・フェースというか、そういうことが求められていると思うのですがね。その辺は田尻さん、いかがですか。

田尻 時と場を共有しないと理解できない情報があるように思います。教育においても、この時と場の共有が重要だと感じています。

インターネットの発展により紙の資料をパソコンやスマートフォンで見られるということの利点はあるのですが、視線を感じ、言葉の強弱を聞き取り、それに対して反応するようなことがないと、自分の学習意欲や問題意識が獲得できないように思います。

そういう意味では、バーチャルライブラリーは、意味があるものだと思いますけれども、教育する際にはフェース・トゥー・フェースで向き合う場が不可欠だと思いますね。

甲賀 場を共有することが教育として大切なのだと。田尻さんありがとうございます。APUはどうですか。教育のありようなどお感じになることを三並さんお願いします。

APUの教学コンセプト「学内での多文化共生」が社会に評価されている

三並 APUは開学一二年たって、社会的な評価では、かつてない評価を得つつあるのではないかと実感しています。開学の時に立てたAPUのコンセプトが、素晴らしいかったのだなと。それを実現してきた皆さんの努力は、本当にすごかったのだらうなと思っています。



開学時のコンセプトで、三つの五〇というのがありました。学生の五〇%、外国籍の教員五〇%というのも素晴らしいのですが、五〇カ国以上の国・地域から学生を迎えようというのが、一番よかったのではないかと思います。いまは八〇カ国・地域を超えていますけれども、このバラエティー、多文化環境というのがAPUを特徴付けるものすごい強みになっていますね。

先ほどのICTの話にもつながりますが、異文化、多文化と触れ合う場で人が学び育つということが強みとして評価をされていて、受験してくる人たちもそういうものを求めている、そういう中で育った人を採用したいと、企業にも評価されていると非常に強く感じています。

それから、学問的などころでは、専門教育やアクティブ・ラーニングも頑張っていると思うのですが、何が教育の中で一番評価されているかというと、日本語教育ではないかと感じています。留学生が日本企業でやっていくには、やはり日本語がある程度できないといけないですね。APUの日英二言語というコンセプトを打ち立てたことは、本当にすごいことだと思います。そのコンセプトがあるからこそ、日本語教育については、かなり教育内容も練られて、結果として留学生の日本語習得レベルは相当高い水準を達成して、それがいま企業から評価されて、APUの社会的評価を高めているという、こういう到達点なのだろうなと思っています。

ですから、先ほどから出ていた工業化社会だとか、教養教育か専門教育かということとて言うところ、少しベクトルが違いかもしいないのですが、大学に入学してくる学生たちが求めているのは、大学を出た後の

自分の将来であり、未来なんですね。そこに応えることをしっかりと打ち立てないといけないし、新興大学だからこそ、それをより実感していますね。そこがいまのAPUの強みだと思います。

ですが、今後三年、五年、一〇年とたつていくと、国内の大学も、世界の大学もこういう多文化環境の魅力を重視していくでしょう。もし、APUが今のままの教育や環境で満足していたら、間違いなくAPUの競争力は相対的には低下する傾向にあるだろうという危機感も持っています。それだけに、これからのAPUでは、入ってくる学生の未来とか将来とかを相当意識した大学づくりをしないと、恐らく世の中の要請に應えていけないのじゃないかと感じている日々です。

甲賀 それに関連すると思うのですが、中教審の答申に日本の学生は内向きだと書いてあるのですよ。日本の学生の内向きさというのはどうしたらよろしいのでしょうか。

三並 難しいですね。

首都圏のビジネスマンは国際的人材が育つ大学を意識している

甲賀 中教審答申に国際人材が必要だ、でも学生は内向きだと書いてある。APUは教育のコンセプトそのものがグローバル人材教育ですね。

三並 おっしゃるとおり、APUの多文化環境やグローバル人材育成に対して、例えば、入試説明会などでは、高校生の父親である首都圏のビジネスマンが一番反応している印象がありますね。そこからの志願

者が増えています。今年のAO入試では首都圏だけでなく大阪の志願者も伸びているのですよ。もちろん一年だけの数値を見るのではなく、中期のトレンドを見ていかなければなりません。間違いなくビジネスマンの方が世界を見ておられて、APUのような大学の環境というものについて強く意識を持たれているのは実感します。

甲賀 それは自分がそういうグローバルな環境での学校の教育を体験してなくて、企業で海外要員になって、子どもにはそういう環境で学ばせておいた方がよいという、親の子に対する期待が、そういうところで表れているのかもしれないですね。

三並 あると思いますね。

甲賀 ありがとうございます。次に浅野さん、人材育成についてお願いします。

キャリアセンターから見た現在の学生―内向き志向・安定志向とその背景―

浅野 一つ目はグローバル化の話になります。私のキャリアセンターでの経験で、グローバル人材の養成などもかなりいろいろと取り組みをしていますが、やっぱりグローバル化という問題を、自分の問題として捉えていない学生が非常に多いというのが、実感としてあるんです。

世界では、グローバル化が進んでいて、日本の企業も海外へ出ています。例えば、中国で反日デモが起きたときに、日本の企業は大きな打撃を受けた。ということは、日本企業が沢山中国に出ていっていると



いうことですね。そういうことについて、ニュースでは見ているけれども、自分の問題としてリアルに実感していない。要するに、自分はグローバル化の影響を受けずに、生涯過ごしていけると思っている学生が非常に多いというのが、一つの印象として感じていることです。

例えば、窓口で学生と相談していて、これからはグローバル社会だけれどもどうするのと尋ねると、僕は英語ができませんと返事する。英語ができなくても海外へ行つて頑張れるよと返しても、僕は地元に戻つて公務員になりますから大丈夫ですと言うのですね。それで、グローバル化は君がどこへ行こうが追い掛けてくるよ、地元自治体の公務員になったとしても追い掛けてくるよと言っても、ぴんとこないのですね。あるいは、僕は地方の信用金庫に就職します、だからグローバル化は僕には関係ありませんと言う。信用金庫が取引している会社が中国や韓国にどんどん出ていっているよと言ってもぴんとこない。というようなところが、まだありますね。

二つ目に、若い人たちにお金回っていないというのも一つの要因かなと思っています。いまの日本は、若者たちが経済的に自立できない社会になっているのじゃないかと感じます。だからどうしても最終的に親御さんに依存せざるを得ないというか、親自身も、ほどほどの経済力を持つておられますから。

また、いまの祖父母の世代の人たちは、お金を持っておられますので、孫への学費支援であるとか、親の世代への間接的な支援など、いろんな形で支援をしている。これらのお金の動きに加えて、親に頼ろうとする子どもの気持ちと、親が子供を離れたがらないという気持ちとが、子供の自立を妨げていると感じま

す。「親が子どものスカートの裾を踏む状態」と、表現しているのですが、要は離れたいと思っても離さない。唯一許すのは四年間の大学生活。この間、京都へ行くのは許してあげるけど、四年過ぎたら必ず帰ってこいと言って、証文を書かされているような状態ですよ。

甲賀 そんな親子がいるのですか。

浅野 それがいるのです。立命館大学では関西以外の出身者が約五〇%ですね。そのうち、卒業後は地元に戻っている学生はけっこういますから。そういう構造もあって、グローバル化というのが、なかなか進まないということをキャリアセンターの視点で見てもすぐ感じているところなので、この辺りのところから考えなければいけないのかなと思っています。

また、学生実態の話なのですが、私も私がいとも思うのは、やはり学生たちが育ってきた生い立ちを見ないと駄目だろうと思うのですね。例えば、今年入学している学生たちだったら一九九〇年代前半頃の生まれですから、ちょうど「五五年体制」が崩壊したときですね。ある種これで日本は大きく変わっていくのじゃないかという高揚感を持っていたと思うのですが、あつという間に、細川政権は倒れてしまい、その後、政治的昏迷がずっと続いているという状況にあります。さらに、学生たちの幼少期には、地下鉄サリン事件など一連のオウム的事件があったり、阪神・淡路大震災があったり、金融不況が起こったり、数え上げれば切りがないくらい暗い話題が多いですね。失われた一〇年、二〇年という経済的にも厳しい時代でした。その後も世界ではテロが頻発し、地域紛争が続くという状況にあるわけです。

そういう社会情勢に影響を受けながら、いまの学生は育ってきているということです。例えば、日本と

中国、韓国、アメリカの若者の意見で比較すると、日本では「自分は偉くなりたいとあまり思っていない」学生が全体の五三%を占めています。でも、アメリカや中国では、逆に「偉くなりたい」と思っている学生が半数以上を占めているのです。暮らしていける収入があれば、のんびり暮らしていきたいと思っている学生も、日本では八〇%を占めています。でも、アメリカとか中国で見たら四〇%前後ぐらいです。このような調査結果をみると、やはり日本の学生の考え方は、安心や安定を求める傾向にあるのかなと思います。

ゆとり教育の影響が表面化してきていると感じる

もう一点は、ゆとり教育と個性尊重の教育の影響です。いまの学生たちは、ゆとり教育世代ですから、学習時間だけで見ても二五%から三〇%削減されていますし、学習量という基準で言うと、それまでの世代とは決定的に違いがあります。でも、全員が勉強していないわけではなくて、勉強している子もいて、例えば塾へ通っている子はしっかりと勉強している、通っていない子は勉強していない、その差がすごく大きく、二極化しているなあと感じます。

それから、学習指導要領の中で、絶対評価が絶対評価に変わったということが大きいような気がしているのです。他と比較するのではなく、自身の頑張りを評価するという絶対評価の中で、自己肯定感を涵養するのはいいのですが、他者との関係は度外視し、自分の努力を認めて欲しいという感覚がありますね。

こういう感覚も、彼らの受けてきた教育の影響ではないかと感じます。

また、これもよく言われることですけど、彼らには根拠のない自信がすぐあります。その根拠のない自信はどこから来ているのかというのは、これは推察になるのですが、やっぱり絶対評価の影響かなと思っています。絶対評価ですと、他者との比較の中で頑張ったかどうかではなくて、その学生自身が以前と比べて頑張ったかどうかを評価しますので、一般的に見たら、大して頑張つてなくても、頑張ったと言ってもらって、それが自信の根拠に繋がるわけです。この辺りは、いまの学生の一つの問題点というか、特徴かなと思います。

そのような中で、学生たちは、自分の親の世代より豊かになれないという、漠然とした閉塞感を持っています、成長より安心、安全、安定志向になっています。成長したいという思い、チャレンジしようという思いよりも、手堅くいきたいという意識なのだと思います。たぶん、ロースクールを目指す学生でもそういう感覚があつて、チャレンジしようという意識が、社会全体に失われているのかもしれませんが、少なくなってきたのではないかと思います。

それから、少し前の世代と比較して、基本的な知識量が少ないなと感じます。やはり、ゆとり教育の影響が大きいのだろーと思います。また、社会的な共有知を軽視する傾向もあると感じます。我々の世代は、高校時代までみんなが同じ科目の授業を受けていたと思うのですね。例えば、社会科であれば地理も公民も世界史も日本史も全部、一通り勉強して、その上に積み上げるかたちで、例えば世界史Ⅱとか、日本史Ⅱなどを選択科目として学んでいました。理科の分野でもそうだと思います。物理、化学、生物、地

学という四つの科目を学んだと思うのですが、いまの学生は、高校時代にまったく学ばないということもあるわけですね。例えば、物理は一切勉強していないとか、世界史は一切やっていないという学生がいるわけです。したがって、お互いに話をするときでも、共通の知識の部分が、われわれの世代とはずいぶん違うのかなと思っています。

先ほど、ICTの話が出ていましたけれども、やっぱり、相手と直接コミュニケーションをしなくても、コミュニケーションできる手法をいまの学生は持っているので、だから逆に直接的なコミュニケーションが非常に苦手だというところがあります。こんなところがキャリアセンタ―から見て取れる学生の特徴のような気がします。

甲賀 ありがとうございます。では次に飴山先生、国際人材や、理工系人材などでご発言お願いします。

国際的人材育成には「交流」が、国際的な研究には「畑を作る」ことが大切

飴山 そうですね。私は国際化と、研究のことについてお話したいと思います。先ほどからICTのお話があつて、そういうコミュニケーションの話ですけども、国際化においても一緒に、交流というのが一つのキーワードです。

交流というのは、インターネットで繋がるという意味ではなくて、直接会って対面で何かするということ、そこで混合とか化学反応が起きるのだろーと思ひます。最近ではそれが欠落しているなあと感じてい



ます。

例えば、昔は友人同士でマージャンをよくしましたが、いまはコンピュータでゲームをしています。相手の顔色を見ながらゲームをするということもコミュニケーションですし、大切だと思うのですよ。

甲賀 ケミストリーというのは人間関係のことについても言われることですね。⁽⁵⁾

鮎山 そうですね。その反応というのがすごく大事ですね。だから、そういうことを考えた国際交流であつたり、いろんな中での交流を考えなきゃいけないだろうと。そういう意味では、海外にうちの学生が行くとか、留学生が来るとか、G三〇（グローバル三〇）の関係でいろいろやっていますけれども、そこに大事なものは、そういう化学反応を起こさせるようにすることですね。いま、こちらでも学生を送り出すということである海外留学プログラムを一所懸命やっているわけですけども、実際に海外になると経済的な理由でいざれ頭打ちになるなと思っています。

そうしたら、どうしたらいいかというと、やっぱり、オンキャンパスで、日本の中で、例えば、衣笠でも、BKCでも、OIC（大阪茨木新キャンパス）でもいいんですが、そこで疑似留学ができればいいなと思っています。APUはまさにそういう環境にあると思っています。そういう体験を通して、どうしたら化学反応を起こさせる能力が身に付くか。それができたら、たぶん海外に行こうが、日本国内であろうが、やっていけると思えますね。色々な考え方、価値観の中で揉まれること、それが大人になるということじゃないかなと感じています。

それから、研究の方ですけれども、大学が何をしなきゃいけないかというときに、大学というのは、研究にしても教育にしてもプラットフォームなのだと思います。大学を「畑」に例えれば、そこに種をまいて、育てて、収穫するという仕組みがあるのですが、やっぱり、肥料をやらなくともよく育たないですよ。

例えば、BKCの移転のときとか、ちょうど一九九〇年代半ばのころに、いろんなインフラ整備をしたわけです。研究機器などもそうですが、いまはもうそれが二〇年ぐらいたちましたから、ちよつと古くなつてきています。でも、それが更新できるかというと、そこにもう一つキーワードとして「競争」というのが入つてきています。かつては、いろんな研究分野での研究機器の整備というのが、私学助成によつてもありました。いまは私大戦略事業とかいろいろと助成制度はありますが、あくまでも競争的資金で、自己資金を個々の研究者が用意しなきゃいけない状況になつています。これはかなり大変なことです。

かつては大学が畑を耕し肥料を取りあえず供給して、そこからいろんな研究の成果が生まれてきました。現在、立命館大学が研究大学を標榜できるのは、ちゃんと畑作り、土作りをやつてきたからだと思います。畑を上手に作るというのを、いま、もう一度振り返つてみなきゃいけないのではないかなと思います。

QS大学ランキングを立命館の研究の発展にどう活用するか

そこで、このランキングというのをお手元に資料として用意しました。

結局、研究大学かどうかを決めるのは、他の人、外部が認めるかどうかです。資料は二〇一一年のラン

キングの結果をまとめたものですが、幾つかある評価のうちQS (Quacquarelli Symonds) が行っている評価です。⁽⁶⁾元々は欧米の大学の優位性を伝えるために、こういう世界ランキングというのが始まったと言われています。

ランキングはナンセンスだとおっしゃる人がものすごく多いですし、まさにそのとおりの部分があるのも事実ですが、現在、世界ランキングは独り歩きしていますね。そういう状況の中で何をもとにランキングが評価されているかというと、学術面の評価、これは研究成果ですね。あと、ST比とか、いろいろとあります。ST比などは大学によっていろんな事情がありますから、一概には言えないですけども。この学術面の評価とか、教員一人あたりの論文の被引用数とか、これは頑張れば何とかなるでしょう。面白いのは、雇用者による評価です。これは何かというと、学生を採用した企業側の評価なのです。ですから、そういうキャリアなどの部分も、こうやって見られていますよということです。他には外国人の教員比率とか、留学生の比率とかで評価がされているわけですけども。

日本の大学はこれまで東大で三〇位ぐらいだったのですが、今年二〇一二年度になって三五位に下がりましたし、その他の日本の大学も総じてランクダウンしています。その理由は、アジアの大学の台頭が大きいです。韓国、中国、台湾、東南アジアですね。マレーシアとか、インドネシア、あのあたりがすごく力を入れて、いわゆる戦略的にランキングを上げるような仕組みをつくっています。例えば、この学術面の評価とか、教員一人あたりの論文被引用数を上げるための戦略を持っています。

去年の春でしたけれども、マレーシアの大学で、大学フォーラムがありまして、そのときに講演したデ

ンマークのある大学では、世界ランキングを上げるために、論文被引用数とかを上げるようなことをもつと戦略的に進める部署を学内に設置していると報告していました。これは今後、伸び代がある部分だと思います。

研究はそれぞれの研究者が自由に行えるということが大切で、立命館大学も自由な気風が研究を支えてきました。そして、毎年科研費の獲得数や金額、あるいは外部資金は増えています。ですから、国内的にはどんどん成長しているのですが、世界ランキングを見ると、立命館大学も日本の他大学と同様に後退しているのが現実です。これまで論文の被引用数などを上げるような工夫は誰もやってきていないと思いますので、今後、作戦を立ててこのあたりに力を入れてはどうかと思います。

では現在、立命館大学は何位かというと、六百位台ですね。実はインド政府がこの八月か九月に政府の方針として、インドの大学が海外の大学と共同学位とかいろんなことをやるに当たっては、相手先の大学が五百位以内でないと駄目だと言ったわけです。だから五百位台に入っているかいないかは結構大きな問題です。これにはものすごく賛否両論があったようですけれど、そういうことを国として言ってくるような時代になってきていますし、立命館大学自体がインドにオフィスを持っていますから、それをどうするか、ということを私たちは真剣に考えなければいけないということです。

あと、QSの評価で立命館大学のいいところを言いますと、アート&ヒューマニティーという、人文社会系の分野で非常に評価が高いです。これは恐らく、立命館大学独自のユニークな分野があるというように評価されているのではないかと思います。

私立大学では、いろんなことに手を広げて展開するのは難しいので、ある程度、重点的に研究テーマを絞って資本投資するというのが必要だと思います。重点化で評価が高まる可能性があるということに私立大学として一つの戦略を見出せるかもしれないと思います。そういう意味では、アート・リサーチセンターやGIRROの研究プロジェクトは立命館において成功している事例だと思います。

そういうことでキーワードとしては「競争」があげられますが、世界の中での競争を、これからもっと意識しないと、次のステップには行けないと考えています。

評価される研究をする、成果を内外に発信する、そういうセクションが必要

甲賀 ありがとうございます。ランキングで評価される項目でもある研究は重要ですね。それに、成果については評価をしてもらえるような発信をしないといけないと強く感じています。これはセクションを置いてもいいぐらいですよ。

鮎山 そうです。さらに、そのセクションはそれを分析してフィードバックして、研究者側もそれに応えるようなことをしなきゃならないと思います。

甲賀 その通りです。国際部で取り組んでもいいですね。広報課が発信の仕事をしたらいいいね。

鮎山 それで一つの事例として、台湾に南台科技大学という私立大学があって、一〇年ぐらい前から交流が続いていまして、毎年、立命館大学を訪問し、その都度、キャリアオフィスやリサーチオフィスとかを

調査していかれました。立命館大学をベンチマークにしていると先方の学長さんが言っていました。その大学は昨年まではランキング外だったのですけども、いろいろと工夫して、とうとう、今年は五九〇位に上がりました。工夫次第でランキングは上がるのだということを実感しました。

甲賀 APUでは、英文ジャーナルで発信しないと評価されないと行って海外誌への論文投稿もがんばっていますね。立命館大学でも英文でも見られるサイトをつくっているでしょう。ああいうのがアート&ヒューマニティーで評価される。だから、評価を上げることが意識した、外国語でも発信を進めるセクションをつくらないといけないと思います。これがないので立命館が過小評価されている側面もあるんじゃないですか。

鮎山 そうです。本当にその辺は戦略でやるべきだろうと思いますし、実際に研究部などは戦略的にやっていますからね。それはそれで科研費なんかにつながつていると思います。

甲賀 では次に石坂さんから、学生の学習面での実態を中心にお話をお願いします。

「学びの実態調査」から見える現在の学生の姿

石坂 はい、はじめに、二〇〇九年度から実施している「学びの実態調査」で見えつつある特徴からお話したいと思います。

学びの実態調査は、学部の上の改善課題に役立てていくことを目的に行っている記名式のアンケート



ト調査です。調査は、共通項目と学部固有の文脈に即した独自設問からなっています。二〇一一年から二〇一二年にかけて実施した調査では、七学部で新入生調査を、一二学部で在学生調査を実施しています。

学びの姿勢の自己評価に関わっては、宿題はきちんとやる、遅刻はしない、教材は持ってくるなどの、真面目な学習態度を表す設問では、「身に付いた」という割合が八割程度と高くなっています。

予習や復習をしている、積極的に発言している、グループワークなどでリーダーシップを取っているなどの、主体的な学習態度を表す設問は、「身に付いていない」という回答が非常に多く、八割ぐらいができていないという回答です。ここからは、受動的な学びの姿勢が大学入学後もずっと続いているということが伺えます。

高校時代についた力と、大学で身につけたい力、大学で身についた力を聞く設問に対する回答の概要としては、高校時代は英語や国際的な力をつけることができていないという自己評価を持っており、大学に入ったらそういう力をつけたいと強く思っているけれども、卒業するときには、やっぱりつかなかったというような答えが非常に多いという状況となっています。

先ほどの甲賀先生の話にあった、論理的思考力とか批判的な思考力とかという項目については、大学に入ったときには身につけたいという回答は少ないのですが、大学で身についたかという自己評価では、それなりについたと回答している学生が多いですね。

この調査はあくまでも学生の主観なので、客観的なデータの裏付けがあるわけではありませんが、論理的思考力など大学での学びに求められる力というのは一定程度ついているという回答になっています。これは、学生が強く意識していない課題であっても、授業などの中で意識的な取り組みを行えば、必要な力を付けることは可能であることを示していると理解することでもできると思います。受動的な姿勢を転換するという課題も大学側の意識的な取り組みで変えていくことは十分可能であると思います。

学生実態を前提にして、いま大切な「教育の仕組み」は

いま、高校までの学びを大学での学びへといかにして転換していくのかが非常に大きな課題になっています。昨年の全学協議会でも大きなテーマになっていました。その中でも、特に、最初のセメスターでどういうことをするのかというのは、決定的に大事だと思っています。いわゆる初年次教育ですね。これは、一般的な意味での高校までの学びから大学での学びへの展開ということにとどまらない課題を持っていると思います。例えば、基礎学力の高い層がセンター試験を利用した入試などで入学してくるけれども、成績はあまり伸びていない傾向があることや、不本意入学者が立命館への入学を不本意に思ったまま学生生活を送っていくことなどを考えると、入学時の基礎学力やモチベーションの差なども初年次教育できちんと対応する必要があると思っています。

初年次教育の課題は色々であると思いますが、学習する習慣をつけさせるというのが、まず必要だと

思っています。今日の配布資料の中でも、高校二年生（普通科）の平日の学校外における学習時間の数字が出ていますが、本学のポリウムゾーンにも重なる偏差値五〇から五五ぐらいの層の生徒の学習時間が一九九〇年の一二時間から、二〇〇六年は六〇時間となり、半減ぐらいまで減っているのです。

かつては、受験勉強など継続的に勉強した経験を持っていた層が入学してきていました。しかし、そもそも授業以外の学習を継続的にした経験がないという層に学習習慣をつけさせるとなると、かなりエネルギーがいるんじゃないかと思います。ですので、初年次教育の中でも、基礎演習のように学生が把握できるように小集団規模での教育に、より力を入れていかないといけないのではないかと感じています。

大学での学び方を学ぶということでは、近年、アカデミックスキルズなどがよく言われています。それは必要なことですが、グループで学ぶとか、フィールドワークで学ぶとか、座学的、つまり個人学習ではない学び方を、入学後最初の段階できちんとやるのが大事だろうと思っています。特に立命館は小集団で、班をつくって勉強するというのを歴史的にやってきた伝統があります。そういう強みを生かして、学びのコミュニティの中の主体的学習者を育てようという大きな目標に向けた取組みを、より一層組織的に位置付けて、系統的にやらないといけないのではないかと思っています。

先ほど法学部の「学びマップ」の話が出ていましたけれども、四年間で自分はどうのように学んでいくのかという、道筋が見えるようにしていくことが大事だと思います。その道筋を踏まえて、回生やセメスター毎に、きちんと学習の振り返りを学部で即した定型的なシートに書かせて、次のステップで何をするのかというのを自分で考えさせるというようなことが非常に大事だと思っています。こうし

た取組みを小集団教育の中にも位置づけられるとより実効性が高まるのではないかと思います。

また、専門での学習の基礎になるような知識とか、方法論をきちんと身につけるといいうことも当然のことですが大事です。これらのことを一回生の基礎演習の最初にやっておくことが必要だと思っています。

学生実態という点では、学生はいろんなところで、いろんな活動をしているのですけれども、十分把握し切れていません。先生個人からは、こんなことをしている学生がいるよとお聞きすることはあるのですが、全体としてはよく分かかっていなくて、実際にどんな学生が伸びているのかというのも、正直なところ、きちんと把握できているというわけではないのです。最近、他大学のものですが、こういう学生が成長しているのかということについて、アンケートを踏まえて実証分析している論文がいくつか発表されています。それらの論文では、授業だけ出ているという人はあまり伸びていなくて、授業外での学習や、サークル活動なども含めて、いろんな活動を主体的にやっているという層が伸びていることが報告されています。

学士課程教育において学生が力を伸ばしていく上では、正課の範囲だけでどうするのかということだけではなくて、課外活動なども視野に入れて、どういう学生が伸びているのか、どうすることがきつかけで伸びたのかということをしつかりデータの分析を通じて、改革に生かしていかないといけないと思っています。これが、今後の大きな課題だと思っています。

甲賀 その「学びマップ」は、他学部ではつくっていないのですか。

石坂 学部によって名称はまちまちですが、多くの学部でアカデミック・キャリア・チャートなどの類似の取組みがされています。法学部のは、あらかじめ設問が決まっていて、それに対応して自分自身で

振り返らせたものを書かせるようになっていきます。

松宮 振り返って、自分がそれまでどういう学習をやってきたか、それから、その後の計画も書くようにしています。強制力は残念ながらないですし、それを出さないと単位が取れないとか、そういうものではないですから、回収率などの点で限界はありますね。

石坂 回生ごとにこんなことを勉強するという内容が入っているので、学習指導に使われるとすごく効果的だと思います。本格的にやりはじめるのかなりの手間が掛かると思いますので、少ない負荷で実効性あるものとして工夫することも、普及や定着させる上では重要だと思います。

甲賀 理工学部ではJ A B E Eの審査・認定⁷というのは、どれぐらい受けさせているんですか。

鈴木 都市システム工学科、環境システム工学科はJ A B E Eの認定を受けて、指定される分野の科目を設定してやっていますね。

石坂 学生の到達度を評価する場合、客観的にスコアで測れる学力と、学びの実態調査のような自分自身の自己評価として、どんな力がついたかという主観的評価の両面があるのではないかと思います。大学の四年間で身についた力というのは、テストだけでは測れないものが大きいからです。

甲賀 先ほどの松宮先生からも両方必要だという意見がありましたけど、答申もそうなっていますね。

松宮 両方いりますね。これはまさに工程表なので、それに合わない学生もいますから。

甲賀 なるほど、ありがとうございます。次に桂島先生お願いします。

「教育の仕組み」のあり方——キャンパスアジア・プログラムの試み



桂島

いままでのお話を伺っている中で感じたことを、最初にお話させていたいただきたいと思います。先ほども国際化、グローバル化、あるいは内向きとか、そんなお話があったのですが、私はこの二〇年ぐらい、だいたい主として中国や韓国の大学と関わって、中国や韓国にも頻繁に行っているのですが、中国や韓国の大学の国際化の早さはすごい勢いで進行しているわけです。日本の大学がどこも太刀打ちできないぐらいすごい仕組みを今も続々とつくっています。ちなみに、A

P Uですが、韓国や中国から非常に高い評価を受けています。私が立命館の教員ですと言うと、立命館よりもむしろA P Uですかと言われるぐらいです。A P Uの教育の仕組みを参考にしているということをよく言われます。

ですから、立命館はかなり先駆的なことをやってきたのですが、いまはもう遅れをとっているという感じではないでしょうか。たとえば、高麗大大学校では、大学教員採用ではバイリンガルじゃないと採用しない。二カ国語で授業できない人は採用しないというのは、採用基準に入っているのです。ですから、当然授業もそういうかたちで行われています。

文学部は昨年から「キャンパスアジア」というプログラム^⑧を始め、文部科学省から「大学の世界展開力強化事業」の採択を受けました。一回生は日中韓それぞれの大学で学んで、二回生、三回生は三つの国を

横断して二回りキャンパスを移動して学ぶという画期的な仕組みです。前後期では三つの国のキャンパスを回れないので、高等学校のように三学期制を採用し、一学期中国、二学期立命館、三学期韓国というように回ります。四回生はそれぞれまた自分たちの国の大学に戻って仕上げをすることになります。文部科学省も非常に高く評価し、社会的にも注目されています。

先ほどの内向きということに関わって言えば、学生がこの夏休み中、オリエンテーションとして一カ月間、十日間ずつ三つの国のキャンパスを回るという超ハードスケジュールをこなしました。来年には本格的なキャンパス移動が行われますけれども、その前にオリエンテーション的に三つのキャンパスを十日間ずつ回ったのですが、立命館の学生はものすごく変わりました。

甲賀 そのプログラムは文学部全体が対象ということですか。

桂島 はい。主としてアジアに興味を持っている学生が中心です。そこからさらに選抜するのですが、十日間ずつ回ったおかげで、留学したいと言う学生が増えました。現に友達関係ができると変わるのですね。この経験はこれから文学部全体で共有化したいと思っています。

このように、文学部は可能な限り国際水準を目指したいということで鋭意、研究調査をしながら新しい取り組みを進めていて、その面で立命館全体を鼓舞していきたいと考えています。

ところでこうした試みを通じて、ずっと意識していますのは、何を学ぶのかということはおいて、どういう仕組みで、どういう環境で学ぶのが、重要になってきているということです。ややもすると、われわれは何か新しい教学分野、たとえば国際化というと、国際関連の教学分野をといることをこれまで

は考えてきたわけですが、そうではなくて、むしろ既存の教学分野でも、どういう仕組みで学ぶのかということを考えていく必要があります。

この点については、中国や韓国が実際にやっていることから学んだことが多かったように思います。たとえば、情報理工学部が大連でやっている大連理工大学と共同で学部を運営していくという仕組みも、あれは韓国の方が早くから試みていて、上海とか南京に、共同運営の韓国の大学が続々と設立されています。

鮎山 そうですね。

桂島 この仕組みだと、中国語、英語、韓国語ができる人材が育つのですね。ですから、韓国・中国と比較した場合、日本の学力がいま落ちてきているのも当たり前のように思います。

こういう新しい仕組みをどんどん取り入れていくことが重要だと思います。立命館はAPUの経験を持っているわけですから、今度は衣笠やBK Cが、こういう新しい仕組みをやっていく必要があると感じています。キャンパスアジアを通じて何を学ぶかということよりも、どういう仕組みや環境で学ぶのか、大事になっているということを学びました。

教育・研究の立命館の個性を大切にすることがいまこそ必要

桂島 一方、「何を」に関しては、私は立命館の個性が問われていると思います。

先ほど服部先生の話をついて、私も一九七〇年代から学生として立命館に関わっていたのです

が、この三十数年を見ていて、むしろ大学は大きく変わったわけです。ただ、立命館というのは一貫した顔や個性というのがあったと思うのです。それは、ネガティブに評価されている個性もあったと思います。私は必ずしもネガティブに受け止めていません。立命館には物事を原則的・批判的に見るという個性があったように思います。

もちろん学生の質は変わりましたが、質実剛健のような、どちらかというと、外見よりも中身の方が大事であるという教育の姿勢、あるいは基礎的な、先ほど松宮先生がおっしゃったように、うちは基礎学力を重視する、だから地味に見えてしまうのですが、それでも基礎はきちんとやりますといったようなことがあると思うのです。私はそういう個性・作風を、これからの私立大学はきちんと継承・発展させていくことが重要だと思います。

文学部では、一方で硬派文学部というのを教授会等と言っているのですが、それはこれまでの伝統はきちんと守っていきましようという意味です。それは一言でいうと、文章表現力、書く力だと思います。特に文学部はこれを意識しないといけないと思っています。だから、卒業論文に結実する書く力を育成するための少人数教育が、いまも変わらぬ文学部の根幹だと考えています。

ちなみに本居宣長が、学問とは読むことではない、書くことであると言っていました、私はしばしばこれを学生に名言であると言っています。むしろ読まないと書けないのですが。ただ、読んで終わってしまったら、これは学問とは言わない。読むことは誰でもできる。寝ながらでもできる。書くのは寝ながらじゃできませんよという話ですね。

先ほどのインターネットの話で言えば、これは私がゼミで言っているのですが、キーワードに何を打ち込むかということです。インターネットというのは、こちらが打ち込まない限り何もヒットしてこない。何を打ち込むかというのは、あなたの教養が問われているのだ、それはインターネットから学ばせんと言っています。こちらが打ち込む力というのは、読んで書くことを繰り返し返さない限り養われないわけです。そういう側面というのは、文学部は当然これからも担っていきたいと思っていますし、他学部にも発信していきたいと思っています。

いずれにしても、「改革立命館」ということで、文学部も実は長田豊臣理事長が学部長時代から、ものすごい勢いで突っ走ってきたわけですが、一方では、硬派の側面も大事にしてきたわけです。個性、顔が必要ということですね。私立大学というのは、その部分を意識しないといけないと思うのです。

甲賀 その硬派の文学部というフレーズは、女子学生比率が圧倒的に高い中で、女子学生には受けるのですか。

桂島 硬派というのは、学生の前ではあまり言ったことがありません。

甲賀 それから、文学部の学生の卒業先の進路はどうなっていますか。変化していますか。

桂島 変化したと言えば、教員になる人数がやや減って、最近また少し増えましたね。昔は教員がものすごく多かったと思います。もちろん、一般企業が一番多い。正確なデータがここにはないのですが、半分以上だと思います。教員は立命館全体の中でも文学部が第一位だったと思います。今年は産業社会学部が第一位とのことです。また、大学院に進学する人はものすごく増えています。ただ、残念なことです。

国立大学をはじめとする他大学に流出していますね。

甲賀 それは何とかしないといけませんね。桂島先生、ありがとうございました。

学生のキャリア形成や就職のあり方という問題をどう考えるか

甲賀 就職の話に関わって言えば、アメリカではかつて、アイビーリーグなど著名大学の就職先のトップはウォール・ストリートの銀行やノンバンクの金融・保険・証券業界だったですね。それが崩れて、いまどが上がってきたかと言うと、Teach For Americaというところですね。全米で年間三万人ぐらいが就職するトップクラスの就職先なのです。

その Teach For America とは何かと言うと、五週間ぐらい教師としてのプログラムを学ばせて、二年間教育困難校へ派遣する。そこでキャリアを形成してから、次の就職先として民間企業へ行かせるというもののようで、そういう経験をしたほうが使える人材になると民間企業も考えているのですね。これをアメリカのチャータースクールだとか、地方の教育行政が受け入れるわけです。教育現場で効果があるのかとか人材としてキャリア形成になっているのかとか評価は分かれています。日本でも Teach For Japan というのができて、ちょっと動き始めていますね。京都市でも、教員採用塾みたいなものを、教育委員会がやっていますね。中等教育でも教員の質というのが問題になり出しているということですね。

そういうキャリア形成とか就職とかの問題についてはいかがですかね。

服部

その問題は正解という解答はないけれども、それぞれの大学がそれぞれに問いに対する回答をしなければならぬ問題だと思ふのです。いままでの日本の高等学校にしろ、大学にしろ、高等学校の普通科の層が大学に来て、そういう意味で学問分野は違うけれども、普通科の延長線上で大学像があります。ですから、この間、商業高校であれ、工業高校であれ、あるいは高専であれ、だいたい規模の縮小が続いてきて、職能を目指そうと思うと、専門学校の方に行つてしまいます。大学が普通科の延長ですから。

だから、そういう普通科の延長線上での大学というものが変わらなないと、就職問題の新しい状況に対しては、対応しきれない部分が出てくるのではないかと思ふのです。

もちろん、普通科の延長線上でも職能の分野の就職を切り開いていくという層はこれからも必要だと思うのですが、もう少し教育界全体のシステムとして職能教育に特化したような高等教育、そういうものが今後はもっと整備される必要があるのではないかという気がしています。

甲賀 ロースクールやマネジメントスクールなどがそうですね。

服部 そうですね。難関分野ですから就職に結びつけるには大きな困難はありますが。

甲賀 教員養成課程も六年制にしようと言われているでしょう。薬剤師はもう六年制になりましたね。

服部 特に桂島先生は詳しいと思いますけど、韓国の大学は、そういう国家資格やさまざまな専門資格の分野でどれだけの人を就職させているかということが、大学のランキングの指標として重視されていますね。日本はまだそこまできていないですよ。そういう難関分野が幾つかあるというだけですね。

一方で、例えば、海外の特許の申請をする弁理士を難関分野に入れてもいいじゃないかという話もある

わけです。

甲賀 そうですね。立命館も難関分野の教育や就職を以前から意識してやってきていますけど、院生が期待通りには集まらない、社会人も入学して来ないわけです。アメリカは社会人が結構大学に入り直しますでしょう。これはどうしたらいいのかね。これから大変ですよ。

服部 以前、ある特許のシンポジウムで、中国の大学に詳しい人の話を聞いたことがあるのですが、中国の企業の中には教室があると言うのですよ。大学に教室があるのは当たり前だけでも、中国の企業の中にも教室があつて、中央政府から補助金が出るということです。

その企業の教室には、その企業と競合している企業の人たちが、自分たちの仕事が終わったらやってきて、同業どうしいろいろと話をする、そういう交流の場が企業にも設けられているということです。

従来型の知識伝達型の教育システムじゃなくて、まさに人と人とが交わる場を、大学なり企業なりがどういうかたちで提供できるかも一つの方向かなという気がします。

甲賀 立命館の場合は二部（夜間部）を廃止するときに、昼間主、夜間主というのをつくりました。当時の文部省には生涯教育局があつて、これからは生涯学習社会だと訴えていたわけです。でもその後実際には文部省が考えていたほどは実現されなかったと思います。

今度の答申でも生涯教育が強調されていて、たぶん大学院だろうと思いますけど、社会人を九万人入学させると言っています。数だけは何うけれども、具体策は見えてきません。

服部 生涯教育だけの発想じゃ駄目だと思いますね。

いま言ったようなかたちで、内外の学生、院生たちが集まって、そこに社会人Ⅱ企業の、ある意味で言う、将来のリーダーとなり得るような層の人たちが集まるような場が必要ですね。あるいは立命館の卒業生で、立命館のよき時代に巣立っていった人たちが、だいたい中間層になりだしてきていますから、そういう人たちが来られるような、そういう場をつくる必要があるのかなという気がします。

優秀層を十分伸ばしきれていない問題

鮎山 話が変わりますけれども、これまでの話題にはなかったのですが、附属校がすごく大事だと思うのです。例えば、附属校出身の学生と交換留学の面接をしますと、一回生の時点で将来何をしたいか、どういうキャリアにつなげたいかとか、ものすごく明確にビジョンを持っている学生が多いです。一方で、大学に入学後、卒業までモチベーションを維持し続けるのが難しいという問題もよく耳にします。

甲賀 大学の方が対応し切れていないということですか。

鮎山 そうです。だから、多様な学生が入学してくる中で、もちろん全体をちゃんと教育するのも大事ですけども、やっぱり目的意識の明確な優秀層をどんどん伸ばしていく仕組み、私学ならではの仕組みというのを考えてもいいのではないかなと思います。

石坂 かつては、U B C ジョイント・プログラムやアメリカン大学とのデュアル・ディグリー・プログラムなどを始めたときに、学内の一定の優秀層がそこに集まって、進路も恐らく、それまで立命館からは

行っていなかったところを開拓していったように、優秀層を引き付けるプログラムを作ってきた実績があると思います。

そうしたプログラムは、始めてから一定の期間、優秀な学生を惹きつける魅力あるプログラムとして展開されてきたと思いますが、現在、これらに代わって優秀な学生を吸引するプログラムが十分に機能してはいないのではないかと思いますね。

甲賀 UBCは文学部のキャンパスアジア・プログラムの発想の端緒みたいなものでしたね。このプログラムはカナダ政府や現地の教育機関から表彰を受けるなどして評価されたのです。それから韓国の高麗大学やメキシコのモンテレイ工科が立命館と同様のプログラム内容をUBC内で始めたりもしましたね。

そのほかのプログラムでも相当先進的なアイデアを出してきたものが多いと思いますが、問題は持続できるかどうかです。この問題は、ものすごく重要なのですよ。だから、文学部の卒業論文が持続しているのはすごいと思いますよ。ほかの学部はなかなか卒業論文を必修にできないでしょう。

石坂 卒業論文の必修化については、複数の学部が検討しています。文学部のように、完全に必修化にするかどうかということではなく、卒業論文を取らなかつたら代わりのことを課するという方法を考えている学部もあります。これから広がっていくと思いますが、立ち上げて持続していくためにはかなりのパワーが必要になると思います。

桂島 昔、夜間主があったころ、教員は夜九時一五分に授業が終わるのは当たり前だと思っていたのです。でもいまは夜間主がなくなつて、教員の層が入れ替わり、若い先生方は、夜九時一五分まで授業だなんて、

とんでもないと考えてしまう。たぶん卒業論文も同じで、一回やめてしまおうとなかなか復活させるのは難しいと思います。

甲賀 その通りかもしれません。いまだって、五時限まで授業をしたらどうなるのですか。課外活動への影響とか、学生部から見て、どうですか。

「教育の仕組み」を工夫したくてもしにくい制約

浅野 五時限まで必修科目の授業が入っていて困っています。

甲賀 本当ですか。

浅野 はい。これからマルチキャンパス化すると、ますます学生たちはキャンパス間の移動が困難になります。その一方で、先生方は一時限には授業を入れないのですよ。ここを埋めてもらったら状況はかなり改善されます。

石坂 一時限は教室も空いていますね。ただ、一時限に授業を入れるというのが、なかなか難しいのです。

甲賀 一時限に授業いれたら、学生は来ないのではないですか。

浅野 いいえ、学生は来ますよ。

石坂 いまの学生は大学に早く来ていますよ。最近、八時半から九時ぐらいが通学のピークになっていて、私たちが学生だったころとは全然違ってきます。

甲賀 ローターションを組んで、何年かに一度は必ず一時限に授業を持つというルールをつくったらいいいのではないですか。

松宮 課外活動もそうなのですが、いまはゼミが終わると、かなりの学生がすぐにアルバイトへ出かけますね。そのため、ゼミの時間延長がまったくできないですね。教室は空いていても、アルバイトがありますからと言って、学生が抜けていくのです。

演習というのは、議論がその時間で終わり切らないとき、昔は割と延長したのですね。別に強制力はないけど、授業時間は終わっているけども、もうちょっと議論しようと言ってやりましたね。すると、結構、学生は残っていて、そこからの議論でぐっと力を付けていくのですが、いまは八割方帰ってしまいますね。

学ぶ主体である学生の学習に及ぼす経済的な背景

浅野 経済的なことについても発言していいですか。いま、うちの大学で親の収入が年収ベースで四〇〇万円以下の層が一二％存在します。六〇〇万円以下が二五％。だいたい四〇％はそのような経済状態にあります。そうなるとやっぱり、奨学金をもらうとかアルバイトをしないとやっていけないというのが現実としてあります。立命館も奨学金制度を充実してきており、だいたい三二九万円以下層はほぼ全員に対応できています。でも、四〇〇万円になると、対応できない学生がでてきます。私学でどこまで対応するのかという問題もありますが、現実の問題として、松宮先生がおっしゃっているように、やはりアル

バイトを頑張らないといけないという層もいるのは事実だと思います。

甲賀 いま、旧日育（日本育英会）奨学金の利子は何%ですか。⁹

淺野 有利子の二種の場合、概ね1%です。フルに貸与を受けると卒業するまでに九五〇万円近い借金を背負うことになります。

松宮 家計がそういう経済状況ですから、アルバイトをしないと大学にいけないという問題なのです。よく新聞などに日本の学生は勉強しないと書かれますが、実はアルバイトに時間をとられているともいえると思うのです。

甲賀 なるほど、そのような見方がありますね。APUではアルバイトの状況はどうですか。

三並 APUでもアルバイトをしている学生が多いですね。

服部 いまは地方の親御さんと話をしていると、やっぱり、親は親で教育ローンを借りているのですね。子どもは子どもで、利子付きの奨学金を借りていると。そうになると、経済的にはかなり苦しくなります。もちろん、そういうケースはかつての立命館ほどではなく、少なくなってきましたが、それでも一定の層がいます。

甲賀 旧来型の公費助成運動というのみなかなか効果が出てこないけれども、文教予算がますます減らされて、もっと私学団体は動かないといけないじゃないですか。

三並 でも、教育に国がもっとお金をつぎ込むべきだと言っても、正直言って、いま、国は動かないですね。身動きとれない状態になっていますよね。いまの日本の国というのは、国債のデフォルトだとか本当

に現実的に考えなきゃいけないような状況もあるわけですから。せっかく大学なのですから、専門の先生にもうちよつと頑張っていただいて、国家財政における教育投資の在り方とか、社会保障の在り方だとか、大学人として大きなアプローチをする必要があるのじゃないでしょうか。

甲賀 Teach For America のやり方がそのままいいとは思わないけれど、もつと教育投資を、優れた人材を初等・中等教育に投入しないといけないと思います。それがキャリアになって、スプリングボードになって、企業や国際社会へ羽ばたけるようなことですね。

そういう制度設計を政治レベルでも考えてもらわないといけないと思います。財源の問題は経済学者でも見解が分かれるところですが、アメリカでもヨーロッパでも財政危機に対する処方箋として緊縮政策が最優先で進められる状況にありますね。初等・中等教育分野も含めて生徒・学生と教員が傷められていますね。しかし、北欧諸国のモデルもありますからわが国でも社会のありようの議論、成長重視か国民の生活の質重視か政策として大いに議論をする必要があると考えています。私は、国民の新しい力の形成を図らない限りこれからの将来はないと考えていますよ。

採用する企業側から見ると何が大学に必要なのか

松宮 他方で、ちょっとこれは教えていただきたいのですが、では、キャリアアップすればメリットはあるのか。これは日本の中で、いま、どう感じられているのでしょうか。

甲賀 人間の生きがいとか、生活の質を上げるとか、自分の目標を持たすことですかね。

松宮 アメリカでも、中国でも韓国でもそうですけれども、キャリアアップしようと学生が考える、あるいは社会人が考えるというのは、何かメリットがあるからですね。あるいは、そういう人材が欲しいというところがあるからですね。どうも私は日本国内だけ見ていると、あんまりそういう雰囲気がないという印象を持っているのです。

甲賀 ないですね。ですから、困難な課題に挑戦することや海外で雄飛するとかいう志向は自然には湧き出てこないで、あくせくしても結果は高が知れているからのんびりしたいとか、安心安全の方を優先するようになっているのではないですかね。

松宮 学生もそうなのですが、では、企業も含めて社会の方はどう考えているのか、ちょっと気になります。

甲賀 企業の内部の人材に関しても同じような指摘が多くなされていますね。情けないね。だから、負けているといわれています。

松宮 そうなると、では、頑張つてキャリアアップして、いい人材を採用して、戦力にしたら、勝てましたという例をつくらないといけないと思うのです。

甲賀 おっしゃるとおりだと思います。日本がつい最近まで Look East で尊敬され憧れをもってアジアの若者たちから見られていた状況からすると現状はお寒い限りですね。

いかにして日本が国際社会の中で尊敬されて憧れられる、国なり国民を形成するのが今の大学改革論

の背景にあります。その時に国際社会での貢献とか共生が新しい要素ですね。

三並 だから、逆にグローバル企業は日本人じゃなくて、外国人を取りにいくということになっています。

甲賀 日本の企業もAPU出身の人を採用して、APU卒業生を新入社員の代表としたりしたわけです。ものすごいモチベーションが高くて、こういう人材がほしかったのだと言われます。ぬるま湯にこそ熱い油を注いで、インパクトを与えるために必要だということです。

三並 別にグローバル企業と言われる巨大企業じゃなくても、私はこの間、京都にある従業員五〇〇人程度のメーカーの社長のところに、少しごあいさつに行きました。そこでは、要は日本人の体たらくとか、上昇意欲のなさは、やっぱり会社にとっては大きな問題だとおっしゃっていました。だから、外国人を採るのだとおっしゃっていますね。そういうのはあると思います。

浅野 企業が人材を採るときに考えるのは、採用コストです。採用コストを考えたときに、例えば、立命館大学に来て、グローバル人材は何人採れるかということを考えたときに、クエスチョンが付く。でも、APUに行けば確実に、例えば、三人ぐらい採れそうだと。そうであれば、コストかけてでも別府まで行きます。

日本の大学の中で、企業がどのように評価している大学というのは、三つか四つぐらいしかありませんと言われます。秋田の国際教養大学とか、APUとか、ICU（国際基督教大学）とか、早稲田大学の国際教養ぐらいしかないと言われます。

三並 そうですね。

浅野 また、立命館大学では、なかなかそこまでの人材ではないので……という話になって、でも、海外の大学へ行けば、確実に求める人材が採れるとなると、やっぱり、海外の大学へ行つて採ってきますという話になっているのだと思います。

グローバル人材をブランド化した大学というのは、既に形成されつつあると思います。その中で、立命館大学がいかに残るかということです。立命館大学には、いい人材がいて、探せば見つかるのは分かっているけど、どうやって探したらいいのですか、それだけのコストは掛けられないですよと言われます。それだったら、海外に直接行つて採用した方がいい人材が採れますよという話はよく聞きます。

石坂 APUでは、APUにいる環境でいろんな多文化経験ができると思うのですが、立命館大学の場合は、一、〇〇〇名以上の留学生がいても、大学の規模が大きいのと同じようにいかないと思います。だから、海外やインターンシップなど大学の外の社会と触れる機会を短期間でもいいので経験して、帰つてから、きちんと大学での学びにフィードバックするような仕組みを沢山つくらないといけないと思います。

留学でも、デュアル・ディグリーのように二年間も送るのではなくていいので、夏休みや春休みなども活用して短期で行かせて、海外の学生たちと交流させるようなプログラムを充実させることが大事ではないかと思います。文学部のキャンパスアジア・プログラムのように二カ国を短期で回るのもいいですし、一箇所でもいいので海外で様々な学習や経験が積めるような仕組みがあるんじゃないかなと思います。

鮎山 それはたぶん海外の大学でもすごいニーズを持っていて、そういう三週間とか四週間のプログラム

を立命館大学でやってくれませんかというリクエストが、最近ものすごく増えてきています。

甲賀 そのプログラムをつくるのは、国際部がやっているのですか。

鮎山 そういう短期のプログラムもやっています。これまでは、海外経験だとか、異文化理解に焦点をあてたプログラムだったのですが、最近はほとんど専門化していますね。だから、専門分野により近いようなショートプログラムをつくるというのが、いまの状況です。

石坂 最近は学部で派遣するプログラムがすごく増えていますね。経済学部、経営学部や政策科学部は以前から学部独自の海外プログラムで多くの学生を派遣していますし、最近では、産業社会学部が「グローバル・フォーカス」という学部独自の海外派遣を組み込んだプログラムを実施して、それを含めて今年度では約一〇〇名が学部独自の派遣プログラムで海外に行っている状況です。経年でも大きく増加していて、二〇〇九年度から二〇一一年度の二年間で二一三名の増加となっています。こうした学部プログラムをうまく全学で支えるような仕組みを考えないといけないと思っています。

服部 これまでは語学研修とか、異文化体験とか、そういうかたちでの送り出しとか受け入れがずっと続いてきて、いま、一、七〇〇名か一、八〇〇名ぐらいになっているかな。それをどんどん増やしていこうと企画しているんですが、それを教学のシステムとどう結びつけていくか、あるいは国際寮なども含めて生活のレベルでもどう結びつけていくかとかが課題だろうと思うのです。そういう内容の協定をもっと発展させながら進むべきだろうと思いますね。恐らくAPUはいままでの方向でずっと進んでいけばいいのだらうと思いますが、RUは、もっと高度化してフェース・トゥー・フェースの応用ができればいいかな

という気がしていますけどね。

三並 APUからもRUへの送り出しなどを増やそうとすると、やっぱりRU自体が英語による授業を増やさないといけないと思いますね。

服部 そうそう。そこをどう支えるかです。

三並 さっき韓国の話が出ていましたが、この夏に、慶熙大学^{きんぎ}、高麗大^{きんぎ}等々にヒアリングをさせていただく機会がありました。やっぱりどちらの大学でも、うちは英語による授業の比率が三〇%ですとか、三八%ですとか、あそこには勝っていますとか言っています。国がそういうことを政策誘導していて、その比率を高めることに一所懸命なんですね。韓国全体では、数字はちよつと確かじゃないですけど、韓国から海外へ留学する学生が約二九万人、韓国へ留学に来る学生が約一二万人であるのを、両方とも二〇万人にしようとしているそうです。出す方を減らして、入ってくる方を増やす、そのために韓国の国内の学ば環境をグローバル化しようとしています。国を挙げてやっている感じがひしひしと伝わってきますね。

甲賀 それを聞くと日本は海外へ出る人が少なくてとても深刻だと思っていますね。

田尻 海外と日本の労働環境、労働観の違いが大きいと思います。海外の雇用は日本のように安定していないので、常に自分をスキルアップし続ける精神的圧力がずっと掛かっているように思います。日本の多くの企業は終身雇用が基本ですから、入社後に自らレベルアップしようとする意欲が海外の企業に比べてあまり強くない。このことは日本の国力の相対的な弱体化に影響を及ぼしていると思っています。今後、グローバル化が進むと終身雇用を前提とする企業は少なくなっていくって、常に社員たちも真剣に考えざる

を得ないことになるように思います。

甲賀 日本の企業が遅れているということですね。

立命館に来ている留学生から学ぶこと―研究姿勢・奨学金・国際交流

桂島 うちの研究室の学生もいま半分ぐらいが中国、韓国からの留学生ですけれども、ものすごく勉強します。最初は言語的なハンディがあるのですが、日本人の大学院生の二、三倍勉強しますよ。そんな姿にはすごい、強い衝撃と刺激を受けますね。だから、外に出すばかりじゃなくて、どんどん来てもらうことも非常に重要で、むしろ彼らの高いモチベーションに応えるような、どんどん学んでいける環境をつくってあげるとだいぶ変わりますよ。

松宮 その留学生の奨学金などは、どういうところから調達されているのですか。

桂島 うちに来ているのは、すごい豪傑がいっぱいまして、当然、金はあるのかと聞くわけですが、多くの留学生は、半年分だけは貯めましたと答えるような状況でした。最近の留学生は大丈夫ですと平気で言うような状況もあります。半年分しかお金がないと、背に腹は代えられないので、目つきが違いますね。必死になるので、何かの奨学金に必ず当たるような感じです。だから裕福な家庭でなくても、僕の研究室に来て、経済的に破綻した留学生なんか一人もいません。最近、博士課程進学後に学術振興会特別研究員になった留学生も多数います¹⁰。しかも留学生が有利なのは、日本の雑誌じゃなくて、最初から自分

たちの国の方に投稿するということです。

松宮 それで業績を上げていきますからね。

桂島 日本学術振興会側の審査体制から見ると、かえって高く評価される。国際雑誌に載ったとみなされるわけです。

甲賀 文学部は英文ジャーナルとかレジュメも英文で出すとか、日中韓共同編集とかも必要になってきますね。

桂島 まったくそのとおりだと思います。

飴山 そういう意味では立命館の奨学金はほかの大学に比べると、結構いいと思いますよ。ただ、アピールが下手で留学生にはよく理解できないという部分がありますけれども。

松宮 私の専門分野は法学系の「刑法」です。最近よく中国に行きますけれども、その刑法の院生クラスを留学させたいという話になるんです。ところが、だいたい早稲田に行かれてしまっているのが現状です。早稲田は恐らく民間奨学金をたくさん持っていて、最初から苦労しなくてもちゃんと出すよと言って引っ張っているのですね。うちは、自分で取ってきてという話をするので、その奨学金の誘引でどうも早稲田に負けるというところがありましてね。何かいい方法をご存じだったら教えてほしいなと思っていたのです。論文を書かせて、奨学金を取らせた方が簡単ですか。

桂島 幸いなことに、中国や韓国では立命館の評価は高いです。親中派、親韓派の大学であるという、評価になっていきます。あと、やはり京都という魅力がありますね。京都に來ると安心できるということ。

松宮 法学系の場合、学部間の交流協定を結びたいという大学は中国、韓国には結構あるのですが、遅れています。幾つかは結んできているのですが、うちの学生が向こうへ行かない。だから、交換にならないですね。ですから、三カ月とか、半年とかいうぐらいのスパンで留学させないと、特に院生クラスを留学させないと、研究分野での交流が深まらないと思っています。その辺で、何かいいアイデアがあったらうれしいというのが、私の感想です。

甲賀 立命館の法学研究科を修了した人が、浙江大学とか、中国人民大学の教授や准教授になっている、そして中国での近代的な法制度の基盤形成に取り組んでいるという方々に北京や浙江大学でお目にかかってそのような話は聞きましたね。

松宮 そうです。だから、立命館の特に法学部と協定を結びたいと言ってくれます。

甲賀 ものすごく大事な人的ネットワークですね。

松宮 人民大学とは協定を結んでいるのですが、実質的に学生の交換ができていないです。

甲賀 行かせないといけませんね。中国の法を知っている人が、ビジネスの世界に行ったら重宝されるのにね。

松宮 そのとおりですよ。私はいま法科大学院ですから、もう一つ言いますと、中国は司法試験に受かりやすいのですが、受かっただけではだめで、日本の法曹資格も取ればビジネスチャンスは広がると言っていて、日本語ができるのだったらうちの法科大学院に来说っています。APUで日本語のよくできる国際学生がいたら法科大学院を受けさせてほしいですね。過去、若干の例はありますが、ある程度の層として来

ていただけるとありがたいです。

もう一つの課題——学習困難層の存在と「教育の仕組み」——

浅野 先ほどトップ層をどう伸ばすかという話がありましたが、私は逆に学習困難層が気になっています。今年の文部科学省が示した概算予算要求の資料にありましたように、いわゆる発達障害の学生が、アメリカでは一〇・三%程度いると言われていますが、日本でそれがどれぐらい認知されているかというと、現状ではせいぜい〇・三%ぐらいでしょう。でもわれわれの実感としては、もっとたくさんいるように思います。グレーゾーンがすごく多いのだろかなと感じています。

発達障害というのは、脳機能の障害なのですが、そこから、うつ病のように精神疾患になっていく学生もいます。また、発達障害と精神疾患のケースを全部合わせると、グレーゾーンを含めて二〇%ぐらい、そういう可能性があるのではないかと思います。

その中には、いわゆるいまの学力問題のところで、さつき石坂さんが言われていましたけど、基礎的学力の問題とか学習習慣に課題を抱える学生も含めて広い意味で、大学で学ぶということの不適応を起こしている学生も増えているので、やっぱり少なく見積もっても二割ぐらいはそういう学生がいるのじゃないかと思っています。

石坂 発達障害を持つ学生は、コミュニケーションが苦手なタイプが多い傾向があるといわれているので、

アクティブ・ラーニングのように、コミュニケーションが重要な教育プログラムをやり始めると、そこで不適応が表面化する可能性がありますね。ですから、そういう学び方を広げていくときには、新しい学びに対するサポートもこれまでとは違うレベルで必要になるのじゃないかという気がします。

淺野 そうです。いま、大学にはまさに、コミュニケーション能力重視の教育が求められているし、社会がコミュニケーション能力を求めていますね。すると、発達障害を持つ学生は、そこでたちまち壁に行き当たってしまいます。

高校時代までの学習というのは、どちらかというと知識注入型なので、周りが支えになって、何とかやれているんですね。ところが大学に入った途端に、自分でものを考えなさい、自分で論理的に組み立てなさい、ディベートしなさい、地域に行って話して、交渉してみたいな話になったら、まったくできなくなります。

だから、一回生の間はまだ何とかやっています。基礎的な教養や、知識を習得する座学までだったら何とか大丈夫だけど、二回生になって主体的な学習が始まった途端、氷付け状態になって、授業に参加できなくて、大学にも来ることができなくなって、六回生、七回生に上がってしまう。本当にそれでいいのかと、正直思っているところがあります。

先ほど服部先生がおっしゃっていたように、大学でキャリアセンターがやっている進路というのは、ホワイトカラーの養成なのです。そこは発達障害を持つ学生には難しい面があるのです。でも、そういう学生はほかの分野で高い能力を有していることがあります。

それであれば、たとえ卒業はできなかったとしても、社会に適応できる力をつけるような、そんな支援の仕組みも考えていけないといけないということを、いま、学生部で話をしています。

服部 四年間で、これだけの単位を取らせて卒業させるという、現在の教育システムそのものは、そういう学生にとつては難しいですね。それに対応しようと思つたら、単位制の学位しかないのです。本人がゆつくり納得いくかたちで積み上げていくというね。そういうことも考えないといけないのかもしれない。

甲賀 そういう学生の相談件数は増えているのですか？

浅野 ものすごく増えています。

甲賀 学生のサポートルームにカウンセラーを置いていましたね。

浅野 カウンセラーも置いているのですが、大変ですね。カウンセラーがいるって大々的な宣伝はしていないのですが、入学後に、親御さんから相談の電話がかかってくるのが非常に多くなっています。

松宮 カウンセラーをもう少し増やして、きめ細かく目配りするというのが、当面の対策ですか。

浅野 そうですね。当面は、その辺からまず始めて、ケーススタディーを積み重ねて、どう対応したらいいのかを考えていくしかないと思っています。

甲賀 「障害者自立支援法」「障害者雇用促進法」とか、障害者のことが社会全体の問題になる時代だけでなく、就業先開拓とかはどうしているのですか。

浅野 やっています。でもキャリアセンターだけではできないので、やっぱり学外の専門組織と協力しな

がらということです。

甲賀 企業側も障害者を何%か雇用しないといけなかったですね。

浅野 そうです。

甲賀 就職先としての立命館も、障害者を雇用しなければいけないということです。

田尻 障害を持つ方一人ひとりの個性を活かす場がどこにあるかを考えることが重要な課題になっています。

甲賀 ありがとうございます。

立命館職員のあり方 ― 学生と同じ課題を持つ前提を踏まえて ―

田尻 今後の大学における大学職員の役割についてお話ししたいと思います。

先ほど浅野さんがおっしゃったような発達障害を持つ人の増加や、高校から大学、大学から社会に出る移行期を支援する課題が増加しています。一方で現在の職員の仕事の八割ぐらいがバックオフィスの管理的の仕事をしていると感じています。この間、組織が大きくなると同時に制度が増えて、実務的な管理にかかわる間接的業務の割合が増加したのではないかと感じています。管理的業務も重要ですが、もっと学生へ働き掛ける仕事の割合を高めていかないといいなという問題意識を持っています。学習力ウェディングとか、あるいはキャリア・カウンセリング等ですね。そのためには、間接的業務の割合を減らすこ

とが、一つのテーマになってきています。

これからの職員の役割は、学生の成長を支援するカウンセリング的な業務にシフトしていく必要があります。そのためには、カウンセリング的業務を担当する対人能力の高い職員を増やしていかないといけな

いと考えています。

それに関わって、よく若手の職員が、私のキャリアデザインはどうなるのでしょうか、どうやってつけたらいいのでしょうか、学生と同じようなことを言っていますが、やっぱり、学生と同じで、自分で考えていく力、志があるかどうか。社会のために、学生、院生のためにどのようにやっていくかという責任感ですね。そういう主体性をどうやって養成していくかということが求められますね。

三並 先ほど学生の話として議論したことはほとんど職員としても当てはまりますよ。

甲賀 そのとおりですね。

三並 上昇志向も少ない感じがしますね。

田尻 職員はチームで仕事をしますので、チームをどのようにつくるかが大事です。大学においては、「管理する」というイメージを持つ「マネジメント」という言葉が、あまり馴染まないような気がします。

もちろん「管理する」という側面もありますが、大学の場合どうやって先生方と一緒に仕事をしていくとか、学外組織とどうコラボレーションしていくかといったような、チームをどのようにつくっていくか、仲間をどうやってつくっていくかのような、そういう「コミュニケーション」の力や「ネットワーク」をつくっていくマネジメント力をつけていかないと、大学という組織は活力を失っていき将来性がな

くなってしまうのではないかなと思っています。

もう一つは、若い職員を見ていると正解を求める傾向があります。現実の問題では正解が無い事が多いのでベターな答えで十分だと考えるような寛容する力が必要だと思います。特に大学において発達段階にある学生と対応していく上で、寛容というのは非常に重要だと思っています。そのために、職員は数多くの経験を積み、数多くの人と会話することを通して成長して欲しいと思います。

服部 寛容の精神についてはね、多文化共生のキャンパス、APUがそうだと思いますけど、そういう中で、逆に無批判的な受容になってしまったらいけないわけで、批判的なシンキングというのはいっていると思います。

もう一つ必要なのは、自尊心というか、自分自身の持っている文化的な価値とかね、その生き方とか、大学に対する使命感とか、そういうそれぞれが持っている高邁な精神で、それがあってこそ、ほかの人の違った価値観も認められるということになるのだと思います。

寛容と、自尊心、高邁は同じ単語です。たとえばスピノザはラテン語の *generositas* に「寛容」の意味を持たせていますが、デカルトの *Genérosité* は「高邁」です。表裏一体です。だから、これからの時代は寛容と同時に、自分自身が持っている価値観に対する自尊心がないといけないと思うのですね。

甲賀 冒頭で言いましたが、中教審の答申で、「答えのない問題に解を見出していく」という人材を必要としていると言ってますね。

「解答の無い問い」に回答するという現代諸問題に、学生も教職員も対応する必要

松宮 解答の無い問いということと言うと、刑法でもそうできて、実際の事件で裁判になって、有罪判決が下るといふのは極めて少なく、実際に刑罰を言い渡すのは実は被害者対策でもあるのです。もちろん、加害者に謝罪をさせて、賠償させるのは当然なのですが、被害者の感情をどうやってうまくだめるか。

甲賀 それは主に「民法」じゃないのですか。

松宮 ところが、それが「刑法」なんですよ。「刑法」というのは、そういう被害者のある犯罪で言うといかに被害者の復讐的な感情をうまくだめて丸く収めるかというのが、肝要なのです。

甲賀 じゃ、法学部も紋切り型の教育をするわけじゃなくて、まさに「解答の無い問い」を訓練することが必要だというわけですね。

松宮 ええ。だから、司法試験の受験教育を中心に教えていますと、そういう教育ができなくなるのですね。

甲賀 このジレンマは専門教育と教養教育のジレンマと同じですね。

松宮 本当の専門教育は、この事例問題をどう解くのかじゃなくて、これだったら、起訴するようになるが、しかし、これをどうやって裁判に持ち込まずに終わらせるかを考える力をつけることだというわけです。

鈴木 そういう意味では留学プログラムなども、どうやって理不尽な体験をさせるかということだと思う

んですよ。学生にとって理不尽な体験ということで、自分ですぐ解決できないような全然違う世界の価値観と向き合わせて、いかにそれをクリアさせるか。たぶんそれが一番ポイントだと思っていますね。

甲賀 これからの社会に必要な、想定してなかった事態にぶつかったときの判断力ですね。

石坂 職員のキャリアも同じで、異動を含めて想定できなかったことに直面したときにどうやってそれを受け止めて仕事をしていくかということを、自分なりに考えないといけないと思います。自分の発想や能力の限界を超えようと思ったら、全然違うところに行つて、新しい体験をするしかない。若いうちにそういう経験をする仕組みをつくらないといけないと思いますね。自分が考えているキャリア・プランを新しい環境と課題に合わせて、不断にバージョンアップさせていくことが大切だと思います。

服部 日本学術会議が平成二二年に「大学教育の分野別質保証の在り方について」(回答)¹²⁾を出しましたけど、そこで言われている教養教育でのコミュニケーション能力について話があったときに、合意できないものは合意できないままに、何か協働の可能性を探すというような、そういうコミュニケーション能力が必要だということでした。

それと解決できない問題に直面したときに、解決の正解を求めたら駄目なのですね。ある意味でトライ・アンド・エラーがいるわけです。

例えば、プラス五とマイナス五の間には複数の選択肢があつて、中間の「ゼロ」だけじゃなくマイナス三を選択してもいいわけです。その選択でも一歩前進していると。そのときまたどういふ問題が生じるか、またトライ・アンド・エラーでやっていったらいいというわけです。二者択一の解決策ではないのですよ。

だから、何か一つの解決できない問題に直面したときに、何かある一つの「こたえ」を「かいとう」というのは、解決の方の解答じゃなくて、返す方の回答、それを出して、そして、それでまた応答し合って対応していくような、それが必要じゃないかと思っています。

桂島 先ほど学生だけじゃなく、職員にも当てはまる話だと言っていましたけども、教員も様々な問題を抱えていて、とりわけ文学部は個人経営的な先生の方が多い学部なので、個人で悩んでおられる方も多いと思います。だから、大学全体、学部全体で教職員の悩みを受け止める仕組みをつくることが重要です。そういう意味では、大学組織は今転換期に来ていると感じています。

松宮 いろんな問題がありますが、最近は取りあえず二年間もたせられる回答を出して、その間に次の回答を考えるとという発想をするようにしています。

甲賀 AかBかという二者択一的な思考方法はだいたい変えないといけないと思います。AでもBでもある場合とかね、Aで試してみても、うまくいかなかったら、Bにいかうとかね、そんな発想がものすごく必要になってきます。制度設計でも、社会のありようでも恐らくそうなると思います。これでないとしためというのではないですよ。

松宮 「取りあえず、当面放つたらかしておこう」という回答もあっていいわけです。

現代の諸問題に対応するには、六年間学修する必要があるのかもしれない

松宮 いま学生が大学で過ごす時間が短くなっています。これは、大学院政策に関わりますけれども、教審の答申の中にもありますが、就職活動の時期が早くなっていますでしょう。本格的に専門の勉強をするという三回生のときに、大学にあまり出てこなくなってしまうている。

ですから、大学院の前期課程を入れて六年間で、その内二年間ぐらいしっかり勉強する期間を設けて、それから就職活動をするというような雰囲気をもう少しくつくっていくことが必要かなと思っています。これはキャリアアップという点もありますが、どちらかというと、しっかり専門を勉強したという実感を持って卒業して欲しいという願いですし、何とかもうちょっと大学院に進学してくれないかなという希望でもあって、そういうのをぜひ考えていただきたいと思っています。それで大学院の入学金を安くしてもらうとか。

桂島 奨学金はだいぶ手厚いのですが、目立ちにくいのです。説明はしていますが。いったんとにかく学費を払ってくださいというのが、本学の制度なので。後期課程ぐらいまで来ると、親に頼っていませんから、なかなか最初の学費を払うのが厳しいのですよ。

博士後期課程に限れば、奨学金で入学後にだいたい補填できるような制度になっているのですが、やっぱりもっと募集の段階で、学費はさしてかからないのだということを分りやすい工夫をしないといけないと思います。

鈴木 実際にドクターは研究大学のコアですよ。ドクターのいないところは研究ができません。特に理工系はそうですよ。学費が無料になったら非常にいいなと思います。

甲賀 その奨学寄付金を取ってきて、それから授業料を払うというのは、日本ではまだ進まないのですか。

鮎山 ええ。なかなか難しいでしょうね。そもそも、企業の方もそんなに出さないですし。

松宮 マスターまでとか、後期課程に行つてとかいうのが、入学して割と早い時期にそういう学習プランが立てられると、それでできた時間に専門をしつかりやるとか、さっき言った、留学に半年ぐらい行つてみるとかいう発想も出てくると思うのですけどね。

政策上も「大学院」「学部」と分けて考えないで、アカデミック・キャリアという視点で一体のものとして考える。さらに、立命館は大学院まで学費面も含めて非常に行きやすいですよということをアピールする。こういう仕組みをこれからつくつていかないといけないのじゃないかなと思います。

甲賀 それはいいですね。アメリカは学位を取ったら収入がいくらふえるとか、大学の学士の場合の就業と高校までとの生涯所得格差はいくらになるかという計算をする。生活の質が高くなりますよという問題とともにコストパフォーマンスが高いですよ、投資のしがいがありますよと訴える。そういう説得力も大事ですね。日本はそれがなかなか難しいでしょう。大学院を出て就職しても、マイナスになるようなことになる。

三並 そうですね。理工系以外ではドクターを出ても、明らかにマイナスでしょうね。

甲賀 日本の社会ではね、工学系も、それがまだできてないですね。

松宮 技術者はマスターを取っておいた方がよいというのは、普通でしょうけどね。

甲賀 研究職はドクターを取りますよね。企業の研究者です。そういう人たちがもうちょっと入学してき

てくれたらいいのですが。生活の質が高くなりますよという問題とともにですが。それとも最近、入学せずに論文の審査によつて博士号を取得する論文博士が多いのでしょうかね。

鮎山 いや、最近は課程博士にどんどんシフトしていますよね。在職しながら、社会人ドクターで入学してくるケースが多いです。社会人ドクターは授業料を会社が出しているのか、自分が出しているのかはともかく、入試の制度がちよつと違つたりしますのです。

いずれにしても、いまドクターは留学生が圧倒的に多いですからね。いろんな先端的なノウハウが国外に流出するのが気になる場所ではあります。

甲賀 そういえば、APUはJDSの⁽¹³⁾院生が多いでしょう。

三並 そうですね。いまでも多いです。

甲賀 法学部でもそういうJDSの枠組みとかで留学生の受け入れを考えていけるといいのですがね。

甲賀 そろそろお時間になつてきたようです。「私立大学 これまで これから」ということでそれぞれのお立場から多岐にわたるご発言をいただきましたので、ここであえて「まとめ」的な発言はいたしません、私学として、個性というお話も出ていましたけれども、立命館らしさを打ち出しながら、みなさんそれぞれの持ち場での仕事を牽引いただくことが、おのずと立命館の「これから」をつくることにつながっていくと思います。

本日はお忙しい中、どうもありがとうございました。

(終了)

【注】

(1) 「学ぶ主体」議論 一九八三年度、一九八七年度全学協議会における主要な議題。一九八三年度の全学協議会では、学生を自立の過程にあるととらえ、学生実態と発達段階、学生の要求や関心を踏まえた適切な教育目標の設定を通じて、学生が真に「学ぶ主体」として自らを確立するという人格形成の課題を視点として重視した。以後、この視点からの教学改革、学生の生活支援の諸施策が展開された。一九八七年度の全学協議会ではこの視点を引き継ぎ、総合的な厚生援助政策の方向が鮮明に打ち出された。（詳細は『立命館百年史』通史三、第一章を参照）

(2) エスピン＝アンデルセン デンマークの社会学者、政治学者 専門は福祉国家論

(3) 「一八歳人口と進学率等推移」（文部科学省「学校基本調査」による表）

(4) 一九七九年の全学協議会での新しい学費方式 一九七九年度全学協議会で提起された学費方式で「新年度学費＝前年度学費×（1＋物価上昇率＋教学条件改善率）－ α * α ＝経常費補助金の対前年度増額分（一人当たり）という式に基づいて学費額を決定する方式。これは相対的低額費政策の堅持とともに、学園の基本財源である学費収入の安定的確保につながった。（詳細は『立

命館百年史 通史二』一、一七九頁参照）

(5) chemistry 化学現象以外の意味で、「不思議な働き」「相性」がある 用例：They have good chemistry. 彼らは相性がいい

(6) QS社の大学ランキングは、次の項目と比重率を評価指標としている。

「学者による定評評価」（四〇％）

「雇用者による定評評価」（一〇％）

「教員対学生比率」(二〇%)

「一教員あたりの論文被引用数」(二〇%)

「外国人教員比率」(五%)

「国際学生比率」(五%)

- (7) 日本技術者教育認定機構(JABEE: Japan Accreditation Board for Engineering Education / 設立一九九九年一月一九日)は、高等教育機関の技術者教育プログラムの審査・認定を行うNGOであり、一般社団法人。土木工学科(平成一五年三月 建設部門)、環境システム工学科(平成一六年三月 環境部門)、都市システム工学科(平成一六年四月 建設部門)が認定を受けた。指定される分野の科目、授業到達目標を設定し実施しなければならない。

- (8) キャンパスアジア・プログラム・立命館大学、東西大学校(韓国釜山)、広東外語外貿大学(中国広州)の三大学が共同運営するプログラム。二〇二二年度より開始。日中韓の言語に通じ、その文化・文学・歴史等に深い理解力を有するとともに、そこに横たわる諸問題を人文的知見から洞察・分析して具体的な解決を図り、日中韓を舞台とする企業・公共機関・教育研究機関・NPO等で実践的に活躍する人材の育成を目的とする。三大学から選抜された学生が、「移動キャンパス」という仕組みによつてプログラム化された共同授業を四年間履修し、その過程で一〇名の学生がバイロット学生として選抜される。二〇二二年度文学部一回生と二回生から参加可能。バイロット学生に選抜されるには、中国語、朝鮮語の語学能力を含めた選抜試験に合格する必要がある。
- (9) 二〇二二年現在、日本育英会奨学金は、日本学生支援機構(JASSO)が所管。第一種(無利子)と第二種(有利子)奨学金がある。「奨学金ガイド二〇二二」では、第二種の利子は「上限三%」として貸与終了時での利率(独立行政法人日本学生支援機構に関する省令 平成一六年三月三十一日文科科学省令第三号)で決まる。固定・変動を選択できる。二〇二二年現在ではだいたい

一%前後。

(10) 学術振興会特別研究員。日本学術振興会の研究助成事業のうちの一つ。博士課程後期課程以上の若手研究者養成を目的とし、月額二〇～四〇万円弱の研究奨励金と一五〇万円以内の科学研究費補助金が支給される。

(11) 発達障害は、「発達障害者支援法」（平成一六年十二月十日法律第一六七号）では、発達障害の定義を「自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害その他これに類する脳機能の障害であつてその症状が通常低年齢において発現するものとして政令で定めるもの」としている。コミュニケーションが苦手などの対人関係に表層的に現れる。

(12) 「大学教育の分野別質保証の在り方について」（平成二三年七月二三日 日本学術会議 回答）平成二〇年五月に文部科学省高等教育局長から日本学術会議会長宛に依頼された「大学教育の分野別質保証の在り方に関する審議について」に基づき出された回答。学士課程の質保証に関連した教育分野について「教養教育の在り方」と「大学と職業との接続の在り方」——いわゆるキャリア教育——を回答した。

(13) JDS (Japanese Grant Aid for Human Resource Development Scholarship：人材育成支援無償事業)

JICA事業の一つ。政府の「留学生受入一〇万人計画」に資するために、平成一一年度の新設された無償資金協力による留学生受入事業のこと。当事業では、「対象国において将来指導者となることが期待される優秀な若手行政官等を日本の大学に留学生として受け入れ、帰国後は、社会・経済開発計画の立案・実施において、留学中に得た専門知識を有する人材として活躍すること、またひいては日本の良き理解者として両国友好関係の基盤の拡大と強化に貢献すること」を目的とする。平成二四年度四月現在、毎年約二五〇名の留学生を、一二カ国から受入れている。APUでは、二〇一〇年度中国から一〇名、キルギスから三名、タジキスタンから三名。合計一六名を大学院に受入れている。

座談会

「附属校　これまで　これから」

日時　二〇一二年一〇月一四日（日）九時三〇分～一二時三〇分

場所　立命館大学衣笠キャンパス　西園寺記念館　2階　K二〇四会議室

司会　立命館百年史編纂室長　甲賀　光秀

出席者　上杉　兼司（立命館中学校・高等学校 副校長）

西川　隆史（立命館宇治中学校・高等学校 中学校教頭）

江川　順一（立命館慶祥中学校・高等学校 高等学校教頭）

小山　寛一（立命館守山中学校・高等学校 中学校主幹）

事務局　佐々木　雅美（百年史編纂室 課長）

奈良　英久（百年史編纂室 課長補佐）





甲賀 今号の座談会は、通史三巻の発刊の記念でもありますので、「附属校これまでこれから」というテーマで開催させていただくことにしました。他に「私立大学これまでこれから」を予定しています。

まず、お手元の資料として大部のものをお配りしていますが、なかでも中央教育審議会の答申で、高等教育に関するありようが提起されています。今回の答申はパブリックコメントなども参考にしながらまとめたものようですから、かつては「期待される人間像」が上から提示されるというようなスタンスもあつたように思いますが、今回はそうではないかたちで「人間像」ということが言われていますね。

これからの時代を「予測困難な時代」だととらえています。日本の社会が将来について「予測困難な時代」に教育はどう立ち向かうかということが論じられています。そうした脈絡で、社会の期待にこたえる教育改革とか、グローバル人材をどう育成するかといった課題が据えられています。

そこで言われている人間像・人材像といったものは、私なりに言いますと、正解のない問題にぶつかって自分が問題を立てて回答を出す、そういうことが可能な人間、自主的に判断できる人間、あるいは想定外の事態が起こったときにも対応できる人間です。グローバル人材像について言えば、海外で日本固有の文化や固有のイノベーションといいますか、繊細な技術のありようみたいなものを世界に発信できる人間です。

大学に関しては、その「予測困難な時代」に日本の未来を創造するのが大学だと、そういうクリエイ

タイプな役割が大事だということがうたわれています。

だから、人材を育成するということと、大学はそういう教育にかかわる側面だけではなくて、研究を通してイノベーションにつながるような、日本社会を世界に伍して戦える固有の社会としてつくり上げるような、そういう役割を担ってほしいというのが、大学に対する期待です。

もう一つは、「大学と地域」ということですね。地域の中でコアになってほしいということが、大学のあり方について書かれています。

また、今の大学生は、学習時間が少なすぎる、学習時間をいかにして確保するかが重要だと言っています。そのために、カリキュラムをちゃんと組み立てるとか、シラバスを丁寧にするということですが、もういくつかの大学では実際に始まっていますし、立命館でもすでにやっていることが多くて、例えば十五週授業などですね、新規にどういうアイデアなのかという具体性があまりみられません。

学習習慣がついてないという問題指摘もされています。学習習慣の問題は、小・中・高等教育の接続の問題として議論されていたりもします。中・高一貫より前倒しで小・中接続とか、もつと大胆に、「六・三・三制」の見直しとかいうことが議論されていたりします。制度としてどう具体化されるかはわかりませんが、そうした状況がある中で、立命館の附属校は、これまではこうだったけれども、これからはどうするかと、そういう話を展開していくことができばと思っています。

最初に、私学の優位性とか、それから立命館の強みとかいうことをお話いただいたらどうかと思います。

最近の競争的条件なども念頭に置いて、各校の特色や取り組みについて、立命館の強みということでお話しただけだいたいと思います。

それではまず、一番歴史の長い深草、立命館中学校・高等学校からお話いただけますか。

立命館中学校・高等学校の「これまで」と今



上杉 深草の上杉と申します。よろしくお願ひします。

私は、一九七九年に立命館高校（北大路）を卒業後、生物、特に生態学に興味を持って沖縄の琉球大学に進学して、大学院までそこで学びました。その後、大学での非常勤講師や予備校の講師を経験をしながら、一定期間、公立の学校に勤務して、沖縄尚学高等学校という私立の学校に勤務しました。その後、立命館に赴任してきたということになります。

高校時代に、生物に興味を持ったというのは、やはり先生の影響が非常に大きかったと思っています。

特に、当時は、卒業研究レポートという取り組みが深草ではありましたので、その卒業研究レポートの取り組みが、ずいぶん軌道に乗り出したころだったかと思っています。

甲賀 それは中学校の卒業のときですか。

上杉 はい、中学校の卒業のときですね。私は中学校、高校と立命館でお世話になりました。影響の大き

かった先生というのは具体的に言うとい高俊行先生ですけれども、日高先生の赴任後四年目だったと思いますが、ずいぶん脂が乗ってきたときに担当いただいたのだと思います。非常勤講師として立命館中学・高校に教えに来られていた生物の先生も京都大学の日高敏隆研究室の方でしたので、いろいろなお話をおうかがいし、卒業研究レポートのときなどもお世話になりました。それ以降も京都大学の日高敏隆先生の研究室に行ったりしているうちに、大学はこういうところに行ったらいいだろうというような話も聞いて、新進のおもしろい先生方が集まっているという沖繩を選んだという経緯があります。

そのように自分自身が経験をしてきたことから言えば、立命館高校は私が通っていた時分から、子供たちが高校時代にやりたいことを求め、それを自然に追究させるというような指導がされている学校だったなと思っています。もちろん立命館の附属校なので、大部分の生徒が立命館大学に進学しますけれども、当時は学内入試があったという関係もあり、意外と立命館大学以外の大学に進学する生徒も多かった記憶があります。

そういう意味で、さまざまなベクトルに向かっていく生徒たちそれぞれにうまく合わせたような教育というのが立命館では当時からできていたのかなと思っています。今の深草の教育にはそのような部分があると思いますね。

自治活動に関しても、例えば中学校のときにPTSAといって、PTAにSⅡスケジュールも加えて、保護者、教員、そして生徒も交えた取り組みがあったと記憶しています。そういう自治といいますか、さまざまな議論を通して、お互いの理解を深めていくような経験もそのころからできていたのかなと思います。

す。そういう部分で、今、そしてこれからという部分では、これからも立命館中学校・高校（深草）というのは、生徒の自治活動を大事にしつつ、さまざまな経験をさせ、いろいろな気づきをさせていくというような教育を大事にしていかなければならないと考えています。

立命館（深草）の強みに関してですが、一点目には、スーパーサイエンスハイスクール（以下SSHと略）で一定の成果を上げていることがあります。三期連続でSSHに選ばれ、もう一〇年間以上SSHとして先進的な取り組みを実施してきました。特にこの二年間はコアSSHにも選ばれています。海外の生徒たちを招いてのサイエンスフェアも、今年で一〇回目になりますけれども、海外十八カ国・地域の二九校の生徒たちが立命館へ集まってきて、参加生徒の人数がもう二〇〇名を超えるような国際的な大きな取り組みになり、国内の学校も多くが参加するようになっていきます。まさに科学の国際交流の全国的な見本になり、深草はそれを先進的に引っ張っていくような立場にあると考えています。

二点目には、そういった取り組みを通して、様々な海外の学校と教育協定を結ぶことになりましたが、教育協定を結んだ学校とは、理系だけではなく文系のほうでもかなりの連携が進んできていまして、文系の生徒に対してもさまざまなプログラムを提供できるようになったことです。

それに付随して、英語に対してのモチベーションが高まっている点も強みとしてあげることができます。海外の生徒たちのやりとりを通じて、しっかりと英語で発表をして、かつ英語で受けた質問に対して答えることができるのか、もしくはポスターセッションなどでも、しっかりと相手に説明して受け答えができる、自分がやってきたことについて自信を持って相手に伝えることができるというレベルにまでなっ

きています。それは、SSHのコースの生徒だけではなくて、これからさらに全校へ広げていくということが非常に大事だと考えています。

さらに、立命館小学校から立命館中学校に生徒が入学してくることによる変化もありました。やはり立命館小学校出身の生徒は、小学校のときの授業の成果もあつて英語に対しての「耳」がとてもいいのですね。したがって、それまでどおりの英語の授業をやっているのでは対応が不十分になってしまいます。こういう生徒たちをさらに飛躍的に伸ばさないといけないということもあつて、英語の授業改革はずいぶん進みました。たとえば小・中一貫のインテンシブプログラムやディスカバリープロジェクトなどのプログラムですが、そうしたプログラムで生徒たちはより英語の部分で伸びてきておりますので、今までとは違ったタイプの生徒をさらに育てることができるのかなということを期待しています。

二〇一三年度には、カリキュラム改革に合わせて、グローバルリーダー育成という国際のコース（GLコース）を立ち上げるということになっておりまして、国際の分野でも活躍できるような生徒たちをたくさん輩出していきたいと考えています。

高大連携の取り組みの発展

また、これは附属校全体に共通することだと思うのですが、高大連携の取り組みが最近本当に発展してきたと思っています。一貫教育部を中心にして、春と秋に大学の各学部すべてと懇談をするということ

を実施しています。そうした中で大学の先生方からどんな生徒を欲しているのか、どんな生徒を中・高で育ててほしいと思っているのか、というようなことを膝をつき合わせて議論することができますし、さらに附属校出身の生徒個々が大学に行つてどういうパフォーマンスを発揮しているのかということもずいぶん明らかになってきました。

かつて言われていたように、低学力層の問題についての指摘が中心になるのではなくて、附属校出身の生徒で、実は立命館大学での様々な活動で中心的に引つ張っている学生が多いことです。APUにしても開学当初にAPUに進学した附属校出身の学生がAPUの文化の一端をつくってくれたとまで言うてくださる先生もいらっしゃるほどです。そのように大学と附属校との間で様々な意見を交換することによって、どういう生徒が大学でどのように活躍しているのか、どういう生徒が大学生生活をうまく送れていないのかというような分析がちゃんとできてきています。

また、これまでも各校でずいぶん議論をされてきた基礎学力の問題などを加えての分析や意見交換もしていくことができます。最近では附属校出身の学生のGPAが入試区分別の集計で留学生を除き大学でトップになったという話も聞いています。ですからそうした大学と附属校との話し合いを続けて、いろいろなところを改善していくということは非常に大事だと、またそういうことができる環境はすばらしいと思っております。

さらに、大学からいろいろな協力をいただいています。大学の先生が高校の教育に実際に携わつていただくということで、法学の分野だとか国際関係の分野、それから大学の応用人間科学研究科ですか、

本当に主体的に関わっていただいています、様々なかたちで高大連携の仕組みができてきているということはすごくうれしいです。それからSSHのほうでも、R—GIRO¹の先生方をはじめ、先ほどお話ししましたようなサイエンスフェアも含めて、様々な専門の理工系の先生方に協力をいただいております。

そういう大学の学問にふれたり、研究などをしたりすることによって、英語にしても、論理的な考え方にしても、それから相手と協働をしていくという部分でも、生徒が様々な能力を発揮することができるということがわかってきましたので、立命館高校では今一度原点に立ち返って、二〇一三年度の入学生からは文系も含めて全員に課題研究を課すということが決まっております。

甲賀 それは卒業レポートのようなかたちでまとめるということですか。持続的に取り組み結果を出していければユニークな教育上の取り組みになるでしょうから期待できますね。

上杉 そうです。しかし、高校三年生の九月の段階でまとめさせるというプログラムなので、中学の卒業研究レポートよりは大きくレベルアップさせることができると思っています。

文系の生徒も含めて全員が対象ですので、例えば映像が好きな生徒なら映像を作品として、その定義なんかもしつかりと文書化するというような研究でもいいのです。立命館大学の映像学部からも授業の協力を受けていまして、実際に映像制作を行ってそれが全国的なコンテストですごくいい賞をとることもありましたし、政策科学部との連携もあります。取組みの事例をあげたらいくらでもあるほど、本当に多くの学部とたくさんプログラムの現在実施されています。

大学とよい関係を保つということは、やはり中等教育においてもよい方向にいくということをつくづく

感じていまして、それが大学の附属校としての、ものすごく大きな強みではないかなと思っています。まずはこのくらいにしておきます。

甲賀 ありがとうございます。

今のお話をお聞きして、私は以前に教学担当や専務理事として中等教育を長く担当していたことがあって、そのころの議論も思い起こしますと、すぐ変わったという感じがしますね。かつては大学と中・高は今のような信頼関係にはなかった時期もないわけではないと思います。かつては「附属」高校とさえなかなかならず、要するに附属ではなく独立しているのだと言っていたような時期もありました。

上杉 「附属」校じゃないんだと言っていましたよね。

甲賀 ええ、言っていました。中等教育部を設置するということには、教育委員会のようなものをつくるのかと反対さえ受けたこともありました。

今、上杉先生からお話いただいたような深草の高大連携の取り組みは確信に満ちている感じがしますね。それらの取り組みが実際にアウトカムとして積み重ねられていけば、本当に素晴らしいことだと思います。後ほどそのあたりを補足していただければと思います。

それでは次に歴史の古い、立命館宇治中学校・高等学校からご発言をお願いしますか。

立命館宇治中学校・高等学校の「これまで」と今



西川 立命館宇治中学校・高等学校の西川です。よろしくお願いします。

私は、立命館大学の卒業です。一九八七年に大学を卒業しまして、学校法人宇治学園に奉職しました。宇治学園が一九九四年に立命館と合併し、一九九五年に新しく誕生した立命館宇治の第一期生を担当しました。

後発組として大学の附属校になり、深草は百年の歴史がありますけれども、立命館宇治は歴史が無い中で、新しい新機軸を打ち出しながら学校づくりをしていることが使命でした。

新しい大学附属のありかた、それから国際化、情報化ということを一つの新機軸として打ち出し、新しい学校づくりを始めました。入試でも、多様な能力を評価することを始めました。現在、一八年目を迎えて、第一期の卒業生が今年三二才になります。立命館宇治の「これから」ということでは、違うステージに進まなければならない段階にあると思っています。

立命館宇治は国際化ということを打ち出しました。立命館と宇治学園が合併した一九九四年に立命館大学びわこ・くさつキャンパス（以下BK Cと略）が開設していますが、BK Cで高校の授業を行ったり、情報化においてはUNIXの授業を行ったりもしました。それから、帰国生徒の受け入れを進め、生徒寮もつくりましたし、課外活動における高大連携として新しくアメフト部やチャリーダー部をつくりました。他校がやらないことをやっていくという気概を持って、これまで頑張ってきたと思っています。

二〇〇〇年に、スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール（以下SEELHiと略）の指定

を受けて、二〇〇三年には一年間海外に留学させて、前後に英語による教育を展開する高度な英語ベースの国際化カリキュラムを提供するSELコースをつくりました。海外経験を早い段階で持った生徒を育てていこうというコースを設けたわけです。現在では高校二年生が四三名、高校一年生が五二名というかたちで、人数としても拡充してきています。二〇一一年度のSELコースの卒業生のTOEFL平均点が五二点ということで、人数的にも学力的にも成果を伸ばしつつあるという状況にあります。二〇一〇年に国際バカロレアを取得できるIBコースを立ち上げて、第一期の卒業生がこの春卒業しています。

それから、帰国生を受け入れる学校としてずっとやってきまして、現在、中学校で大体一割、高校で約二割は帰国生徒です。海外の現地校であったり、日本人学校であったり、インターナショナルスクールであったり、多様な背景を持つ生徒たちを受け入れてきました。

スポーツ政策にも力を入れていまして、陸上競技や野球、柔道、ラグビー、アメフトなどに力を入れて取り組んできました。近年では、京都サンガと提携して、サンガのユースの選手を高校に入学させる制度もあります。現在の高校一年生の中には、この九月にあった「U16」というアジア選手権に日本代表として派遣されている生徒もいます。サンガとは別に、サッカー部も全国大会出場しまして、ベスト一六の成績を収めるなど、スポーツでも一生懸命頑張る生徒を輩出してきました。

立命館との合併後しばらくは高校単独校だったのですが、二〇〇三年に中学校を開校しまして、基礎教育をやりながら、五つのスキルということで、英語であったり、数学であったり、作文であったり、そういうスキルをきちんと身につける、基礎をちゃんと教える中学校づくりをしていこうということで進めて

きました。

深草の上杉先生もおっしゃったように、高校と大学のつながりの中で、一つはやはり大学の先生に高校に来ていただいたの授業であったり、高校生が大学を訪問したりするということもすごく大事な要素でありますし、もう一方で卒業生が高校にやってきて、大学の様子であったり、さらには大学を卒業した社会人が高校を訪問してきてくれて、自分たちが働いている環境はこうだから高校時代にこういう力をつけておいたほうがいいよというようなことを話してくれます。大学附属というのは、単に学校がつながっているということではなくて、人間的なつながりがある中で、縦のつながりがあつて、人間教育ができていくのだと思います。このことが立命館学園としてのものすごい強みであると私自身は考えています。

甲賀 ありがとうございます。それでは次に立命館慶祥中学校・高等学校からお願います。

立命館慶祥中学校・高等学校の「これまで」と今

江川 立命館慶祥の江川です。よろしくお願いいたします。

私はもともと北海道の道立高校の教員が振り出しでした。高校は三校に赴任しまして、それから行政に入って指導主事を一〇年間務めて、その後、教頭として道立高校に出ました。そして二年半前の二〇一〇年四月から立命館慶祥にお世話になることになりました。

なぜ立命館慶祥かといいますと、私は立命館大学の出身ではありませんが、一人娘が立命館慶祥高校に



入学しまして、大学は立命館大学国際関係学部でお世話になりました。娘が高校に在学している三年の間に保護者会長を務めました。保護者会長だった当時の校長は西脇終先生だったんですけれども、娘の卒業で私が保護者会長を辞めることになる年に、当時、一貫教育担当の常務理事であった川崎昭治先生が校長として慶祥に赴任することになり、何をどう思われたのかはわかりませんが、「立命館慶祥に来い」というような話になりました、お世話になることになりました。

二年半前にこの学校に来て、いろいろ驚くことがたくさんありました。思い起こせば、立命館慶祥という学校は、一七年前ですか、北海道に立命館の拠点をつくらうということで、慶祥学園と立命館が合併して、立命館が北海道に学校を持つことになるわけですが、そのときの北海道の教育委員会の反応はものすごかったです。大きな影響というか、「黒船襲来」などと言われてずいぶん話題になりました。黒船が来たぞ、大変なことになるといふように、北海道内の私学はもちろん、公立高校でもずいぶん話題になったという話を聞いています。

甲賀 私も当時は合併交渉に携わっていました。立命館慶祥の前身である札幌経済高校は、優秀な層を集めていた時期もありましたよね。当時は、商業学校や経済高校、特に経済高校というのは珍しいですから、就職にしても活躍されている卒業生が多いんじゃないですか。

江川 就職もよかったです。

甲賀 北海道と立命館いう点では、立命館大学への北海道からの志願者が非常に多かったということは

つてからあって、立命館の附属校を北海道につくるという流れ、これは自然だったところもあります。

江川 入試の地方試験会場が北海道にもありました。かなりの数が受験して、入学もしていました。

三〇年ぐらい前は、私学の入試で北海道に地方試験会場があるのは、立命館と同志社、この二校しかなかったんです。ですから例えば札幌の公立のトップ校である、いわゆる「東西南北」校（札幌東高校、札幌西高校、札幌南高校、札幌北高校）は、北海道大学を受験して、併願で立命館か同志社のどちらかを受験する、あるいは両方受験するということをしていました。

甲賀 それに関わって、私学と公立ということについて発言していただきたいんですけど、北海道では公立優先で、特に中学校と高校の関係では、偏差値順に「東西南北」のような高校から始まって順番に公立高校に生徒の進学先を配分を考えていくことがあって、そのシステムを打破しなければならないと、立命館慶祥を設置する前から問題視していました。そんなことを言ったから、「黒船」だとか何とか言われたと思うのですが、いずれにしても私学の熱意が大事にされないというところがありました。それを私たちは当時、「官尊民卑」と表現していましたね。

江川 おっしゃるとおりです。それで、「黒船襲来」などと言われながらも立命館慶祥が設置されるんですけれども、特色ある教育の中身をまず充実させようということで、例えば海外研修、これを海外に行くだけではなくて、七コースから八コースを設定して、テーマとエリアの設定を大切にした研修旅行としての位置づけています。例えば今年はベトナムに行ったり、マレーシアに行ったり、中国を設定していたんですが情勢の関係で行けないことになってしまっただけに変更しました。それから、アメリカ、オランダ、

ベルギー、ポーランド、リトアニア。極めつけは、よく言われますが、ガラパゴスです。日本の高校では、たぶん慶祥しか行っていないと思いますね。

甲賀 そんなところにも行っているのですか。

江川 南アメリカ大陸の西側の島、地球のちょうど日本の真裏になります。そのような取り組みも展開して、教育の中身を充実させていこうとしました。

北海道における入試の改革と生徒募集業務の工夫

江川 それで、もう一つ言わなければならないのは、先ほどの「官尊民卑」にも関連するんですが、慶祥ができて当初は入試でもものすごい人気が出たんです。当時は競争率が五倍ぐらいあったというふうに聞いているんですけども、本当に人気が出ました。でも、それが一時期から、志願者や入学者がどんどん減るようになってしまいました。それはなぜかというと、北海道の風土として、入試の風土として、公立が一番で、第一志望はまずは公立、そして第二志望で一校だけ私学を受験する、その受験する私学というのは、受験する前から合否がわかっているというようなことがありました。つまり、合否を教えてもらわないと私学は受験させないというようなところがあつて、立命館は、こちら京滋でやっていた入試というか、日本全国どこでもそうだと思うんですけれども、当日点で合否が決まるということが当然だと考えてそういう入試を実施しようと考えたわけですが、北海道の事情は違ったんですね。成績の「ランク」という

のがあって、それぞれA、B、C、Dと成績によってきれいに区分けをして、この生徒はCランクだから合格とか、Dランク以下は不合格になりますよ、だから受験しないで他校を受験させてくださいというようにして、受験する前から合格が決まっているようなところがありました。そのような状況になっているものですか、当時の立命館が当日点によって合格を決めるということで入試を実施したところ、大変なことになりました。もう立命館なんか受験させるなどか、中学校から生徒たちに立命館は受験させないというふうになってしまったんですね。どんどん入学者が少なくなってしまうと、定員割れの状況が続くことになってしまいました。

その後、一貫教育担当常務理事だった川崎先生が校長として赴任されて以降、巻き返しを図りました。今年は、中学校で定員をオーバーする入学者がありましたし、高校もそここの数の入学者です。中学校・高校両方合わせて学則定員を超えている、そのような状況になってきています。

甲賀 どこをどう「てこ入れ」したのですか。

江川 これは簡単に言うと、例えば中学校入試ですと、塾訪問をそれまで以上に丁寧に行いました。高校入試ですと、公立中学校訪問をして、地道に足で稼いで、もうひたすら信頼回復の毎日という感じですね。

甲賀 そのこと自体は以前からもやっていましたよね。

江川 ええ、以前からやってはいたんですけども、今はもっともってやっています。今、副校長が一名、それからあと教員が一名、授業の担当時間数を一〇時間弱に軽減して、塾専属に訪問するなどしています。それから、中学校を専属に回る教員も一人、今年、常勤講師で雇用しました。公立中学校を退職した教員

です。校長をされていた先生なので顔もききますし、その先生には毎日必ず五校ぐらいずつと行脚をしてもらっています。

西川 中等教育分野においてもかなり入試業務が肥大化していますよね。

江川 そうです。肥大化しています。

甲賀 やむを得ない面もありますけどね。

西川 授業を持ちながら中学校や塾を訪問したりするというのは、教員にとってはかなりの負担です。

甲賀 要するに、教員数の問題ですか。

西川 ええ。教員の業務なのか、そうではないのかという問題は、今後考えなければならぬ問題だと思うのですけれども。

甲賀 宇治では以前に事務長格の人が担当していませんでしたか。

西川 今は以前に教員をやっていた人が担当してくれていますが、一人で担当するのは限界もあります。一般の教員もずっと塾訪問も中学校訪問もしなければならぬ現状があり、とても大変な状況なのです。

甲賀 職員が入試に相当携わったり、何かそういう工夫が要りますよね。

江川 そう思いますね。

甲賀 特にこれからは少子化がもつと進んで、日本の人口全体が減っていく中で、私学の優位性、立命館の強みということをこれからますます打ち出さなければならぬと思いますね。発信のありようを含めてですね。入試業務だけじゃなくて、もつと全体的な発信ですよ。

進路と新たなコース制の設定

甲賀 進路についてはどうですか。

江川 進路については、北海道なものですから、どうしてもほぼ全員が立命館に進学ということにはなかなかならない状況があります。今は、だいたい立命館へ進学する生徒と、他大学へ進学する生徒と半々くらいです。以前は、立命館への進学が四割ぐらゐまで落ち込んだ時期もありました。

甲賀 それは立命館の大学の人気に関係しているのですか。

江川 そうですね。それも理由の一つとしてあるかも知れません。しかし、むしろ立命館大学の人気が衰えたというより、もともと関西方面の大学に進学を希望する生徒が少なかったからではないかと思います。道民の意識には、関東ならまだしも関西にまで目を向けるという雰囲気は強くはない。したがって、慶祥は、「立命館大学進学」と「東大・京大などの難関大学進学」という二足の草鞋を履かざるを得なかったわけです。慶祥は、北海道でこのことについてずっと模索を続けてきました。そこで、立命館以外の他大学へ進学ということになると、当然、受験で勝負になりますので、六年前から「SPコース」という、いわゆる特進コースをつくりまして、そこに立命館、慶祥の持てる進路指導の力、受験指導の力を傾注していきましました。私たちが最近目標としているのは、東大・京大・医学部医学科・北大、これを縮めて「東・京・医・北」と言っていますけれども、合格者数を五〇名と目標値を設定し、一昨年度は、五四名と達

成しましたが、昨年度は残念ながら二六名に留まり達成することができませんでした。そういうコース制、SPコースがかなりいい雰囲気で機能しているのかなと感じています。

ただ、そうなってくると、慶祥自体が、何といいますか、難関大学合格・進学にばかり力を入れているんじゃないのか、立命館コースの生徒は何か軽く見られているのではないのかと思われた時期がありました。そこにやはり対応しなければということで、これまで立命館大学とAPUに進学をする生徒には、立命館コースとして、カリキュラム上、いろいろな門戸を設定して選ばせたりもしていたんですけども、今年度から四つのコース制をとることにしました。一つはIRコース、インターナショナル・リレーションコース、国際関係ですね。二つ目はJB、ジャスティス・アンド・ビジネスです。

甲賀 法と経済、経営ですね。

江川 はい、そうです。三つ目はLA、リベラル・アーツ、文系一般ですね。それから四つ目はSSコースで、スーパーサイエンスの理系がこのコースになります。その効果が徐々に出てきているかなと思います。

甲賀 慶祥もスーパーサイエンスの指定を受けられたのでしたね。

江川 ええ、今年度からになります。

甲賀 ありがとうございます。

では、立命館守山中学校・高等学校からお願いします。

立命館守山中学校・高等学校の「これまで」と今



小山 立命館守山の小山です。よろしく願います。

まず、私自身の話ですが、教員になって二八年になるのですけれども、京都の公立の中学校にずっと勤務していました。六年前の立命館守山中学校の開校のときに、立命館にお世話になることになり、着任したという経緯です。

立命館に来て驚いたというか、新鮮だったのは、やはり公立中学校では、教育は教育委員会や校長の意向で決まっていくところが多いんですが、立命館では何かこうおもしろいとか、こんなことをやりたいということが全体に認められていけばどんどん実施できていくような、それが教員もそうですし、生徒にしても、やはりそういうふうな風土があるんだなということを感じています。

去年ぐらいから、生徒の取り組みなんですけれども、例えばPFJといって、プレイ・フォー・ジャパンというボランティア団体を立ち上げたんです。東日本大震災の関連のボランティアです。これは高校生主体の取り組みなんですけど、多くの生徒がそのボランティア団体に所属して、生徒なりにイベント部とかシヨップ部とか組織的に活動しています。

甲賀 そのPFJには何人ぐらい所属しているんですか。

小山 高校生のうち一五〇人ぐらいは所属していると思います。非常に多いという印象です。

甲賀 すごいですね。高校生全体の六分の一ぐらいは所属しているということになりますか。

小山 そのくらいの割合になると思います。

甲賀 そのP F Jというのは他の高校にもあるんですか。

上杉 立命館中高には、リビオというボランティア団体があり、震災関連のボランティア活動、宇治の土砂災害復旧活動、自閉症児施設でのボランティア活動、あしなが育英会の募金活動など、さまざまな取り組みを阪神・淡路大震災（一九九五年）以来続けています。日本海の高知流出事故の時も、この団体が現地に出向き、高知の回収ボランティアを行いました。

小山 立命館守山の取り組みを紹介しますと、守山市には「守山銀座」という商店街があるのですが、ショッピング部がその商店街の中の空き店舗を一つ借りて、東北の復興支援の商品を生徒の手で売って、それを還元して、東北のほうに送ろうと考えています。これから立ち上げて、空き店舗を借りようという段階です。今は文化祭の時期でもありますから、少し活動が止まってしまっていますが、そういう取り組みが立命館の中では認められていく土壌があると感じています。

甲賀 それは、私学の優位性ですね。

小山 よいところだと思っています。そういう驚きがあるのですが、立命館守山の開設の経緯や教育に関連して言うと、守山市の市立の女子高校が立命館へ移管されてできた学校という経緯もあって、「地域に根づいた学校・教育を」ということが、立命館守山の大きな特色の一つだと思っています。そういうことが、P F Jの取り組みなどにもつながっているなと思います。「地域に学び、世界に発信する」というこ

とが立命館守山の大きな打ち出しのポイントだと思っています。

甲賀 公立の私学への移管ということはそれまで例がないことですから、それはそれでその詳細などもきちんと記録に残しておく必要がありますね。

小山 はい。二〇〇六年に移管されましたが、この移管事業は守山市との「まちづくり協定」によってなされ、公私が協力するという非常に画期的な挑戦だと思います。

甲賀 公立の私学への移管というのは、本当に難しいことだと思いますよ。だから、それが実現できたというのは、タイミングとか地の利とか人の利とか、いろいろなことが重なったことによるものだと思います。それに、今、小山先生が地域の関わりについてお話をくださったように、やはり地域から信頼されないとならないですね。

西川 滋賀県のいろいろなものづくり企業が、守山中・高の土曜講座などに参画されていますよね。例えば、パナソニックサイクルテック株式会社が自転車を持っていたりしていますよね。

小山 はい、他にも旭化成やワコールなどの企業にもお世話になっています。土曜講座ということで学校に来ていただいているだけではなく、インターンシップやソーシャルワークなどで公共施設にお世話になることも多いのですが、守山市の様々なバックアップも多く手厚いと感じています。

甲賀 守山市には他に中・高で私学はあるんですか。

小山 いえ、私学はないです。

西川 滋賀県は公立優位のところがありますね。私学は少ないですね。

滋賀県下の高校受験の中で、立命館守山高校の位置はどのようになっていきますか。

小山 滋賀県の場合、公立高校の序列化がすぐはつきりしていますね。そこに食い込んでいくというのは、厳しい面はあるんでしょうけれども、だからこそやはり、いわゆる受験の学力をつけるというところだけの勝負ではなくて、立命館守山独自の教育とか、「売り」を見せていかないといけないと思っています。例えば国際理解、国際教育などに関して言えば、海外研修は今年五コースあったのですけれども、アメリカ・シカゴで、高校生で海外の企業にインターンシップをさせてもらうという取り組みがありました。マクドナルドとか、トミーのインターナショナルとか、ライオンズクラブとかでインターンシップをしました。タイでは実際にボランティア活動に行って、生徒が現地に家を一軒建ててくるというような取り組みを行っています。こうした受験学力とは異なる、実践を通して学習するという本当の意味での学力を身につけさせる取り組みに関しても大切にしていきたいと思っています。

甲賀 ありがとうございます。公立と私学ということでは、授業料助成や私学の授業料の問題についても後ほどまたお願いできればと思います。

それでは、それぞれ一通りお話いただきましたので、言い足りなかった点や、各校の取り組みについてお聞きいただいたことを踏まえて、全体を通じてのご発言をいただければと思いますが。

「価値観」「つながり」「スピード感」

西川 ちょっとキーワード的なことを発言しておきたいのですが、宇治にしても、慶祥にしても、守山に

しても、新しい学校をつくるときには、新しい価値観を社会に提示して、それが受け入れられるのかどうかというところがあつたのかなと思います。そういう意味で、今の日本の時代的な流れを見ながら、今後やはり新しい価値観を提示していかないとならないという責務がたぶん私学にあるのだろうなということが一点目です。それから今、慶祥のお話の中で、信用とか信頼とかということもあつたんですけれども、やはり私学としての人のつながりであつたりとか、いろいろな組織と組織のつながりであつたりとかがすごく大事になってくるのかなということが二点目です。三点目はスピード感です。やはり公立は大きい組織なのでなかなか動きが鈍くて、私も公立の先生のお話を聞く機会があるのですけれども、紙一枚を買うにしても入札しなければいけないとか、だから学校に紙がないときがあるとか、そんなことを聞きます。独自の財政を背景にしたスピード感というか、そういうものが私学の優位性だと思います。

甲賀 そう、スピード感ですね。

西川 ええ、大事なことはすぐにやるというスピード感がやはり大事なのかなと思います。価値観とつながりとスピード感、この三つがすごく大事だなと思っています。

甲賀 つながりについても少し敷衍して説明していただけませんか。組織とのつながりということで。

西川 例えば、宇治では七月に一〇日間、アブダビの生徒を留学生として受け入れました。その関係で、八月にはモンテ・カセム副総長と宇治のフォックス校長、東谷教頭と一緒にカタールの中東世界会議に行

きました。そこでは日本が教育分野で貢献しているのだと財界の方から評価を受けました。やはり教育という分野は純粋に子どもたちが将来をどう分かち合っていくのかということなので、そういう軸を持つことにより国境を越えてつながりをつくることができるということを実感したと聞いています。そういう中でも私学が、先見の明をもっていろいろなことを働きかけていくことによって、日本の社会のためにも何か役割を果たせるのではないかと思うのです。

甲賀 アブダビから留学生が何人来たのですか。

西川 二四人の高校生が来ました。あと、生徒を送るほうの留学で言えば、海外の、例えばアメリカの大学に生徒や卒業生を送り出そうというときに、アメリカの大学というのは、相手側の高校がどのような学校なのかということをするごく熱心に調べると聞いています。ホームページがちゃんと英語化されているかということは基本で、どのような学校かわからなかったらその学校からの生徒は留学や入学はさせないということです。だから宇治では今、今年度から着任したチャールズ・フォックス校長がアメリカを回り、大学との関係づくりに着手しましたが、やはり人と人とのつながりでやっていく部分があるので、私学としてはそういうものを大事にしていかなければならないと考えています。

甲賀 そうですね。そういうつながりですか。すごいですね。大学でも社会的ネットワークということを言っていますけれども、どういうところとどんなネットワークをどれだけつくるかが大事ですね。

SSHのとき、ずいぶんそういうネットワークをつくりましたよね。京都の企業だったり、それから経済界でもそういうことに熱心な人を講師に呼んだりして講演会をしたりしましたよね。そういうきっかけ

づくりは大事ですね。

西川 そうですね。

甲賀 大学も一緒ですが、アイデアに関しては知的所有権がないから、いいアイデアを担い手がどうやってちゃんとマネジメントしていくとかいうことが大事になってきます。

立命館では例えば、BK Cに経済学部と経営学部が移転したときに、文系・理系の学問領域を横断して学び、新しい発想で社会の発展に貢献できる人材を育成しようと、文理総合インスティテュートを設置しました。その一つがファイナンス・インスティテュートで、サイバーディリングルームというのをくつて、世界の金融市場にリアルタイムでアクセスできるバーチャルマーケットでの教育や研究を開始しました。このインスティテュートでは、理工学部の数理科学系の人と、経済学部の金融の人がジョイントで教育や研究を行いました。そういった取り組みは立命館が最初だったと思います。それにスポンサー企業もついたりして、学生たちは実際に現場の証券取引所や生のデータを見ながら判断するとか、難しい数学を使うので、なかなかポピュラリティーはないのですけれども、立命館の後から、一橋大学や京都大学でも取り入れるようになりました。立命館の場合アイデアはいいし一番にやるのだけれども、担い手をつくりだしながら継続的に取り組んでいくというところに課題がありますね。

西川 つながりを持つのはやはり個々の人なので、つながりを持つような人材をどのように育てていくのが大事ですね。

甲賀 APU創設のときは、立命館を知ってもらうために、衣笠キャンパスのアカデメイア立命21・中

野記念ホールに各国の大使を一度に大勢呼んで、講演とパーティーをしたりしました。立命館という名前は当時、アジアの中でさえほとんど知られてなかったのですよ。そのようなきっかけとつながりとか、APUのときも現地の方のバックアップを相当得ました。

中等教育関係のお話をお聞きして、共通するのは、いわゆるグローバル人材をできるだけ育成しようということですね。その場合も、私学ができる一番のことというのは、ネットワークづくりやバックアップかもしれません。しかも、継続的にそういう人物とか担い手がいるというのが大事です。やはりグローバル人材の育成というのが、私学の優位性の第一ですか。

西川 第一だと思います。今は日本の中等教育自身が、国公立にどれだけ生徒を輩出するか、つまり入口に直結した問題で窮々としているところがあると思います。そんなことではなくて、やはり価値観をどういうふうに提示するかというのが、私学の使命だと思います。

甲賀 そのときに、やはり一私学だけでは限界があるので、できるだけ内外のネットワーク、絆づくりのようなことを相当やらないといけないということですね。

西川 立命館の附属校はお互いに仲がよくて附属校間で人材交流もしているのですけれども、これはなかなか他の私学ではやってないですね。附属校が新たに横のネットワークをつくりながら、全体が浮上って行くようなかたちでやっていけないと思います。

甲賀 だから、附属校間連携、すみ分けとか、相互刺激の関係をね、相互援助もそうだけでも、どうつくるかというのが一つのテーマでしょう。これだけ学校数も増えましたらね。それに附属校の評判で大学

の評判がよくなる、評判をよくするということ、あるいはその逆もあります。そのことを一九九〇年代の宇治や慶祥との合併前後のころにはいろいろ議論しました。

一九九五年に、大手私立大学で附属高校を持っているところが集まって附属校サミットというものをはじめて開催しました。慶応のように諸学校の担当理事という役職を設けている法人もあつたりして、立命館でもそのくらい専門的にやらなければと思つたり、そういう組織をどうするかということも含めて勉強になりました。そのときに立命館で中等教育の専門部局を設けようと現場に説明に行つたら、先ほども言いましたように、教育委員会的なものををつくるのかという意見があつたりして、当時はそんな状況だったのが、今の状況をお聞きますと、中・高と大と小学校も含めて相互の連携が全然違うという印象を受けますね。附属校サミットを開催した当時は、附属校と大学との関係ということがどの法人でも本当に悩みました。サミットはもうやっていないのですか。

上杉 いえ、今もやっています。今年は一月一六日、一七日に開催されます。深草では、創立一〇〇周年の時に開催しましたが、長岡京移転後の創立二一〇周年（二〇一五年）にも本校で開催予定です。

甲賀 慶應義塾は一九九〇年に湘南藤沢キャンパスに総合政策学部と総合情報学部を開設して、その二年後に附属校（湘南藤沢中等部・高等部）を開校しています。その校長にサミットに来てもらいました。その先生が言っていたのは、やはり慶応に進学すると言つたら、人文・社会科学系では経済学部だそうですね。附属校でも大学のどの学部にも人気があるかということ、その附属校によって、大学によって違うんですね。立命館の場合は、最近の状況はどうなっていますか。

西川 附属校の生徒には経営学部が人気ありますね。やはり何かスピード感があるという印象を受けるのでしょうか。

甲賀 先ほど西川先生が言われたように、新しい価値観と、信用や信頼を得てつながりを広げて強めるということと、それからスピード感と、この三つが私学の優位性ですか。

西川 その三つが優位性ではないかと私は思います。

授業料無償化の状況

甲賀 ところで、民主党政権になって始まった授業料無償化については状況としてどうなんですか。

西川 各都道府県によっても状況が違うと思います。大阪と京都は国からの就学支援金に府の補助金を上乗せしています。

甲賀 北海道はどうですか。

江川 北海道は、公立だけ授業料が無料になります。同じ金額は確かに私学に入ってきていますが、保護者や生徒にとってみたら無料というわけではない。

西川 私立高校では通常年 一 万八、八〇〇円、年収 二五〇万円未満程度の世帯は二三万七、六〇〇円、二五〇〜三五〇万円程度の世帯は一七万八、二〇〇円が就学支援金として国から設置者（学校法人など）に支給されます。

江川 だから、保護者の見え方としては、公立は無料なのに、何で私学は違うのかと。

甲賀 授業料無償化とうたっていますからね。

江川 保護者にはそういうふうに見えないのです。なおかつ、慶祥は年間で六〇数万円の授業料ですが、他の私学は、慶祥の授業料の半分から〇・七倍ぐらいまでの間の金額に推移しています。それで一番授業料が安い私学に比べると慶祥は倍にもなるんです。一方で公立は無料、慶祥は一番授業料が安い私学に比べると倍でしょう。これでは、教育内容を云々する前に、土俵にあげてもらえませんか。

西川 大阪ではどうなっているかというと、国の就学支援金に加えて府の支援補助金が出ているんですね。六一〇万円までの年収の人ですと授業料無料。八〇〇万円までだったら年間一〇万円の授業料負担になっています。授業料五八万円までは国の就学支援金と大阪府で出します。五八万円を超える分については各私学が負担して、それで無償にしないという仕組みです。

甲賀 無償にしないと言っているのですか。

西川 そうです。例えば授業料が七八万円だったら、各私学が二〇万円を上乗せして支払いをしなければならぬということです。だから、大阪の私学にとっては、自分のところのお金の持ち出しになってしまう。

甲賀 提携校の初芝立命館なども同じということになりますね。

西川 初芝も同じです。無償化の方向はいいと思いますが、やり方によっては「安かろう悪かろう」となってしまう可能性もあって、私学独自の財政的なポリシーをやはりしっかり持たないといけないと思います。

ます。

甲賀 各私学一人当たり二〇万円も負担して経営上成り立つというのは、どういうシステムになるのですかね。

西川 生徒数をたくさん抱えるということになるのだと思います。

甲賀 そういう情勢についてどういう方針を持つかは、立命館の一貫教育部でも全学的に提起していかねければならないことですね。

教員確保、時間確保、教員の育成・研修

甲賀 お手元にお配りした資料の中に、「ティーチ・フォー・アメリカ」というのがあります。ここでは、アメリカ国内のアイビーリーグと呼ばれる大学の学部卒業生を、教員免許の有無にかかわらず大学卒業から二年間、国内各地の教育困難地域にある学校に赴任させるプログラムを実施していて、ここに就職したという希望者が増えているようです。アメリカはご存じのように、チャータースクールというのがあります。パウチャー制度とか、選択制を強めるといような自由化の議論の脈絡の中でそういう学校ができているのでしょうけれども、行き先は全米にわたっているようです。一流大学の卒業生の優秀な人材を教育困難地域に送って、そこで読み書きの能力なんかも、スコアで測れるようにあげていこうということに力を入れているようです。日本でも「ティーチ・フォー・ジャパン」というのができています。

公立と私学ということで、教員確保や教員の教育・研修の問題、先生方の時間確保の問題があります。私も以前に教員採用に携わったこともあります。教員確保という点でも、私学は公立に比べて有利だということはないでしょう。処遇が抜群にいいわけでもないですしね。

西川 私学が優位ということはないです。

甲賀 先生方というのは、土日はクラブなどの課外活動もあるし、実態として大変だということを学園の構成員の皆さんにもっと理解してもらわないといけないと思います。それでも、OECDの今年のレポートでは、日本の教員の中高年層は世界の中でも給与水準が高いと報告されています。初任者の給与水準を上げなければ、いい人材は集まらないと思います。

初等・中等教育に関しては、かつて日本の教員は高い給与を得ていました。これは経験のある教員には依然として当てはまる、つまり年功序列賃金体系ということですね。しかし新任の教員には賃金が国際的に高いということは当てはまらなくなっています。データによりますと、最低限の教員資格を持つ勤続十五年の初等・中等教育の教員の平均的な年間法定給与は、四万五、七八八米ドルです。OECD平均は三万七、六三〇米ドル、前期中等教育三万九、〇〇〇ドル、後期中等教育四万一、〇〇〇ドルとなっています。日本の初等・中等教育の教員の初任給は二万五、四六四ドルと報告されていますから、だいたい二〇万円、そのくらいでしょうか。OECD平均は二万八、五〇〇ドル、日本より高いですね。それから日本の教員の勤務時間はOECD平均よりも大幅に長いです。

日本の公財政支出は、対GDP比においても一般の政府の支出に占める割合においても、他のOECD

加盟国に比べてかなり低いです。チリ、韓国に次いで三番目に教育の私的負担が高い。教育支出全体の三一%が私的なもので、塾だとかその他の教育はもちろん入っていない。中央教育審議会答申はもちろん教育を重視している文面になっていますが、そうであるなら財政をどうするのかという問題が決定的な点です。競争的資金の配分の延長などという発想ではなくてね。これはやはり私学としての優位性をバックアップする財政的保証みたいな話につながるわけですから、先ほどのネットワークのお話も含めて考えるのですが、基本は国の方針にありますよ。

それから、先ほどお話に出た卒業レポートですとか、総合教育などの取り組みを私学でやるときの新しい価値観みたいなものをちゃんと整理して打ち出しておかないと、評判の良くないゆとり教育の延長みたいなものかなと受け取られてしまうと思います。端的に言えば、例えば入試学力で測ったら基礎学力的なところが弱いという側面があるにもかかわらず、他方で何か先進的な総合教育だとか、海外へ連れて行くプログラムをやっていたりするところもあって、私学は一体どうなっているのかという批判はあると思います。これは大学でも同じことが言えて、本当につけるべき力と、文部科学省の答申で求められているような自主的人間像との間でどんな折り合いをつけるのかという問題があります。大学にはさまざまなタイプがありますが、そうした人材を育成するカリキュラムをそれぞれどうしていくのかということです。しかも、三回生の後半から就職活動が始まったりして、四力年の大学生の学修期間は大幅に制限されてきていますからね。そんな中で学習時間を増やせと言われていますが、どうしたらよいのでしょうか。ゆとり教育の結果、勉強してきていない大学生が増えたという意見もあるのです。例えば、高校で理科を一科目

しか履修していない、理系の生徒は社会を一科目しか履修していないということもあります。附属校ではそのあたりはどうなっていますか。そんなことも含めて、お感じのところをもう少し先生方からお話いただければと思うのですが。

教員確保、時間確保の課題

西川 先生方は長時間労働です。クラブ活動があり、それから放課後の補習なんかもあります。やればやるほど、しなければならぬ分野はどんどん拡大していきます。公立の教員の場合は、教育公務員特例法というのがありますが、私学には適用されない。教育つてやはり時間がかかりますよね。時間をかけて子供と対峙しながら育てていくということですから。六〇人、一〇〇人ぐらいの講堂で一律に授業したら一番効率がいいのですけれども、やはりそういうわけにもいきません。私学は特にそうです。宇治でやっている国際バカロレアではかなりいろいろなこと、例えば、ボランティアなども単位認定の対象なのです。自分でボランティアを見つけてきてやるとか、自分でテーマを見つけて実験させるというようなこともやっています。去年の生徒は、鴨川がどんな生態系になっているかということを、鴨川に行つて問題意識を持って、いろいろな大学の先生、例えば京大の先生のところに行ったりしながら勉強していつてレポートを作成していくことをしました。それにはものすごい時間がかかります。そのようなことは、たぶんスーパーサイエンスのどこの学校でも取り組みはじめていますから、そういうものをサポートする教

員の労働時間はおのずと長くなってきているんじゃないでしょうか。その中で先生方をどう確保するかというのは、どの学校でも難しくなっていると思います。

小山 そうですね。やはり業務が本当に多くなっているの、教員一人一人は一つのことを割ける時間がものすごく短くなっているというようなことを感じるのと、担任などの業務で言うと、一つの学級の生徒数ともやはり関係するじゃないですか。適正規模としてはやはり三五人が最低基準で、その次に可能ならば三〇人とか、やはり少ない人数のほうがいいとは思うんですけれども。そして教員を確保した後、きちんとトレーニングをやっていく必要があるということを考えています。

西川 そうですね。生徒指導もありますし、保護者対応もありますし、専門の教科指導もありますし、クラブの指導もしなければならぬし、もうありとあらゆる分野でスーパーマンであることを求められますものね。

甲賀 そんな能力を全部一挙に確保するのは不可能ですからね。先ほどふれたアメリカの「ティーチ・フォー・アメリカ」というのは、現場の教育大学、教育系のトレーニングを受けた先生と大学を卒業したばかりの人たちとを競合させてやっていますが、成果はファイティー・ファイティーだということです。多面的な能力をすぐに身につけることは困難ですから、ある学校でこれだけ頑張って貢献したということをPRして、他の産業へキャリアアップしていくというようなこともあるようです。

西川 時間確保のかかわりで言えば、寮での指導について、愛知のある学園では、企業の人を寮に泊めて、寮監みたいなかたちで生徒とかかわらせて、勉強教えたり人生相談にのったりというようなことをしてい

るようです。

江川 慶祥も寮がありまして、寮監は置いていませんが、ご夫婦に入っていたいただいて寮の管理をお願いしていきまして、慶祥の卒業生で北海道大学に進学したような学生に寮に来てもらって食堂で学習させたりというようなこともやっています。

甲賀 確か、以前は寮の中でも先生が勉強を教えていましたよね。

江川 はい。今もその名残があつて、教員も男子寮には一名、女子寮には二名必ず毎日交替で行って、生徒に勉強教えたり、部屋を回ったりしています。

甲賀 そうですか。労働条件の問題とか手当ての問題もさることながら、本来の教育が何かはひと言では説明できないところはありますが、課外とのかかわりは大事ですし、寮でのアフターケアのような教育も大事ですけれども、それにかなりエネルギーが割かれたり、それがしんどさになったりということもあるのだと思います。宇治にしても、寮ができるまでも大変な苦労がありました。寮ができたまでにはいろいろありました。そういう苦労は、学校法人立命館の教職員にやはり広範に伝わっていないわけでしょう。伝えないといけないと思いますよ。

教員の育成・研修の課題

上杉 私が沖縄の学校に勤務していたときは、理事長が校長でもある学校だったので、実は、立命館のほ

うが何事にも慎重という印象を持っています。

甲賀 どのような件で特に感じられるわけですか。

上杉 職員育成でも改革でも予算の件でもすべてにおいてです。深草は教員会議で徹底的に議論します。それには、いい面があるとは思いますが、時間がかかることが気になります。

甲賀 大学の政策や大学のあり方について議論するのを急がれていた時期もあったわけですよ。スピードのある意思決定を否定的にトップダウンと呼ぶかトップのリーダーシップと呼ぶのか議論のあるところですね。トップに対するチェック機能という点でも民主的な議論を経過して教育され訓練されるという点でも、下からもやはり大事で両方大事だと思うのですよ、スピード感もですね。下からの議論の積み上げと、私学の優位性であるスピード感というものをどう両立させていくのか、管理運営の課題として、こういうことももっと議論していかなければならないと思います。先ほどのお話でもあったように、公立よりも私学のほうが初任者研修に割ける時間が少ない中で、一人前の教員に育てていくことでは、教員会議が研修的な役割も果たしている面もあるのでしょうかからね。

先生方の研修というのはどうなっているんですか。

西川 教員の研修はやはりOJTで、現場で仕事を覚えながらトレーニングをしていくということではないと実際的ではなくて、研修機関にお願いして研修するといった方法には限界があります。

上杉 ただ、以前より真面目で、何というか、その分、柔軟性がないと感じる 때가あります。もっともっと柔軟に生徒の対応もやらないといけないはずなのに、型にはまりすぎることがあるんじゃないかと

思います。例えば新任の間はコマ数を減らして、ほかの研修担当の先生をつけるどうか、コマ数を減らした方は常勤講師を採用して対応するだとかいうことを一年間は認めてもらうとか、何かそういう制度的なものがあつて、じつくりと新任の先生方を指導していくことができるようなシステムがあるといいなと思うんですけれどね。

西川 私は、若いうちは現場で先輩が育てていけないと思うのです。私たちの世代は先輩の先生と泥まみれになりながら育ててきたようなところがあつて、若いうちに苦勞をすべきだろうと思つています。

上杉 私たちの世代はそうだったとしても、そういうのに耐えられないような人たちが増えてきていると思いますよ。西川先生のおっしゃることも含めて、もつと新任の先生に様々な働きかけが必要ですね。

初等・中等教育に精通した事務職員の育成・配置と継続性

甲賀 それと大学のほうでは、職員がアドミニストレーターとして、単なる事務をとるといことではなくて、政策立案のための調査や提起文書を書くことなんかも含めて、すごい役割を果たしていると思います。国公立大学では、少なくとも最近までは職員にそのような力を期待されていなかったと思います。立命館のような私学はそこにも強みがあると思います。かつては、大学というのは企業から電話がかかつてきて五時を過ぎたら誰も電話に出ない、立命館はよく電話に出ると言つて褒められたことがあります。立命

館の教職員はやはりよく働いています。これには組合運動が貢献した面もあると思いますが、教育労働者としてのありようについて議論してきたことです。だから、組合のある大学は、中等教育についても経営者とちゃんとした議論をするなどの役割も果たさなければならぬと思います。

初等・中等教育の事務職員をどうするかということに関しては、高校の先生で、慶祥の副校長をしていた桂先生が附属校の事務長になったというようなことも非常に重要な経験だと思います。副校長までされた先生が事務長になるというのは、立命館でもそれまで初めてですし、たぶん全国でも例をみないことだと思いますよ。問題は、それがどう総括されて、今後の初等・中等の教育の「プロ」の職員、アドミニストレーターの育成につなげていくのかということでしょう。ちゃんと実践して、ちゃんと成果をアウトプットとして出して、発信する。担い手を継続して定着させていく。この取り組みを私学の立命館が今後も出来れば、ものすごいと思いますよ。一貫教育部は一貫教育部で強化しなければならないんだけど、こういう問題を学園の規模が大きくなった中でどう考えるかですね。職員のアドミニストレーションの役割を一貫教育の領域までもっと広げなければならぬと思います。私学立命館は、そういうことを率先的にやれると思います。

西川 初等・中等教育の事務職員は、三年か四年経てば他部署へ異動してしまいます。大学だったら、例えば入学センターとかの大きい部署だと、一人や二人異動しても集団である分、業務が継承されていくと思うのですけれど、初等・中等教育の少ない事務職員で、ある職員は入試のプロ、ある職員は経理のプロ、ある職員は国際のプロみたいなかたちになっていったときに、異動になってしまうと業務の継承がなかな

かうまくいきません。こういう課題をどういうふうに解決していくのかは、一貫教育の大きな課題だと思います。

甲賀 そうですね。それはアピールしてちゃんと解決しなければならない課題です。教育についても教職協働というところでどう担っていくかということです。これをやらないと、先ほどの話の三つの私学の優位性を打ち出して継続的に頑張るといこともなかなかできないですよ。

西川 ある瞬間にはうまくいくかもしれないですけど、継続的に、例えば数十年とか百年間成長し続けることを目標に今の課題設定をする必要があります。

甲賀 問題は継続ですね。大学の職員のポジションも上げなければならぬんです。大学職員の中にも大学院で修士号取得する職員が多く出てきていいと思います。そういうことも展望して、これからの初等・中等教育づくりを私学としてどうしていくのか、どこでどう議論して定着させていくのか。一貫教育部は勿論大学の機関でも議論が必要ですね。問題提起者としては一貫教育担当常務理事の役割は大きいですね。初等・中等教育に精通した職員層をどう育成していくか。異動するにしても、他の附属校へ配置して別の経験を積むとかいうことも含めて考えていかなければならないですね。

西川 国際交流や国際教育にしても、事務職員でそういう国際畑をちゃんと熟知している人が、しっかりと座らないといけないわけです。教員だけではできない段階にきていると思います。ある「畑」に精通しているような事務職員を大学と附属校間で往復させて配属してもらうことなども考えていく必要があると思います。

初等・中等教育の正課・課外における学生・生徒の力による「つながり」

甲賀 そういえば学生の間でも、草食系男子とかいう話がされていますね。附属校でも女子生徒のほうがパワフルである一般的な言える状況があるのですか。

上杉 海外研修旅行などには女子の申込者が圧倒的に多いですね。

西川 中・高のクラブ活動でも、スポーツをしてないのか、縦の社会の中でもまれてないというか、そんなことが背景にあつて衰えている部分があると思いますよ。

甲賀 それもやはりなぜだろうと考える必要はない問題です。

上杉 ほかの私学でも、男子校のときは男子の生徒が結構目立っていたけども、男女共学になったら、もう圧倒的に女子が出てくるというようなこともありますね。

甲賀 それは、教育の根本問題かもしれません。教育というのは、その人がその人の人生で、自分のやりたい課題や人生の目標を決めていく、例えば親の世代ができなかったことを子供の世代がやるのかということです。親もそれを期待しているということがあります。これからの予測困難といわれる社会にあつて、親の世代より子の世代のほうが人生の質全体がよくなる見通しが持てるかどうかということです。よくないかどうかかわからない中で、どうして親の世代より頑張ろうという気になりますか。女性の場合は、これからの社会にやはりもっと進出していくとか、目指したい姿や目標を持てるような状況がまだ多いのでは

ないですか。中・高の女子だけではなくて、女性の人生の描き方がそうやってきたときには、やはりそれは女性のほうがパワフルになるでしょうね。実際に北欧諸国では、高学歴率は女性のほうが高くなっています。

私学として、これからの学生の層として、女子生徒やお母さん、仕事をされている方も主婦の方もそうですが、女性にどんどん入学してもらって、女子力によっても新しい社会をつくる役割を牽引していつてもらいたいということもありますね。新しい社会をつくることは、現状を墨守することではなく日本の社会の中でそれまでと違う新しいことを示して、それを楽しみにして、ハッピーだという目標にして頑張れるような社会にしていくことです。一般的に教養を身につけるといっただけではなくて、社会を変えていくような、そういうことを期待したいですね。

アメリカではおよそ五割しか正規就業できない状況があつて、あとは非正規と失業で、奨学資金のローンが返せないなど大変な状況になっています。日本の場合はそこまでではないですが、やはり格差は始めていますし、そういう状況の中で私学というのは大学も含めて、どうやって生きていくのか？がものすごいシビアになると思います。初等教育や中等教育から大学、大学院まで私学に通った場合、どれだけお金がかかるかという現実的な問題です。アメリカの場合、そういうことを言われたらどう答えるか？例えば、大学院修了だったらあなたの所得水準はこれだけ大卒より多いとか、大卒だったらこれだけ高卒より多いとか、だから授業料の投資はペイできるというようなことを計算したり、自動車一台の値段と大学の授業料と比べてどちらが多く価値があるのかという比較の仕方をしていたことがあったのですが、アメ

リカでも現在は就職が困難になって、収入が確保できないのだからそういう比較ができなくなっただけです。日本の教育にしても今後そのような問題にぶつからんじやないかと思うんですね。

甲賀 大学の新しい取り組みを少し紹介しておきますが、文学部でキャンパスアジアといって、日中韓の連携で文学部の学生を中国で何カ月、韓国で何カ月、向こうの学生も立命館で学ぶということをやり始めています。法学部では「学びマップ」というものをつくって、学生が自主的にカリキュラムに基づいて学習計画立てて、提出することを始めました。

奈良 そうですね。あれは自分が学んでいくステップを可視化する作業です。それを可視化して、教員と学生自身がそれを見ながら、「私は今どこまでステップが進んでいるか」ということを見ながら指導をやっていくというやり方です。

甲賀 それから、文学部は卒業論文を課していますが、四年制私立大学では卒業論文を課しているところが少なくなっているでしょう。かつてはどの大学でも課していましたけどね。文部科学省が言っている学びの時間を増やすという課題を、小・中・高から大学まで一貫して、どういう仕掛けで、どういうインセンティブで増やしていくのが問題です。放っておいて勉強したくなるようにするというのは、それはちょっといけないと思います。何か課題を課さなければならぬわけですね。先ほど深草でお話に出た中学校の卒業レポートは、私も何冊か目を通しましたけれど、非常に優れた内容のものもありました。今度は高校三年生の九月までにそれをやらせてみるのはいい取り組みだと思いますよ。中学校ではずっと続い

ているのですか。

上杉 いえ、中学校では今はやっていないです。

甲賀 そうですか。一斉に並べて生徒もみんなが見ることができるようになっていましたよ。なかなかおもしろい仕組みだったと思いますけどね。

上杉 並べるという点では、おもしろい取組みがあります。昨年から一貫コースの中学二年対象にディスカバリープロジェクトを始めました。時代に合わせて、ポスターセッションの形式を取り入れていきます。夏休みの理科の自由研究をはじめ、全員の先生が指導者として生徒の研究指導をし、ポスターを完成させました。ポスターの前で説明する生徒たちは生き生きとしていました。

甲賀 高校で課題研究を始めようとしたのはどんな背景からですか。

上杉 中高に総合学習の時間が入ってきた時に、それに教科横断で対応し、各教科でいろいろな取り組みをさせる中で、論文を書かせて卒業レポートに替えようという議論があったように思います。実際にそれがうまくいっている教科もあれば、それほどうまくいっていない教科もあったので、各教科の取り組みだけにとどめておくのではなくて、制度化して、ちゃんとそれを書かせていくことがやはり大事だろうということになりました。特に、スーパースイエンスで学ぶ生徒たちがその研究を通していかに成長していくかという課題を目の当たりにして、研究して論文を書く経験を全員にさせてやるべきだと考えました。

「つながり」の部分では、サイエンスフェアや国際交換交流で、立命館にたくさんの海外の学校が継続して来てくれるというのも、やはり「つながり」なんです。最初はいろいろな経緯があったにせよ、他

よりも早く取り組んだことから、海外の先進的な学校といち早く知り合え、互いに刺激をし合い、各校ともより先進的に取り組むようになったからこそ、立命館に行けば先進的な学校の話も聞ける、交流もできるというふうに思っていたのだと思います。それから、ホスピタリーの部分だとか、さまざま部分でも努力をして信頼を勝ち取ってきたという部分もあると思います。だから、そういう「つながり」というのがどんどん広がっているということは大事なことです。

深草はタイや台湾の学校とも交流をしているのですが、実際に交流をしたそれらの学校からAPUに進学をしているという部分でも「つながり」ができています。そのようなAPUに進学した学生が深草に「戻って」来て生徒に話をしてくれるとか、先ほどの話にもありましたけれども、卒業生もTAとか様々なかたちで来てくれています。深草と交流してきた海外の学生や卒業生が、さまざまな部分で協力してくれるというような「つながり」が実際に深草の教育でとても活きていると思います。

甲賀 それは全くボランティアですか。

上杉 取り組みによりますね。全くのボランティアの場合もあれば、交通費や謝礼を払うという場合もあります。

甲賀 立命館大学の場合、一つのアイディアですが、附属出身者で大学の在校生あるいは附属校出身者に限らなくてもいいですが、大学生が中等教育で何か貢献させるような取り組みをやる。これは、全部ボランティアというわけにはいかないけれど、交通費は払うとか、何かそういうことも考えとかね。立命館の大学生の中でその取り組みが成功したのは、例えば情報関連でパソコンの利用なんかを支援するレ

インボースタッフですね。これまで学内ジョブというのは、学内でアルバイトができる仕組みをつくってきました。学生の学習時間を増やすということを、何かを通じて自主的にするような仕掛けみたいなことを、大学も中学校・高校も連携してやっていくことができれば一番いいですね。

西川 そうですね。深草では高校生が中学生の授業を教えに行ったりしていますね。

上杉 道徳やH Rで先輩の話を聞く機会は進路選択や大きな行事前にあります。また、高校三年生になると、特に二月、三月というのは比較的時間があきますので、その時期を利用して放課後に先輩に教えるということもやっています。高校生が小学校へ行つて、クラブ活動を見たりもしています。

甲賀 そういうことももつと発信しないといけないですね。よい取り組みをしても、みんな知らないままかもしれませんから。

西川 宇治では、土曜日に小学生向けの「R i t s — k i d s」という取り組みをやっています。そこに宇治校出身で、英語のできる学生がサポートに来てくれています。クラブでは、例えばアメリカンフットボール部では大学生が高校のクラブにコーチとして指導に来てくれています。そういう循環のシステムとこののを、やはり意図的につくっていかねばならないと思います。

上杉 せっかく一貫なので、附属校と大学、どちらにとってもプラスになることを、ですね。

奈良 先ほどのレインボースタッフの話と関連して、今のお話に一番びつたり合うのがE S、エデュケーションサポーターという制度ですね。今お話がありましたように、先輩が後輩を教えるというピアエデュケーションの観点で大学が全学で導入している制度です。毎年六五〇人の規模なのですが、ある科目

を受講した人が、その科目を初めて受ける後輩に授業の援助として入っていくという制度です。先輩が後輩を教えるので、結局教える側もその中で教え方を学ぶという意味があるということになります。

甲賀 それも一つ私学の優位性かもしれないですね。やはり一貫の優位性で、ちよつと柱として大きく目立たせないといけないんじゃないですか。教育開発推進機構と中等教育との関係はどのようになっていきますか。高校の現場をご経験されたベテランの先生方に来ていただいていると思います。

西川 数学教育と英語教育では学校を超えた共同の会議・研究会が定期的に行われています。英語教育のほうでは今、教材やテキストをつくると言つて頑張つて取り組んでいます。

甲賀 そういろいろ例もいろいろとつくり上げていくことが重要ですね。

佐々木 教育開発推進機構に関して言えば、機構の先生が百年史編纂室にお越しになられて、附属校で実践している「立命科」の取り組みを今後どう展開していくのかについて意見交換をさせていただいたことがあります。現在、附属校向けには「立命館で学ぶ君たちへ」というテキストがありますが、内容について百年史編纂室ともっと協同したいとのことでした。例えば学園史の側面からもう少し改定が必要だろうかとか、実際の授業において生徒たちにはどのような内容が響くのかというようなことですね。

甲賀 アイデンティティ教育ですね。

江川 慶祥では道徳として「立命科」でそのテキスト使つて授業をやっています。

佐々木 あのテキストは非常にわかりやすいですね。教職員にとつても入職後の導入として役に立つものだと思います。教育開発推進機構の先生は、各校がどのような取り組みをしているかについては話をされ

ているようなのですが、今後の展開の中では、ある附属校の教育実践のよいところを附属校全体に共有することが課題だとおっしゃっていました。

小山 先ほどの話の流れで、例えば発達心理学や臨床心理学を専門に学ぶ大学生が、中学校・高等学校で発生する不登校などの問題にかかわってもらうというようなことも、要望としてはありますね。

奈良 それは、先ほど深草のお話でありましたけども、大学院の応用人間科学研究科がプロジェクトを組んで、実際に入ってやっていますね。

甲賀 それではそろそろ各校の「これから」ということで、それぞれの学校を光らせるものを何にするか、そして附属校全体でどう考えていくか、先生方からもう一巡ずつお話をいただきましょうか。今度ははじめのご発言と逆まわりで、守山、慶祥、宇治とお願いして、最後に深草にお願いします。

附属校の「これから」～守山

小山 守山は地域に学んで世界へ発信していくというところを大切にさせたいというのがあります。まずは、いい生き方をさせたい。そのためにもいい経験を中学校、高校の段階でいろいろと経験させていきたいと考えています。

あともう一つ、大学へのお願いとしては、やはり大学の先生に来てもらっての授業をもっと拡大してい

きたいというのがあります。そして守山は滋賀県というグラウンドでしっかりと確立していないといけないと思っています。たとえばAP授業（Advanced Placement 授業）のように、高校段階で大学の講義を受けられ、その大学での単位が有効になるシステムを採用させてもらっていますが、それを拡大できないか、地域のネットワークの拠点校となり、AP授業をほかの高校の生徒も受けられるようなところまで拡大していく、そのようなことができれば、大学にとってもメリットが出てくるのじゃないかなと思っています。何かそんな高校間のネットワーク、各高校と大学のネットワーク、高校と地元企業とのネットワークづくりを滋賀県の中で確かなものにしていきたいと考えています。

甲賀 今の在校生の出身府県とか地域ということでは、どのような割合になっていますか。

小山 滋賀県が圧倒的で、七割くらいが滋賀県からの生徒です。

甲賀 わかりました。慶祥からも最後にご発言をお願いします。

附属校の「これから」 慶祥

江川 慶祥では、冒頭にもお話をしましたけれども、今年、立命館の特化コースということで立命館コースの充実を図りました。先ほど深草のご報告にもあったかと思うんですが、課題研究は、慶祥ではもともと三万字論文といって八〇枚弱の文章を書かせたりということもしていたんですけれども、この特化コースの運用に伴って、もっとももっとたくさん、いろいろな科目ができたんですね。例えばIRコースであ

れば国際社会とか英語創作ですとか、それからJ Bコースであれば司法講座、これなんかは札幌弁護士会の若手の六人の弁護士に来てもらって、それで毎回グループごとに判例研究をしたりということを、高校三年生の段階でやっているんですよ。これはものすごい力になると思います。

甲賀 そうですか。

江川 ええ。そのような取組みが、例えば慶祥から立命館大学法学部に進学して弁護士になる、そしてその先輩が慶祥に司法講座などで後輩の面倒を見に応援にくる、生徒は先輩の姿を見て自分も弁護士を目指す。というようなよい循環ができるのではと思っています。そのほかに、起業家の講座で日本ハムファイターズの戦略マネジャーに来てもらって企業経営について話を聞くとか、これはやはり外部との連携だと思っんですね。やはり立命館の特化コースでは外部との連携というのが欠かせない。もちろん、その中に高大連携として立命館大学の先生方、APUの先生方にも来ていただいています。立命館以外にも北海道大学や北星学園大学ですとか、地元にある大学の先生方にもたくさん来ていただいて、この講座の運用を手伝ってもらっています。これは、ある一定の成果がきつと何年か後にはちゃんと出てくるのではないかなと思っています。

私学の優位性ということでは、今お話した立命館特化コースの充実もあるんですけれども、例えば今年、慶祥でいろいろな方々をお呼びしました。小説家の島田雅彦さん、劇作家の倉本聰さん、それから日本原水爆被害者団体協議会代表委員の坪井直さん、そういう現場の第一線で活躍していらっしゃる方々をたくさんお呼びしています。単に話を聞いて終わりではなくて、事前学習と事後学習をきちんとしっかりやる

中でお呼びして、生徒にその人の話を聞いてどういうふう思ったか、それを自分の人生とかこれからのキャリアアップのためにどうやってつなげていくかということ、考えさせているんですね。

そういうことのしつかりとした積み重ねが、実は先ほど小山先生もおっしゃっていたと思いますけれども、人格形成というか、私は「刺激のシャワー」と呼んでいるんですけど、刺激のシャワーをうちの学校に入ってたくさん浴びることによって、生徒の何かが変わっていくんだろうというふうに思っているんですね。

甲賀 それは、もう教育現場では通説ですか。感動体験とか刺激のシャワーはやはり多いほうがいいということですか。年中浴びていて刺激が刺激でなくなるというようなことないですか。

江川 と思いますけどね。やはり経験を多くするほうが、後になって生きてくると思います。

甲賀 だけどそれを正課授業でどう具体化できるかですね。そのようなイベントが多くなってしまうと、学校の営みが軽くなってしまう側面がでるのじゃないですか。

江川 そういう側面はありますね。ですから、本校ではしっかりと学習させるような取り組みもあります。基礎基本を保証して、より高い学力を担保するために、授業の充実を図ったり、放課後講習をはじめ夏、冬の長期休暇中の合宿講習を実施したりしています。今年度認定されたSSHの取り組みも学力担保の一環として考えていきたいと思っています。

甲賀 深草ではそんなSSHの全国や外国との交流は盛んに行っていますか。

上杉 SSHの推進機構の先生方が中心で、生徒がずいぶん自主的に動いていて、伸びていますね。

甲賀 それはいいですね。生徒が動く仕組みをつくるというのは一つですね。

附属校の「これから」→宇治―学園が一体となった国際ネットワーク形成の取り組み

甲賀 宇治の「これから」ということではどうですか。

西川 宇治はかなり国際化の先端に近づいていると思います。宇治はIBと英語のイマージョン教育で日本で突き抜けた成功事例になると、もっと英語で飛び抜けた、とんがった学校になるということを含い言葉にしています。

甲賀 そうですね。宇治は今年から、校長先生はチャールズ・フォックス先生が着任されているんですね。

西川 フォックス校長先生には海外のネットワークをすごいスピードでつくってもらっています。宇治の学校の雰囲気もイメージも大きく変わったと感じます。宇治が日本の国際化の先端をいく、その気持ちで頑張っています。それにはお金や人も必要になりますけどね。

奈良 人について言えば、こういう教育は数年で効果が出るとは限らないですから、一〇年、二〇年のスパンで関わっていくことが必要だと思います。大学の教員が一〇年くらいの期間をかけて組織的に附属校の国際教育に携わっていくというような仕組みができればいいと思いますね。

西川 大学だと科研費とかいろいろな「財布」があると思うのですけれど、高大連携では満遍なくつながるのではなくて、ある部分で突出した形で言語教育センターであるとか、国際関係学部であるとか、AP

Uと共同してプロジェクトを立ち上げ、行政からお金も人も取ってくるような、特別な仕組みが何かできないのかなと思っています。宇治は今、日本で一番最先端でとんがっているところ、突き抜けていこうとしているので、その突き抜けができるように、大学附属の大きな組織的なメリットを出してやっていかないとけませんね。

こういういろいろなアイデアを、誰とどういうふうにつないで共有しながら進めていったらいいのか、学園自身の意思決定を誰がされているのかというのが、ちょっと不透明になってきているのかなと感じているんですが。

甲賀 内容によりますけどね。西川先生がお話されたことなどは、ちゃんと話をつないでいかないといけないと思います。大学で附属校の国際プログラムを一所懸命やっている先生はいらっしゃるのですか、語学の先生も含めてですが。

奈良 個別の先生ではいらっしやると思いますけれども、組織的に関わっているという先生はおられないのではないでしょうか。ただここ数年、立命館の大学のレベルでは、接続教育、いわゆる初年時教育、導入学期教育ですが、これをかなり意識してプログラムを組み始めていますから、この部分で、附属校の教育と大学の専門教育とをどうつなげていくかという方向にすすみ始めています。国際プログラムに関しては、国際部という組織が大学にあつて全学的なプログラムを作っていますし、最近では学部単独のプログラムも多くなっています。ただ、それぞれに課題を抱えているという状況です。

甲賀 中等教育の場合は、国際交流をするというのは生徒の送り出しが中心ですか。

江川 受け入れもあるんですが、慶祥ではだいたい半々ですね。

上杉 深草も希望者や選抜して行う交流では二〇〇名規模でほぼ同数です。

西川 宇治は送り出すほうが多いですね、圧倒的に多い。それはやはり宇治の生徒が海外へ行くことをもっと率先しなかったらダメという意識からです。アメリカの大学では学部レベルでの日本からの留学生の数が二〇〇〇年に比べてもう半減しているということです。だから、閉じこもり傾向がある中で、宇治からはもうどんどん送り出していこうと。

上杉 全員研修を入れたら送り出すほうがさらに三〇〇名以上多くなります。

甲賀 でも一週間も行かないでしょう。

上杉 中学三年生で二週間と少しの期間です。一人一家庭のホームステイで、土日を二回経験させることにしています。

甲賀 二週間も行くのですね。

西川 宇治は、企業の幹部の方が自分の子供を入学させたいと、入試の説明を聞きに来たりされることが多くなっています。

甲賀 APUにもそういうところがありますね。だから、本当に日本の高等教育で国際化に突き出た学校になろうとするのだったら、もっと受け入れを増やさないといけないと思います。送り出すのはやはり限界があるので。受け入れを、例えばAPUのように、何カ国・地域から何人とか、ターゲットを広げたりパイオニア的に行ったりするとか、そういうことを考えたらどうですか。APUの高校版というような。

西川 それもありますね。ただ、財政的な面では、圧倒的に日本の生徒を抱えておかないと、できないですよね。そこが悩みどころです。

甲賀 だから、そこをなるべく突破するようにしないといけないですね。APUの場合はアドバイザー・コミッティ（ACC）という組織をつくって留学生の支援金を募ったわけです。

西川 国際化をこれからどう進展させるかということで、宇治はIBと留学の二つの国際コースがあるので、そこをどんどん広げていきたいと思っています。今は宇治もAPUも単独で海外を回っている状態です。そこを一体化して海外に立命館ネットワークを形成していきたいですね。これからはアメリカのハーバードとかスタンフォードとかに生徒や学生を送り出して、将来の日本のネットワークづくりになるような人材をつくっていかないとと思っています。

そういうことをやはりもっと真剣にしなければいけないだろうし、その生徒が附属校からたえ立命館大学に行かなかったとしても、将来の立命館のネットワークとして、二〇年後、三〇年後に生きてくると思います。なので、何かそういう視野で学園からも後押ししていただきたいというのが、宇治としてお願いしたい点です。

甲賀 以前にAPUの仕事で上海第一中学校に行ったことがあります。ここは公立ですが、英語教育がすごく進んでいました。アメリカの有名大学に進学するような生徒が多いと聞きました。バスで遠方からも生徒が通学できるようにしていました。そういう中国などの国際学校の進展の仕方も注視しておく必要があるでしょうね。アジアは国際教育をどの国も意識していますからね。中等教育で海外を含めて先進的国

際教育とはどういうものなのかというのを調査して、そのレベルには少なくとも追いついて日本の固有の何かプラスを出す、そういう調査企画のセクションも必要になるんじゃないですか。

西川 要りますね。

附属校の「これから」～深草の接続教育

甲賀 深草は何で光らせていきますか。理系も文系も頑張って取り組みを展開しているし、英語も展開していこうとしているし、これからはどこで特色を出そうと考えていますか。

上杉 そこなんですよね。オールマイティーの過ぎる感じがして、わかりにくくなっているかもしれませんが。

甲賀 キャンパスの長岡京への移転もあって、小学校からの進学もあるしね。

西川 深草は一番難しいでしょうね。深草の課題は「多様性」でしょう。

上杉 そうですね、多様性が求められる時代という背景もあって、今は何に対しても率先してやる必要があると思っています。

西川 ある意味、フラッグシップとして一番のハイスペックでやらなければいけないと、私は思います。何事においても一流目指すというね。

甲賀 それは絶対にいいと思う。そのためのバックアップをどう形成していくのか、大学や法人を含めて

ね。そうだけど、どこに特色出していきますかね。

西川 それは、サイエンスの分野で始められています。

甲賀 私もそう思ってきたけれど、それ一本だけというわけにはいけませんね。主軸はサイエンスだけど、英語でのプレゼンもやるし、歴史もそれ以外の教科もある水準で知っていることがサイエンスのためにも必要である、というようなことを具体化していければいいと思うんですけどね。

奈良 先日、この座談会に関連して、附属校の事務室にヒアリングしてまいりました。深草の事務室で話を伺っていて強い問題意識として持たれていたのは、他の附属校と比べて小・中・高の一貫教育のあり方についてでした。

やはり「四・四・四制」ということを対外的に強く打ち出して、それを有効性ある中身にしようと思うと、物理的な距離の問題も超えなければならない。それから、小学校から中学校に進学するときの連携をどうするかが課題だと。小学校の子供たちの一定数は、深草に進学をせずに別の中学校を受験している。これは、親の期待を十分酌み取れていない部分があるからではないか。さらに中学校から高等学校に進学するときに、生徒の学力をいかに上げていくのかという点で課題を抱えているという話をしていました。

上杉 小・中の接続もそうだし、中・高も、高・大も、接続教育ということが、どういうものであるかということが、すごく試されている時期だと思うんです。今のお話にありましたけども、小学校で優秀な児童をもちろん育てていますけれども、一方で、学力の二極化が進んでいるという点は課題です。そういうことも含めて、立命館中学校が、小学校の親に選ばれる学校、行きたい学校になっていかないといけない

と思っています。小学校自身も、受験生や親を引きつける魅力ある学校になるということもあわせて考えていかなければいけない。

いろいろな経過もあつて、小学校から進学する附属中・高は深草ということですからいいますが、附属中・高それぞれが教育の特色化を進めていけば、将来的には小学校から宇治へ進学したいとか、守山へ進学したいということが出てきて、そういう道もあり得るんじゃないかと、個人的には思っています。

甲賀 それぞれの光るものが大事ですね。大学の学部も一緒です。

江川 慶祥に進学してもいいんじゃないかと思うんですけどね。

西川 親元を一定期間離れて寮で暮らして勉強するということもあつていいと思います。

最後に

甲賀 「これまでとこれから」ということで、「これまで」で言うと、立命館の場合、庶民の学校と言われて、以前は京都の老舗といわれる家庭の子弟は立命に是非行かせるのだという強い思いは少なかったと思います。立命館小学校ができてからありがたいことにぜひ立命館へとという機運が出てきた感じですね。この間の変化は大きいですよ。

西川 そうですね。そのためには中学校・高校側の評判というか、実際の教育とか実績も重要で、頑張らないといけません。

甲賀 できることとできないことがあるかもしれないけれど、先ほど出たスピードの問題でね、あるときはかなり議論したけれど、最近の議論ではスピードの問題についての緊急性の意識よりも、民主的に議論をしようということの優先度が高くなっていますね。やはりそのことも大事ですね、先ほどPTSAという話もありましたが、教職員、学生・生徒も含めての議論、それはそれで大学も大事ですよ。だけど、それとスピードとをどう両立させるのかと、あるいは機動性というか、柔軟性というか、そういうこともみていかなければならないです。

西川 やはりリーダーが見ている視野と、山のふもとで見ている視野とは違いますでしょう。リーダーがやはり広い視野でいろいろなものを見て、決断することについては、信頼を置かないとだめですよ。そういう組織構造が必要だと思います。

甲賀 APUでは、そういうことが比較的やりやすいような組織構造になっていますね。

西川 日本全体がこれから変わろうとしているという時代に、ちゃんと視野のある人が一定の権限を持ってやっていくような仕組みは必要だと思っています。

甲賀 それは、分権化といって、経営の権限をどれだけ下位の組織に譲り渡すかということになるわけです。例えばキャンパス単位、これは言うは易しいけど、難しい問題です。BKCができたときに、キャンパス担当の副総長、副学長を置いたのは、その実験的試みだったわけです。全員参画型の意思決定システムというものと機動性というものをね、どう考えるのかというのは本当に重要な課題でしょう。

トップ専断制もよくないけれど、何でも時間かけてミーティングやるというのもよくない。民間企業の

ように、トップの専断でやるというのは教育機関としては難しいと思います。完全な競争性や市場メカニズムでやるというのも同じですね。私学経営といえども、私企業と違うところはどこなのかとか、そんなことが今まで全然詰まっていなかったと思います。APUをつくるプロセスでは、そういう私学経営の問題をものすごく考えさせられたわけです。留学生にAPUに来てもらおうと思ったら、日本語の壁や生活費の壁なんかがあって、いろいろなバックアップが欠かせない。国のバックアップ、自治体のバックアップ、企業のバックアップなんかを、新しい挑戦のときにどこまでやってもらって、その後どれだけ持てるかという問題を真剣に議論して実践しましたね。産学連携にしても導入当初は反対もありました。ルールをきちんと整備してやればよいという議論になりました。ともかく産業界は悪だというようなことを言っていたら、私学は生きていけなかったと思います。

西川 そうですね。

甲賀 私学は自分たちの自主性が大事です。政治が動き出したときに、教育を守る、戦争を二度とさせない現場をつくろうと思ったら、下からの力がないと理事長や学長一人で頑張っているだけでも動きません。だから、カウンターベयरリングパワーというか下からの力というのか、それはそれで本当に大事です9・11以降、アメリカでもアカデミック・フリーダムということをあらためてものすごく大事にする動きもあります。教育改革をどうするかという問題がありますが、どの政権になっても社会の力の中心は教育・人材であると、これは変わらないと思いますけどね。

授業料の問題はどうですか、これ以上授業料を上げること考えられますか。それでも来てくれる層は

どのくらいいると思いますか。

西川 内容によると思います。内容が伴ってくればまた上げることもあり得るんじゃないでしょうか。例えば日本のIBの学校で調べると、平均すると年間の授業料は二五〇万円です。

甲賀 すごいですね。ただそれは、先ほど西川先生がおっしゃった、信頼などが相当強固に形成されたうえでないとできないですね。

西川 はい、「出口」、つまり進路や就職の問題として、どのくらいいいところに行けるのかということにも関わってきます。宇治は今の生徒数の規模を維持して、これからIBをさらに進めていこうとなると、教室数が足りないという問題があります。それから留学生が短期間でも宿泊できるような寮なども考えたいですね。校内でそんなことができれば、全体に対する刺激にもなるのではないかと思います。

甲賀 深草でもどう特色化するかという議論になったときに、全国的に理系離れが言われている中、スーパーサイエンスでいこうということになって、立命館大学のBKICを使って授業をといることも考え出したわけです。やはりそういういいアイデアを出して、これはすごい、これはやれそうだというのをつくってあげば、今、西川先生が言われたような授業料のことも考えていくことができるかもしれません。しかし全体状況はそれを許さないところへ進むかもしれません。

私学が時代の要請や状況を見据えて、これからは新しい私学の価値観や存在理由を打ち出していく、それをそれぞれの地域ごとにやっていくというようなことが大事になると思います。そのうえで、シンパシーを感じてくれる人がスポンサーになってくれたり、連携したり、ネットワークを形成していったり、

そういうことを本格的にやらないといけないですね。教員の中でそれを専業にやる人や職員の中でそれを専業にやる人、そういう人材配置をどうするか、こういうことに本格的に取り組まないと、私学は体制的にもたないんじゃないかと思います。

西川 もたないです。

甲賀 慶祥でも、APUでも大変な状況があると思います。これは担い手の問題が大きいですね。関西から見ると、慶祥もAPUもやはり見えにくいですよ。法人全体として共通の認識をつくっていかないといけません。私学の新しい価値観やミッションに基づいた教育を実践して、かつ若い先生方を含めて元気出るようなことが必要です。保護者も先生方を見えますからね。どういう質の先生だとか、学歴なんかも見えていると思います。そうするとね、いい先生をどう採用していくかというのはものすごく大事で、オールマイティーの人をできるだけ増やさなければならぬけれど、リクルートの仕方をどう開発していくか、それも課題です。

西川 この学校も悩んでいる大きな課題です。

甲賀 だから、職員論もやらなければならぬし、教員の質の保証みたいなものも考えなければならぬ。それをやはり一貫教育担当の常務理事のところに上げて、課題が全学の中で正確に据えられるようにしないといけないですが、それを訴えて課題を上げていくのはやはり中等教育の現場からですからね。これからの附属校のあり方を考えていくのに大事な課題ばかりです。

江川 前向きな課題に対して一丸になって議論していかなければならないと思います。

甲賀 私学の優位性、立命館の強みということで、そのような新しい議論も出始めているということが、各校の「これまで」と「これから」を語っていただく中から見えてきました。それから、課題について一貫教育部でオーソライズして、それでだんだんに上げていくということかたちも大事ですが、上からの判断が求められることも多くなるのではないということも課題として見えてきたように思います。それぞれが地域や日本社会、あるいはグローバルな社会の中で、本日お話いただいたような私学の価値観や存在理由を、「これから」ますます光らせて、教育活動に取り組んでいただくことを期待したいと思います。

本日は先生方、お忙しい中、また慶祥は遠いところご出席いただきましてありがとうございます。事務局もご苦勞様でした。本日のお話をきちんと記録にまとめておきたいと思います。お疲れ様でした。

（本座談会には当初、立命館小学校より浮田恭子校長に出席いただく予定でしたが、座談会開催直前に急な校務が入り、出席いただくことができませんでしたので、附属中学校・高等学校の先生による座談会としてまとめさせていただきました。 百年史編纂室）

〔注〕

- (1) 二〇〇八年四月に設立した「立命館グローバル・イノベーション研究機構」のこと。持続可能な社会形成のために解決せねばならない課題に焦点を絞り、教育・研究を通じて社会貢献していくための組織的な機構です。具体的には、まず、21世紀に緊急に解

決せねばならない課題として「環境」「エネルギー」「食料」「材料・資源」「医療・健康」「安全・安心」の6領域を研究対象として、二〇〇八年四月から自然科学系を中心として、政策的・組織的に取り組みを実施している。

立命館大学アメリカンフットボール部の歩み

(一九七〇～二〇〇一年)

平井英嗣

日本におけるアメリカンフットボールの歴史は一九三四（昭和九）年に遡る。第二次世界大戦による三年間の中断を挟んで今日まで七八年の歴史を刻んできた。その中で、立命館大学体育会アメリカンフットボール部は、一九五三年に創部され広小路キャンパスの鴨川グラウンドで活動を開始した。

創部以来長い低迷期はあったものの、近年では日本のアメリカンフットボール界をリードする強豪校の一つとして注目されている。関西学生リーグ優勝九回、学生日本一毎日甲子園ボウル優勝七回、日本選手権ライズボウル優勝三回という輝かしい実績のほか、二〇一一年七月、オーストリアのウィーンで開催された国際アメリカンフットボール連盟



鴨川グラウンド（1953年）

(International Federation of American Football) 主催の第四回世界選手権大会では十六名の本学卒業生が活躍し、アメリカ、カナダに次ぐ日本の銅メダル獲得に貢献した。

しかし、このような輝かしい実績の陰で一九七〇年代初頭には部員不足によりリーグ戦参加も危ぶまれた時期もあった。その後、多くの試行錯誤と失敗を繰り返しながらチームは成長し今日に至っている。

今回は筆者が深くチームに関わった一九七〇年から二〇〇一年までの歩みを振り返ってみることにした。

ブローグ

アメリカンフットボールの試合を観に行かれた方が目にする最初の光景は、サイドラインに立つ多数の選手やコーチとサポータースタッフの姿であろう。さらによく見ると、ゴールポストの後ろや観客席の高いところでカメラを構えているスタッフやスタンドの高いところに陣取るサイドラインとは別のコーチの団が試合を見つめていることに気付く。

余りに多くの人間が試合に関わっていることに驚かれることだろう。その理由は競技特有のルールが関係している。特有のルールとは、試合全体がダウン方式と呼ばれる短いセットプレーの積み重ねで構成されていることと、ダウンとダウンの間の僅かな時間を利用して自由に選手交代ができることである。特に後者のルールによって、いつも元気の良い選手を試合に出すことができるとともに、ダウン間に作戦を選択に指示したり、最も作戦に適した選手の投入を可能にする。このことが高い戦略性を生み出し、競技の

魅力の一つになっている。サイドラインのコーチはスタンド上部にいる別のコーチとヘッドフォンを使って情報交換しながら効果的なプレー指示を毎回フィールドに送っている。

またこの競技は、非常に激しいコンタクトが繰り返され負傷者が多く発生するので、万一に備えチームドクターやアスレティックトレーナーも待機している。

このように、一試合約一二〇プレーの一つひとつにコーチと選手、それを取り巻く多くのスタッフが関わって「数は力なり」を地で行くのがアメリカンフットボールの特性である。したがって、全国制覇のミッションは競技力そのものを高めることと、それを支えるサポートスタッフを加えた総合的な組織づくりの作業とその道程でもある。

コーチへの第一歩

筆者がアメリカンフットボールコーチに関心を持ったのは、選手時代に他大学の偉大な指導者に出会ったことが大きく影響している。京都大学、関西学院大学、日本大学の監督やコーチの方々の印象は強烈だった。

京都大学からは、科学的なアプローチと長期戦略について興味深い話を聞いた。関西学院大学では、豊富な知識と洗練された技術や戦術に憧れた。日本大学からは、監督の檄で怒涛のごとくフィールドを駆け抜ける選手の姿と指導者のカリスマ性に圧倒された。それぞれ個性は違っていたが、頼れる存在、選手に

夢や希望を抱かせる魅力的な指導者だった。

中でも京都大学のストーリーは、具体的な選手育成や作戦計画など今にも実現しそうな話で若者の熱い血を滾らせるものがあつた。コーチの力によって強いチームがつくり上げられるのを目の当たりにして、私も立命館大学のコーチとなつてチームを強くしたいと思つた。

一九七〇年、筆者は大学卒業と同時に週末の休日を使ってチームを指導する、いわゆるサンデーコーチとしてチームづくりに参加することとなつた。週末毎に現役幹部らと協議して練習計画を示し、それにもとづいて上級生が日常練習を実施する方法でチームづくりを進めた。部員が少ない頃は、週末に卒業生やコーチが練習に加わり新しい技術やフォーメーションプレーの練習を行つた。他にも、練習が終わつてから別の場所で幹部とミーティングをするなどしながら日常的に指導できない不足を補つていた。コーチングの質を高めたと思う、アメリカから専門書や雑誌を取り寄せて知識を得たり、他校の指導者からの助言を得て、技術指導やフォーメーションプレーのコーチングに活用した。

しかし、断片的な知識と少ない経験によるコーチングでは、細かな説明が足りず部員たちが納得できる内容にはなつていなかった。専門書で覚えた新しい戦術や技術も計画的な訓練抜きでは成り立たず、結果的に体力や技術力の不足する選手に無理なことをさせたようだ。さらに部員が少ないハンディからくる士気の衰えを避けるために、精神主義的練習や過重な実戦練習を課して、かえつて故障者や負傷者を増加させてしまった。特に、自分が現役時代にできたプレーは選手にもできるはずと思ひ込み、上手く行かないのは選手の努力が足りないからと叱り飛ばし、自分が練習相手になつて選手を遣り込めることもあつた。

「数は力なり」と分かっていたにもかかわらず、感情的なコーチングスタイルは負傷者の発生と部員の減少につながり、その年から始まった関西学生リーグ入替戦に敗れ、二部リーグである近畿学生リーグへ降格という最悪の結果を招いてしまった。未熟な新米コーチの失敗だった。

マイナス・スパイラル

アメリカンフットボールは部員数が少ないと十分な力を発揮できない競技である。試合ができる選手数は最小一一名だが、少なくともオフェンスチーム一一名、ディフェンスチーム一一名、さらに交代要員を合わせて四四名は必要だ。選手としての育成期間を考えるとさらに二二名が必要で、合計六六名程度の部員数を確保できれば未経験者をベースにしても安定したチームづくりが可能となる。

筆者がコーチを始めた一九七〇年度の立命館大学の連盟選手登録者数は一九名だが、経験の浅い一回生もいたため、実質は最低数の一一名で戦うことになった。これでは負傷者が発生すれば未熟な一回生を投入することにならざるを得ず、多くの経験者と部員数を要する強豪校との対戦では散々に痛めつけられることになってしまう。

こうした無茶な使われ方に嫌気をさして、定着率はまたしても低下した。メンバーが少ないので無理をする、無理をするから嫌になる、嫌になるから去って行くというマイナス・スパイラルが加速し、翌年度にはたった九名の選手でスタートしなければならず、春の公式戦を辞退することも考えた。

定着率悪化の原因には練習環境、指導体制、学生生活と組織運営の問題があった。

当時の練習環境は、一九七一年から新たに柘野総合グラウンドとなっていた。このグラウンドには、鉄筋コンクリート造2階建ての総合合宿所、給湯器付きシャワーや風呂場、合宿用宿泊施設、ミーティングルームなどが整備されていて、それまで使用していた上賀茂グラウンドの老朽化した施設や設備に比べて大幅に練習環境が改善していた。この環境は、コーチにとっても部員にとっても心機一転して関西学生リーグ復帰の意欲を掻き立てるものだったが、部員の定着率改善にはつながらなかった。

その原因の一つは、グラウンドがキャンパスから離れていたことであつた。開講期間中はスクールバスを利用できたが、休講期間中は市バスの終点から徒歩で三〇分以上かけて通うことになった。遠距離移動は毎日の時間的、経済的負担に加えて肉体的、精神的消耗が重なり、新入生のみならず部員の活動意欲を減退させることになった。夜間照明が無く、練習時間と授業時間が重なり部活動と学習の両立に支障が出ることもあり、単位取得への不安から活動の継続を断念する部員も出た。

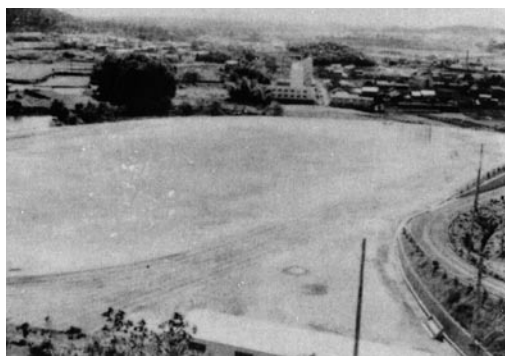
次に指導体制では、監督やコーチの指導は週末や休日のみとなるので日常的には上級生が下級生を指導する。部員数が少なかったことで、上級生は新入生の体力がついてくると早々に練習に組み入れて



上賀茂 (神山) グラウンド (1968年頃)

技術を覚えさせる。上級生の教え方や人柄によって下級生の定着率が変わってくる不安定な選手育成の仕組みだった。大学からアメリカンフットボールを始める新入生に、ルールや技術を段階的に指導する手順が定まっておらず、初心者にとっては極めて不安で危険に感じたことと思われる。週末にやって来るコーチは選手に指示した技術やフォーメーションプレーはマスターされていることを前提に指導するので、選手がミスをするとき厳しい態度で迫り、何度も繰り返してできるまでやらせた。その苦しい練習を必死で乗り越えることによって強い精神力と技術力が養成され、リーグ戦の強敵とも互角に闘えると考えた。しかし、選手にとっては合理的な説明も無く無茶な注文を押し付けられていると感じただろう。こうしたコーチングは部員の定着とチーム強化にとっては極めて逆効果だった。

続いて学生生活では、経済的な負担が大きな影響を与えていた。アメリカンフットボールで使用するヘルメットやショルダーパッドなどの防具類は全て米国からの輸入製品だったので、一ドル三六〇円時代の学生にとっては大変高価なものだった。シーズンオフにアルバイトして貯めた預金を叩いて購入するのだが、経済的に苦しい下宿生にとっては厳しい選択だった。さらに、試合や練習の度に交通費が嵩み、遠方の交流戦や合宿費の出費も負担を押し上げ、取り組み意欲の減退につながった。正課と課外を両立させな



柊野グラウンド (1973年頃)

がらアルバイトで貯めたお金を部活動に出費するには、苦しい練習、惨めな敗戦、展望が見えない現実では夢を追い続けるには厳しすぎた。

そして組織運営では、こうした部の状況からすると、部員が意欲を持つて夢を追いかけることが出来る説得力ある目標と具体的計画、そのことを着実に実行する求心力を持った指導者のリーダーシップが何より必要だった。

それでも、厳しい条件下でクラブを続けることにどの部員も同じ気持ちで格闘していたこともあって、部員間で上下の理不尽な封建的な組織運営がなされることは無かった。少人数の組織であるが故にコミュニケーションのとれた柔軟性のある仲の良いチームだった。このことが、マイナス・スパイラルから抜け出すための大きな力となっていくことになる。

マイナス・スパイラルからの脱出

部員の定着率の改善を最も深刻に受け止めていたのは現役部員だった。

アメリカンフットボールはポジションごとに固有の技術がありプレーの中で果たす役割も異なるため、簡単にポジションを変わって代役を務めることは極めて困難であり、新入生に限らず退部者の出ることはダメージが大きかった。従って、退部の申し出を受け取ると、しっかり理由を聴いて改善に反映するように心掛けた。退部希望の主な理由は、①勉強する時間が欲しい、②仕送りや学費、生活費など経済的理由、

③興味が無くなった、④他にすることが出来た、⑤自由な時間が欲しい、⑥部内の人間関係、⑦指導者や指導方法への不満、⑧就職活動、⑨留学志望だった。

そこで、一九七三年頃から次のような対策で定着を図った。①新生には自由な活動を容認し無理をさせず、②授業への出席は最優先、③アルバイトやリフレッシュ期間を明確に設けて気分転換を図れるようにした。また、留学志望者も帰国後の復帰を受け入れ、就職活動も自由にやってもらうことにした。特に部内の上下関係に封建主義的支配を持ち込まないように注意した。経済的には合宿をできるだけ学内で済ませ、新生には関東遠征などの参加を自由にして出費を抑制した。ともかく新生が活動できる住み易いチームを目指した。この方針を売り物に勧誘活動を行った結果、新生の入部が増加し部員の定着率も改善の方向に向かった。

次に改善を目指したのは一貫性を持った信頼されるコーチングである。サンデーコーチの欠陥は、コーチの考えと選手の思いに食い違いが生じ易いことだ。選手が毎日練習してきた技術やフォーメーションを、週末になるとサンデーコーチが覆して一からやり直しを命ずる様なことが起きた。これは部員に混乱を生じさせ、練習意欲に悪影響を与えた。こうした状況を避けるため、筆者はできるだけ書面や図を用いて意思を伝え、プレーや練習の意図を分かり易いように示して、両者間に大きな認識の差を生じさせないよう工夫した。これはチームづくりの進捗に焦りがちなコーチの頭を冷やすことにも役立ち、コーチと選手の役割を明確にして少しは組織的な練習ができるようになり、部員も少しずつ増加をはじめた。

その他にも一九七〇年代後半はアメリカンフットボールへの追い風が吹いていた。難関国立大学である

京都大学アメリカンフットボール部が躍進し、施設や人材に恵まれた伝統校を打ち負かした快挙がマスコミで取り上げられ、未経験者が大学から初めても一流選手になれる競技だと報じられ、アメリカンフットボール人気が全国的に広がった。

部内の組織運営の柔軟さと指導体制の改善に加え、社会的ブームに後押しされて部員不足の問題は解決の方向に向かって徐々に動きだした。

関西学生リーグ復帰

一九七七年になると新入生の数が上級生の数を上回り、一九七九年には四四名の組織に拡大した。マイナス・スパイラルから脱出し、急成長への移行期が始まった。大きく頑丈な体格で運動能力の高い新入生が多く入部し、上位リーグである関西学生リーグ復帰への条件が整ってきた。当時、サンデーコーチの指導体制、遠距離移動、練習時間の限界、近畿学生リーグ所属という現状では学生をチームに惹きつける要素は多くなかったが、安心して活動できる組織づくりの運営方針は親和性に優れた部のスタイルを形成していた。

学生主体のチームでは組織のリーダーである主将の果たす役割が非常に大きく、部員の信頼を集める人材かどうかが鍵になる。主将は部のリーダーであり、下級生を指導するコーチであり、部の民主的運営と規律を維持する統括責任者であり、コーチと選手の関係を円滑にするコーディネーターである。特に、

コーディネーターは、部員の学生生活や活動の様子、毎日変化する部員のコンディションを把握し、普段は部員の姿を見ることが少ないコーチとのギャップを埋めて、円滑な部の運営を維持する重要な役割を担った。

また、夢を現実に変えるためには、挫折を繰り返しながらもチームが常に高い目標を持ち続けることが不可欠な要素であり、多様な価値観を持つ部員を統率し目標に向かって団結して課題をやり遂げる固い意思を持った主将の手腕が決定的に重要である。一九七九年は誠実で信頼できる冷静な主将の人物に魅かれて、関西学生リーグ復帰を目標にチームが結束して頑張ることが出来た。強い責任感で固い結束力を生み出した手腕は見事だった。着実な計画の遂行と安心して活動できる組織づくりによる部員の増加と競技力の向上を目指した自発的取り組みが結実し、九年ぶりに一部リーグである関西学生リーグ復帰を達成した。不十分な練習環境や指導体制の中においても、仲間の信頼関係を土台とした活動し易い組織を構築することによって、チームの求心力が高まり誠実で責任感あるリーダーと共に最適な練習環境を自ら創り出した部員の学生力の成果だった。

総合スポーツ政策

関西学生リーグ復帰を決めた一九七九年度は、立命館学園の将来の方向性を定める全学協議会が開催され、「全学生のスポーツ活動に対する政策の確立」として「青年の発達にとって、スポーツに対する要求

は切実であり、またスポーツ活動が体力向上、人間形成、集団づくりなどに果たす役割が大きいことを踏まえ、①学園の総合政策の一環として、当面の総合的スポーツ政策を八〇年三月末までに作成し、提起する。②第二体育館の建設を進め、さらには衣笠キャンパスに比較的近い場所でのグラウンドの確保に努めることによって、全学生のスポーツ要求に応える。③体育会に組織された課外スポーツ活動に対する援助を系統的に強める。」ことが確認され、立命館大学におけるスポーツの大衆化と高度化の実現に向けた本格的な動きが始まった。

この全学的な合意形成に基づき、キャンパス近隣の原谷グラウンドの取得やスポーツ諸施設の整備に向けて具体的な動きが進められて行くことになった。積極的な練習環境の整備はチームの拡大に伴う部の発展にとって大きなブースターエンジンの役割を果たした。

安定化への模索

九年ぶりに関西学生リーグ復帰を果たした一九八〇年度は、これまでとは異なる厳しい環境での戦いとなる。それまでは、チームに多少の欠陥や試合運びの失敗があったとしても、相手をオーバーパワーすることでカバーできたが、関西学生リーグでは弱点を持つことが即敗戦につながるようになった。リーグ開幕戦では前年覇者関西学院大学を倒す寸前まで追い詰め、関西学生リーグでも通用する地力が備わっていることを確信した。しかし、その後のリーグ戦では負傷者の発生が大きく影響して、結局二勝五敗で

シーズンを終了した。選手層の薄さが原因の結果だった。

続いて関西学生リーグ残留をかけた関西大学とのプレーオフに臨んだ。初戦は一六対一六で引き分け再戦となった。ここでコーチは選手の体力的消耗に配慮して再戦を避けて入替戦に集中する方針を部員に提案したが、四回生は「必ず勝てます」と最後まで決着を主張した。次の試合も接戦だったが一三対一二の僅差で勝利し残留を決めた。余計なことは考えず目の前の試合に全力で戦えと、コーチが選手に叱られた恰好だ。サンデーコーチの限界を選手達は自らの力で乗り越えた瞬間だった。

翌一九八一年度は大学も大きな変化を迎える。衣笠一揆点化が完成し二万名の学生が同じキャンパスで学ぶことになった。新入生の勧誘にも弾みがつきチームは活気づいたが、リーグ戦は厳しい戦いが続き一勝六敗で再び入替戦出場となった。この年も対戦相手を決めるプレーオフを行うこととなったが、コーチは前年の教訓があつたにもかかわらず、又しても入替戦に向けて戦力を温存する策を提案する。

前年と異なり四回生もその提案を受け入れ、プレーオフを敗戦で終え岡山大学との入替戦に臨んだが、圧倒的に有利と考えた相手に七対二七と完敗し近畿学生リーグへ再降格が決まった。

コーチが策を弄してチームを苦境に陥れるという大失敗であつた。相手を選んだ瞬間に油断が生じたこともあるが、コーチが対戦を回避する意思を示したことは、チームに力がないと宣言したのと同じである。その結果、選手も自信を失いその勢いを挽回することは容易でないことを知らされた。緊張の中で全力を尽くしてプレーすることこそが危機を乗り越える最大の力になることを知るには高すぎる代償を払った。勝負はコーチの浅知恵だけで勝てるほど甘くはないという教訓だ。課題に取り組む選手を励まし、

素直に試合に臨めば良かったものを、不用意な弱気の発言で士気を挫いてしまった。サンデーコーチ体制においては、監督・コーチが出来る限界を自覚し学生主体のチームづくりを牽引しようとするのではなく、後押しする存在として機能していればもっと早くに良い結果を出せたのではないかと、今では考えている。

しかし、競技力の安定化に向けては、練習時間の確保に向けた施設整備は欠かせない条件であり、正課終了後の夜間練習を保障する照明設備や筋力トレーニングの施設設備はコンタクトスポーツであるアメリカンフットボールにとっては必須な条件だったが、部が単独で解決することは困難な問題であり、根本的な環境の改善にはもう少し時間を必要とした。

原谷グラウンド移転と高度化へのスタート

近畿学生リーグからのスタートとなった一九八二年は、練習拠点が衣笠キャンパス近隣の原谷グラウンドに移転した。これで遠距離移動の問題が解消され活動も活性化した。特に小型バイクの普及もあって、学生にとっては「練習場が裏庭にできた」様な気分だった。しかし、夜間照明が無くシーズン後半期の練習にはバイクや自動車のヘッドライトを利用するなどの工夫が必要だったが、部員の初年次定着率は八〇%を超えて選手層の安定化につながった。

環境の好転はチームにも良い影響を与えて、近畿学生リーグも無難に通過し入替戦を一カ月後に迎えることになった。これまでの教訓からこのままの勢いを維持して入替戦に向かうのが定石であったが、コー

チは入替戦までに約一カ月間の空白が生じることへの懸念から、上位チームとの実戦感覚を取り戻すため京都大学のジュニアチーム（二軍）との練習試合を計画した。京都大学は激しいコンタクトが特徴の強豪チームだったので部内は賛否両論騒然となった。コーチ間でも懐疑的な意見もあり、重要な時期に選手とコーチ、選手と選手で意見が分かれてしまった。それでも、実力を試したい選手を中心に下級生を補強して調整試合を行うことにした。試合は互角の展開で接戦になったが負傷者も無く、チーム全体が適度な緊張感と大きな自信を持つて入替戦に臨むことになった。入替戦は僅差の勝負だったがピンチにも動くことなく接戦を制して関西学生リーグ復帰を決めた。今回はコーチの思い切った強気の賭けとそれに応じた選手の意気込みが功を奏した。

翌一九八三年度、筆者はヘッドコーチとしてコーチングの統括を担うこととなったが、この年は大学が本格的なスポーツの高度化をスタートさせる起点となる年でもあった。その年に開催された全学協議会ではスポーツの高度化と大衆化の達成に向けた多くの具体策が示され、新総合スポーツ政策の策定も相俟ってアメリカンフットボール部にとって飛躍を目指す絶好のタイミングを得ることとなった。



原谷グラウンドでの練習（1985年春合宿）

新総合スポーツ政策の提案

一九八〇年代に入ると立命館大学体育会の各クラブは一九七〇年代の全般的な低迷から脱却しつつあり、関西一部リーグへの復帰を果たすクラブも増えて立ち直りの兆しを見せていた。一九八三年度はこうした体育会クラブの活躍を受けて、さらに競技力向上と体育会の発展を目指す新総合スポーツ政策策定の方が打ち出された。この年の全学協議会では、学ぶ主体の確立のために「学生の人格形成を視野においた諸施策の充実」として厚生活動、就職活動とともに課外活動の重要性が確認されて、課外スポーツの高度化と大衆化をさらに進める議論が行われ、全学協議会確認付属文書の中で一九八四年三月までに「総合スポーツ政策」の大綱を示すことが確認された。

さらに、一九八四年四月より実施可能な課題については一九八三年度内に具体化を図るとし、当面検討すべき内容を、①課外体育活動との有機的結合・関連を視野に入れた正課体育カリキュラムの改革、②保健体育委員会・課外体育委員会等の充実、③部長会等の強化と監督・コーチ会の確立、④推薦入試制度の充実・改善、⑤専任コーチの確保、⑥課外体育活動の総合的・体系的援助のあり方の検討、⑦施設、設備等条件の改善、などの柱が示された。さらに、具体的な対策として（a）選手育成の鍵をにぎる指導体制充実のために、重点的強化対象パートを明確にして、本学の財政力量の可能な範囲で、専任のトレーナーおよびコーチの確保を行う。（b）保健体育教室および体育課の援助と協力により「トレーナー養成講

座」や「スポーツ相談室」等を開設する。(c) 尚友館を四月に開館し、より充実した強化合宿が可能な条件設定を行うとともに、トレーニングルームを春季の基礎体力づくりに使用できるようにする。(d) 「課外体育委員会」の充実を行う。(e) 体育会強化対策費について、体育会強化の重点政策を明確にして改善・充実を図るなど、当面の課題が示された。

その他、施設関係では今後の継続検討課題に「原谷グラウンドの照明施設について、正課体育の原谷グラウンド使用時期との関連で、日没後も一定時間練習が可能な施設について、検討を行う。」と記され、アメリカンフットボール部の大きな課題となっていた練習時間確保の解決に向けた夜間照明設置の動きが加速された。衣笠一拠点、原谷グラウンドの開設、総合スポーツ政策の策定と原谷グラウンドの尚友館建設など、次々に課外活動に対する力強い支援が始まった。

高度化政策とチームの飛躍

一九八三年度には原谷グラウンドの諸施設は未整備だったが、一九八四年度に入ると部室、ウェイト器具を整えたトレーニングルーム、合宿所、ミーティングルームを備えた総合体育施設「尚友館」が開館すると同時に、専従専門トレーナーの配置も実現した。アメリカンフットボール部には当初専門競技コーチの配置も検討されたが、素人を集めて育てることが基礎となるので、競技指導の前に入学初期段階の運動能力の開発に重点を置いた科学的トレーニングを可能にする専門トレーナーが配置されることとなった。

こうして一九八四年度からアメリカンフットボール部専属の専門トレーナーによるトレーニング指導と学生生活指導を加えた総合的部活動の指導が可能となったが、その効果は選手だけに止まらなかった。サnderコーチにとつても専従者の眼を通して日常の選手の状態を把握しながら練習計画を進められるようになり、指導体制上の弱点を補うことが出来るようになった。専従専門トレーナーの指導によって部の組織運営も強化され、秩序ある学生組織の構築に向けて大きく前進した。

一九八五年は念願の原谷グラウンドの夜間照明が設置され漸く施設条件で強豪チームの練習環境に近づいた。夜間照明の設置は、サnderコーチだった筆者も仕事を終えてからの練習参加が可能になり、より深くコーチングに関われる環境が整いつつあった。

競技力の強化に向けた練習環境の整備が進む中、部員数の増加も急激な伸びを示していた。これまでの少人数の部員を相手とするコーチングの知識や方法では百人近くの選手をコーチするのは困難になっていた。そのこともあって、米国の有力チームで選手として活躍したデイビッド・ダンキャベツジ氏をコーチに招聘し技術指導を手伝ってもらい、不足する知識とコーチングスタッフの量的緩和を図った。

その結果、一九八五年度は創部初の五勝二敗の成績でリーグ戦同率二位を確保した。大規模チームを指導するコーチの質と量の問題を大きく意識させられた出来事であった。特に米国人コーチの指導が選手のモチベーション向上に大きな影響を与えたのは驚きだった。

ピッツバーグ大学パンサーズ (Pitt Panthers) の出場

アメリカンフットボールは分業化が高度に進み各ポジションの異なる役割と技術の組み合わせでプレーが成り立っている。そのため米国では各ポジションに専門コーチを配置して指導に当たっている。日本でも大規模チームでは同じような組織で運営されているが、それには豊富な知識と経験を持つ多くの人材を必要とすることから、長い歴史を持つ強豪チームのみ可能な指導体制であった。

選手数では大規模チームとなった我々もそれに応じた指導体制を必要としていたが、当時日本にはアメリカンフットボールのプロコーチは存在せず、先進の他大学からも人材を得ることが困難だったことから、自前でコーチを育成する必要がある。そこで、考えられたのが米国ピッツバーグ大学アメリカンフットボールチーム「パンサーズ」への視察研修だった。筆者と岡本直輝（現スポーツ健康科学部教授）専従専門トレーニングコーチが短い期間だったが、みっちり本場のコーチング知識や手法について学ぶことになった。

ピッツバーグ大学では本学教員の援助もあって「パンサーズ」に丁寧に説明や指導をいただき、厚さ十数センチのプレーブックや多くの映像資料を頂くことが出来た。プレーブックは専門参考書とは比較にならない詳細な指示が書き込まれ、選手が迷い無くプレーできるようになっていて、これが本物のプレーブックかと感心した。コーチの仕事に関しては、業務分担や年間計画、毎日の練習時間割とその内容、試合当日の詳細な予定表、選手の行動規範や単位取得について書かれていた。アシスタントディレクターの会話からも、学習支援に対するチームの手厚い配慮が伺われた。

練習でも新たな発見があった。コーチは、ドリルのはじめに練習の狙いや方法と注意点を説明するが、一旦練習が始まると流れを止めずに一〇分毎に種目を変えながらテンポよく進められる。選手には失敗すると原因を即座に指摘し、良いプレーには「Good Job」と声をかけて評価する。選手と共に機敏に動き回って指導する姿を見て初めてコーチングとはこういうものだと思えた。全米大学体育協会(National Collegiate Athletic Association = NCAA)の規則による練習時間や日数制限の下で、綿密な計画と速いテンポの練習によって時間を有効にかつ効率的に使う努力や工夫がなされていた。日本では選手が期待どおりのプレーができないと、その場で何度も繰り返しやらせることが多いが、奨学金のかかった米国では選手の練習時間や評価の平等性や公平性に配慮した練習がなされていた。

初めて垣間見た本場のアメリカンフットボールチームの大きさと詳細な計画に基づく合理的な練習システムに刺激を受けて、我々も新しい知識の導入による近代化への道を歩み出すことになった。これまでのチームづくりの手法に大きな発想の転換を与えてくれた価値あるピッツバーグへの旅だった。高度化を目指す上で今後の指導体制整備のモデルケースを掴むきっかけができた。

その後二年間、選手を伴ってピッツバーグ大学視察研修を実施したが、コーチと選手が目標とするチームの考え方や組織の姿を共有できる良い機会となった。このUniversity of Pittsburgh「Pitt Panthers」との出会いをきっかけに、一九八七年度からチームのニックネームを「グレーターズ」から「パンサーズ」に変更した。

スポーツ特別選抜入試と専任職員コーチ

一九八六年度は体育会全体を勇気づけるニュースが大学から発表された。一九八七度入学試験から「スポーツ特別選抜入試」（正式名称…スポーツ能力に優れた者の特別選抜入学試験）が実施されることになった。これで優れた選手獲得の道が広がり競技力強化に繋がると期待が寄せられた。アメリカンフットボール部の出願資格要件には高等学校にアメリカンフットボール以外の種目を行っていた者も対象とされ、広範なスポーツ分野から優れたアスリートの選抜が可能な仕組みになっていた。これによって大きな体格、優れた走力、秀でた投球術などアメリカンフットボールのポジションに適した優秀な選手の選抜が期待でき、他大学のスポーツ推薦入学制度に対して大きな優位性を保つことができた。その結果、想定どおり相撲や柔道、陸上競技、野球やバスケットボールなどのスポーツ分野から高い運動能力を持った選手が入学し、全国制覇を担う主力選手が育つていった。

「スポーツ特別選抜入試」の開始に伴って、指導体制にも強化の動きが出てくる。筆者が一九八七年度から本学の専任職員として採用され、業務終了後の練習参加が可能となつて、圧倒的に学生と接する時間が増加した。多様な種目からのアスリートの入学と専門トレーニングコーチの専任配置、競技コーチ可能な専任職員採用によって「スポーツ特別選抜入試」の効果を最大限に発揮させる選手育成の体制が整備されてきた。

指導体制の変化と転換期の課題

関西学生リーグでも二位となる実力を発揮し始めたチームは、次の目標を「トップクラスに定着し全国制覇を目指す競技力獲得」に設定した。大学は一九八三年度以降、練習施設の整備、指導体制整備と指導者の育成、活動の財政援助の拡大など全国制覇を視野に入れた支援を行った。

一九八六年度以降、米国研修の成果を発揮したいとピッツバーグ流のコーチング手法や持ち帰ったばかりの資料をベースに新たな方法を導入してチームづくりを進めようとした。先進的な手法を導入すれば強くなると考えたが、リーグ戦の結果は三勝四敗と負け越した。それまでのサンデーコーチ体制にあつて、部の組織運営や試合での戦術や戦法の選択に部員・選手の自由度がかなり高かったことを考えると、急激な管理システムの変更が選手にコーチへの反発や不満を生じさせたことは容易に想像できる。この時期はアメリカンフットボールが高等学校でも盛んに行われるようになり、運動能力も高く技術の優れた選手が増加していたことから、それに合わせたより適切なコーチングの方法があつたと思われる。しかし、コーチが早く新しい知識を試したいと変化を急ぎ過ぎたようだ。

翌年一九八七年度は筆者が専任職員となり選手と接する時間が増加し、計画的時間管理が進んだ新しい練習システムの導入と指導体制の改善が行われ競技力強化が進むと見込んだにもかかわらず、三勝四敗と連続して負け越した。その原因は前年度同様にこれまで培われてきた組織運営のシステムとコーチが導入

しよう考えたこととの間に食い違いが生じた結果だと考えられる。緩やかな管理体制のサンデーコーチ時代は主将を中心に学生主体のチームづくりや組織運営がなされてきたが、コーチが日常的にチームづくりに深く関与することによって、前年よりもさらに選手に大きな戸惑いを生じさせたようである。例えば、コーチ関与が深まるとコーチは練習計画やフォーメーションプレーに忠実で正確な実行を選手に強く求めるが、選手は体験によって得た知識や技術を優先させるため互いに噛み合わずフラストレーションが蓄積し、プレーに集中できなくなり不本意な結果を生み出した。

これまでの学生主体によるチームづくりから、コーチが主体的に進める新しい方式への過渡期における不統一でもあった。現実的に部員が一五〇名を超え、主将と幹部数名で統率できるような規模では無くなり、複数のコーチによる中長期を見据えた組織的チームづくりが必要な時期に差し掛かっていた。

スポーツ強化対策室設置と指導体制強化

一九七九年度以降、アメリカンフットボール部のステップアップの転換期と歩調を合わせるように、一九八三年度、一九八七年度とスポーツ強化政策が打ち出され、専従専門トレーナー・コーチの配置、原谷グラウンド諸施設の整備、練習機器の設置やコーチ招聘の援助がアメリカンフットボール部の高度化を後押しした。こうした学園スポーツ振興政策の展開と政策の具体的成果を踏まえて、大学では「総合スポーツ政策の到達点と当面する課題の政策的展開について」（一九八九年三月二十二日常任理事会）の

政策提案が承認され、一九八九年四月、課外体育委員会の下に「強化対策プロジェクト室」が設置され、一九八九年度の重点課題を、①指導者の強化 イ、監督・コーチの強化、ロ、重点パートへの専任コーチの配置、ハ、強化費によるコーチの招聘など有効な施策の展開）②科学的トレーニングの強化、③学生自身の力量向上、④スポーツ特別選抜入試の積極的展開、⑤各部の部長（専任教員）の役割の明確化と強化、⑥学生課の体育担当の業務・役割の明確化と強化とし、競技力強化に向けた課題の日常的推進を図ることとなった。

続いて一九九一年度には「強化対策プロジェクト室」の実績を踏まえ、第一、全国制覇をする課題、第二、総合的力量の基本である科学的・理論的なスポーツ論の獲得、第三、指導体制や指導の在り方についての制度を含む検討の必要性を新たな問題、課題として取り組むため、「強化対策プロジェクト室」を発展的に改組し、課外体育委員会の下に「スポーツ強化対策室」を設置して、多様な課題に常時対応できる体制がとられることとなり、各クラブの喫緊で具体的な課題解決に向けて即応性をもって対処することになった。

アメリカンフットボール部にとって喫緊の課題は、関西学院大学、京都大学に対抗できる指導体制の充実だった。一九八八年度に本学の語学講師ジェフリー・マティー氏を臨時のオフエンスラインコーチに、翌年には日本体育大学の守備選手として活躍し高校のコーチをしていた嘉原淳一氏を専門ディフェンスコーチとして招聘した。加えて一九八九年度には前年主将だった古橋由一郎氏が本学の専任職員として採用され、業務終了後ではあるが部員の指導に携わることになった。これで専従専門トレーニングコーチ

と競技を担当する専任職員ヘッドコーチの二名体制から、ディフェンス部門に専従配置の専門競技コーチ一名と専任職員一名が加わり、合計四名のコーチで日常的なコーチングを担うこととなった。オフフェンス、ディフェンス、トレーニングの三部門に役割分担して専門化が進みコーチ機能が強化された。

勝利の女神をさがして

一九八九年度にコーチ体制が強化され、本格的に二強と呼ばれる関西学院大学と京都大学への挑戦が始まった。一九九〇年にはスポーツ特別選抜入試の一期生が四年目となり期待通りの力を発揮し二強に勝利したが下位チームに取りこぼし関西制覇はならなかった。この年には、本学と関西大倉高等学校との教学提携に基づく推薦入試制度が始まり、スポーツ特別選抜入試とは別に新しい選手確保の道が広がった。

期待された一九九一年度は関西学院大学と京都大学に負け、一九九二年度は関西学院大学には勝利するが京都大学に残り二二秒で逆転を許し「毎日甲子園ボウル」を逃した。翌一九九三年度は増加する選手の指導のため専任職員だった古橋由一郎氏がコーチに専従することになり強化が図られたが、二強に行く手を阻まれてしまった。

毎年負けては涙し反省を繰り返したが、部員がもっとも美しく輝き躍動する活力に満ちた季節を迎えていた。

原谷グラウンドではリーグ戦終盤が近付くと、打倒関西学院大学や京都大学の看板が掲げられ、入り口

には試合までのカウントダウンを示す日程表を設けて集中力を高めて練習に取り組んでいた。全体がピリピリとした雰囲気の中で二強との対戦に備えていた。試合直前にはミニ合宿で夜遅くまでVTRで相手を分析し対戦に備えた。選手は修行僧のように頭を丸坊主にして一心に集中した。控え選手を中心とするダミーチームは関西学院大学のブルー、京都大学のグリーンのヘルメットやユニフォームに身を包み、本気で先発チームに挑んで緊迫感をつくり出した。

全員がどのような練習をどれだけすれば勝てるのか分からない不安と焦りの中で、相手はもっと練習している、もっともっと練習に真剣さが必要だとチームメイトを叱咤し励まし納得するまでプレーの精度に磨きをかけていった。練習内容が生ぬるいとコーチに訴える選手も出てきて、コーチと選手の殺気立った雰囲気と緊張感の中で夜遅くまで練習が続いた。それでも思うような結果が出ずに選手やコーチの苦悩が深まりプレッシャーは大きくなったが、その悔しさをエネルギーに変えながら次世代の力として濃縮され受け継がれて行った。

部員の必死の努力にも拘わらず敗戦が続いたのは筆者であるヘッドコーチの試合運びの拙さも一因である。試合に勝つためには選手の能力を高め戦術に磨きをかけ、相手を研究して適切な対策を準備し作戦を立てることに加えて、試合中の目まぐるしく変わる局面に対して冷静で的確なプレーコールで対応することが出来なければならない。

米国では既に行われていたことだが、予め予想される局面毎にプレーを細かく切り出しリスト化しスクリプトと呼ばれるゲームオペレーションシートを作成して試合に備えるのが一般的だったが、その方法が

とられていなかった。試合の準備は過去の試合分析に基づく効果的なプレーの選択と練習の積み重ねによって、熟練したプレーを何時でも正確に自由自在に使いこなす力を養成することが求められていた。強豪チームでは既に常識的だったこうした準備のできなかったことが、選手の力を十分に引き出せなかったことに繋がった。勝利の女神は学習し緻密な準備をした者だけに微笑んでくれるようだ。

原谷グラウンドの新しい問題と本拠地移転

関西学生リーグ優勝が見えるところまで来たチームは、部員の増加が続き総勢一七〇名近くになりつつあった。一九八二年度に整備された原谷グラウンドはサッカー部、ラグビー部、アメリカンフットボール部の三チームが輪番で二チームずつ共用していた。三週間に一週は練習時間帯が午後一時から四時頃となり、早番と称するこの週は授業との重なりが増え欠席者が多く、練習は限定的でチームプレーの練習はできなくなった。また、アメリカンフットボール部の百数十名の選手がオフエンスとディフェンスに分かれて練習すると、双方共にパスの練習など十分に出来ない有様だった。僅か十年間で他のクラブも同様に大型化が進み、当時の原谷グラウンドは芋の子を洗うような混雑で練習スペース確保が新たな施設問題として浮上していた。

コーチはこの問題を解決するためABCの三チームを構成し、ABチームが原谷グラウンド、Cチームが衣笠中央グラウンドで練習するなど主力チームの練習量確保を優先したが、部内では止むを得ない事情

とは理解しつつも、このやり方はすこぶる評判が悪かった。この方法はチームの高度化に向けた練習の効率化と次世代育成の課題を上手く調和させるには難しい問題を投げかけていた。

そうした状況の中、筆者が監督を拝命した一九九三年秋のリーグ戦終了と同時に学生部から、一九九四年度の滋賀県草津市の新キャンパス「びわこ・くさつキャンパス（BKＣ）」開学に合わせて練習拠点を移転してはどうかと提案を受けた。移転によって当面の課題は解消できるが、一方で遠距離移動の古くて新しい問題が浮上し、全体的な問題解決にはならなかった。衣笠キャンパスから新キャンパスへの移動は九〇分を要し、個々の交通費負担は京都駅からでも一往復一、五〇〇円程度に上がることが分かった。スクールバスの運行も予定されておらず、衣笠キャンパスに学ぶ一五四名、全体の九一・七％の部員にとって負担が大きすぎること、新入生確保と育成に大きな悪影響を与えることが懸念された。

しかし、原谷グラウンドの二倍近くの面積を持つグラウンドと新体育館には二面のアリーナとウェイトトレーニング場が整備され、試合用の天然芝フィールド一面も整備が予定され、それら施設をアメリカンフットボールが自由に使える環境が手に入ることは魅力的で、条件が整うなら移転のメリットは大きかった。地域との関係でも市民や行政機関との連携、ドクターをはじめとするメディカルスタッフや医療機関



BKCのグラウンド（1994年頃）

の協力、部員の地元交流など地域と密着した様々な活動が考えられ、京都地域では実現が難しかった社会的な広がり期待できた。何よりも全員の練習が保障され、思い切って練習できる環境が確保できる状況に逃したくなかった。総合的に見て将来的な発展や飛躍が期待できる潜在的可能性の大きい魅力あるキャンパスだと考えた。

筆者は、リスクは高いがこのチャンスをもにしたいという積極的な気持ちが強かった。コーチの間にも多少の驚きはあったが、現状を打開するきっかけとして肯定的にとらえてくれた。部員にも練習拠点の移転について説明し意見を求めた。これまでとは格段に良好な練習環境が実現するチャンスであることを伝えたが、学部移転の確定していた理工学部の部員を別にして移転に伴う負担増加に不安が広がり全般的に否定的だった。しかし、部員構成はスポーツ特別選抜入学者と関西大倉高等学校のスポーツ推薦入学者の増加によって、アメリカンフットボール経験者率は選手の五〇%を超えていたこともあり、練習環境が格段に改善されることに魅力を感じている選手も少なくなかった。

部内の意思統一は監督やコーチ、上級生の一方的な押し付けではなく、安心して活動できる組織づくりの原則に従って、部員全員が議論できるグループ編成での意見集約によって行った。関西学生リーグ制覇の目標を定めてその達成に向けた活動を柱に移転論議を活発化させた。自由な議論や意見が出せるようにコーチと主将をはじめとする幹部ミーティング、各パトリダーミーティング、学年別やグループ別のミーティングなど縦横に風通しの良い組織を使って、回生や部内役職に関係なく積極的な意見交換を促す建設的な話し合いを積み重ねた。

当初部員は移転反対の意思を示したが、大学からの強い要請と強力なバックアップの申し出を受けてさらに話し合いを進めた結果、部員はリスクをとってチャンスに賭けることを選択した。決断に大きく影響を与えたのは優勝への強い欲求と仲間の結束だった。チームの大型化に伴う原谷と衣笠の分散練習の解消と、理工学部の一四名の活動を支えたいと決めたからだ。今一步で届かぬ頂点を目指して大きなきつかけを求めたことと苦労を重ねた仲間が一つになれることを最優先に考えて新キャンパス移転を決断したのだ。

長い年月を経て形成されてきた組織が落ち着いて混乱することなく、自らの力で新たな道を選択することができたのは、アメリカンフットボールの特徴である、現状を分析して論理的に考え合理的な結論を導き出す日常の思考方法が、複雑で困難な状況においても民主的な合意形成にもとづく適切な判断を下したと考えている。

こうしてBKC移転は最小限の痛みで未来に向けて動き出すことが出来た。大学も部員の不安解消に向けて出来るだけの努力と検討を約束していただいた。経済的負担の問題も総合的な活動援助の中で対応が図られ、この年からやっと本格的な夏の合宿が可能になった。施設的にはBKC建設現場のプレハブ事務所を転用した簡易宿泊施設が設置され、遠距離移動の負担緩和が図られ、休講期や休日の練習効率を高めることになった。練習が始まる頃には広大な敷地に人影もまばらになり、キャンパス周辺には遊ぶところも無く、アメリカンフットボールに集中して打ち込むには絶好の環境だった。

変化と挑戦

一九九四年初夏にはBKCへの練習拠点移転が完了し新たな環境でチームづくりがスタートした。BKCではディフェンスとオフェンスがそれぞれ正規フィールドで練習が可能になり、ウェイトトレーニング施設も大勢の選手が一举に利用することができた。また、雨の日も体育館を活用して練習ができたので計画を大きく変更せずに準備が進められた。さらに、選手全員が一度に更衣できる更衣室、BKC建設現場施設を利用したマネージャーやアナライジングスタッフ、トレーナーの専用室も確保され、ミーティング室には対戦相手のスカウティング用VTRがセットされ、夜遅くまで相手の動きを研究したり、自らの練習を見直したりしてチームプレーの改善に役立てた。

選手確保のシステム、指導体制、施設条件は全国的に見てもハイレベルなものになったが、内部的にはキャンパス間移動の問題がずっしりと重荷になっていた。練習拠点移転に伴ってコーチは、部員の学生生活の大きな変化に対応して出来ること、出来ないことを明確にして移転メリットを生かすように考えた。キャンパス間の距離は短縮することはできないし、授業時間を変えることもできない。変えることができるのは練習時間とその内容だ。BKCのメリットは練習計画を自由に調整できるし、選手個別の自主練習は時間が自由なことだ。パート毎にグループ練習もできるし、泊り込みでVTRを見て研究も出来た。コーチは遠距離移動の負担をカバーするため練習計画の大幅な変更を実施した。休養日の増加、平日の練習時間短縮と強度の調整、休日の練習集中化、自由時間の活用等だった。

例えば疲れの出る木曜日には強度を低くする、筋力トレーニング日も毎週曜日を決めておく、金曜日の

夜に泊まり込み土・日にチーム練習を集中させるなどして全体的な練習時間を調整した。選手は出来るだけ授業の無い時間帯を利用してグループで練習を行った。特にパスオフェンスのユニットは捕球回数を増やすため二時間くらい早くグラウンドに出てコンビネーションを合わせていた。このように全体練習の時間は減少した反面、自発的な個人やグループの自主練習時間が大きく増加したことによってクォーターバック(QB)やレシーバーなどのスキル部門の精度は向上した。

アメリカンフットボール部では長い年月をかけて、部員が監督やコーチ、上級生に直接、質問や意見が言える仕組みや風土を培ってきたが、裏方を引き受けるマネージャー、アスレティックトレーナー、アナライジングスタッフ、スカウティングチームが選手と共に遠距離移動の苦勞を共有したことで、大切な仲間へのリスクと各部門の重要性の認識や人間的相互理解が深まって、リスクを克服しチャンスに変えようとする強い意志と固い団結力を持った組織を創り出した。コーチも丸山浩史コーチ、古橋由一郎コーチ(いずれも立命館職員で、古橋氏は専従コーチ)に加えて筆者もBK Cに勤務するようになり全体のコーチング時間は格段に増加した。

初優勝の思い出

新天地での一九九四年度のリーグ戦は下位チーム相手に大勝もするが危うい試合もする不安定な状況だった。これに対して優勝候補筆頭の京都大学は鉄壁の守備で他を寄せ付けず勝ち進んできた。自信満々

の京都大学に不安が一杯の立命館大学が挑む。その一戦を前に集中力を高め念入りの作戦を行うためその後恒例となる直前合宿を行った。この合宿はこれまでの戦術の確認をして不安なく試合に臨めるようにするのが目的だったが、相手は見れば見るほど大きくて力強く不安だけが増してくる。確かに相手はオフエンスもディフェンスも掛値無しに強かったので、勝てると答えを出すのが容易では無く合宿の最後まで問題は未解決に終わった。

結局、出来ることをしっかりと遣りきることだけに集中して試合に臨むことになった。QB東野稔の能力に期待すること、ペナルティーを少なくする、ギャンプルを避けて佐藤正治のキック力に託すことにした。ディフェンスの力は互角と見ていたので我慢比べを想定した。終わって見ればタッチダウンは無かったが、正確なキック力のお陰で立命館大学が下馬評を覆し一五対六で勝利した。次の関西学院大学もきわどい勝利だった。前半はリードしたが後半に猛追を受け逆転される。ここで、東野稔から芝原穰へのロングパスが見事に決まり一挙に相手ゴール前に迫り、次のプレーでしっかりと得点し再逆転で悲願のリーグ優勝を決めた。

関西制覇の次は全国制覇を目指して「第四九回毎日甲子園ボウル」に出場する。厳しい関西学生リーグを乗り越えた経験で「毎日甲子園ボウル」はリラックスして臨めた。相手の法政大学はスカウティングビデオで見たとおり驚異的な運動能力に加えて思ったよりもはるかにプレーの熟練度は高かった。立命館大学が勝るのは平均体重くらいだったが、リーグ戦で力を発揮したディフェンスを信頼していたので、相手にリードされても落ち着いてプレーできた。少し心配したのは観客のことだった。キックオフの時間が近

づいてもスタンドの入りは悪く、立命館大学の応援は来るのだろうかと不安になったのを思い出す。しかし、試合が始まる頃にはスタンドは満員になっていた。

試合は予想したとおり法政大学にリードを奪われる展開で進んだが、終盤に逆転しそのまま逃げ切った。劣勢を挽回できたのは母校の応援だった。突然スタンドが騒がしくなり、ふと見上げるとスタンドの右から左、左から右に立命館大学を応援する観客による大きなウェーブが起こっていた。声援が飛び交い全身がぞくぞくして体の中から熱いものが込み上げてきた。もっと素晴らしいプレーを見せてやるぞと力が湧いて来た。スタンドと一体になり立命館大学の新しい歴史を生み出す「学生日本一」の瞬間を迎えてこの感激を大応援団と共有できた喜びは忘れられない思い出となった。初めて出会った甲子園球場の芝生と大試合への緊張感、そして感激、こんな嬉しい経験は二度と味わえないだろうと思っている。

学生日本一の称号を持つて迎えた一九九五年一月三日の東京ドームで行われたライスポウルでは、東京にもかかわらず多くの立命館校友が応援メガホンと大歓声で迎えてくれた。相手は社会人日本一



甲子園ボール優勝 学生日本一となる (1994年12月18日)

の松下電工インパルスだった。僅差で負けてしまったが、学園の総力をあげた応援に部員もコーチも自分たちをここまで引っ張ってくれた大応援団に感謝するとともに、立命館学園の学生、生徒、教職員、校友、地域や社会の方々に対する責任の重さを認識した貴重な年となった。

常勝チームへの階段、附属高等学校チームの存在

安定した強い城づくりにはもう幾つかのブロックを積み上げる必要があった。附属校チームの存在は大学のチーム力となつて現れている。関東の日本大学、法政大学も附属高等学校で養成された選手がチームを支えている。特に関西学院大学の強さの源は中高大一貫の選手養成にあり、中学、高等学校、大学と一貫したチームづくりで高いレベルのチーム力を維持している。筆者はリクルートだけに頼らない安定した戦力を維持するために、どうしても立命館大学の附属校にチームが必要だとコーチを始めた頃から願ひ続けていた。アメリカンフットボールは難解で複雑なルールを理解すること、頑強な肉体、特殊な技術の修得、多彩で多数のフォーメーションプレーとシステムの習得と頭脳の訓練が必要であり、短期間でハイレベルの選手を育成することが難しいことから、附属校から手順を積み重ねて選手を育成する仕組みを持つことを望んでいた。

そんな時、一九九四年度に開設された立命館宇治高等学校の第一期生の入学が一九九五年度春に始まった。この機会に高大连携のチームづくりができないかと考え、大学の協力を得て立命館宇治高等学校にア

メリカンフットボール部創部の説明に伺った。文武両道を基本として燃え尽き症候群を起こさせない、スポーツの楽しさを知り信頼できる友人をつくることを目的したクラブ活動だとお伝えした。大学でプレーを続けるかどうかは本人の選択であり、安全面を重視したチームづくりをお約束して創部をお願いした。

高校では新規クラブの創部が非常に困難な状況にあったにもかかわらず、生徒の学校生活の安定が重要とまった。最初の顧問の先生は、アメリカンフットボールにはこだわらず、生徒の学校生活の安定が重要と考え、クラブを活性化させるため部員を集めること、活動の安全と安心を築くこと、興味の継続を図ること、意欲を持たせることを担っていただけ、むしろ生徒の親が安心する学習援助と規律を教えていただける先生を検討いただいた。その年、西川隆史教諭と山口宗信教諭を顧問に迎え、お二人の熱心な新入生の募集によって一学年で一〇人以上が集まった。練習指導を担ったパンサーズの学生コーチ陣は安全性に配慮し、生徒に興味を持たせて楽しく取り組ませたこと、気軽に話せる監督やコーチの存在によって既存のクラブとは少し異なる雰囲気クラブが出現し多くの新入生が定着した。

続いて、北海道にも新しく立命館大学慶祥高等学校（二〇〇〇年の中学校の開校時に立命館慶祥高等学校と校名変更）の設置が決まり、一九九六年度には北海道札幌市に出かけて地元の大学チームの指導者と意見交換し、立命館大学慶祥高等学校のアメリカンフットボール部創部への協力を働きかけた。競技の経験者で地元の企業にお勤めだった中川善之氏（現立命館慶祥高等学校教諭）、白濱伸一氏らにコーチを承諾いただき、北海道にも新しい附属校チームが誕生した。

今では、立命館宇治高等学校は後に就任した丸山浩史監督の指導で関西の強豪校に成長し、立命館慶祥

高等学校卒業生は大学チームの重要なポジションを担う選手や学生スタッフを輩出している。スポーツ特別選抜入試、関西大倉高等学校推薦入学に加え、二つの附属校の誕生によって、未経験者を育てて訓練するチームづくりの仕組みから優秀な経験者を中心に高度な技術力を駆使するハイレベルなチームづくりへと徐々に変貌していく。附属校一期生の大学入学は一九九八年度から本格化する。

三強時代

学生日本一を達成した翌年から筆者も専任職員としてアメリカンフットボール部のコーチに専従することになり、チームの指導体制は専任職員専従者二名と専門コーチ一名の三名が携わることになり、サンデーコーチを含めてオフエンス二名、ディフェンス二名となつて体制が整えられてきた。

BKCは二年目に入り部員のキャンパス間移動という学生生活も厳しいなりに定着して来た。全体の練習時間は減少したが選手の自主練習とコーチによる計画的で内容の濃い練習が必然的に実現した。

この年のリーグ最終戦は、阪急西宮球場で京都大学と全勝同士の頂上決戦となった。三万人を超す大観衆が詰め掛け、フィールドから上を見上げると天空から歓声が降って来た。両チーム共、ディフェンスが強力で勝負は最後まで分からぬ展開になった。三対七で迎えた第四クォーター、QB東野稔が自陣ゴール前四ヤードから残り時間一分四〇秒から反撃を開始して、残り四一秒で相手のゴール前四ヤードまで迫った。その後の四回の攻撃がゴールを割ることが出来ず時間切れ敗戦となった。全く互角の展開だっただけ

に惜しい試合を逃した。

翌一九九六年度は関西学院大学が京都大学に勝利、京都大学は立命館大学に勝利、立命館大学は関西学院大学に勝って三校同率優勝となった。毎日甲子園ボウル出場をかけた史上初の三つ巴のプレーオフトーナメントに突入した。籤引きで立命館大学は関西学院大学と対戦後、京都大学とあたることとなった。関西学院大学戦はリーグ最終戦で負傷したQB東野稔に代わって大橋正宣がスターターとして登場し、素晴らしい活躍を見せて関西学院大学を一七対三で下す。続く京都大学には六対二四で敗れ、二年連続で全国優勝の道が断たれた。

一九九七年度は京都大学に雪辱したが、関西学院大学に七対一六で敗れて全国には届かなかった。目標としてきた二強に追いつき追い越すところに辿りついたが、抜き去る迄には至らなかった。次に目指すのは、二強の模倣ではなく立命館大学のオリジナルを追求し日本のアメリカンフットボール界の先頭に躍り出る挑戦の時代に移っていく。その新しい発想を与えてくれたのは、一九九五年度から出場した米国人コーチとの深いつながりを生み出す「平成ボウル」だった。

平成ボウルと米国人コーチ

「平成ボウル」とは一九九〇年に開始された春のボウルゲームの名称である。この試合は関西学生リーグの前年上位二校が米国の実力二校から招待した各二名のコーチと八名の選手がそれぞれ日本チームに加

わり対戦する。来日するコーチは全米でも実力ある指導者でアメリカンフットボールの最先端の技術や知識を導入し日本チームを指導する。日本人コーチは事前に渡米して相手コーチを訪問し意見交換する。その際、アメリカにおける最新の知識や戦術、選手育成方法の新しいアイディアを学ぶことが多かった。平成ボウルに出場することで、年々変化する米国の先進的な技術や知識、練習方法の変化を吸収し出場したチームの日本人コーチの質的向上に直結した。

この経験から関西学生リーグ上位二チームが優位性を維持してきた一因を垣間見た。この平成ボウルの経験によって、選手も米国流のコーチング手法を知り米国人選手の各段に違う体格、筋力、技術に接することで、グローバル水準の高い目標設定に向けた大きな動機付けとなった。その後、米国のプロリーグNFL (National Football League) の下部組織であるNFLヨーロッパリーグに参戦する選手が出てくるきっかけにもなった。

BKC新展開と米国人コーチ

一九九八年度はパンサーズにとって一九九四年以来の大きな変化の年となった。

一つ目は経済学部と経営学部がBKCに移転し、部員のキャンパス間移動の問題は大幅に解消に向かうことになったことであり、二つ目はディフェンスコーチに米国人コーチの招聘を決めたことである。

大学では学生部に付置された「スポーツ強化対策室」が発展的に改組され、全学機関として「スポーツ

強化センター」の設置が決定され、大衆化と高度化に加えて全国制覇、世界水準の選手輩出を目指す高度な取り組みの支援をスタートした。スポーツ強化センターは全国制覇を達成する対策の中で、短期的な外国人のスペシャルコーチの積極的活用を提案しており、我々はこの提案を受けてすぐさま行動に移った。

アメリカンフットボール部の積年の課題は攻撃力特にパスアタックとその中心となるQBの育成が最優先事項だった。早速米国に渡りQBコーチでオフENSEコーディネーターのできる人材を求めたが、QBコーチは米国でも需要が高く日本でのキャリアを求める人材を見つけ出すことは難しかった。

次に、米国の有力大学で行われているチームづくりの手法を日本で指導できる新たな人材を求めた。そこで紹介されたのがニール・カズマイアーザック氏だった。彼は米国でプロコーチになることを目指してスタンフォード大学でコーチ補助をしていた。彼のコーチング能力の判断は日本の大学事情に精通したスタンフォード大学のコーチの推薦を得て決定した。当時のパンサーズディフェンスは古橋ディフェンス・コーディネーターの指導で高い実績を上げていたが、年間を通した米国方式のチームづくりと米国人コーチのノウハウを学習したいと考え、カズマイアーザックを一年のディフェンス・コーディネーターとして招聘した。

この起用によって、我々のコーチングに新たな気づきやアイデアを提供してもらい、チーム力強化に役立つコーチングスタッフの質的向上に繋がることを期待した。その中で、戦術や技術理論以上に筆者に気づきを与えてくれたのは、チームづくりの計画性と安定性を維持することについてである。これまでは筆者の都合や練習の進捗によって日程調整し予定を変更することがあったが、彼は日程変更を極力避ける

ことを主張した。年間スケジュールを確定することで、選手やコーチの生活の計画性が高まり、学校生活や私生活が安定し安心して活動や仕事に打ち込むことが出来る。コーチが家庭生活の充実によって、いつもフレッシュな気持ちで意欲的に仕事に取り組める環境をつくることも監督の重要な仕事であると認識した。当初やや危ぶんだ戦術や技術の導入も彼の計画した一定の訓練を重ねることで可能になり効果が発揮されることになった。その他にもスポーツ指導者をめぐる米国の訴訟問題や、リスクを回避する対策をアドバイスしてくれたこともあった。カズマイアーザックコーチの加入でこれまでの実績と新たなアイディアの融合によって強力なディフェンスが構築された。

その結果、それまで必ずしも強いと考えられていなかったチームだった立命館大学が、関西学生リーグで優勝し、「第五三回毎日甲子園ボウル」（一九九八年）でも法政大学を破り、四年ぶり二度目の学生日本一となった。平成ボウルの経験もあってカズマイアーザックコーチとのコミュニケーションがスムーズに行われ、コーチや選手に何の戸惑いも生じさせなかったことも、米国人コーチの招聘が最高の結果を生み出した要因の一つであったと考えている。

続いて行われた全日本選手権「ライスボウル」はリクルート・シーガルズに体格、スピード、戦術で圧倒された。しかし、完敗したことでパンサーズが目標とするレベルが明確になり課題が明らかになった。立命館大学パンサーズは社会人チームを圧倒する高い能力を持つワンランク上のアメリカンフットボールを目指して新たな基準を定めた。

戦術の近代化に向けて

新たな目標の設定は強力な攻撃力の獲得が課題となった。とりわけパスオフENSEスの向上を目指して一九九九年シーズンを開始した。オフENSE戦術の柱をランからパスへシフトし、試合中もランとパスの使用比率を計算しながら攻撃を展開した。この戦術は下位チームには通用したが、俄か仕立てが通用するほど関西学院大学は甘くなかった。それでもワンランク上のチームを目指して新たにスタートした以上、古い殻を脱皮するまでは引き返せないと決めていた。

オフENSEシステムの大改革を目指しているチームに、折りしもスポーツ強化センターからコーチの長期米国派遣の提案があり、二〇〇〇年度には専任職員だった橋詰功コーチをオクラホマ大学「スーナーズ(Sooners)」に派遣することが決まった。長田豊臣総長からのオクラホマ大学への支援要請によって受け入れ態勢も整い、「スーナーズ」に密着して練習から試合までの一貫した取り組みを間近で学習することが可能となった。橋詰功コーチが不在中は、インターネットでオクラホマから送られてくる情報をやり取りして、新しいシステムやフォーメーションを導入しながらチームづくりを進めたが、詳細を知ることには困難で完成度の低いままリーグ戦に突入した。結果は七年ぶりに三位となってしまう。一方、米国ではオクラホマ大学「スーナーズ」がショットガンフォーメーションからの多彩なオフENSEと鉄壁のディフェンスで二〇〇〇年度全米チャンピオンに輝いた。橋詰功コーチは最高の舞台で最新のトレンドを学ぶ

ことが出来た。

二〇〇一年春、橋詰功コーチが帰国して念願の新たなオフENSEシステム構築に向けたステップがスタートした。オクラホマ型のオフENSEは今までのパンサーズオフENSEをひっくり返すような改革となった。パスオフENSEのみに特化した練習内容は選手だけでなくオフENSEコーチも驚かされた。練習の六〇％はパスが占め、ランプレーに慣れ親しんだ筆者や米倉輝オフENSEラインコーチには不安な日々が続くことになった。

しかし、このオフENSEの本質は、パス主体のスプレッド隊形で相手のディフェンスを広げることで、ランプレーの威力も最大限に引き出す点にある。強力なパスオフENSEであると同時に、ランプレーでもロングゲインを連発させることができるところにこのオフENSEの強みがある。

天地をひっくり返すような改革が実行できたのは、自らの弱点を知り尽くして、今変わらなければ後がないと切羽詰まった気持ちが強かったことと、変革には痛みはつきものだと考えて覚悟を決めたからだ。この年も関西学院大学に負けて甲子園ボウルに出場することはできなかったが、はつきりと過去とは違うハイパワーなチームが出現しつつあることを確信させた。

ツールを手に入れ、ようやく日本の頂点を極める近代的なチームの完成を迎えようとしていた。翌年には米倉輝コーチをオクラホマ大学「スーナーズ」に派遣しオフENSEラインの技術を補強して万全を図った。こうして新たに導入したリッツ・ガンと呼ばれる戦術は全国を席卷することとなった。鉄壁のディフェンスと共に。

エピソード

一九七〇年、初めは僅かな経験と勘を頼りに、私たちは大海を目指して急流に船を浮かべた。

最初の一〇年は、転覆しそうになりながら激流を流されるように進んだ。

次の一〇年は大学の援助に支えられ、高性能の船を手に入れて道程を加速したが、その性能に知識と技術がついていかない時代だった。

続く一〇年は新天地を目指す大海原のレースになってくる。試行錯誤の末にやっと学生日本一に辿りついたが、一瞬の油断や隙が勝敗を左右する厳しい戦いに苦戦は続いた。

やがて、追いつけ追い越せの時代から独自の戦略や戦術を確立する最先端に向かって舵を切ることになった。

創部以来、チームは幾度かの大きな変化を伴って規模も実力も飛躍的な発展を遂げたが、いつの時代にもその原動力となったのは部を構成する学生の力だった。自ら強くなりたいと望み、自発的に練習に取



1993年度パンサーズ — 中央が平井英嗣監督（当時）

り組む姿勢と学生生活を柱に据えた自律的な組織運営力が幾多の困難を克服しチームの自己変革と成長を進めてきた。

現在は指導体制が充実し綿密な準備と緻密な計画によってチームづくりが行われているが、船を操り荒波を乗り越え新しい時代を築いてゆくのは、進める情熱に支えられた部員の学生力だと信じている。

今後もし非その無限の力を發揮して文武両道を貫き、安心して活動のできる民主的な組織を構築し、世界を視野に入れた日本一の目標と人格陶冶の目的を達成して欲しいと願っている。

筆者は多くの尊敬する仲間恵まれ、立命館大学体育会アメリカンフットボール部の発展に少しでも貢献できたことを大きな幸運だったと考えている。未熟なマネジメントで多くの方々に大変ご迷惑をおかけしたにもかかわらず、いつも情熱を持って献身的にチームづくりに邁進していただいたコーチの皆様から感謝申し上げます。

また、いつの時代にも変わらぬご援助をいただいた立命館学園の皆様御礼申し上げます。また、筆者のコーチ人生を三〇年余にわたって支えていただき、今もご尽力いただいている仁ノ岡登総監督の功績に敬意を表するとともに衷心より感謝申し上げます。

最後に、この度、筆者の拙い経験にもかかわらず、立命館大学体育会アメリカンフットボール部の取り組みについて執筆の機会を与えていただいた百年史編纂室の皆様厚く御礼申し上げます。

【注】

(1) コーチ

文中におけるコーチは監督、ヘッドコーチ、ヘッドコーチの指示を受けて専門分野の競技指導を行うコーチをすべてを含む競技指導者およびその仕事を示している。

(2) ダウン方式

アメリカンフットボールではボールとサイドラインまでの仮想領域（ニュートラルゾーン）を挟んで攻撃と守備それぞれ一人が対峙して試合が展開される。攻撃側は四回の攻撃で一〇ヤード前進すればさらにもう一度四回の攻撃権が与えられる。これを繰り返して相手陣地にボールを持ち込めば得点が与えられ、得点の多い方が勝者となる。一回のダウン（攻撃）はセンターのスナックから始まり、ボールを持ったプレーヤーの両足の裏と手のひら以外の体の一部が地面に触れた瞬間（ボールデッドと呼ぶ）に終わる。次のダウンはボールデッドの地点から新たにボールをセットして再びスナックから開始される。ダウンとダウンの間には審判の許可を得ずに選手の交代を行うことができる。

(3) プレーオフ

公式リーグ戦終了後、同順位のチームが複数となった場合等、リーグ内の順位を確定させるためにリーグ戦とは別に行う試合のこと。

【参考資料】

『立命館大学アメリカンフットボール部創部五十周年記念誌』（立命館大学アメリカンフットボール部OB会、二〇〇三年）

『堂々たる前進 日本アメリカンフットボール協会六十年史』（日本アメリカンフットボール協会、一九九五年）

『毎日甲子園ボウル五十年史』（毎日新聞社、日本学生アメリカンフットボール協会、一九九六年）

『体育会の歩み』第一集、第五集（立命館大学体育会）

『全学協議会確認事項等資料集』（立命館大学百年史編纂室編、二〇〇五年）

『立命館大学トレーナー会報』創刊号、第三号、第四号（立命館大学トレーナー会）

日本アメリカンフットボール協会ホームページ

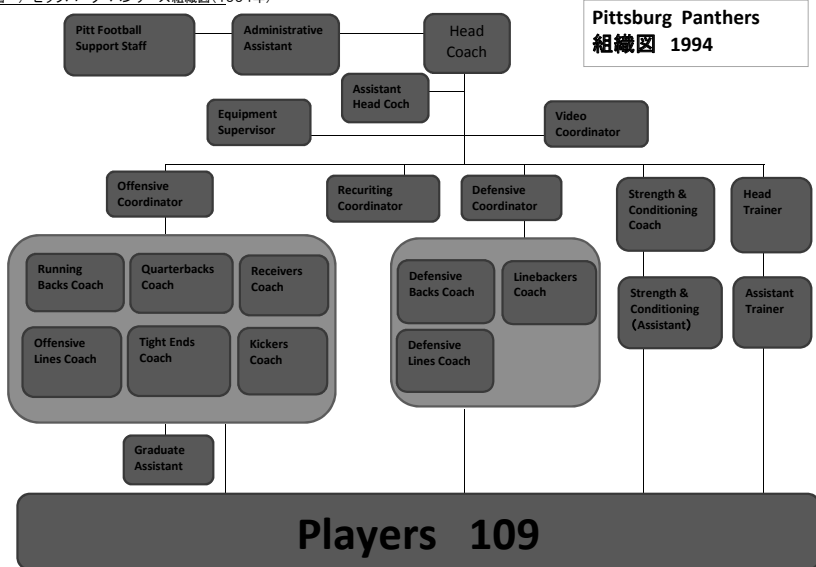
「参考図表」

（図一）ピッツバーゲ パンサーズ組織図（一九九四年）

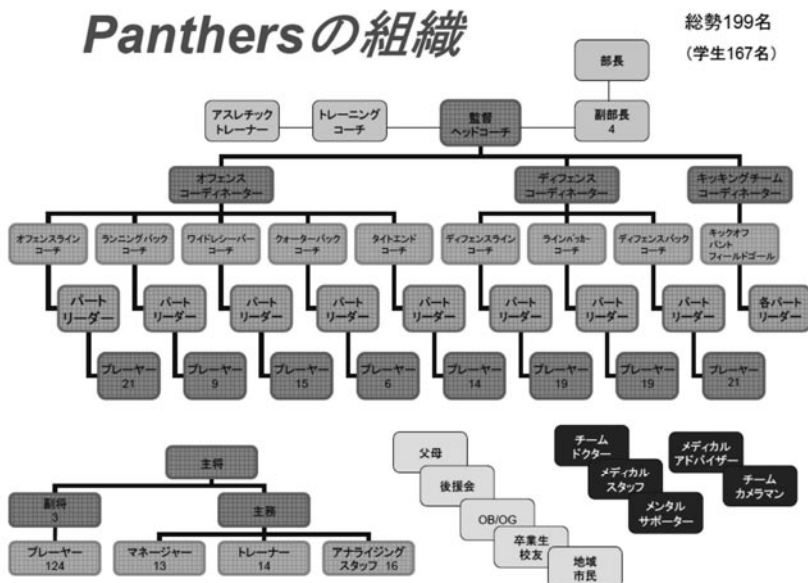
（図二）立命館大学パンサーズ組織図（二〇〇〇年度）

（図三）立命館大学アメリカンフットボール部 部員数推移表（一九六六～二〇〇二）

(図一) ピッツパーク パンサーズ組織図(1994年)



(図二) 立命館大学パンサーズ 組織図(2000年度)



(図三) 立命館大学アメリカンフットボール部 部員数推移表(1966～2001)

年度	体育会登録者数		連盟登録者数		選手の回生内訳					スポンツ特別選抜入試等による入学者内訳				スタッフ数		リーグ戦績				
	全体	A/F内数	部員数	選手数	4回生	3回生	2回生	1回生	A/F3方式合計	スポン選AF	関西大倉AF	付属校AF	合計	男子	女子					
1966	1,237	34	20	19	4	4	3	8	入学者	累計	入学者	累積	入学者	累積	1	1	0	D1 6		
1967	1,202	23	22	21	5	3	5	8							1	1	0	5		
1968	1,229	21	18	17	3	6	5	3							1	1	0	5		
1969	1,098	24	23	23	6	3	2	12							0	0	0	5		
1970	978	21	19	19	3	1	5	10							0	1	0	8		
1971	記録なし		18	17	1	6	2	8							1	1	0	D1 1		
1972	948	27	23	22	6	3	4	9							1	1	0			
1973	938	22	24	22	3	6	4	9							2	0	2			
1974	1,048	31	29	27	6	4	8	9							2	0	2			
1975	1,115	31	31	29	4	8	9	8							2	0	2			
1976	1,213	26	31	28	7	5	7	9							3	0	3			
1977	1,233	32	36	32	5	5	5	17							4	1	3			
1978	1,274	42	37	36	4	4	12	16							1	0	4	D1 1		
1979	1,375	44	44	40	4	12	10	14							4	0	4	D1 8		
1980	1,248	51	56	53	12	9	12	20							3	0	3	D1 6		
1981	1,249	53	55	50	8	10	17	15							5	1	4	7		
1982	1,343	61	56	52	9	15	13	15							4	1	3	D1 1		
1983	1,382	75	79	75	15	11	12	37							4	0	4	D1 8		
1984	1,294	75	75	71	11	11	26	23							4	0	4	6		
1985	1,294	81	85	81	10	21	19	31							4	0	4	2		
1986	1,286	112	109	102	19	17	26	40							7	1	6	4		
1987	1,414	115	111	102	19	20	23	40	7	7	7	7	7	7	9	3	6	5		
1988	1,678	140	112	102	19	24	32	27	6	13	6	13	6	13	10	2	8	2		
1989	1,623	150	146	136	21	30	35	50	6	19	6	19	6	19	10	2	8	3		
1990	1,786	167	160	146	25	32	36	53	12	31	9	28	3	3	14	6	8	2		
1991	1,819	169	170	155	33	32	43	47	15	39	10	31	5	2	15	5	10	3		
1992	1,932	188	178	152	28	37	31	56	22	55	10	35	12	20	26	16	10	2		
1993	2,093	151	173	150	37	28	47	38	15	64	10	39	5	25	23	14	9	3		
1994	1,961	163	168	145	27	37	31	50	14	66	11	41	3	25	24	9	14	1		
1995	2,119	170	175	141	36	24	36	45	17	68	11	42	6	26	34	15	19	2		
1996	1,888	149	152	124	20	30	35	39	17	63	12	44	5	19	28	13	15	同輩 1		
1997	1,763	169	182	141	27	27	34	53	17	65	9	43	7	21	1	41	16	25	2	
1998	1,687	188	187	146	31	34	35	46	22	73	11	43	8	26	3	4	17	24	1	
1999	1,641	176	173	136	28	35	33	40	23	79	11	43	4	24	8	12	37	13	24	2
2000	1,682	171	167	127	31	29	33	34	24	86	11	42	4	23	9	21	40	14	26	3
2001	1,640	151	154	115	26	28	31	30	24	93	14	47	2	18	8	28	39	14	25	2

(注) 表内 AF はアメリカンフットボール部の略
注) 表内 リーグ戦績 DIはDivision1(Ⅰ部リーグ)、DⅡはDivision2(Ⅱ部リーグ)を示す。

「百年史編纂を振り返って」——歴代編纂室課長の随想——

『立命館百年史』は、執筆者の方々のみならず、史資料提供や種々のアドバイスをいただいた多くの人々の協力によって発刊されている。

また、史資料の収集・選別・分類・保存を行い、各巻の構成案編成から執筆者への依頼・校正、印刷会社との諸交渉に関わった百年史編纂室教職員も重要な担い手である。

本紀要では、『立命館百年史』の完成を期して、立命館百年史編纂の実務の責任者であつた歴代の課長に在任当時を振り返っていただいた。

執筆は、その時々々の史資料収集や編纂過程のエピソードで綴られている。

『立命館百年史』のサイドストーリーとしてご覧いただきたい。

なお、本文中には百年史編纂室の将来像として「総合資料センター」の設置にかかわる記述がある。この将来像は、二〇一二年一月七日常任理事会において「立命館 史資料センター（仮称）」の設置について」として承認され実現することとなった。承認文書は本紀要に全文掲載しているので、合わせてご参照いただきたい。

課長在任期間と主な発刊物は次の通りである。（詳細は文末略年表参照）

一九九一年五月 百年史編纂室 設置

一九九二年一月一日～一九九五年三月三十一日 西岡成幸

一九九三年三月 『立命館百年史資料集 第一集』

一九九三年十二月 『立命館百年史資料集 第二集』

一九九六年四月一日～一九九八年一〇月三十一日 西川 賢

一九九八年一月一日～二〇〇〇年三月三十一日 伊藤 昇（次長兼務）

一九九九年三月 『立命館百年史 通史一』

二〇〇〇年一〇月 『立命館百年史 資料編一』

二〇〇〇年四月一日～二〇〇二年三月三十一日 橋本弘之

二〇〇二年四月一日～二〇〇六年三月三十一日 （課長欠員）

二〇〇六年三月 『立命館百年史 通史二』

二〇〇六年四月一日～二〇一〇年一〇月三十一日 齋藤 重

二〇〇七年七月 『立命館百年史 資料編二』

二〇一〇年十一月一日～

佐々木 雅美

百年史に想うこと

西岡 成幸

課長在任期間 一九九二年一月一日～一九九五年三月三十一日

はじめに



百年史の仕事に携わることになったのは、一九九二年一月のことであった。百年史編纂室は九一年五月に正式に設置されていたが、以前からあった館史編纂室を継承するものであった。館史編纂室といっても総務課の一係のような存在で業務は嘱託職員で進められていた。百年史編纂室が設置されてはじめて正職員が配置されており、この時点では史資料（以下、史料も含めて資料という）の新たな収集と収集されたものの整理作業が主な仕事になっていた。このたびは資料とその保存ということにかかわって想っていたことにふれてみたいと思う。

『五十年史』に関して

『百年史』に関して書くまえにひとこと『五十年史』の資料についてふれておきたい。筆者が立命館中学二年生か三年生のとき、一九四九年か一九五〇年であったと思う。教室で担任の先生から立命館の『五十年史』を創るために資料を集めたいので、昔の立命館の刊行した新聞や雑誌その他立命館に関係したものを各自の家庭で持っていたら寄付ないし協力してほしい旨の依頼があったことを憶えている。終戦時の混乱に際して消却したり紛失したりして残っている資料はかなり不充分であつたらしい。

『立命館創立五十年史』（一九五三年刊）の執筆については、当時文学部教授であられた奈良本辰也氏、林屋辰三郎氏の監修のもと当時立命館高等学校で社会科を教えておられた前島省三氏が委嘱されてその仕事に専念されたようである。今回の『百年史』のように多数のかたがたに依頼して手分けして執筆するという編纂ではなかったようである。問題は『五十年史』完成後の資料の処置である。『五十年史』執筆のために使用された資料が完成後何処の部署に返されて保管されていたのかがよく判らない。推測ではあるがこの発行者は「立命館大学五十周年記念事業局」となっているので多分とりあえずはここであろうと考えられるが、ここは記念事業が済めば解散している。その後はどこが預かって保管していたのかもはっきりしない。図書館でも預かった形跡はない。このたび『百年史』をつくることになって、どこから引き継いだ資料があつたとかの話も聞いたことがない。このような資料は使い捨てにするような性質のもので

はないのであるが、今となつては調べようもない。いずれかの部署にたまたま残っていたものをよくわからないままに引き継いでいるかもしれないのであるが、『百年史』の事業が完成の暁にはこのようなことがないようにと願うばかりである。

百年史編纂に向けて

したがって、今回『百年史』をつくるにあたっては館史編纂室の嘱託職員として元立命館中・高等学校の校長であられた上田勝彦氏が資料集めを一応ゼロないしはそれに近いところからスタートされたといえる。自分とアルバイトで大学の各部署にどんな資料があるのか、移管可能なものか、複製しなければならぬものかという調査からはじめられた。筆者は当時大学図書館に在籍していてその調査に対応したのでよく覚えている。上田氏の退職後そのあとを継がれたのは元総務部長であられた金井直彦氏であり、元教育学部次長であられた崩場弘氏も加わられて二人で資料の収集と、後述する『立命館八十五年史資料集』の作成に取り組まれたのであった。

百年史編纂室が独立したひとつの課となつて出発したことは非常に好ましいことであつた。その創立が立命館と前後するような歴史をもつ学園は大なり小なり学園史を専ら取り扱う部課をもっていたから、このような部課を持たなかつた立命館は、学園にかかわる資料が出てくると図書館に預けたり、自分の職掌のところで保管していたり、専門の係がいらないから忘れられたりないがしろの扱いを受けていた資料も

あったりしたであろうと思われる。図書館経験の長かった筆者はそのような部課の設置を常々希望していたのでうれしかった。

資料の収集と二次的資料

資料といっても原資料と利用しやすいように整理された二次的な資料とがある。原資料は史実を証明するうえで最も大切な資料であることは言うまでもないことであるが、すべての資料が即利用可能というわけにはなかなかいかないのが現実である。たとえば毛筆の古文書やそれに類する文書類はできれば活字化しておくと作業はすすみやすいし、またたとえば人事関係記録のように複数の簿冊に別れて書き込まれているような事項は原資料にもとづいて整理しておくことが好ましい。このように整理された二次的資料も大切な資料となるものである。百年史編纂室ではそういった意味で二次的資料の作成にも力を入れたつもりである。『立命館百年史紀要』に掲載した課職員の執筆はそれらを具現化したものであり、執筆担当者のお役に立てていただこうとしたものである。

金井・崩場両氏がおられたころ、特筆しておきたい大きな仕事をなさっているのを思い出す。それは『立命館八十五年史略年表』（一九八五年刊）と『立命館八十五年史資料集（一一八）』（一九八六—一九九〇年刊）の作成である。『百年史』通史編第一・二巻では大いに役立った資料であるが、後者は学園の学制・組織・財政・課題と施策の基本的な資料を整理されているほか、『京都新聞』の記事中、立命

館に関わりのある記事を大学図書館所蔵のマイクロフィルムから抜き出して編集したものもある。これは量が多いから実に根気のいる仕事で、金井氏が担当されていたようである。金井氏は当時図書館にあった特別閲覧室に閉じこもって毎日毎日アルバイトの女性と交替で頑張っておられた。筆者はよく記憶しているところである。資料の収集や作成というものはやる気と根気が必要なことを如実に示している見本であると感じている。

資料の整理と保存

資料の保存という観点からいまひとつ危惧しているのは、文書規程があるのにまったく無視するか、または全くそのような意識がなくて資料を処分してしまうことである。筆者の経験からいうと就職課に再度赴任したとき、若い頃自分が整理しておいた資料が無くなっているの聞いてみたところ、広小路学舎から衣笠学舎への移転の際に廃棄したものであるのどその中に混じってしまったものと考えられるとのことであった。お陰で「百年史」編纂に関わって就職に関する草稿を執筆するときは代替資料を探すのに少々苦労させられたことを思い出すのである。

すべてがこのようなことでは決してなかったことも記しておく、たとえば経済学部事務室では『兵役者名簿』や『戦死者・殉難職員学生生徒名簿』その他貴重な書類が残されていたし、理工学部事務室でも『昭和十九年督学報告』や『日満高工庶務雑綴』などのほかにも貴重な資料が結構残されていたのである。

各部課で現在使用されている資料は日に日に過去のものになってゆくが、残すべきものと廃棄してもよいものとはつきりさせ、残すものは整理して保管することが大切であることを認識しておいて欲しいものである。

百年史の執務室のこと——おわりにかえて

百年史編纂室の執務室に関して資料ともかわって少し思うことを述べてみたい。このことについてはその前史の館史編纂室からつづくものである。前述のごとく最初は上田勝彦氏がアルバイトを助手に学内を巡回しておられたことは述べたが、いまから思えば上田氏とアルバイトは調査を終えても自分の執務する定まった部室はなかった。あるにはあったが極々短期間である時は会議室、ある時は別の場所を転々としながら仕事を続けられていた。そしてそれは上田氏の後任になられた金井氏や崩場氏の代でも続いた。会議室の仮住まいであった。敬学館（衣笠学舎東端の木造二階建買上げ民家、現在のアトリサーチセンタ―の場所）に来てやっと落ち着いたかに見えた。新たに課として設置された「百年史編纂室」は、ここで「館史編纂室」を引き継ぐかたちでスタートしたのであった。

しかしながら、この頃になると収集された資料も全部書架に並べておくことはできなくなってきたおり、元々民家であるため狭隘さと床の耐久性が心配な状況になっていた。当時丁度空室状態であった「平野会館」へ移転した。平野会館の一階のフロアを主に使って執務室と資料室を整備することができたまでは良

かったのであるが、一九九三年に設立された㈱クレオテックがここを本社として本格的に活動することになって、落ち着く間もなくまた移転を余儀なくされた。修学館の空き研究室へ仮住居して「末川記念会館」へやっと落ち着いたのである。ここが終の住み家と思っていたが、筆者が退職後また「西園寺記念館」へ移転した。果たしてここが終の住み家になるのだろうか。

『百年史』は未だ完成していない中で、途中で度々の移転業務もこなさなければならないのは辛いことである。そのときどきに事情があつて止むを得ないとも言えるのであるが、それにしてもよく替わった。場所を替わるたびに資料の置場も変わる。慣れるまで要領も悪いし、資料の紛失の危険性も多分にある。できれば不動の部室が欲しいものである。

立命館が未来に向けてつづく限り今後も折々に「年史」というものは創られるであろうと考えるが、その時に必要な資料がなければ困ることは自明のことである。過去の資料を大切に保管し、将来に役立つ資料は常日頃から収集をつづけなければならないと想っているものである。

編纂室勤務をふりかえって

西川 賢

課長在任期間 一九九六年四月一日～一九九八年一〇月三十一日

編纂室勤務一七年



『立命館百年史』通史の最終巻である『第三巻』がいよいよ発刊されるとお聞きして感慨もひとしおです。百年史編纂事業につながる「館史」編纂委員会と同編纂室が発足したのは一九八一年でした（『紀要』第一号・一九九三年三月「立命館年史編纂のとりくみ経過」参照）。それから数えると約三〇年、「百年史」編纂委員会と同編纂室になってからでもすでに二〇年余が過ぎました。

百年史編纂室発足当時は、その一〇年後の創立百周年にあたる二〇〇〇年の完結を目指したのですが、倍以上の年月を要したことになります。年史編纂の難し

さを示すものといえましようが、膨大な手間と経費をかけたこの事業の成果は必ずや次代に生かしていただけのものと思います。

『通史』の最終巻刊行にあたって、編纂にかかわってきた者として「随想」を書くようにとのご指示を編纂室長からいただきました。筆者は一九五七年四月立命館に就職、学部事務室や教学部などを経て、一九九一年四月末に「館史編纂室」のあとを受けて新発足した「百年史編纂室」に配属されました。最初は木造の「敬学館」（現在のアート・リサーチセンターの場所にあった買上げ民家）二階のただ一人の職場でした。以後、定年まで八年（課長の期間は二年半）、契約職員として六年（非常勤の期間を含む）、さらにアルバイト（非常勤）で三年、通算すると一七年も編纂室の業務にかかわったことになります。この間、史資料の収集・整理とともに、『通史』第一巻・第二巻、とそれぞれの巻に対応する『資料編』一・二の編纂にも直接関わらせていただきました。長い期間でしたので、あれこれと思い起こすことは多いのですが、かえって本稿の焦点を定めることができます。業務の経過を振り返りつつ、思いつくままに多少の感想も述べてみたいと思います。

実は、二〇〇二年三月発行の本『紀要』第十号に筆者の拙文「百年史編纂室 この十年」で、それまでの編纂室の経過についての大まかな記録や感想を掲載させていただいています。強く印象に残っていることは今も変わりませんので、この記事と内容が重複することをお許し願いたい。

史資料のこと

史資料の収集・整理等のことについては、『紀要』第十号でも述べていますが、言うまでもなく編纂室勤務の始めから終いまでの中心業務のひとつでしたから、再度触れざるを得ません。

『立命館創立五十年史』執筆の際の史資料はその所在がわからなくなっていたため、史資料の収集・整理は一から始める必要がありました。「館史編纂室」（百年史編纂室の前身）発足当初は、各課にある史資料のタイトルを検索するカードの作成がなされたようです。この時期、編纂室には史資料を保管する場所がないため、現物収集は見送られたものと思われます。ところが、検索カードに記された各課の現物史資料は、保存措置がなされていないため、それぞれの所管の判断で廃棄や移動が行われるという状態でした。ですから、次期の館史編纂室では、印刷冊子のかたちにした『八十五年史資料集』の作成に力を入れたものかと思います。この『資料集』と、同時に取り組まれた『立命館八十五年史略年表』は、その後の百年史通史一・二巻の執筆作業に大いに役立ちました。

筆者が着任した時は、集められたいくらかの現物史資料があったのですが、その保管場所が転々としていて、いまだどこにあるのか分からないというような状態でした。一定のスペースのある平野会館に移ってからの第一の仕事は、現物史資料を集めることでした。「戦前の非現用資料」、「『大学紛争』時までの非現用資料」の二回に分けて編纂室への移管を全学に呼びかけました。これは規程等による拘束力のあるものではありませんので、呼びかけに対する各課の反応や対応はまちまちでした。それは各課・各人の学園史についての認識のありようと関わっているように思われました。編纂室としては、全学の『学園史マ

インド”を高め、協力を得ることも必要でした。それぞれの史資料収集を振り返ると、その一コマ一コマに思い入れがあり、今は思い出となつて蘇ってきます。

これは「物資料」に関する些細な一コマですが、ある時、学生課より体育会クラブの優勝杯などの一部を移管したいとの連絡がありました。現場へ行ってみると、女子学生数人がダンボール箱に無造作に突っ込まれた優勝杯や盾などをせっせと解体しているではありませんか。移管のためのダンボール箱への荷造りをすべきところを「処分」と間違つたものでしょう。誰も疑問をもたないまま作業が始められていたのです。

衣笠グラウンド地下倉庫には様々な“ガラクタ”が一時保管されていたことがよくありましたが、そのなかに体育会クラブの「○○部」という木製の看板が見えました。伝統あるクラブが廃部となつて、ボックスを整理し、廃棄される物のなかにありました。史料として意味あるものと思い看板は編纂室に保管することにしました。学園史資料として見なければ、優勝杯も単なるプラスチックの塊、看板は古い板切れにすぎないのかも知れません。

理工学部に移転の際、おそらく史料として貴重な古い実験用具などがたくさんあったのではないかと思われませんが、気になりながら、これを調べるタイミングを失ってしまったのは私の“マインド”欠如のためでした。

「紙資料」についていえばきりがありませんが、ある課で保存のために整理されたファイルがいつの間にか担当者の判断のみでまとめて廃棄されていた例もあったようです。どの資料をいつまでどのようにし

て保存するのか、各課における実際の扱いは難しいものです。

図書館で戦後、いくつかの主な商業紙を現物のまま綴じて製本し、資料として閲覧に供していました。電算化がすすみ、記事検索ができるようになり、現物が不要になったため廃棄することでした。たしかにこれは膨大な嵩があり、置き場にも困っておられたようでした。でも、なんとなく現物を廃棄するのは惜しい、新聞そのものの姿を少しでも残したいがこちらも保管場所がない。やむを得ず『京都新聞』のみを編纂室で保存することにしました。いまはペーパーレス時代となり、「紙資料」のありかたは大きく変化していくでしょう。

さて、各課から送られてきたダンボール詰め of 史資料は、平野会館一階と地下の倉庫をたちまち満杯にし、冷暖房のない倉庫での整理作業が始まりました。こちらから各部課に出向いて、非現用資料を区分けして持ち帰る作業もしばしば行いました。宇治学園との法人合併の際には早速宇治高等学校校長室に出向いて、何日か史資料収集の作業をしたこともありました。

現物史資料の保管・整理には場所的条件の確保が欠かせません。百年史編纂室になってからも「敬学館」「平野会館」「修学館」「末川記念会館」そして「西園寺記念館」と移転を繰り返しつつ、スペース確保が図られてきました。筆者は「西園寺記念館」以外の移転には全てかわってききましたが、移動の度に史資料をあらためて整理（暫定的ですが）する必要があります。一片のビラでも当時の状況を確認するための貴重な史資料になることがありますから、整理途中のものは特に注意する必要があります。ほとんどの史資料は書架に保存・整理することになりますが、内容や分類もさることながら、紙・物・写真

など多様な形態のものがあり、形や大きさが異なるため、うまく収まらないという悩みがありました。

長期間の編纂室勤務のなかで年史編纂の基礎となる史資料の収集・整理・保管については、次々と思いつくことは限りなくありますが、紙数が限られています。編纂室発足当初から目指していたような「立命館 史資料センター」の具体化が図られようとしているとお聞きしました。「センター」がたちあがる日を楽しみにしつつこの項を終えます。

人と組織

『通史』の完結を前にして、編纂に尽力された故人のお姿が目には浮かびます。百年史編纂事業出発の時の総長、天野和夫先生はご退任後もいろいろと気にかけて下さいました。スクラップや写真など年史関係の資料が出てくると直接連絡を下さり、再三お宅までいただきにありがとうございました。

館史編纂委員会初代委員長の奥田修三先生は『紀要』の執筆とともに、ご自分の残された「教授会資料」からビラに至るまで、多くの学園関係史資料を寄贈して下さいました。後藤靖先生にも、お忙しいなか『紀要』第一号に「委員長三代目」の稿を寄せていただきました。

平野会館二階でアルバイト雇用の大学院生を指導しながら『第一巻』完成に尽力された主幹の衣笠安喜先生、そして『第二巻』主幹の畑中和夫先生、山下健次先生も編纂室にはなくてはならない方でした。山下先生は編纂室へ弁当持ちで出勤され、執筆の合間の休憩時には、自ら持参されたサイホンで皆においし

いコピーをたてて下さいました。

執筆者会議で熱心に議論されていた西川富雄先生のお姿も忘れることはありません。

編纂室前任者の金井直彦元総務部長に『第二巻』完成を告げるため、伊藤昇次長と自宅にお伺いした時のことも今また思い浮かびます。これらの方々のご尽力があつてこそ、今日の到達を得たものと思います。

年史の内容を充実させるうえで、数多くの方々の協力が必要なことは言うまでもありません。『紀要』第一号二五三―二五五ページには一九九三年三月現在の「『立命館百年史編纂委員会』関係委員名簿」があります。重複しているとはいえ、顧問、参与、編纂委員会、常任委員会、編纂室員、研究員をあわせるとのべ八二名となり、おそらく立命館の学園機関の中でも一番人数の多い部類の組織だったのではないでしょう。

編纂委員会は年一回、常任委員会は年二回程度開催しました。研究員会議や室員会議はなかなか集まらないという状況がありました。でも、この多くの方々の知恵と力を合わせて進められたことは本学「正史」の編纂にとって重要だったと思います。日常の教育研究、管理運営に忙しい人たちに携わっていただけですから集まりにくいのはやむを得ませんが、そうした忙しい方々であればこそ学園史にたいする確かな視点を持つておられるともいえます。

執筆者も随分多数で、実人数で『第一巻』二六名、『第二巻』では約五〇名にのびります。この中には事務職員も多く含まれているのは本学の特徴です。他の学園史では、教職員ではなく、いわゆる「書き手」による執筆もあつたようですが、手間と時間をかけても、皆で議論し皆で執筆するというやり方は、

本学園にふさわしい気がしました。

とはいえ、全体の整合性や文書のトーンも含めてその調整には大きなエネルギーと時間を費やしたことも事実です。その結果、苦勞して書いていただいた草稿が大幅に修正されるということもままありました。

『第二巻』では研究会や執筆者会議などを通じて、その期における社会状況や情勢の論議・分析が重視され、「序章」や「はじめに」の内容を充実させることができたものと思います。これも多数の協力によつてこそできたものといえます。

座談会やヒアリングを重ねることによつて、百年史編纂に関与していただいた方々の輪が一層広がりました。多くの校友の方の協力も得ましたが、新聞部O・B会からはバックナンバーの寄贈もしていただきました。

座談会等の内容の多くは文章に整理をして『紀要』に掲載することが出来ました。史資料が不足する部分を補う意味でも必要な取り組みだったと思いますが、全体の流れや関連を把握する上で果たした役割も大きいといえます。

編纂にかかわった人たちのなかで、一人職場の時から支えて下さったアルバイトの方々の地道な資料整理などの努力があります。また、通史の編纂を進めるために大学院生の方に、その専門を生かして執筆資料の整理や参考文献調査などを行っていただきました。これらの人たちの努力があつてこそ編纂作業を進めることができたことを忘れてはなりません。

この項の最後に、学外組織である各大学の年史担当事務局によつて構成されている「全国大学史資料

協議会」における恒常的な交流はまことに有益だったことを指摘しておきたいと思います。この組織で、他大学の状況や年史資料の扱いなどを学ぶことによって、自分たちの行っている作業の位置や価値をよく知ることができました。

心残りのこと

課題としていながら、取り組みなかったことは山ほどありますが、この機会にあえて触れておきたいことがあります。

(一) 学徒出陣五〇年の基礎調査のこと

一九九三年「学徒出陣五〇年」にあたり、他大学でも本学全体としても数多くの取り組みが行われました。百年史編纂室でも当時の在校生へのアンケート調査を行うとともに、資料調査・統計などのための作業を行いました。それらの結果は『紀要』第二号（一九九四年三月）の「小特集 立命館大学 学徒出陣五〇年」や『紀要』別冊（一九九六年三月）などにまとめられています。

『紀要』二号には「〔統計〕立命館大学関係の『学徒出陣』者数調査」という筆者の報告がありますが、そこでは調査が十分できなかったことの言い訳をしています。「当初は『学籍簿』に記載の情報も全て入力することも計画していた」が、「『学籍簿』からの情報入力は極めて複雑で大量の作業となることが次

第に明らかとなり、当初計画した学生数並に『学徒勤労動員』の詳細な調査を今回完了することは不可能と判断せざるを得なくなった。」（一七二ページ）と。学徒出陣のこの時期は学生数さえも明確ではなく、学徒勤労動員も含めて学籍簿全調査によって正確な実態を明らかにする必要がありました。持ち出しのできない学籍簿のことであり、学部事務室に赴いて幾日かこつこつ作業を行った記憶があります。調査のために必要な条件設定は惜しまないので是非行うようにとのトップの意向はあったようですが、人海戦術でできる調査ではなく、体制がとれないまま「全調査」はできなかったのです。こうした戦時の実態調査については、他大学で取り組まれた先進的な事例もあるようですから、本学でもいつかの機会に学籍簿による悉皆調査をやっていたらいただければと思います。

（二）部局史などのこと

各局や関係団体などの年史は、それ独自の必要性和ともに、学園「正史」では書ききれない個別の問題を補ってくれるという意味でも重要です。筆者の知る限りでは、各学部ではそれぞれの節目の年を記念して独自に取り組まれ、まとまったものもあつたと記憶しています。教職員組合などでは過去に略史は作成されていますが、本格的なものはありませんでした。教職員組合に関しては、その関係史資料は古いものから百年史編纂室に移管されました。組合の「正史」作成をめざした検討が行われたことがありますが、その時は編纂の体制が整わないままでした。

各学部をはじめとする関係組織や団体の「部局史」などについて、編纂室もかわりながら、進められ

ればと願っています。

(三) 『百年史』の活用

(1) 「立命館歴史物語」(『百年史』のダイジェスト版)を

『百年史』本巻は全部で七、六〇〇ページにも及ぶことになり、よほど関心の高い人か関係者でないと通読されることはあまりないでしょう。単なるダイジェスト版ではなく、学生も教職員も気楽に読めて、常に店頭にも並んでいるような読み物「立命館歴史物語」があればと思ってきました。

これについても『紀要』第十号の「鼎談」で「『立命館小史』発刊の必要性」の項で触れられています。当初から提起されていた問題です。未着手なら次の課題に据えていただければと思います。

(2) 学生・教職員向けの講座を充実

① 学生向けの「自校史」講座

すでに実施されてきたことですが、継続する必要があると思います。他大学においても盛んに取り組まれていたようですが、各大学・高校などとの横の連携も深め、そのあり方を研究する必要もあるのではないのでしょうか。

② 教職員には「学園史」——学園運営の教育研究のために

教職員でも通史全三巻を通読する人は少ないと思います。教職員の学園運営のための教育、研究にとって、「学園史」は極めて重要なテーマの一つであることは言うまでもありません。全ての教

職員がこのテーマに関心を持ち学習できるようなシステムを立ち上げる必要があると思います。

百年史編纂実務に携わった一人として、通史の完結編である『第三卷』刊行は大きな喜びです。編纂室から離れて既に四年以上経ち、現在の状況を知らないまま、当時を懐かしみつつ勝手な「想い」を述べさせていただきました。

『立命館百年史』——その一期一会

伊藤 昇

課長在任期間 一九九八年一月一日～二〇〇〇年三月三十一日

はじめに



私が立命館百年史編纂室に勤務していたのは、一九九八年一月～二〇〇九年三月までである。十年余月の期間に『立命館百年史』通史一（一九九九年三月）、『立命館百年史』資料編一（二〇〇〇年一〇月）、『立命館百年史』通史二（二〇〇六年三月）、『立命館百年史』資料編二（二〇〇七年七月）の発行にかかわった。また、近々刊行予定の『立命館百年史』通史三の構想やその執筆にも携わることが出来た。このように『立命館百年史』のほぼ全巻にわが身を置き、充実した日々を送ることが出来た。まことに幸福であった。いま、『立命館百年史』について筆のおもむく

ままに振り返ってみたい。

『立命館百年史』通史一

一九九八年一月、平野会館（現在の㈱クレオテック社屋）一階で開催されていた百年史編纂室での会議で私は赴任の挨拶をした。あたかも『通史一』の編纂作業が最終局面に入ったところでの会合であった。戦前・戦中を対象とする『通史一』の口絵写真（立命館学園 その現在）の選択についての議論で、二〇〇〇年に開学予定の立命館アジア太平洋大学の写真を掲載するか否かをめぐって、百年史編纂室長の松岡正美教授と『通史一』主幹の衣笠安喜教授との意見が異なっていた。松岡教授は掲載すべき、衣笠教授は否定的だった。衣笠教授の考えは、いかに壮大な学園事業といえども開学予定である限り学園史の口絵に掲載するのに躊躇いがあつたのだと思う。その議論を聴きながら、〈学園〉としての〈歴史書〉である「学園史」の難しさの一面を痛感したものだ。議論の結論は、百年史編纂委員会常任委員の意見を徴することになった。そして、立命館アジア太平洋大学について、建設中の校地と完成予想図が掲載されることになった。関連していえば、衣笠教授から「伊藤次長は長らく教学部におられたので、その経験を活かして口絵写真（立命館学園 その現在）の解説文の作成をお願いします」といわれた。かくして、衣笠キャンパス、西園寺記念館、柊野総合グラウンド、原谷グラウンド、びわこ・くさつキャンパス、立命館アジア太平洋大学、立命館中学校・高等学校、立命館宇治高等学校、立命館大学慶祥高等学校につい

ての解説文を私が執筆した。いま読み直してみると稚拙な文章で恥じ入るばかりであるが、それが私の百年史編纂室における初仕事であった。

ところで『通史一』は、一九九五年四月に着手され、その後四年の歳月を経て一九九九年三月に刊行された。刊行祝賀会（同年四月三日）において衣笠教授は『通史一』は、「私も含めて二七名の共同執筆になっています。二七名それぞれが個性的な研究者であり、文体も個性的ですし歴史の評価もそれぞれありまして、そのずれが出てきます。私はその調整役をつとめただけでありまして、あるところを褒めると、別のところから不満が出る…」と気苦労を吐露されている。（『立命館百年史紀要』第八号、二〇〇〇年三月）。そして『通史一』の骨子について「一八六九年に私塾立命館ができ、三一年後の一九〇〇年に京都法政学校が発足し、そして一九一三年に財団法人立命館ができて私塾立命館の名跡の継承が実現することになり、敗戦の時点では大学・専門部に法・経・文・理工の四学部が揃います。附属中等学校も整備されてきます。…この時点までに、戦後の総合学園としての基礎ができたのではないかと思います。第一巻の内容をそういうものとして受け取っていただければ有難いと思います」と述べられている。（前掲『紀要』）。

その『通史一』は、高い学術的評価を得た。『史学雑誌』第一〇八編、第一一号（一九九九年一月二〇日）は、「立命館は一九五三年に『創立五十年史』を刊行しており、今回の『百年史』は二度目の歴史的経験の検証になる」と紹介したうえで、『通史一』の特徴を端的に二点指摘した。第一は「地域との関係、大学の地域性という観点の重要性を具体的に認識させられた…京都という地域が高等教育機関を

いかに切望したかがよくわかり、立命館の存在意義もその文脈において明解となった」。第二は「本書はこれまでの類書に比して、完成度の高い著作になっている。各巻に文献、年表を掲載した沿革史類は、これまで知らない。新しい試みといえる。試行には周到な準備と蓄積とが求められるが、それが立命館にはあり、本書に活かされた。…新しい沿革史類の誕生を慶びたい。」と締め括っている。最高の賛辞である。因みに、この高い評価を与えた中野実氏は、東京大学史史料室助手を経て東京大学助教授（大学院教育研究科）で、『東京大学百年史』通史二、通史三、資料一、資料二、資料三などに関わられた大学史研究の第一人者である。全国大学史資料協議会（後述）の発足にも尽力された研究者であり、私はその全国大学史資料協議会を通じて親しくしていただいたが、二〇〇二年三月に五一歳で早世された。

立命館大学文学部非常勤講師であった清水教好氏も早世されたお一人である。同氏は、衣笠安喜教授の門下生である。日本思想史学、日本史学を専攻され、『通史一』の共同執筆者（第二章第五節、第四章第四節など）でもあった。『立命館百年史紀要』第五号（九七年三月）に「戦前期校友会の動向をめぐる一考察―『立命館大学』校友会の場合―」、第六号（九八年三月）に「戦前『立命館』の中等学校『同窓会』の動向」の二編を寄稿された若き研究者である。『通史一』共同執筆者の一人である桂島宣弘立命館大学文学部教授は、『清水教好遺稿集』のなかで清水氏の研究姿勢の特徴について、「全ての先行研究のリストを完璧に作成し、それを集め、批判的に分析することにかれは貪欲だった。その脚注における執拗なまでの先行研究への言及をみよ」と指摘している。そして研究方法は、衣笠安喜指導教授をはじめとす

る立命館大学日本思想史学の長年培ってきた伝統に従ったものであり、「きわめて正統派的な文献学的方法であった。あくまで漢文を中心とする原典史料を、一次史料に立ち返って辞書を引きながら丁寧に読み、その史料に語らせながら思想の内容を再構成することがそれである。そして、全先行研究を読破し、その議論を批判的に検討しながら鍛えに鍛え抜かれた解釈を史料にほどこし自らの議論を作成する。（略）『他流試合』を含むいくつもの研究会・学会での激しいバトルに基づいて自らの議論は、より洗練されたものに仕上げていかなければならない。そして、納得がいけない点が明らかになるまで、もう一度原典史料に立ち戻って読み直すことがくり返される」（『日本思想史研究会会報別冊』二〇〇八年二月）と紹介している。原典に始まり原典に戻るその往復過程は、研究者の宿命とはいえ、まことに厳しい試練の連続だったに相違ない。かつて天野和夫立命館総長は「行きつ戻りつ一本の道友と歩む」と詠まれた句と軌を一にするものである。

清水氏が心から尊敬していた衣笠教授は、二〇〇一年十二月末に逝去された。彼の落胆は尋常ではなかった。百年史編纂室で彼は「結婚式は衣笠先生ご夫妻の媒酌人を考えていたのに、それも出来なくなつた」と視線を落としながら語っていた姿を思い出す。

衣笠教授が逝去後は、京都市から大津市へのご自宅の移転作業や遺品整理に、彼は令室の片腕となつて一生懸命に働いた。そのなかで見つかった数々の資料を百年史編纂室へ寄贈してくださった。私との会話では、童顔に笑みを絶やさず少しかみながら話すのが彼の常だった。清水教好氏が急逝されたとの知らせを受けたのは二〇〇七年二月であった。「歴史学研究発行機関紙」の寄贈を受けたのは、亡くなられ

る一週間前であつた。西川賢さんと一緒に大阪市のご自宅に弔間に行つた。ご尊父は「親より先に死ぬのは最大の親不孝」と悲嘆にくれていわれた言葉が今も忘れられない。享年四三だつた。

『立命館百年史』資料編一

『通史一』の発行後、一年七カ月を経て二〇〇〇年一〇月に『資料編一』を刊行した。『資料編一』は、西岡成幸さんのご労作といつてよい。だから私が云々する資格はない。しかし、今でも鮮明に記憶しているのは、校正作業に手間取つたことである。『資料編一』の「あとがき」で松岡百年史編纂室長が「最終段階では、次長以下の事務局メンバーが夏季休暇を返上してまで綿密な検証作業と煩雑な校正作業に当たつた。…事務局の献身的な努力に感謝する。」と記されている所以である。ともあれ『資料編一』は、
「立命館創始一三〇年・学園創立一〇〇周年記念『感謝の集い』」が国立京都国際会館で盛大に举行された二〇〇〇年一〇月一〇日に上梓することができ安堵したものである。

『資料編一』は、立命館創始の一八六九年から敗戦の一九四五年までの史資料七六〇点を収録している。また、巻末には西川賢さんが作成された一九〇〇年から四五五年間の学生・生徒数や卒業者数推移などの諸統計を掲げたので、ページ数は一八一八頁に及んだ。あまりに大部なので分冊も考えたが、資料編の書物としてはギリギリ許容されるページ数であろうという判断で、一冊に収録したのである。

『資料編一』は、『立命館八十五年史資料集』をベースにしている。しかしその後に発掘した新たな

史料も収録していることを強調しておかなければならない。例えば、（一）西園寺公望が国粋主義を戒めた「第二次教育勅語案」（六六頁）、（二）「中川家文書」による中川小十郎の「女子教育の拡充」（二一八頁）、（三）東方語学校講師給与について山座円次郎が中川小十郎宛に出した「山座円次郎書簡」（二一九頁）、（四）校舎焼失後の措置と新校舎造営についての中川小十郎宛「末広威磨書簡」（二四二～二四六頁）などを挙げることが出来る。なかでも（一）は、学祖の西園寺公望が日清戦争以降とりわけ顕著になった国粋主義的な社会傾向を憂いた新教育勅語案で「朝日新聞」（一九九七年一月二四日、一九九八年一月一六日）などマスコミで大きく取り上げられた貴重な史料発見であった。余談ながら、一九五三年発行の『立命館創立五十年史』には「資料編」が刊行されていない。のみならず編纂にあたって蒐集された諸資料は、その後の管理が杜撰だったためにどこかに散逸してしまったのである。したがって、『資料編一』は、大仰に言えば立命館学園創設以来の初めての資料集刊行であった、と私は思っている。

『立命館百年史』通史二―「難産」の思い出

『通史二』は、二〇〇六年三月に発行することが出来た。『通史一』の発行後、約七年の歳月を要した。実に「難産」だった思いが、いまもある。「難産」の要因はいろいろあると思うが、さしあたり次の二点を挙げておきたい。

一つは、執筆者が予定日までに草稿を提出しなかったことである。「提出締切日を一九九九年一二月末としたが、現実に各草稿の提出が始まったのは二〇〇〇年九月であった。」と『通史二』の「あとがき」は記している。この「あとがき」は私が原文を書いたのでよく覚えていたが、率直に言えば二〇〇二年になっても草稿の多くは提出されなかった。多くの執筆者予定者は督促のたびに「業務が多忙のため執筆できない」と口を揃えて言われるのが常だった。一方では草稿の督促、他方では予定通り草稿を提出された方からは刊行は未だかと苦情がよせられた。両者の板ばさみにあつた日々が続いた。百年史編纂室からの度重なる督促に、私との人間関係までまざる教職員もいた。しかし執拗とも思われる督促は、当然のことながら公務・公憤であつて、私事・私憤ではない。結局、共同執筆者全員（約五〇名）の草稿が出揃うことはなかった。執筆依頼を断念して編纂室で代筆した項目も少なからずあつたが、今にして思えば、行政文書と歴史文書とはその基本が異なるので書きにくいという点もあつたのかもしれない。一般に大学史は共同執筆である場合が多いが、第一次草稿執筆者を選定することの難しさとその限界を痛感したものだ。

第二の要因も、共同執筆に関わる事項である。私たちは第一次執筆者への執筆依頼文には、提出稿は編纂室でリライトすることがあるので予めご理解をしておいてほしいと事前の了解を得ていた。それ故、提出された稿を「原稿」といわず敢えて「草稿」と称した。なぜなら「学園史のもつ性格や体系性を確保する観点から、重複部分の削除、記述の加筆などのリライト、場合によっては削除」（前掲「あとがき」）する可能性があるからである。提出された草稿のなかには単なる随想、極端な場合にはメモ類にも似たも

のがあった。したがって草稿をリライトする作業は大変だった。単に内容の重複や異同の調整、用語・文体の統一にとどまらなかった。とりわけ第一章については「戦後直後から五〇年代についての史資料が不備であったこと……そのために史実の確認やその評価について予想外の労力と時間を要したこと」（前掲「あとがき」）を思い出す。

思い出のついでに『通史二』刊行後に苦情が寄せられたことを付記しておこう。「なぜ私の原稿を書き直したのか」「どうして私の原稿に記載した資料を削除したのか」という内容だった。いずれも著名な研究者からのクレームで自分のプライドに傷がついたご様子だった。重ねて述べるが第一次執筆者からお預かりしたものは、原稿ではなく草稿である。「学園史のもつ性格や体系性を確保する観点から、重複部分の削除、記述の加筆などのリライト、場合によっては削除」することがあり得ることへの周知徹底が不十分であったかもしれない。衣笠主幹がかつて『通史一』で経験されたご苦勞を、私もまた異なった形ではあるが『通史二』において追体験し、共同執筆の難しさを実感したものである。

全国大学史資料協議会の思い出―木村礎教授

全国大学史資料協議会は「大学史に関する情報交換と研究、並びに会員相互の質的向上と交流をはかる」（規約第二条）ことを目的とし、（一）大学史に関する情報、（二）史資料の収集、保存、利用、公開に関する研究、（三）研究会、講演会の開催などを主な事業として設置された機関である。二〇一二年

七月現在、国公私立大学などの機関加盟が一一一、個人加盟が三八名である。

その全国大学史資料協議会の二〇〇一年度総会、全国研究会での記念講演で元明治大学長の木村礎教授の警咳に接する機会があった。記念講演が実現したのは全国大学史資料協議会東日本部会の鈴木秀幸さんの尽力があったと後日知った。テーマは「大学史および大学史料を考える」であった。教授は一九二四（大正一三）年一月のお生まれで、二〇〇四年一月逝去されたという。日本近世史、地方史研究で多くの著作がある重鎮で、明治大学での学内では教職員組合委員長（一九六三～六四年）、文学部長（一九七七～七八年）、明治大学長（一九八八～九二年）などの要職をつとめられた（「木村礎研究Ⅰ」『明治大学史紀要』第一六号、二〇一二年三月）。ご高齢で小柄な身体にもかかわらず、発せられる言葉の一つひとつに重みがあり説得力があった。私は講演を聴いて、その迫力に圧倒された記憶がいまも蘇る。

講演は、ご自身が長く明治大学百年史編纂委員会委員長をつとめられた経験を踏まえ、年史編纂をするにあたっては「なによりもまず編纂に携わる委員会の自立性が確保されなければならない点を強調された。特定の立場や利害などによって歴史的な事実が左右されないような編纂体制をとることが、大学における年史編纂の基本」（「大学アーカイヴズ」『全国大学史資料協議会東日本部会会報』二〇〇二年三月）であると述べられた。そして大学史を叙述、編纂するうえでの留意点として五点を挙げられた。その五点は『明治大学百年史』（一九八六年三月発行）に明記されているので引用しておきたい。「（一）近代日本社会とのむすびつきを重視し、それによって明治大学を社会的広がりの中に位置づけること。（二）近代

日本社会の知的諸潮流、諸問題を重視し、それに最も敏感な学生の動向に留意すること。(三) 一般的な教育制度事項についての史料収載や記述を努めて限定すること。(四) 明治大学の歴史を大学史一般の中に埋没させることなく、明治大学の独自性を重視すること。(五) 『明治大学史』を顕彰や論断の場に行わないこと。…歴史の細部の一々については、それぞれの事実の語るにまかせる」(九一二頁～九一三頁)とある。とくに最後の点を強調された印象が私にはある。「どんな大学も『きれいな事』のみの歴史を歩んだわけではない。後に不利益となるような事も多くあり、そういうものが統一されて一つの組織体をなしている。したがって、都合の良いことばかりの大学史は、信賴の置けない中途半端なものでしかない」(前掲「全国大学史資料協議会東日本部会会報」)と明言され、大学史を「顕彰」や「論断」の場にしないことが大切である。私の記憶にいまもお生々しく残る言葉である。

翻ってわが『立命館百年史』を考えてみると、『通史二』や『通史三』の第一次草稿執筆依頼者の多くは、当該のテーマに深くかかわった教職員を選定している。それ故、どうしても執筆の内容は「顕彰」することになりがちである。そこに現代史としての大学史を叙述することの陥穽が不可避免的に内在する、と私は思う。木村教授は「歴史の細部の一々については、それぞれの事実の語るにまかせる」といわれ、とりわけ現代史としての大学史を通じて「顕彰」や「断罪」することがないように自戒しなければならぬと注意を喚起された。年史編纂に携わった者として、その言葉の重みをしみじみとかみしめている。

『立命館百年史』通史二―山下健次教授

『通史二』主幹である山下健次教授が永眠されたのは、二〇〇三年一二月であった。遺言に従い、葬儀は東山山麓の小さな葬祭場で行われた。無宗教で、司式の担当は小生、ヴィバルディ「四季」が流れるなかで厳かに執り行われた。そして、以学館で行われた「山下健次先生を偲ぶ会」（二〇〇四年三月）では、代表世話人がそれぞれ「明確でゆるがぬ芯棒を、しなやかでゆとりのある人間性で包んでいた」（樋口陽一氏）、「民主主義と人権という原則的基準は先生自らが担当された」（川本八郎氏）、「悠揚迫らぬ風貌と重厚かつ中庸の論理でもって、学園でもなくてはならない存在だった」（畑中和夫氏）と故人を回想された。

私事になるが、ドイツの政治学者カール・シュミットの暗と明を初めて教わったのは、一回生のプロゼミ担当者であった山下教授であった。卒業後の一九七〇年七月には、立命館「白雲荘」でテキスト『法律家』（潮見俊隆著、岩波新書）を使用して、大学時代の友達とつくった「読書会」に山下教授をチューターとして呼び出したこともあった。公私にわたるご交誼は四〇年になる。とくに二〇〇一年四月には、『通史二』百年史編纂室主幹として着任されたので、毎日顔を合わすようになった。奥様お手製の弁当を持参され、雑談を交わしながらの昼食は楽しく有益なひと時だった。また、三時になるとご自身がサイホンでコーヒーを沸かして、われわれに振舞われる日もあった。そのような何気ない日常の言動の端々に

「明確でゆるがぬ芯棒を、しなやかでゆとりのある人間性で包んでいた」教授を知ることが屢あった。

遺稿となった「ユニタース」（三三七号 二〇〇一年七月二五日、三三八号 二〇〇一年九月二五日）で山下教授は「『庶民の学園』とそれを支えた若々しい教・職協同のエネルギー」を寄稿されている。『通史二』は「戦後の再出発から大学紛争を経て一九七〇年代における学園新展開の始動へと進む過程が扱われる。学園の公式文書にみるだけでもこの間の諸改革の歩みはめざましいが、それを支えた教職員・学生の、通常の学園史では語られることのないダイナミックで多様なエネルギーの源にも目を向ける必要がある」として基本視点を明確にされたうえで、「助議会」「教職員組合『青年婦人部』」、「自主的なサークル活動」、「幻の『ユーラシア大陸探検隊』」、「在日韓国・朝鮮人学生」「未解放・被差別部落出身学生」を学園史として叙述する必要性を説かれた。この視点と指摘は、先に引用した木村礎教授の「（二）近代日本社会の知的諸潮流、諸問題を重視し、それに最も敏感な学生の動向に留意すること」。

（四）明治大学の歴史を大学史一般の中に埋没させることなく、大学の独自性を重視すること」のまさに立命館大学版である。非常に激しく流動した戦後史の流れのなかで、ともすれば見落としがちになる労働組合運動や学生の動向に着目し、一九五〇年代半ばから一九六〇年代へかけての立命館大学の特質・独自性を的確に剔出された山下教授の慧眼に、大いなる敬意を表する所以でもある。なお、ユニタースに寄稿された遺稿は、『通史二』第二章第三節六「『庶民の大学』の戦後的展開」のなかに叙述されている。

『立命館百年史』通史二―大学職員論

『通史二』は、一九四五年から一九八〇年にいたる戦後前半期の学園史である。大きな特徴を私なりに整理すれば次の四点になる。第一は、戦前の「国家の須要に応じる大学」から脱却して「憲法」と「教育基本法」に立脚した「国民のための大学」へ転換していったこと。換言すれば、末川博総長を迎え戦前の「禁衛隊」から「平和と民主主義」を教学理念とする学園に転換していった「立命館民主主義」創成過程のダイナミズムを詳細に叙述したことである。第二は、「大学紛争」を世界的な観点から位置づけ、紛争の史実を克明に叙述したこと。第三は、「同和教育」について年代的には『通史三』に属する事項も含め『通史二』において立命館学園として総括したこと。そして第四は、大学職員論を大学史のなかで新たに叙述したこと、に集約できると思う。第一から第三の特徴については、後述の成澤榮壽教授の書評をはじめ学内では『立命館百年史紀要』『ユニタース』などで周知されているので重複を避け、ここではあまり言及されていない第四の特徴点について補足説明をしておきたいと思う。

かつて長田豊臣理事長は二〇〇三年の年頭所感で、大学をひとつの劇場空間になぞらえて「その劇場が成功するか否かのキーは、なんとと言っても上演される脚本や優れた演出者の選定にあると思います。（略）公演の企画を立て、脚本を書くライターを探し、俳優の手当てをする所謂プロデューサーであることが職員の皆さんの役割」と明言し、職員は学園活性化を生み出すプロデューサーたれと述べた（「ユニ

タース」三五二号 二〇〇三年一月二五日)。教員が役者で職員はプロデューサーとする比喩には、立命館大学が培ってきた「教職協同」の理念からいえば疑問符がつくし、教員を役者とする立論もやや適切さを欠くと思う。しかしながら、少なくとも今日、職員が単なる受け身としての事務処理屋ではなく、専門職的力量をもったアドミニストレーターになるべきであるという立論に異議を唱える人はいないだろうと私は思う。

閑話休題。『通史二』では、その職員像の変化、変革の足跡について第二章第二節二「職員体制充実への取り組み」および第四章第一節四「職員の位置づけと『新しい教職員像』において、三〇ページにおよび詳しく叙述している。私の知る限り、戦前から戦後の新制大学、そして「大学紛争」に至る歴史のなかで、職員の役割や位置づけがどのように変化していったのかを、克明に跡づけたのは数多く刊行されている全国の大学史のなかでも『立命館百年史』通史二が初めてであると思う。

職員論が立命館大学で旺盛に展開された背景には、先述した先進的な「教職協同」の取り組みや、伝統的な教授会自治論をいち早く批判的に克服して、大学の自治は教員、職員、学生、院生を含めた大学の構成員であるとする「全構成員自治論」が立命館大学の伝統としていまもしっかりと根付いているからであろう。わけても、一九七〇年代〜一九八〇年代に開催された学園振興懇談会や全学協議会において、職員像をめぐってあれほど真摯に全学論議を繰り返した大学は立命館を置いて他にはないと自負してよい。例えば、一九七三年度全学協議会では「職員は教員と仕事の分野が異なっている、対等の協力関係をもつて大学業務を遂行しなければならない」と位置づけたうえで「大学業務の遂行についての提案」を積極的

に行うべきであることを確認しているのは職員論の先進性を示すものといっているだろう。

ともあれ、今日いわれている「専門職的力量をもったアドミニストレーター」は、職員論をめぐる本学の長い歴史のコンテクストのなかで創出された到達点であると私は考えている。

『立命館百年史』通史二の刊行―書評をめぐって

『通史二』刊行後、成澤榮壽教授は『人権と部落』（二〇〇六年一〇月号）で次の書評を書かれた。教授は日本近代史・部落問題の研究者で元長野県短期大学長、二〇〇二年からは社団法人部落問題研究所理事長の職に就いておられる。「本書は大冊である。：『通史一』が学問的にも高評を得たとある。さもあらなん。時期的対象を敗戦から一九八〇年代までとしている本書も同様に評価されるであらう。」と総評したうえで、学園史の類に携わったことのある成澤教授ご自身の経験を踏まえて「類書を見る場合、教授会のほか『自治』の一環として、学生自治会、学生の部・研究会活動、教職員組合、生活協同組合がどう扱われているかを評価の一つにしてきた。この観点から通覧しても本書は卓越している。立命館には、苦難の克服を含め、すぐれた自治活動の実態があったからである」「二二ページにわたるこの項の部落問題記述は内容が実に入念で、類書に例がない」と高い評価をいただいた。しかし最後に警鐘を打ち鳴らしておられるような気がしてならない。すなわち「今日、産学提携の先端を行く立命館について叙述されるであらう『通史三』が本書とどう連結するか、強い関心をもつ」と指摘された。

ご指摘の産学提携、私たちの用語では産学連携について詳しくは近々刊行予定の『通史三』をご覧いただきたいが、先だつて卑見を紹介しておきたいと思う。立命館大学はすでに一九九一年度に「立命館大学学外交流倫理基準」を制定している。その前文に「現代の社会における人文・社会・自然の諸科学の研究は、先端化・情報化・国際化・高度化などの急速な進展のもとにおかれているだけでなく、学際化、多角化、巨大化を要請されている。このような学術的環境の中で、本学は従来の研究や内容のみに固執することなく、学外機関との交流を行うことを通じて人類の福祉と社会の進歩に貢献するという学問研究に内在する要請に応えていく必要がある」として、第一「自主の原則」（研究を担当する本学研究者の自由や創意が尊重され、研究者の意思決定の自由が確保されていること）、第二「民主の原則」、第三「公開の原則」、そして第四「平和利用の原則」（軍事開発や人権抑圧など反人類的内容を目的とする研究教育は行わないこと）の四原則を全学的に確認し、遵守するための諸手続を定めて厳格に運用してきた。九四年に立命館大学びわこ・くさつキャンパスを開学して以降、社会的にも大きく注目されたりエゾン活動の展開も、この倫理基準にもとづいていることは言うまでもない。したがって、立命館大学の取り組んだ産学連携は、平和と民主主義の教学理念や学問の自由と大学の自治を擁護した伝統をしっかりと踏まえ、それを深化・発展したものであると私は考えている。

補足すれば、大学が有している教育・研究機能を基礎として、社会に存在する多様な機関との広範な連携を築き、社会的要請や国民の期待に応える社会的ネットワークの形成は、九〇年代当時、「開かれたアカデミズム」として大学に要請されていた課題でもあった。その一環として学術交流協定、寄附講座、

チエアプロフェッサー制度などの取り組みがあつたことを思い出す。

以下は余談になる。『通史二』が業者から納品されたのは二〇〇六年三月下旬であつた。その納品を待っていたかのように故末川博総長のご子息である末川清教授が、当時は末川記念会館の二階にあつた百年史編纂室に入室された。立命館大学を定年退職後、愛知学院大学文学研究科客員教授をつとめられた二〇〇五年に退職、いまはフリーの身になっていると話されていた。学会の用事で立命館大学にこられた帰路にたまたま編纂室に立ち寄られたのである。虫の知らせというのだろうか、親子の不思議な縁を感じた。『通史二』は、第一章、第二章、そして特別章として「補論 戦後民主主義と『立命館民主主義』——いわゆる末川体制について」において、戦後初代総長であつた末川博の事蹟に多くのページを割いている。納品されたばかりの『通史二』はフロアーに山積みされていた。そのなかから一冊を取り出し、末川清教授に進呈した。大部な『通史二』を丁寧な風呂敷に包み家路を急がれたことを昨日のように思い出す。その清先生も長い療養生活ののち二〇一一年一月に逝去された。「父は相当のヘビー・スモーカーで、昔ニコチン含有量の高いあの『光』を一日七箱もすった」（末川清「父末川博とその周辺」『立命館百年史紀要』二〇〇二年三月）と語られた息子と父親は、天国で『通史二』を読みながらどんな会話を交わしておられるのだろうか。

『立命館百年史』通史二——「立命館略年表」

多くの大学史には年表や年譜がついている。『立命館百年史』通史二にも巻末に「立命館略年表」（戦後前半期）を一八ページにわたって掲載している。「立命館略年表」の原案は私が作成、百年史編纂室の会議に諮って意見を聴きながら修正（加筆、削除）した。その過程で感じたことを記しておきたいと思う。

第一、「年表」は当該大学史の顔であるということ。そのことを強く感じた。極端に言えば、大学史を読まなくても「年表」を眺めるだけで、その大学の年史の特徴がよく分かる。「年表」には大学史の特徴が浮き彫りにされているからである。一九七〇年代前半に流行ったジーン・長髪、ミニスカートなどを記載した大学史の年譜もあった。それほどに各大学の年表は多種多様であった。

第二、各大学によって同じ歴史事象でも用語が異なるということ。例えば、一九六〇年の新日米安保条約をめぐる全国的に反対運動が高揚していく状況を「安保闘争」と記すのか、「安保反対運動」と記すのか、「安保騒動」とするのか、大学によって区々であった。その正否を問い質しているのではない。しかし、これは単なる用語の問題ではなく、一九六〇年新安保条約に対する運動の評価にかかわるのではないか。つまりは編纂者の歴史評価がこっそりと「年表」に具現化しているのではないか、と私は思ったのである。あと一例を挙げておこう。一九六九年～一九七〇年代初頭にかけて全国の大学で起こった「大学紛争」を「大学闘争」と記している大学があった。これも単なる用語上の問題ではなく、すぐれて運動の評価にかかわっている。「年表」に記された歴史評価が具現化された端的な事例であろうと思う。

第三、私の原案では一九五六年一〇月に起こった「ハンガリーのブタベストで反政府運動」が記されて

いた。しかし、この原案は削除され「ソ連共産党二〇回大会でのスターリン批判」だけが掲載されることになった。卑見ではハンガリー動乱は、スターリン批判に匹敵するだけの大きな歴史的事件であるという認識があったが「略年表」には載らなかった。ハンガリー動乱を大学史の年表に掲載するのが妥当か否か、意見が分かれるところであるが、掲載しないという結論つまり歴史評価にはいささかの無念さが私にはあった。あと一例だけを挙げておきたい。一九六〇年六月に羽田で起こった「ハガチー事件」（ハガチーアメリカ大統領秘書が来日、羽田空港でデモ隊に包囲され離日した事件）である。これも原案では記載していたが削除となった。「ハガチー事件」を一連の安保条約改定阻止運動のなかで占める歴史的位置を考えると、やはり掲載すべきだった、と私はいまも思っている。

かつて木村礎教授は「大学史を顕彰や論断の場にしないこと。そして、歴史の細部の一々については、それぞれの事実の語るにまかせる」といわれた。しかし、年表については、あまたある歴史的事実のなかでどういう基準にもとづき、どの事実を選択して「事実の語るにまかせるのか」、その選択自体が大学の特質を顕著に示すことになる〈厳しさ〉があることに気がついた。

そして第四は、たかが年表と軽視してはならないということ。「年表の一行それ自体が想像力をくすぐるし、史実の因と果をさぐりあてることも可能である」「年表を眺め、その一行を調べ、そして時代を理解したとき、正史の行間には必ず庶民の感性が反映されていると、私は知った。」「『年表学』の本質」（保阪正康「毎日新聞」二〇一二年一〇月一日）と指摘されるほどに「年表」は史実の宝庫なのである。史実の宝庫たる「立命館略年表（戦後前半期）」を担った責任の重たさを今頃になって感じている。

『立命館百年史』資料編二の刊行

『立命館百年史』資料編二を刊行したのは、二〇〇七年七月であつた。刊行後に私は「『立命館百年史』資料編二の編纂を終えて」を「ユニタース」三九八号（二〇〇七年九月二五日）に寄稿した。その拙稿によりながら『資料編二』を振り返つてみたい。

『資料編二』は、諸資料を渉猟し始めてから校正作業を終えるまで約三年の歳月を要している。『通史二』での引用資料や出典・参考文献は、三、〇〇〇点に及ぶ。それらの資料を逐一再調査して、各章・節・項ごとに整理、それを厳選する作業は地味ではあるが実に難渋を極めた。（一）「通史二」の章・節・項に沿つて整理する、（二）公的な性格をもつ資料を中心とする、（三）最重要文書は全文掲載する、この三点を申し合わせ事項として検討し、最終的に採録した資料は五五三点となつた。各章別の採録件数を記しておく。

第一章 戦後の再出発と「立命館民主主義」への模索	一五三点
第二章 「立命館民主主義」の創成と学園の整備	一九一点
第三章 「大学紛争」と立命館学園の課題	一一七点
第四章 立命館学園新展開への始動	九二点

『資料編二』の編集は、西川賢さんが主に担当された。二〇〇四年四月～二〇〇五年三月末までは立命

館大学大学院文学研究科の櫻澤誠君、青柳雅文君が、二〇〇五年四月～二〇〇六年七月末までは青柳雅文君と佐藤太久磨君にアルバイトとして手伝っていただいた。西川賢さんと私の二人で協議・検討を重ねる日々が続いた。時には大学院生を交えて四人で協議したこともあった。そうして掲載すべき資料を確定したのは、二〇〇六年六月だった。原稿整理に約二カ月を要し、九月に印刷業者へ出稿した。『資料編二』の「あとがき」で「『通史二』を裏づけるべく渉獵された諸史資料は膨大で多岐にわたるものとなった」と記している。とりわけ、その膨大で多岐にわたる諸資料を各章・節・項ごとに整理し、〈厳選〉する作業は、『通史二』を幾度も読み直し当該資料のもつ歴史的位置、重要性を考慮して、真に後世に遺すに値するかどうかの判断を伴う重大な責任をもつものであった。実に難渋を極めた思いがいまも私にある。それだけに刊行したときの喜びは筆舌に尽くし難かった。

『ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへ』——平岩外四氏の思い出

立命館創始一三〇年・学園創立一〇〇周年記念として取り組まれた「立命館アジア太平洋大学開学式典」が、別府市のビーコンプラザを会場として二〇〇〇年五月二〇日に挙行された。立命館アジア太平洋大学アドバイザリー・コミッティでもある平岩外四氏が来賓として祝辞を述べられた。「今日、世界の中で、多くの課題を抱えながらも発展が期待され、希望に満ちた地域の一つはアジア太平洋地域であります。この地域は、豊かな資源や自然環境に恵まれ、加えて未だ発掘されていない優れた人材の宝庫でも

あります。そうした中で、二一世紀のアジアと世界の将来を考えると、いま必要なのは、国際感覚を持ち、この地域の平和と繁栄を実現していくことのできるリーダーであります。他の地域や国々の多様な文化と価値観を理解する力を持ち、物事を多面的に見ることのできる優れた人材であります。」そして「立命館アジア太平洋大学の目的と構想は、非常に壮大であり、いわば国家的事業であると申せます。地方自治体と私学が一体となり、これを民間企業が支援し、さらにアジア太平洋地域の各国の協力を得て創り上げるところに、新しい積極的な意味があると考えます。是非、この立命館アジア太平洋大学に、多くの国の関係者が関心を持っていただくことを切望致します」（「ユニタース」三二六号 二〇〇〇年六月二五日）。一八六九（明治二）年、学祖・西園寺公望が京都御苑に私塾「立命館」を創設してから一三〇年、一九〇〇（明治三三）年五月に立命館大学の前身である京都法政学校を中川小十郎が開学してから一〇〇年、それを記念するのに相応しい壮大な立命館アジア太平洋大学開学式典であり、平岩外四氏の祝辞であつた。

平岩外四氏から頂いた名刺には、社団法人経済団体連合会名誉会長とあつた。同氏は、自民党や財界が一体となつて日本国憲法を諸悪の根源とまでいつて非難していた改憲論の流れに抗し、毅然として護憲の立場を明確にされ「平和主義と国際共存こそ日本の大事な国是」と明言、「わが国の憲法の精神は単に敗戦直後の歴史的所産という以上に、平和を願う人類の希望を見事に表現したものである」（一九九一年五月、経団連総会における挨拶）と述べられた気骨のある財界人である。また、一九九〇年～一九九四年の経団連会長在任中に地球環境憲章や企業行動憲章を制定されるとともに政治献金斡旋廃止に取り組みこれ

とても著名な財界人である。

私は「立命館アジア太平洋大学開学式典」の前日と当日の二日間、平岩外四氏の案内役をつとめさせていただいた。非常に物静かな口調は、気品に満ちていた。開学記念式典が滞りなく終わり、大分空港までタクシーでお送りした。タクシーのなかで、平岩氏は「伊藤さん、二日間いろいろとお世話くださって有難う」と謝辞を述べられた。そして、大学をめぐる動向に話が及んだときに「日本の大学は長い年月にわたって『ゲマインシャフト』にありましたけれども、最近は漸く『ゲゼルシャフト』になりましたね」と感慨深く言われた。財界人としての豊富な経験と高い識見に裏づけられた見事な言葉だった。大学をめぐるドラスティックな環境変化を、これほどの確に指摘した言葉を私は知らない。一九九一年六月の大学設置基準の大綱化以降、社会的に流布されていた言葉は、「グローバル時代の大学」や「国際化時代の大学」であった。「ゲゼルシャフトにおける大学」は、私が初めて耳にした非常にインパクトの強い言葉であった。私は驚愕し、ただただうなずくばかりであった。

改めていうまでもなく、「ゲマインシャフトとゲゼルシャフト」は、F・テンニエスの古典的名著『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』を指す。ゲマインシャフトは共同社会と訳され血縁に基づく家族、地域に基づく村落、友愛に基づく都市などを例示している。ゲゼルシャフトは利益社会と訳され、各自の利益的関心に基づいてその人格の一部分をもつて結合する社会で大都市、国家、会社などを例示している。『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』の著作を通じて、テンニエスは「ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへの社会発展の方式を明らかにしようとしている」（テンニエス『ゲマインシャフトとゲゼル

シャフト―純粹社会学の基本概念―(下)』杉之原寿一訳、岩波文庫 一九五七年)のだが、日本の大学の変革、発展をゲゼルシャフトの時代に入ったと物静かに指摘された平岩氏の巨視的で鋭い指摘は私の忘れられない言葉となつていまも脳裏に鮮明に残っている。その平岩外四氏は、二〇〇七年五月に逝去された。

平岩氏のご指摘をわが『立命館百年史』に引き寄せて換言すれば、『通史一』『通史二』における大学はゲマインシャフトの時代であつた。『通史三』はまさにゲゼルシャフトの時代の大学を叙述するといつていいだろう、と私は考えている。

おわりに

百年史編纂室の前身である館史編纂室が設置されたのは一九八一年七月である。天野和夫総長(一九七八年七月―一九八四年十二月)時代であつた。天野総長は、「戦後最大の私学の財政危機について最も敏感に認識され、責任を持つて対処された総長で、現行の学費改定方式の大英断」や「第三次長期計画の基本を提起され」また、「学園の歴史に強い関心をもたれ」館史編纂室を設置したのである(川本八郎「天野先生との二三七六日」『回想の天野和夫』法律文化社 二〇〇二年)。

その館史編纂室のもとで、『立命館八十五年史資料集』(第一集―第八集)および『立命館八十五年史略年表』が刊行された。これらの基礎資料整備は、金井直彦さん(元総務部長、編纂室主任)が中心と

なつて編纂されたものである。「学制に関する資料集および学祖・総長・学長の演説・祝辞等集」（第一集）から始まり「各社の新聞記事」（第八集）に至る各資料集は、編集がよく工夫されており実に便利であつた。私が百年史編纂室に勤務していた頃、机上にこれらの『資料集』を置いて学内外の多種多様な質問に即座に答えていたことを思い出す。もちろん『立命館百年史』の執筆には必須のツールであつた。冒頭に紹介した中野実氏の正鵠を得た表現を再びここで借用する。『通史一』刊行に至る「試行には周到な準備と蓄積とが求められるが、それが立命館にはあり、本書に活かされた」と中野氏が指摘する「周到な準備と蓄積」とは、具体的には『立命館八十五年史資料集』（第一集～第八集）であろうと私は思っている。金井さんの実直なお人柄を偲びながら、感謝を捧げて筆を擱くこととしたい。

百年史編纂を振り返って

橋 本 弘 之

課長在任期間 二〇〇〇年四月一日～二〇〇二年三月三十一日

はじめに



私は立命館創立一〇〇周年記念の年にあたる二〇〇〇年四月から二〇〇三年三月まで百年史編纂室で『立命館百年史』資料編第一巻一と通史編第二巻の編纂および通史編第三巻の構成案を作成し、執筆依頼するまで関わる事ができた。また、定年退職後も『立命館百年史』通史編第三巻の草稿執筆と資料調査に関わることができたことに感謝し上げる。

さて、百年史編纂室に就任した二〇〇〇年度は、立命館創立一〇〇周年記念の年にあたって、記念行事が続いた。五月二〇日には、「立命館創始一三〇年・学

園創立一〇〇周年記念式典、立命館アジア太平洋大学開学記念式典」が大分県別府市において盛大に挙行された。また、一〇月一〇日には、「立命館創始一三〇年・学園創立一〇〇周年記念〔感謝の集い〕」が国立京都国際会館において挙行された。

そして、二〇〇一年三月二〇日の卒業式の日にあわせ、立命館創始一三〇年・学園創立一〇〇周年を記念した「立命館その由来の碑」が、立命館大学父母教育後援会の寄贈により衣笠キャンパス正門正面、中央広場の東に建立され、除幕式が行われた。

ところで、二〇〇〇年四月は、百年史編纂室は修学館四階に仮住まい中で、資料も分散保管されていた。そのような環境の下で、最初に担当した業務は『立命館創始一三〇年・学園創立一〇〇周年記念写真集』（編集・広報課、監修・百年史編纂室、二〇〇〇年五月二〇日発行）の校正作業であった。基礎的な知識も無いまま、いきなり校正作業を担当して戸惑いもあったが、その後の百年史編纂作業にとっては大変良い勉強になった。

百年史の編纂にあたって苦労・工夫した点

百年史編纂室に就任した二〇〇〇年四月は、「はじめに」でも書いた通り百年史編纂の三つの大きな作業（通史編第二巻と第三巻、資料編第一巻）を同時進行で進めなければならない時期だった。

当時、通史編第二巻の執筆者用基礎資料は準備されていたが、通史編第三巻の執筆者用基礎資料は追加

準備する必要がある、以下の資料集（部内用）を順次作成することになった。

（一）百年史編纂のための基礎資料の準備

①『立命館役員・役職者』一覧（一九九八～二〇〇〇年度）の発行

『立命館役員・役職者』一覧（一九〇〇～一九九七年度）が発行されていたが、あらたに『立命館役員・役職者』一覧（一九九八～二〇〇〇年度）を追加作成し、二〇〇〇年九月に発行した。

②『立命館史略年表 戦後編』（一九四五～二〇〇〇年）の発行

通史編第二巻の執筆者用として『立命館史略年表 戦後編 一九四五～一九九七』が作成されていたが、二〇〇〇年度までの略年表を追加して、「戦後編」の再増補版を作成し、二〇〇一年一〇月に発行した。

③『全学協議会確認事項等資料集』（一九五七年度～一九九九年度全学協議会）の発行

新規に『全学協議会確認事項等資料集』を作成し、二〇〇二年一月に発行した。

④『立命館学園広報・ユニタース総目次』（通巻第一号～第三三三号）の発行

新規に『学園広報・ユニタース』の総目次を作成し、二〇〇二年三月に発行した。

⑤『立命館百年史紀要』別冊三号の発行

二〇〇二年一月から二〇〇二年一二月までに開催された『立命館百年史』通史編第三巻の研究会報告記録（計二四回分収録）を二〇〇三年三月に『立命館百年史紀要』別冊として発行した。

その他、私は、主として勤務時間外と夏期休暇などの休日には、通史編第二巻の草稿検証作業で収集した史料を整理して、「立命館寄宿舎（学寮）の変遷」を『立命館百年史紀要』第十号に、「立命館大学セミナーハウスの変遷」を『立命館百年史紀要』第十一号にそれぞれ執筆掲載することができた。この史料は、通史編第二巻の検証作業と第三巻の草稿執筆作業に大変役立った。

（二）『立命館百年史』資料編第一巻…二〇〇〇年一月発行

二〇〇〇年度は、資料編第一巻の最終校正の段階にあったので、夏期休暇はほとんど返上して校正作業を集中的に行い、一〇月には発行にこぎつけることができ、一〇月一〇日に挙行された「立命館創立一〇〇周年感謝の集い」の会場（国立京都国際会館）で刊行の記者発表をすることができた。

（三）『立命館百年史』通史編第二巻…二〇〇六年七月発行

一九九九年三月末に各執筆者へ草稿執筆依頼が行われていたが、現実には草稿の提出が始まったのは、二〇〇〇年九月頃からであった。通史編第二巻の編集作業委員会を組織して、二〇〇〇年一〇月からは、提出された草稿について随時検証する作業が開始された。

提出された草稿は、出典確認、検証、草稿の加除、リライト作業など諸作業を開始したが、草稿のなかには、一からのリライトが必要な草稿もあり、諸作業は労力も時間もかなり大変であった。

編集作業では、①章節項目間の調整、②内容上の重複調整、③論理の飛躍や説明不足、④大学紛争など評

価の問題、⑤表現の統一、⑥叙述のバラツキ等々校正作業には大変苦労した。

編集するうえで大きな論点となったテーマに関しては、独自の研究会や座談会などを開催して検討した。また、未提出の草稿執筆者へは督促する一方、既に提出が出揃った各章草稿については、主幹を中心とする草稿集中検討会を持つて、草稿の調整作業を行った。

二〇〇一年度前半期には、第一・第二章合同作業委員会、第三・第四章合同作業委員会、高中作業委員会を開催した。二〇〇一年度後半期からは、第三・第四章を中心とする草稿集中検討会を開催した。

ところで、通史編第二巻の第一章と第二章の出稿は遅れていたが、その原因は戦後直後から五〇年代についての史資料が不足していたこともあり、資料の調査確認や評価が困難で、予想外の労力と時間を必要としたことにある。さらに困難な状況が生じるようになったのは、主幹の山下健次先生が二〇〇二年一二月に病気で入院される事態になったことである。

(四) 『立命館百年史』通史編第三巻…二〇〇三年三月各執筆者へ草稿執筆依頼

通史編第三巻は、二〇〇〇年五月頃から編集方針、章節項目の「構成素案」を作成し、検討が始まった。なお、「構成素案」を作成するにあたっては、第三次長期計画から第五次長期計画までの長期計画と、一九七九年度全学協議会確認をはじめ、四年毎に開催される全学協議会確認、立命館史略年表などの基礎資料をもとにし、作成した構成素案について百年史編纂室事務局会議で討議を重ねた。そして、二〇〇一年六月には「構成案」にすることができた。

二〇〇一年度からは、第三巻編纂準備委員会打ち合わせ、その後に編纂準備委員会、第三巻編纂委員全体会議、編集小委員長会議、拡大編集小委員長会議等が組織され、「構成案」をめぐる議論が活発に行われた。また、第一章から第四章それぞれの小委員会が開催された。

二〇〇二年一月からは、各章それぞれの小委員会・研究会が開始され、研究会の内容は前述の通り二〇〇三年三月発行の『立命館百年史紀要』別冊に所収されている。そして、二〇〇二年度末には、草稿執筆者へ草稿依頼することができた。

(五) その他、百年史編纂に関連して

①『立命館百年史紀要』の編集

『立命館百年史紀要』第十号（二〇〇二年三月）発行を記念して、特集として、「立命館を築いた人びと」をシリーズで取り上げることができた。

②学園広報『ユニタース』の「百年史編纂室だより」

二〇〇一年度からは、「百年史編纂室だより」を百年史編纂室の室員が分担し、「通史第二巻草稿に学ぶ」をシリーズで執筆し、第二巻で取り上げている主題を順次紹介することができた。なお、執筆原稿は、その都度、百年史編纂室事務局会議で共通認識とすることができた。

③自校史教育の開講に協力

百年史編纂と密接に関連する自校史教育について、二〇〇一年度には教学部と百年史編纂室が協力

して、自校史教育の講義テーマ・担当者等についての検討を重ね、二〇〇二年度から一般教育特殊講義「日本近現代と立命館の一〇〇年」を初めて開講することができた。

④百年史編纂室・末川記念会館のホームページ開設

念願であったホームページの開設について、二〇〇二年に入ってから「百年史編纂室」と「末川記念会館」のホームページ開設の具体的な準備を開始し、二〇〇二年五月には初めてホームページを開設することができた。情報化社会にあつては、百年史編纂室の情報を発信するにはホームページは必要であり、有効な手段である。

編纂過程で判明した新たな事実

編纂過程で判明した新たな事実は数多くあつたが、そのほとんどは毎週開催される百年史編纂室事務局会議で報告されていた。手元にその資料が無いので、紙の史料以外で記憶に残っているものとして、一つは、西園寺公望の石膏像発見である。二〇〇一年三月八日に清水市（現在の静岡市清水区）のフェルケール博物館で開催されていた特別企画展「西園寺公望と興津」を見学に行った際に、西野和豊副館長さんから、「先日、清水市興津の清見寺で西園寺公望の石膏像が発見され、今朝の静岡新聞に掲載された」との説明を受け、運よく前日から展示されていた西園寺公望の石膏像を撮影させていたことができた。この時の写真と掲載された静岡新聞を大学へ持ち帰って報告したが、後日、西園寺公望像をブロンズ製

レリーフとして複製することになった。

二つ目は、商業学校の職業訓練の学科実習として、疑似体験を行うために作られたと思われる「立命館郵便」という切手（模造切手）が存在したことである。

三つ目は、第二次世界大戦末期に立命館大学が学内で製造した防衛戦用の槍に刻印した「立命館千本槍」の焼き印が発見されたことである。

百年史を今後の学園の発展に活用する視点（順不同）

百年史を今後の学園の発展に活用する方法としては、次のような幅広い活用が考えられる。

先ず、立命館学園の資料収集、整理・保存、選別・廃棄、閲覧・レファレンス（照会対応）、調査・研究、自校史教育、展示、資料公開、市民公開講座等々が考えられる。

次に主な活用の視点を述べることにしたい。

（一）『百年史小史』の発行

自校史教育のテキストとして、また、学生や生徒、教職員、卒業生等にとって、立命館の百年史と学園の現状が分かり易く把握できる「小史」の刊行は必要である。

(二) 自校史教育

二〇〇二年度から自校史教育「日本近現代と立命館の一〇〇年」の開講が始まったが、自校史教育は、学生に対して、自らが学んでいる場というものを考えさせること、大学で学ぶ意味や意義を自覚させること、「大学改革」の課題を共有化させる機能を持つているなど、開講した意義は大きかった。

自校史教育は、立命館の歴史を通して日本の近現代を見る、日本の近現代の歩みのなかで、身近な生きた歴史を学び、自らのアイデンティティを発見し、学ぶ意欲を高めることが期待される。

自校史教育は、立命館百年史編纂と密接に関わらせて、百年史編纂の成果を教育に生かしていくことが必要である。授業では、百年史編纂室に保管されている原資料や写真などを積極的に使って学生に学園の歴史をできるだけ具体的に提示していくことが有効と考える。

(三) 教職員研修

新規採用者研修や管理職研修などで、研修の一部として立命館百年史を取り入れる。

(四) 史資料の展示

収集した資料や調査・研究成果を踏まえて、立命館の歴史に関する展示を行い、公開することは学園関係者だけでなく、大学の社会貢献としても必要なことと考える。

既に展示室が設置されている多くの大学では、展示室は正門付近やキャンパス中央など分かり易い場所

に設置されているところが多い。「現物」を見ることによって関心も高まり、研究する人も増える。展示は学園史を中心とした学術研究の成果であるとともに、社会へ向けてのアピールの場として機能すると考える。したがって、展示室は、学園のイメージアップ、受験生に対する宣伝効果も大きいので、受験生や一般市民にも分かり易い場所に設置していただきたい。

(五) 公開講演会や市民講座の開講

百年史編纂での調査・研究成果をもとに、公開講演会や市民講座などを行うことは学園の社会貢献としても有効である。

(六) 立命館「白雲荘」校宅の利用活用

立命館では、旧広小路学舎跡や衣笠学舎、北大路学舎などに古い建物が全く残っていない。立命館学園創立者中川小十郎先生の「塔の段」旧邸（現「白雲荘」校宅）は、明治三八年に取得され、大正時代に拡充・本格的改築がされているが、立命館にとって貴重な歴史的建造物であるので、是非とも利用活用して保存していただきたい。

(七) アーカイヴズ（総合資料センター）の立ち上げ

立命館では過去に『立命館創立五十年史』執筆の際の資料が紛失して残っていないといわれている。そ

れは、恒常的な取扱い部局が無かったことが原因の一つである。このようなニガイ経験を教訓として、百年史編纂で収集した資料をはじめ、今後も系統的に資料を収集し、整理・保存、公開できるように「アーカイヴズ（立命館総合資料センター）」を早期に設置していただきたい。

私は、二〇〇二年二月二日に名古屋大学大学史資料室主催の第一回ワークショップ「アーカイヴズのすすめ」に参加した時に、名古屋大学名誉教授の小川克郎氏が講演で、「アーカイヴズとは古文書、古記録、記録保管所等々と略されているが、一言でいえば、『検索機能付記録保管庫』ではないかと考えられる」と話されたことが大変印象に残っている。そのような『検索機能付記録保管庫』が立命館にも早く実現できればと願ってきた。

なお、収集する資料は、機関の資料だけでなく、個人や団体（クラブ・サークル等）で保管されている資料も受け入れることが大事である。とくに、戦前に創設された古い歴史のあるクラブでは資料が散逸している場合も考えられるので、早急に収集・保存の手だてを取る必要がある。

新設されるであろう「アーカイヴズ（立命館総合資料センター）」が立命館の教学や経営などへの提言、問題提起といったシンクタンク機能を担うことも期待される。

資料は保存されなければならないが、保存すること自体が究極の目的ではなく、保存した資料を公開することが、アーカイヴズの使命である。利用者の立場からは、資料へアクセスできるかどうかが重要になる。

ところで、立命館百年史編纂室所蔵資料の中には、劣化が進んでいる資料が見受けられるので、早急に

複写やデジタル化とあわせて「現物」資料を長期保存する手だてが必要である。

(八) 研究会の組織化

史資料の調査・研究が発展するように、研究員（含ボランティア研究員）制度を導入し、研究会を組織することを提案したい。

(九) 立命館ゆかりの地めぐり

「立命館ゆかりの地（記念碑）」めぐりができるようにリーフレットを作成し、ゆかりの地めぐりツアーなどの取り組みが考えられる。この取り組みにより、立命館の歴史に関心が高まることを期待したい。例えば、

- ① 立命館創始の地（京都御苑内西園寺邸跡）
- ② 立命館草創の地（私立京都法政学校の仮校舎「清輝楼」跡）
- ③ 立命館学園発祥の地（立命館広小路学舎跡）
- ④ 創立者中川小十郎旧邸（立命館「白雲荘」校宅）
- ⑤ 創立者中川小十郎墓地（等持院北墓地）
- ⑥ 創立者中川小十郎顕彰碑（朱雀キャンパス「中川会館」南側の庭）
- ⑦ 故末川博名誉総長メモリアルホール（末川記念会館一階）

⑧「立命館その由来の碑」（衣笠キャンパス内）、その他

（一〇）ホームページのリニューアル

情報化社会の現代では、ホームページの役割は大きいので、百年史編纂室のホームページをリニューアルして、積極的に情報提供に活用していただきたい。

【参考文献】（順不同）

①全国大学史資料協議会編『日本の大学アーカイヴズ』京都大学学術出版会、二〇〇五年二月

本書は、日本における大学アーカイヴズを取り上げた最初のものである。第一部「大学アーカイヴズ論」、第二部「大学アーカイヴズのいま」、第三部「基本データ」という三部構成になっている。

②新谷恭明・折田悦郎編『大学とはなにか 九州大学に学ぶ人々へ』海鳥社、二〇〇二年三月

九州大学の大学史資料室を中心に編集されたもので、国立大学では初の低年次における大学論の授業である「大学とは何か———toに考える——」（総合科目）の講義録をもとにしたものである。

③立教大学立教学院史資料センター編『立教大学の歴史』立教大学、二〇〇七年一月

本書は、自校史教育「立教大学の歴史」のテキストとして、編集・執筆されたものである。

④松本皎著「中川〔塔之段〕旧邸と立命館〔白雲荘〕校宅の百年」『立命館百年史紀要』第十六号、立命館百年史編纂委員会、

二〇〇八年三月

創立者中川小十郎先生の「塔之段」旧邸である立命館「白雲荘」校宅について書かれている。

『通史二』編纂をふり返る

—資料発見の感動と苦勞—

齋藤 重

課長在任期間 二〇〇六年四月一日～二〇一〇年一月三十一日

この『立命館百年史紀要』第二十一号が刊行される頃には『立命館百年史通史三』が刊行されていることと思う。『紀要』の編集部はその刊行に関わって「百年史編纂をふり返る—歴代編纂室課長の随想—」を企画し、わたしも一筆書くことになった。

わたしは二〇〇六年春に百年史編纂室に着任するが、その時期は『立命館百年史通史二』が最終稿をむかえて刊行準備に入っている時期であった。当然それを引き継ぐ通史三の編纂は準備されているものだと考えていた。しかしそんなに甘くはなかった。わたしが「通史三の資料は」と問うと、諸兄から返ってくる答えは「八五年頃まではあるが以後はない。集めるしかない」というものであった。



正直、一からどうやって全学の資料を収集するか苦悩していた。特に通史三の時代は、理工学部 of B K C への拡充移転、その後の経済学部・経営学部の B K C 移転・新展開、A P U の創立など大きなプロジェクトをはじめ多様な改革を進めてきた時代である。それだけに、その資料の量は多く、しかもそのほとんどが現用資料として関連部課に保存されているため、資料無しに今後の通史三の編纂はどうなるのか、正直苦悩していた。

そんな困難な資料収集にもチャンスはめぐってきた。一度目のチャンスは衣笠キャンパスにあった当時の中川会館の本部機能が二〇〇六年秋に現在の朱雀キャンパスに引越すことになったとき、二度目は二〇〇八年度の生命科学部、薬学部を設置を機に、理工学部と情報理工学部もあわせて総合理工学院へと再編されることになったときであった。もちろんそれ以外にも日々組織が再編されるので、そのときもチャンスであった。また、通史三の資料とは直接関係がないが、中川小十郎生家資料のように突然にチャンスが訪れたり学園関係者からの申し出があることもある。こうしたチャンスを逃がさないことも大切である。

結果 “時と人” を得て実にダンボール箱八〇〇箱の各課資料を収集することができたのである。簡単に八〇〇箱といっても、自分の部課や事務室の引越しを想定していただけばわかるように中途半端な量でないことは理解されるであろう。しかもその一枚々の文書には教職員の英知が注がれており、想いのこもった文書なのだから扱いに注意しなければならない。通史三の編纂のむずかしさを資料収集の苦労の中から学んだのである。

学園総長が通史で語ったこと

通史三の刊行によってようやく完結をむかえるこの時期に少しふり返って通史一、通史二は何を語ろうとしたのか編纂委員長である総長の序を再読してみた。

大南正瑛元立命館総長は通史一の序文で立命館学園の連綿と続く歴史の中で「『自由と清新』の建学の精神に、つねに現代の光を照らし、自主的で創造的な学園づくりに努めてきた。また、戦後は『平和と民主主義』を教育・研究の理念に据えて、日本と世界の学術研究の発展と高等教育の発展に先進的な役割を果たしてきた。そして地域に根差し、開かれた世界水準の大学を目指し、いまや私立大学の雄としてその望ましい地位を占めつつある」（『立命館百年史通史一』序）と述べている。

長田豊臣前立命館総長は『通史二』序のなかで「立命館という一私学の学園史の記述」は「現在の時点での学園の戦後史の総括であるとともに、一私学の苦闘の歴史を通してみられた日本の戦後史の一つの叙述の試み」でもあるという。その試みが通史であるという。歴史の叙述の難しさもあるが、「学園が絶えず戦後社会と真剣に向き合ってきたという姿勢と同じように、この『通史二』もまた、歴史記述のそうしたアポリアを真摯に引き受けた多くの人の手による共同作業をへて」（『立命館百年史通史二』序）編纂されたと言っている。『通史三』もまた「歴史記述のアポリアを真摯に引き受けた」人々によって資料は収集され原稿が執筆されたのだが、その人たちが歴史の主体者として登場する。それが『通史三』で

ある。また大南正瑛元立命館総長のいう「自主的で創造的な学園づくり」の内的動力を外部から評価した論評もある。

「もとより立命館は、日本における長期計画に基づく大学運営の元祖である。今や国立大学法人をはじめ中長期計画に基づく運営はスタンダードになりつつあるが、当時、こうした運営は全国的には皆無であった。一九八〇年代から始まる長期計画に基づく大学運営は『立命館方式』と呼ばれ、独特の運営システムをとる大学と見られていた。大学マネジメントそのものが馴染みのなかった時代から、目標と計画を鮮明にし、その到達状況や評価を、学生、教職員を含む全大学人で構成される全学協議会で厳しく総括、徹底した議論で検証し、妥協のない課題設定を行うことで改革を前進させてきた。」（篠田道夫 日本福祉大学常任理事／桜美林大学大学院教授「二〇二〇年、立命館の目指すもの」『リクルートカレッジマネジメント―創刊三〇周年記念特集―二〇二〇年そのとき大学は―』一七五号（株）リクルート、二〇二二年）

八〇年代、九〇年代の立命館の歴史は、まさに「全学協システム」と「長期計画方式」とを軸として動いてきた。それを裏付ける資料が百年史編纂室には集積されている。

資料はドラマをつくりドラマは資料によって深まる

新しい資料は時としてそれまでのドラマを変えたり深めたりする。学術研究の推論を裏付けたりする重

要性ももっている。在職中思い出に残るいくつかの資料がある。そのいくつかとエピソードを紹介したい。資料の発見や整理は大変だが時として思いがけない面白さもある。わたしが在任中に整理したり発見したりしたいくつかの資料を紹介することで、資料の大切さ、面白さを感じていただき、資料を継続的に収集、整理、公開していく地道な取り組みの大切さを理解いただければと思う。

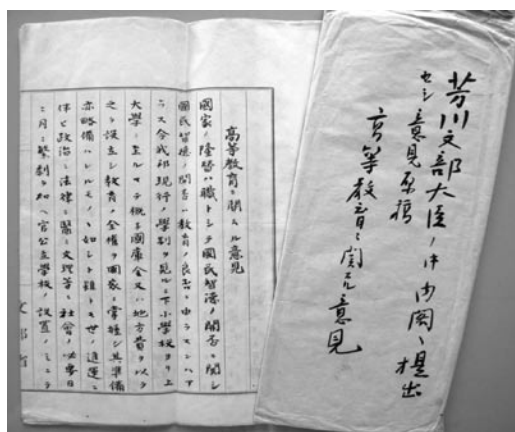
〔資料〕 図書館貴重書庫資料 — 資料番号七五

図書館貴重書庫資料とは衣笠キャンパスの図書館内にある貴重書庫に収蔵されている資料群のことである。この資料は相当な年月を経ているためあらかじめ百年史編纂室が調査することになったものである。詳しくは『立命館百年史紀要』 第二十号「図書館貴重書庫資料・調査報告」をご参照いただきたい。

このなかで「箱七五」（実際のものは皮の大きなトランクである）とよばれる資料番号七五とされるものである。このトランクには「開けるな」と書きがされていてしかも鍵が壊れていたこともあって長いこと開けられた形跡がなく、その中にどんな資料が入っているか興味をもたせるものであった。後述する百年史編纂室資料整理アルバイトの長谷川澄夫氏、当時百年史編纂室課員であった井上雅人氏の立会いのもとに開けてみた。その中に文部省関係文書が五件あった。

その資料の五件中三件が高等教育に関する意見書であり、残りはそれぞれ教育制度の改革論と小学校令に関する文書であった（『立命館百年史紀要』 第二十号「図書館貴重書庫資料・調査報告」）。特に

わたしが興味をもったのは中川小十郎が文部省時代（一八九三〈明治二六〉年～一八九八〈明治三一〉年）に書いたと思われる書簡「芳川文部大臣ノトキ内閣へ提出セシ意見原稿高等教育二関スル意見」（一八九五〈明治二八〉年）である。この書簡の背景や資料的意味などは今後研究で明らかにされるであろうが、わたしが推察したのは、当時の文部大臣芳川顕正の文書「高等教育二関スル意見」（国立国会図書館芳川顕正文書分類番号三八）を中川小十郎が下書きしたのではないかということである。その下書きにはところどころ朱が入っていて修正されている。その朱は文部大臣自らが入れたものではないかと思われるので国立国会図書館にも問い合わせたところ、芳川顕正文書として同名の公文書が保存されていることがわかった。早速その複写を取り寄せ中川小十郎が書いたと思われる書簡と比較してみた。すると朱の入った部分を除けばほとんど同一であった。それでこの書簡は当時の文部大臣芳川顕正の文書を中川小十郎が下書きをしたのであろうことを確信した。その時わたしが感銘をうけたのは、この意見書を下書きしたとき中川小十郎は三〇歳であり、すでに高等教育に対する広い視野と見識をもっていたことである。その二年後の一八九七（明治三〇）年、中川小十郎は三二歳で京都帝国



高等教育二関スル意見書

大学の創設に力を尽くし、その三年後の一九〇〇（明治三三）年、三五歳で立命館大学の前身である京都法政学校を創ることになるのである。

それだけにこの文書を大切にしたかったのか、わざわざ“開けるな”と注意書きしたトランク（資料番号七五）に保存していたのかもしれない。そんな想いをめぐらせ学園創立者の見識にふれたとき、感激と安堵を感じたのである。

〔資料〕 中川小十郎生家資料

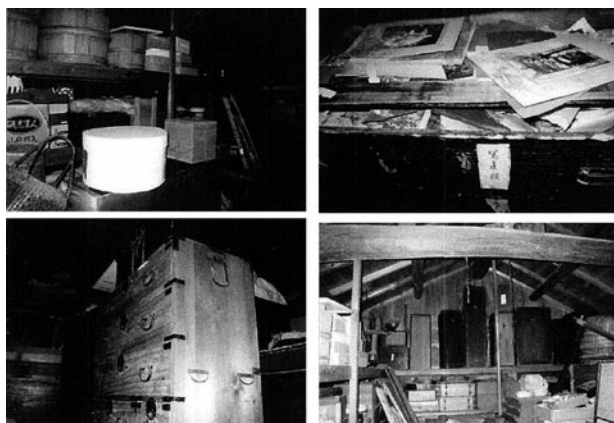
すでに、『立命館百年史紀要』第十九号、第二十号にその調査経過は述べられているのでここでは省略するが、今回の中川小十郎生家資料（以下生家資料）は、実家のあれやこれやを思いやる中川小十郎個人の書簡がこれまでになく数多く残されていたという。この資料も偶然に“時と人”を得て集まってきたものである。

二〇〇八年九月八日、小原輝三氏（元立命館職員）から電話が入ってきた。「中川小十郎の資料のことで友達の長谷川から相談を受けた。君に電話させてもいいか」というのである。了解の返事をした直後に長谷川澄夫氏（本学OBで当時「馬路町史」編纂委員、現在百年史編纂室資料整理アルバイト）から電話が入った。その内容は、中川小十郎の生家は現在長屋門と蔵（二戸前^{にとまえ}）、納屋、祠^{ほこら}が残されている。近々解体されると聞いた。母校の創立者の生家だから貴重な資料があるかもしれないと思って電話したという

ことだった。すぐに松岡正美百年史編纂室室長（当時）と相談したところ「生家だから貴重な資料があるでしょう、すぐに行ってみなさい」ということになった。長谷川澄夫氏（以下長谷川氏）に連絡し、近々訪問することを伝え段取りをお願いした。二〇〇八年九月一七日、現地で長谷川氏と待ち合わせることにし、わたしと松本皎氏（元立命館職員）が亀岡市馬路町の生家を訪ねた。当日は生家を預かる中川陽子氏にご案内いただいた。その後中川陽子氏の了解を得て、当立命館が資料を預かり調査することになり、二〇〇九年一月、立命館に資料が搬入された。こうして今までだれも手をつけなかった生家資料の調査が始まったのである。この調査が完了すれば、中川小十郎関係資料がほぼ全て立命館に集積したことになるそうである。

【資料】戦後初の中国代表团李徳全团长からのお礼の手紙

一九五四（昭和二九）年一〇月三〇日、新中国（中華人民共和国）成立後初めての代表团、紅十字会代



生家の蔵の様子

表団（団長李徳全）が訪日した。当初、団長の李徳全が立命館大学を訪問する予定であったが、予定を変更して東京に向かった。しかし秘書の蕭向前氏シアオシンチエンが代表団を代表して立命館大学を表敬訪問し、わだつみ像に献花して平和を誓ったのである。

一九五四年来日の時の様子を蕭向前氏シアオシンチエンは日中国交回復の記録『永遠の隣国として』とこしえに次のように記している。

「忘れたくない思い出がある。代表団が京都に到着その日の予定を確認しようとしているところへ、日程を管理している日本赤十字社のK氏がわたしのところにやって来た。京都の立命館大学の末川博総長と学生代表が中国紅十字会代表団の歓迎集会を強く望んでいると伝えてきたのである。今回の代表団は、大衆集会には原則として参加しないと日本赤十字社が伝えても、末川総長は承知せず、ねばった。その結果、わたしが通訳をつれて、代表団の代表として出席するならと工藤は妥協したのだという。団長と廖公リャオクン（注・廖承志リャオチンヂーへりようしようし）の指示を仰ぐと、いいだろうと言って、用意した原稿に目を通し、その場でいくらかことばを補ってくれた。〈孤軍奮闘〉することになったわたしは、立命館大学に向かった。大学に着くと、すでに講堂の外まで人があふれていて、まるで英雄のように迎えられた。まず反戦の象徴である有名な〈わだつみ像〉に花をささげ、黙祷した。その後、講堂に案内されると、大きな講堂の座席はぎっしりと人がつまり立っている人もたくさんいた。（中略） 宿泊先のホテルに戻って〈これほど感動したことはないままでありませんでした〉と代表団に報告した。予定外の収穫を、代表団の団員は大声をあげて喜んでくれた。」

これは、新中国代表団が日本の大学を訪問した最初でもあったと思われる。その後一九五五（昭和三〇）年に中国科学院院長郭沫若氏を団長に学術視察を目的に中国科学院代表団が来学し、わだつみ像に花をささげ黙祷した。代表団は歓迎集会にも参加し熱いメッセージを学生たちに送っている。この時の郭沫若氏自身の肉声録音が見つかり、すでにデジタル化し保存されている。

李徳全団長に絵画「広島原爆ドーム」（木村武司作）を贈呈する

続いて一九五七（昭和三二）年の暮れ、第二次中国紅十字会代表団（団長李徳全）が訪日した。この時に関係した資料が寄贈されている。その資料とは李徳全氏からのお礼の手紙と封筒である。この宛名は木村武司様となっている。この木村氏は立命館高等学校、立命館大学と学んできたOBである。大学時代は美術研究部に所属しOBとなつてからも二科会やアトリエ「洛」で美術指導をするなど活



原爆ドームの絵

躍っていた。その木村氏が、中国温家宝首相の来日（二〇〇七年四月）が決まっていた頃、義子を通じて、「以前（一九五七年）中国代表团李徳全団長に立命館大学から記念として自分の絵を贈呈した。その絵がその後どうなったか、もしわかれば死ぬまでにもう一度自分の絵に会いたい」と連絡されてきた。そして、「絵を贈呈したという証拠もある」といつて百年史編纂室に寄贈してくれたのが、李徳全氏のお礼の手紙と封筒である。生前、木村氏にインタビューの機会を得たわたしは、お会いしてそのいきさつをお聞きすることができた。木村氏はうれしそうに二時間ほど話してくれた。

木村氏によれば、ある日、当時の末川博総長から総長室に呼ばれ、末川総長に「美術研究会の展示会で君の絵をみて気に入りました。実は今度中国代表团（団長李徳全）が立命館にきます。それで中国代表团に君の絵を記念品として送りたいと考えています。立命館に寄贈してくれませんか」と頼まれたという。木村氏自身も中国代表团への記念品として贈られるのであれば非常に光栄だということ、末川総長に頼まれたからには断れないとの思いで承諾したというのである。こうして木村氏の絵は立命館大学の記念品として中国代表团に贈呈されたのである。

実際には木村武司氏が描いた絵はいまだにその行方はわかっていないが、わたしが木村氏自身に中国代表团に送った絵と同じようなモチーフで書いてもらった絵が原爆ドーム（写真）の絵である。これも李徳全氏の礼状と封筒とともに百年史編纂室に保存されている。

二〇一〇年七月に木村武司氏は逝去された。生前、氏に「絵が好きならわたしの画廊にきなさい」と誘われたことを思い出す。

先輩木村武司氏のご冥福をお祈りいたします。

〔資料〕夜間部学生推移表―最後の二部学生

立命館大学の前身である京都法政学校は、「勤労者を学生とする夜学としての出発」（『通史一』序章）といわれているようにその出発点は勤労者を対象とした夜学である。学園史ではかならず語られることである。その伝統ある夜間部が通史三の時代に終焉を迎えるのである。

夜間部が終焉するということは、そこに確かに最後まで在籍した学生がいたはずである。そこで、『通史三』の資料として掲載すべく学事課の祝迫一氏にお願いして、一九八〇年から二〇〇七年までの二部学生数の一覧表を作成してもらった。その表では、「夜間部最後の学生」が一人いたことがわかった。夜間主コースは二〇〇七年度に廃止されるが彼は在籍のまま二〇〇八年度は休学し、二〇〇九年度に復学しようとしたが、すでに夜間主コースはないため昼夜区分のない学部にて七回生で復学した。これが夜間部の最後の学生である。

ついでに二部学友会の解消についても少し触れると、学生運動が活発な一九六〇年代から一九七〇年代、二部学友会のデモの隊列はいつも学生隊列の最後で労働者隊列の最初という隊列に位置して、その存在感をアピールしていたことを思い出す。その二部学友会が一部学友会との統合（事実上の解散）を決めたのは二〇〇一年一月一三日、二部学友会代議員会であった。こうして伝統ある二部学友会は歴史に幕を下ろ

したのである。これもまた『通史三』の時代である。

他にも、『通史三』の編纂にあわせて古い資料から新しい資料まで収集することができた。収集された『通史三』の資料は、現用・非現用を問わず人権などに配慮された資料の精選と守秘義務が重く架せられている。

『通史三』にはどうしても現用資料が必要だった

当初『通史三』の範囲は一九八〇年から二〇〇〇年のAPUの開学までをその対象範囲としていたが、後に二〇〇六年の「立命館憲章」制定と立命館小学校の開設までを立命館学園の発展史の区切りとすることが決定された。この決定は、いまからみればもう六年以上前の話になるが、対象範囲変更の決定当時からすれば二・三年前のことであり「それは歴史とはいわない、無理だ」と変更に対する反対意見がある一方、一〇〇年の歴史の中で初めて立命館の建学の精神や教育理念、教育・研究の倫理などを定めた「立命館憲章制定を区切りとすることはもっとも相応しい」という賛成もあった。結果として、二〇〇六年までを『通史三』の範囲として扱うことになったが、これまで収集してきた資料は、当初予定の二〇〇〇年までを前提としたものであったから、二〇〇〇年以降二〇〇六年までの収集は大変であった。

この時期の資料は、まだ各部課で使っている「現用資料」や、保存期間中に参考利用される可能性のあ

る「半現用資料」が多く、担当課や事務室に保存されているため「いま使っている文書だから」「それは取扱注意文書だから」といつて見せてもらえないこともあった。複写も不可、「ましてや渡すなんてもつてのほか」と資料を提供していただけず悔しい思いもした。そうしたこともあつて百年史編纂室は『通史三』の草稿執筆を依頼した方からの資料提供の要請にも十分に応じられない状態となり、執筆者には随分迷惑をかけた。今から思えば懐かしいが当時は資料収集と執筆の催促に必死であつた。

資料収集の転機がやってきた。

その現用資料の収集にとって大きな転機がやってきた。法人本部が朱雀キャンパスに移転（二〇〇六年）するとき、また理工系学部が再編され総合理工学院になったとき（二〇〇八年）である。それ以外には部課が統廃合されたときなどをうまく資料収集の機会にとらえた。朱雀移転の準備のとき、当時百年史編纂室の伊藤昇次長（当時）が、「これ（移転）絶対のチャンスだぞ。この機会を逃したら、二度と機会はないぞ」ということになり、二人で各課を回り始めることにした。特に管財課は移転担当部課として朱雀キャンパスへ移転する部課に諸書類整理を要請していたので、どのようにして資料を残すことを周知するか、一時的な保管場所をどこにするか、資料の管理責任は誰にするかなどを相談することになった。

結局、移転各課に対して部課長会議を通じて朱雀キャンパスにもっていく文書と百年史編纂室に移管する文書を区別して残すことを周知した。保管場所については、移転各課が管財課の指示の下に区分し、移

管するものは第二倉庫（元中央グラウンド地下）へ搬送することにした。第二倉庫では各箇所に各課の名札をおき、その場に置いてもらうことにした。そのスペースはあらかじめ各課の量を概算してそのスペースも確保していた。そして管理責任者はわたしということになった。

捨てるなら一報を

こうして集まってきた数はダンボール箱で実に五三〇箱ほどであったのではないかと記憶している。特に調査企画課、広報課、管理課など法人の部課の資料が移管されたことは大きかった。とりわけ調査企画課の資料には、前述のようなBKC移転、国際関係学部設置、政策科学部設置、APU創設、宇治学園、慶祥学園との法人合併など大きなプロジェクトを裏付ける折衝記録や政策文書が多く含まれており、『通史三』の編纂にあたり非常に助かった。さらに総合理工学院を発足させるとき理工学部事務室などから理工学部のBKCへの拡充移転に関する資料など約三〇〇箱を移管していただいた。ある部課では、資料をダンボールに入れる作業から運搬に至るまでわたしたちだけで行ったこともある。さすがにこの時ばかりは「少しは手伝えよ。同じ立命館の仕事をしているのに。」と思ったものだ。

あまりの量に唾然としながら、わたしと百年史編纂室の倉本広子さん、湯浅敬子さんの三人でダンボールを一箱ずつ開け、のべ四日間、三二時間かけて選別した。苦しい作業ではあったがおかげで理工学部拡充移転の際の文部省との折衝記録や滋賀県、草津市との折衝記録、地域住民との懇談会記録など貴重な資

料を収集することができた。

これ以外にも各課の行政文書、各種ポスター、オープンキャンパスのグッズ、各種講演会録音テープ・ビデオ、記念式典パンフレットや記念品、各建築物の竣工パンフレット、その他の写真資料が集まった。特に一九九〇年代はデジタル化の急速な進展によってフォーマットがどんどん変わり、資料保存のためにデータコンバートが必要になった。覚えている方もおられるかもしれないが、一九八〇年代後半一世を風靡したワープロ（キャノワード、書院など）フォーマットのFD、一九九〇年代初頭の事務用ではNECのN5200シリーズのLANWORDフォーマットのFDも大量に移管された。これらのフォーマットはその後衰退したため、データコンバートしないと何が書いてあるかわからなかったのだ。映像もそれまでの一六ミリフィルムからVHSビデオテープに変わり、プロモーションビデオや広報ビデオ、講演会ビデオなどが急増し、映像資料も大量に移管されてきた。

広報課からの移管は、各種パンフレットやポスター、広報誌に使った写真（ネガ含む）、ビデオテープなどのヴィジュアル系資料が圧倒的に多く、管財課からは建築写真、竣工式写真、設計図など従来にない資料が豊富に移管されてきた。

百年史編纂室は都度「捨てるなら一報を」と各課に訴えていたが、そのうち「勝手に資料を捨てると怒られるぞ。相談してから捨てや」といううわさが立ち始め、段々と定着したのか、各課から問い合わせ電話が入るようになってきた。

学園の博物館ができることを夢見て

百年史編纂室の目的は、立命館学園の百年史を編纂することであり、そこに集積した文書やモノ資料は、そのために使われてきた。それが原則的立場であるが物事はそうはいかない。近年は、「編纂室の資料は学園全体の資料なのだから公開すべきだ」という意見と「編纂室の資料は編纂のためのものであって編纂室は資料室あるいは博物館ではない」との意見の狭間でゆれてきた。百年史編纂室ができてから九年経った二〇〇〇年六月三〇日の百年史編纂委員会常任委員会に「総合資料センター（仮称）の構想についてへメモ」が百年史編纂室から提案された。この提案は学園の歴史的史資料を学園の社会性と学園自らを評価する記録として保存・活用する目的から、「総合資料センター」の検討の必要性を強調している。そして『通史三』が刊行された今日「立命館 史資料センター」の設置が決まり、ようやく動き始めたのである。センターは学園博物館と「似た機能をもつもの」であるので、博物館事業の概要をわかりやすく説明したものがあつたので紹介しておきたい。

滋賀県立琵琶湖博物館は博物館事業を一本の樹に例えて説明している。博物館事業を一本の樹に例えると、展示や出版などの事業は枝葉や果実にあたり、保管された資料は幹、研究調査は根にあたとアピールしている。これを「立命館 史資料センター」に当てはめると、教育・研究を樹とし資料はその幹にあたり、展示や刊行物を通じて豊かな枝葉になり豊穠な果実になるのであろう。しかし研究というしっかりと根が張られ広がらないことには大樹にはならないのである。しかしそれも小さな苗木から始まる。とに

もかくにも苗木を植えなければ始まらない。今がその時期だと思っている。そうして大きな樹木に育てるため日々の教職員の営む教育・研究という栄養はたえず注入されなければ大樹には育たない。立命館という教育・研究の樹は中川小十郎と言う弱冠三十五歳の若者によって植えられた。その樹は星霜を経て一二年なんなんとしている。もうそろそろこの樹を「樹齡一二年」の大樹として人々とそして育ててきた教職員、その樹下の学生たちに姿を見せてもいい時代ではないだろうか。

やがて

正直、自分がまさか立命館学園の歴史編纂に関わるとは思ってもいなかった。たしかに百年史編纂室には、私が知っている諸兄も多く『立命館百年史紀要』に二度ほど執筆させていただいたことはあるが、その程度の関わりである。しかし実際編纂にたずさわり始めると、徐々にその重みを実感するはめになった。『通史三』は現代史であるがゆえに、拾うべき事象、拾った事象に対する記述の難しさ、言葉を選ぶことの難しさなどを痛感した。また尊敬する先生方からの批判や執筆からの離脱、執筆の遅延に先が見えず正直堪えたこともある。しかし一方では志半ばで逝去された山下健次先生、金井直彦氏など先輩諸兄の大変な苦勞に思いをめぐらせたとき、それに応えなければと、決意を新たにした。これも事実である。

わたしは改めて『立命館百年史 通史三』を手にとって見るとき、その輝かしい立命館の百年史に少しでも自身の名を残せたことは本当に光栄だと思っている。またいっしょに地味な資料の収集と整理に協力

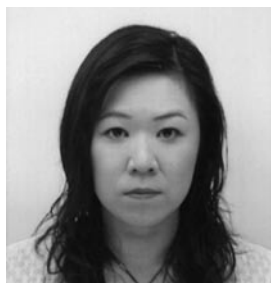
していただいた倉本広子さん、湯浅敬子さん、その他多くの職員、派遣職員 みなさんにも助けを
いて本当に感謝している。

学園の「博物館」ができることを夢見続けている。

歴代編纂室課長の随想をお寄せいただいて

百年史編纂室課長 佐々木雅美

課長在任期間 二〇一〇年十一月一日～



二〇一三年二月、『立命館百年史通史三』の発刊を迎えることができた。過去の記録をたどると、常任理事会において『通史三』の草稿執筆者を決定したのが二〇〇三年三月のことであつたので、発刊まで実に一〇年の歳月を要したことになる。一九九一年の百年史編纂室の設置から実に二〇年の長きにわたり続けられてきた百年史編纂が完結をみる。『通史三』が発刊され、『立命館百年史』が完結を迎えるとともに、百年史編纂室も新たに「立命館史資料センター」開設に向けた準備を担う部局として再編成されることになる。その節目を迎えるにあたり、百年史編纂室が設置されて以降の歴代編纂室課長にそれぞれ百年史編纂や編纂室での業務を振り返っていただき、思われるところ、ご苦労されたことなどをお寄せいただこうと、今号の『百年史紀要』でこの随想を企画すること

になった。歴代課長による随想は、直接に編纂の「現場」において指揮をとられ、奮闘された記録であり、編纂の取り組みを跡付ける記録でもある。各歴代課長には、かなり以前のことを思い出していたきながらのご執筆となったことは想像に難くないが、編纂の業務に携わられた課長ならではの緻密さやご記憶の正確さでのご執筆いただき、あるいは今なお伝わる情熱あふれる文面で随想をお寄せいただき、こうしてすべての歴代課長の随想を掲載させていただくことができ感謝申しあげる。

歴代課長の随想には、百年史編纂の基礎となるご苦勞の数々や編纂後を見越しての課題や期待が込められている。百年史編纂の完結にあたり、現在の百年史編纂室をあずかる立場から、思うところを少し記させていたきたいと思う。

私自身が百年史編纂の業務に携わるようになったのは、二〇一〇年五月から（二〇一〇年一〇月まで総務部付課長として勤務）であり、当時はすでに、『通史三』各執筆者からの草稿が百年史編纂室会議を中心に取りまとめてリایتされ、徐々に印刷業者に入稿して、業者からあがってきたものに対して事務局が文章の内容や事実関係、引用の点検等を行っている段階であった。私は立命館への入職が二〇〇〇年であったから、歴代の編纂室課長の中には直接に存じ上げない先輩課長もおられるのであるが、各課長の随想に凝縮されているように、史資料の収集、整理に始まり編纂にいたる、先輩課長たちが築かれた年史編纂業務の延長のうえに今日の『通史三』発刊、『立命館百年史』完結があるのだということに思いを強くせざるを得なかった。私のような若輩の課長が百年史編纂のいわば最後の部分だけを引き継がせていた

くようなかたちで編纂業務を担わせていただき、『立命館百年史』が完結を迎えるということはたいへん恐縮なことであるが、先輩課長から引き継いだ百年史編纂という学園の歴史の根幹にかかわる仕事に携われたことを誇りに思う。

『通史三』の各章の草稿は、当時、直接に学園創造にかかわられた教職員や、現在職掌されている教職員の手によるものである。また草稿にいたるまでの検討や研究における教職協働、全学園の教職員が参加した執筆体制、校正や編集における担当部課の協力などは、『通史三』の編纂体制が全学園あげて取り組まれていったことを示している。これは『通史三』編纂における立命館らしさの現れであるが、複数の歴代課長がふれておられるように、そこには課長や職員だけではなく、アルバイトの方や大学院生などを含め、多くの人々の支えと実際の作業があつて『立命館百年史』の完結があるということを忘れてはならない。しかも、編纂自体が長期にわたったこともあり、故人となられた方もおられる。そうした百年史編纂にかかわられた多くの方々を思い出して随想をお書きいただいたことは、百年史編纂という仕事の重みを改めて認識することとなった。

歴代課長の随想で共通するのはやはり、編纂の第一歩となる史資料の収集、整理についてのご苦勞である。「課」が設置されても人的体制や資料収集に対する理解や協力体制も不十分な中、個人の手により手探りで史資料の収集が始められたこと、現用の資料の収集が必要となる『通史三』編纂にあたつてのご苦勞など、どの時代、どの課長においても、年史編纂や史資料にかかわる部局の職員にとって共通の「悩み」が示されていた。それは現在にも共通することかもしれない。しかし、そうして集められた史資料が

整っていないければ、今日の『立命館百年史』の完成をみていない、あるいは編纂がさらに長期化したことも予想される。そして、それらの収集された史資料から作成された百年史編纂の基礎資料は、その緻密さと、その作成過程として想像する地道な作業に驚かされるものばかりである。それらの基礎資料は、『通史三』編纂にあたつて大いに活用させていただいた。この場を借りて御礼申しあげる。

さらに編纂や史資料の保管にとつて、編纂室の移転の影響やご苦勞は相当に大きかったものと思われる。通常の部課においても移転というのは相当の労力と配慮を要する事項であるのに、大量の史資料を扱い、その保存を行う百年史編纂室が、しかも編纂の途中において移転を迫られるというのは、並大抵のことではなかったと想像する。西岡氏も述べておられたように、史資料の紛失等を防ぐためにも、編纂が予定されている相当の期間は安定的に同一の場所での執務を見込むことが不可欠であると思われる。今後、将来の編纂がいつ頃予定されるものかは現在のところ未定であるが、編纂体制を組むにあたつては編纂の場所についても留意されることをぜひお願いしておきたい。

最後に、歴代課長から提起された課題や期待に対しての取り組み状況についてふれておく。

一つは、年史編纂後の史資料の扱いについてである。これは『立命館五十年史』編纂後の史資料の行方不明を思えば、当然のご指摘である。今号の『百年史紀要』の「立命館史資料センター（仮称）の設置について」において説明されているように、すでに『通史三』発刊後を見越して、「学園創造に関する史資料の収集・保存」、「立命館憲章」等に基づく学園アイデンティティ醸成の取組みの支援・発信」、「史

資料の公開を通じた学園の社会貢献」を主な目的と任務とする「立命館 史資料センター」の設置が承認されている。二〇一三年度から当面は「立命館 史資料センター準備室」として、百年史編纂で収集した資料の整理を進め、史資料の活用や公開に向けた試行を積み重ねていくこととしている。過去の反省を受け継ぎ、史資料を散逸させることなく『立命館百年史』とともに活用を図っていこうと考えている。

いま一つは、歴代課長から「心残りのこと」（西川氏）、「百年史を今後の学園の発展に活用する視点」（橋本氏）などのご指摘いただいた点であり、それらの中には、自校史教育や職員研修への協力、史資料の展示、「立命館ゆかりの地」マップの作成とその活用のほか、創立者・中川小十郎の文書に関する研究会など、現在の百年史編纂室において百年史編纂と並行して部分的に実施できたものもあるが、歴代課長の時代からの課題が今日まで続いている課題の歴史の重みを改めて認識した。『通史三』の発刊に伴い、今後、『資料編三』の編集はもとより、『立命館百年史』の『通史一、二、三』の索引編（事項編や人名編など）や年表編の作成、さらには普及版『立命館百年小史』（仮称）の作成などの検討課題があるが、『立命館百年史』や学園創造の史資料などの活用にあたっては、何よりもまず、学生・生徒・児童、教職員など学園構成員の教育・研究や学園運営に役立ててもらおうという視点を貫こうと考えている。さらには校友や父母の学園への理解を促進するために、広くは社会全体の学園に対する信頼の形成や学術研究への協力等を通じた社会貢献のために、史資料を活用していきたいと考えている。

学園創造の営みそれ自体が、過去から現在、現在から未来へと受け継がれていくように、学園の歴史と史資料を受け継ぎ、その活用を図りながら、未来の発展のためにつなげていくことが歴史にかかわる部署

で働く者の使命であると思う。歴代課長をはじめ、関係各位の今後いつそのご指導とご協力をお願いします。次第である。

年 月	事項	発行誌	発行誌(未定稿/部外資料)	課 係	執務室移転
1990	5「立命館創立五十周年記念事業」の一環として「創立五十年史」編纂を目的とした				
1991					
1992					
1993	3 立命館創立五十年史				
1981	立命館史編纂委員会 設置 「60周年記念事業」の一環として「立命館戦後史」編纂を目的とした。 その後36年11月に「立命館創始20年・学園創立90周年記念事業」の一環としての「立命館百年史」編纂を目的とした。				
1982					
1983					
1984					
1985	11 立命館八十五年史資料集 第一集		『立命館65年史周年集』(未定稿)		
1986	11 立命館八十五年史資料集 第二集				
1987	1 立命館八十五年史資料集 第三集				
1988	3 立命館八十五年史資料集 第四集				
1989	6 立命館八十五年史資料集 第五集				
1990	11 立命館八十五年史資料集 第六集				
1991	8 立命館八十五年史資料集 第七集				
1992	12 立命館八十五年史資料集 第八集				
1993	3 立命館百年史編纂委員会 設置 32000年の創立100周年にむけ「立命館百年史」編纂を目的とした。				
1994	5 立命館百年史資料集 第一集 『立命館百年史紀要』 第一号		『立命館開校50周年記念選一 賀賀』(未定稿) 『立命館大寺所蔵 大学・学校史関連資料集(含 関連図書・参考文献)』		
1995	6 立命館百年史資料集 第二集		『及び子や兵右衛門重康と中川小十郎』(中川修次) (改訂増補1998.3 増訂増補 1998.3)		
1996	4 立命館百年史紀要 第四号 立命館卒業生の職中体験～学生出陣・学生勤労動員前後～		『立命館史に関する各氏の記述』(流 泉・ 関谷 正孝 著 増補版)		
1997	7 立命館百年史紀要 第五号 立命館卒業生の職中体験～学生出陣・学生勤労動員前後～		『立命館史に関する各氏の記述』(流 泉・ 関谷 正孝 著 増補版)		
1998	8 立命館百年史紀要 第六号 立命館卒業生の職中体験～学生出陣・学生勤労動員前後～		『立命館史に関する各氏の記述』(流 泉・ 関谷 正孝 著 増補版)		
1999	9 立命館百年史紀要 第七号 立命館卒業生の職中体験～学生出陣・学生勤労動員前後～		『立命館史に関する各氏の記述』(流 泉・ 関谷 正孝 著 増補版)		
2000	10 立命館百年史紀要 第八号 立命館卒業生の職中体験～学生出陣・学生勤労動員前後～		『立命館史に関する各氏の記述』(流 泉・ 関谷 正孝 著 増補版)		
2001	11 立命館百年史紀要 第九号 立命館卒業生の職中体験～学生出陣・学生勤労動員前後～		『立命館史に関する各氏の記述』(流 泉・ 関谷 正孝 著 増補版)		
2002	12 立命館百年史紀要 第十号 立命館卒業生の職中体験～学生出陣・学生勤労動員前後～		『立命館史に関する各氏の記述』(流 泉・ 関谷 正孝 著 増補版)		
2003	1 立命館百年史紀要 第十一号 立命館卒業生の職中体験～学生出陣・学生勤労動員前後～		『立命館史に関する各氏の記述』(流 泉・ 関谷 正孝 著 増補版)		
2004	2 立命館百年史紀要 第十二号 立命館卒業生の職中体験～学生出陣・学生勤労動員前後～		『立命館史に関する各氏の記述』(流 泉・ 関谷 正孝 著 増補版)		
2005	3 立命館百年史紀要 第十三号 立命館卒業生の職中体験～学生出陣・学生勤労動員前後～		『立命館史に関する各氏の記述』(流 泉・ 関谷 正孝 著 増補版)		
2006	4 立命館百年史紀要 第十四号 立命館卒業生の職中体験～学生出陣・学生勤労動員前後～		『立命館史に関する各氏の記述』(流 泉・ 関谷 正孝 著 増補版)		
2007	5 立命館百年史紀要 第十五号 立命館卒業生の職中体験～学生出陣・学生勤労動員前後～		『立命館史に関する各氏の記述』(流 泉・ 関谷 正孝 著 増補版)		
2008	6 立命館百年史紀要 第十六号 立命館卒業生の職中体験～学生出陣・学生勤労動員前後～		『立命館史に関する各氏の記述』(流 泉・ 関谷 正孝 著 増補版)		
2009	7 立命館百年史紀要 第十七号 立命館卒業生の職中体験～学生出陣・学生勤労動員前後～		『立命館史に関する各氏の記述』(流 泉・ 関谷 正孝 著 増補版)		
2010	8 立命館百年史紀要 第十八号 立命館卒業生の職中体験～学生出陣・学生勤労動員前後～		『立命館史に関する各氏の記述』(流 泉・ 関谷 正孝 著 増補版)		
2011	9 立命館百年史紀要 第十九号 立命館卒業生の職中体験～学生出陣・学生勤労動員前後～		『立命館史に関する各氏の記述』(流 泉・ 関谷 正孝 著 増補版)		
2012	10 立命館百年史紀要 第二十号 立命館卒業生の職中体験～学生出陣・学生勤労動員前後～		『立命館史に関する各氏の記述』(流 泉・ 関谷 正孝 著 増補版)		
2013	11 立命館百年史紀要 第二十一号 立命館卒業生の職中体験～学生出陣・学生勤労動員前後～		『立命館史に関する各氏の記述』(流 泉・ 関谷 正孝 著 増補版)		
2014	12 立命館百年史紀要 第二十二号 立命館卒業生の職中体験～学生出陣・学生勤労動員前後～		『立命館史に関する各氏の記述』(流 泉・ 関谷 正孝 著 増補版)		
2015	1 立命館百年史紀要 第二十三号 立命館卒業生の職中体験～学生出陣・学生勤労動員前後～		『立命館史に関する各氏の記述』(流 泉・ 関谷 正孝 著 増補版)		
2016	2 立命館百年史紀要 第二十四号 立命館卒業生の職中体験～学生出陣・学生勤労動員前後～		『立命館史に関する各氏の記述』(流 泉・ 関谷 正孝 著 増補版)		
2017	3 立命館百年史紀要 第二十五号 立命館卒業生の職中体験～学生出陣・学生勤労動員前後～		『立命館史に関する各氏の記述』(流 泉・ 関谷 正孝 著 増補版)		
2018	4 立命館百年史紀要 第二十六号 立命館卒業生の職中体験～学生出陣・学生勤労動員前後～		『立命館史に関する各氏の記述』(流 泉・ 関谷 正孝 著 増補版)		
2019	5 立命館百年史紀要 第二十七号 立命館卒業生の職中体験～学生出陣・学生勤労動員前後～		『立命館史に関する各氏の記述』(流 泉・ 関谷 正孝 著 増補版)		
2020	6 立命館百年史紀要 第二十八号 立命館卒業生の職中体験～学生出陣・学生勤労動員前後～		『立命館史に関する各氏の記述』(流 泉・ 関谷 正孝 著 増補版)		
2021	7 立命館百年史紀要 第二十九号 立命館卒業生の職中体験～学生出陣・学生勤労動員前後～		『立命館史に関する各氏の記述』(流 泉・ 関谷 正孝 著 増補版)		
2022	8 立命館百年史紀要 第三十号 立命館卒業生の職中体験～学生出陣・学生勤労動員前後～		『立命館史に関する各氏の記述』(流 泉・ 関谷 正孝 著 増補版)		
2023	9 立命館百年史紀要 第三十一号 立命館卒業生の職中体験～学生出陣・学生勤労動員前後～		『立命館史に関する各氏の記述』(流 泉・ 関谷 正孝 著 増補版)		
2024	10 立命館百年史紀要 第三十二号 立命館卒業生の職中体験～学生出陣・学生勤労動員前後～		『立命館史に関する各氏の記述』(流 泉・ 関谷 正孝 著 増補版)		
2025	11 立命館百年史紀要 第三十三号 立命館卒業生の職中体験～学生出陣・学生勤労動員前後～		『立命館史に関する各氏の記述』(流 泉・ 関谷 正孝 著 増補版)		

年	月	事項	発行誌	発行所(発行者・発行所)	掲載	執筆・寄稿者
1996	8			『中川家文書(第一巻) 彼目録(補訂版)』 『中川(小)十郎遺稿集(録集 三)』 『中川(小)十郎遺稿集(録集 三)』		
1997	3		『立命館百年史紀要』第五号	立命館学芸部・立命館探検隊 監にみる学生・生徒の課外活動の状況(1935～1939年)		
	8			『戦前期における就職動向・基幹局・常務課・校友会・清和会関係資料』		
	1			『立命館役員・役職者』1900～1997(法人以前・財団法人・学校法人)＜未定稿＞		
	2			『戦後の学制改革・その間接改革の経過』		
1998	3		『立命館百年史紀要』第六号	『立命館学園新聞』における立命館関連主要記事内容見出し(戦後第一期・未定稿)		
	10			『立命館百年史紀要』(未定稿)	11月 伊藤 昇	
1999	3		『立命館百年史・通史一』(1900～1945年を対象)			
	1		『立命館百年史紀要』第七号			
	3		『立命館百年史紀要』第八号			1月 榎学園 寄稿版
	4				4月 榎本弘之	
2000	6	『総合資料センター(仮称)の構想について(メモ)』を立命館百年史編輯委員会常任委員会に提記				
	9			『立命館役員・役職者』1998～2000(学校法人＜未定稿＞)		9月 栗山記念会移転
	10	『総合資料センター(仮称)の構想について(メモ)』『立命館学園広報』UNITAS No.329号に掲載	『立命館百年史 資料編一』			
2001	3		『立命館百年史紀要』第九号			
	10			『立命館百年史年表・戦後編』(1945～2000)＜未定稿＞		
	1			『立命館百年史紀要』第十号		
2002	3		『立命館百年史紀要』第十号	『立命館学園広報』ユニタス総目次＜通巻第1号～第333号＞1970～2000		
	4		『立命館百年史紀要』第十一号		4月 久島	
2003	3		『立命館百年史紀要』別冊 No.3	『百年史編輯部だより』1997～2002(UNITAS No.294～353 掲載)		
	4					
2004	3		『立命館百年史紀要』第十二号			
	2		『立命館百年史紀要』別冊 No.3-2	『全学協議会提議事項等資料集』		
2005	3		『立命館百年史紀要』第十三号			
	2		『立命館百年史紀要』別冊 No.3-3			
2006	3		『立命館百年史紀要』通史二(1945～1980年を対象)			
	4		『立命館百年史紀要』第十四号		4月 野藤重	
2007	7		『立命館百年史紀要』第十五号			
2008	3		『立命館百年史紀要』資料編二			
	3		『立命館百年史紀要』第十六号			
2008	11		『立命館百年史紀要』第十七号		11月 西岡孝記念館移転	
2010	3		『立命館百年史紀要』第十八号			
	11				11月 佐々木雅彦	
2011	3		『立命館百年史紀要』第十九号			
	3		『立命館百年史紀要』第二十号			
2012	11	『立命館 史資料センター(仮称)設置について(117)号 任達部発表誌				
2013	2		『立命館百年史・通史三』(1980～2006年を対象) 『立命館百年史紀要』第二十一号			

衣笠キャンパス略史

―校地・校舎の変遷について―

久保田 謙次

目次

まえがき

一、前史―西園寺家ゆかりの地―

二、一九三九年等持院学舎の開設と理工学部単独キャンパスの時代

三、一九六〇年代・七〇年代―衣笠一拠点化の志向から実現へ（第一次・第二次長期計画の時代）

四、一九八〇年代―一拠点の完成から第三次長期計画の時代

五、一九九〇年代―第四次長期計画と第五次長期計画の時代

六、二一世紀の衣笠キャンパス

付、配置図、資料

コラム、本学創立記念日について

まえがき

本稿は、衣笠キャンパスの開設から現在までの、主として校地・校舎の変遷について概観する。

衣笠キャンパスは、一九三九年に立命館日満高等工科学校を北大路学舎から移転したことによってその歴史が始まった。以来今日まで七〇余年の歴史を重ねるに至っている。

立命館日満高等工科学校は三九年四月に北大路学舎に開設したが、その年一月に衣笠に移転し、同月二四日に新キャンパスの開設記念式典が行われた。敗戦をはさんで一〇年後の四九年に新制理工学部が開設となり、六五年には広小路学舎から経済学部・経営学部が移転し一拠点化が進められた。続いて産業社会学部、文学部、二部各学部、そして八一年に法学部が移転して一拠点が完成した。

こうして経済学部・経営学部の移転から数えても十六年の年月をかけて完成した衣笠一拠点であったが、各学部や大学全体の教学の高度化が要請されてくるとともにキャンパスの狭隘化も進み、九四年には理工学部がびわこ・くさつキャンパス(BKC)に拡充移転し、続いて九八年には経済学部・経営学部がBKCへの新展開をはかり、大学は再び二拠点となった。

衣笠キャンパスはその間も国際関係学部、政策科学部、そして映像学部、各研究科が開設され、学部・研究科構成も大きく変化した。そして二〇〇六年には学園本部、法務研究科(法科大学院)が朱雀キャンパスに移転し、学園は多キャンパス化が進んだ。

二〇一二年度現在、衣笠キャンパスは六学部・九研究科を有し、学生数は学部・大学院を合わせ一七、五七四名となっている。施設関係では新体育館が竣工し、今後新図書館や新学部の計画・検討がされるなど、キャンパスは更に新たな展開を図ろうとしている。改めて衣笠キャンパスのこれまでの変遷を概観しておきたい。

一・前史 — 西園寺家ゆかりの地 —

(一) 西園寺北山第

キャンパスの所在地衣笠は、歴史上西園寺家ゆかりの地であることは古くから知られていた。

鹿苑寺（金閣）の西側にある西園寺記念館の名は学祖西園寺公望に由来するが、その鹿苑寺は、一四世紀末に室町幕府三代将軍足利義満が西園寺家から北山第を譲り受け、四代将軍足利義持が鹿苑寺と命名して今日に至っている名刹である。そもそも足利義満が西園寺家から譲り受けた北山第は、鎌倉時代の一二二四（元仁元）年、西園寺家の祖である西園寺公経が今出川第の別業として建てたことに由来する。

義満の北山第は、東は紙屋川、西は衣笠山、南は衣笠総門町付近までの広大な敷地であったという。この総門町という地名は一説に北山第の惣門の名残りともいわれる。

鹿苑寺の前身である西園寺北山第の境域がどこまでであったのか定かではないが、衣笠キャンパスとの関わりで注目されるべき資料を二点紹介しておきたい。

〈立命館日満高等工科学校建設時の新聞記事〉

その一は、一九三九年六月二三日の京都日出新聞の記事である。見出しは「掘出す？金閣寺旧態 日満工校の寄宿舎の敷地から西園寺家の紋章入瓦を発掘」となっている。

記事によると「立命館日満高工では衣笠山麓に一万坪の土地を買入れ三百坪の二階建教室一棟、百五十坪の工場八棟の新築を急ぎ今秋同地に引うつる筈であるがこのほど……工事を行ったところ地下約三尺のところから今より約三百年前のものと覚しき……屋根瓦の破片が多数発掘され、……立命館と因縁深き西園寺家の紋章がついているので一同は奇縁に驚き早速同学中川総長に届け出た。……調査の結果これは間違いなく現在の西園寺公の祖先、時の太政大臣たりし西園寺公経邸に用いられたもので昔同所には西園寺邸が建っていたものと推定されるに至った」とある。

またこの記事には中川総長の談話が掲載されていて、「何も知らずに買った土地が本校が大変御世話になつてゐる西園寺公の御先祖が住まはれた土地であつたことがわかり今更因縁浅からざるを痛感した」と語っている。

〈太田亮教授の論文「西園寺家北山第考」〉

もう一つの資料は『立命館文学』（一九三九年十二月）に掲載された太田亮教授の「西園寺家北山第考」である。

この論文は、前述の新聞記事の後に執筆され、掲載された。太田教授は、北山第は西園寺家の邸宅と西園寺の諸院から構成されていると述べ、更に北山第を足利義満に譲った後、西園寺家は再び室町時代に北山に邸宅を構えたと述べている。『管見記』によれば一四世紀末から一五世紀半ばにかけて西園寺家の北山第が義満の北山第以外の場所にあったというのである。太田教授は、この時代の西園寺家は、「義満の北山第の西方、衣笠山の南麓にあったと想像せねばならない」そして、「当院（成就院）こそ第二の西園寺であって、最近古瓦の発掘されし、等持院の背後、衣笠山の麓の地は、恐らく此の院の在りし地と推察される」とし、「よって此の時代の西園寺家は、衣笠山の裾、等持院西隣の地、即ち日満高工の敷地などの地であって、残存する池は当時の庭園の名残かと考えられる」とした。²⁶

太田教授は論文末尾で後の西園寺家北山第の位置が、果たして衣笠山の南麓であったかについては疑問の余地があるとはしているが、衣笠キャンパスの歴史を考えるうえで興味深い資料である。

（二）西園寺家別邸

西園寺公望は明治維新の後に京都を離れ東京に移住したが、後年静岡県興津の坐漁荘や京都田中関田町の清風荘などの別邸を使用したことはよく知られている。しかし維新のころ等持院の東に別邸があったことはあまり知られていない。

西園寺公望は小泉策太郎筆記／木村毅編集『西園寺公望自傳』で次のように述べている。

「竹軒の号はチッケ（キ）ンの料理が好きだから、それにもじって竹軒といったのだとなっているが、

それほど簡単でもない。京都の等持院辺に今でも西園寺池という池があるだろう、そこに別荘があつて、萬介亭と称した。萬介即ち竹であり、其の別荘に竹が植えてあつたことから、少年の時自ら竹軒と号したのです。」^③

また、西園寺公望が亡くなった（一九四〇年一月二四日）翌月の朝日新聞に、西園寺公の逸話として中川小十郎が「竹軒」の由来の談話を掲載している。

「……京都の等持院の東の方に公の少年時代の下屋敷があつた。邸内に大きな池があつて、附近の田の灌漑用水になつていたが、今は住宅地帯になつて、その池の面影もない。藪があり、竹が多かつたので、その邸を萬籟亭と名づけた。籟は中庸にある字で、竹の意だが、「まんかいとい」といふ発音が料理屋じみていると友人が冷やかすので、竹軒と改めた。……実は右の通りだと公爵の直話であつた……」^④

このように『西園寺公望自傳』および中川総長の新聞談話は、衣笠キャンパスの東南の等持院東町に、幕末維新のころ西園寺家の別邸があつたことを伝える。

萬介亭（萬籟亭）は、西園寺公望が私塾立命館を開く少し前に過ごしたことのある別邸であつたのである。^⑤

（１）『京都日出新聞』 一九三九年六月二三日付

（２）太田亮「西園寺家北山第考」『立命館文学』第六巻第四号 一九三九年二月

太田亮教授は昭和前期の日本古代史学者。一九三四年四月立命館専門学部講師、一九四一年立命館大学教授に就任、国史の講座

を担当。西園寺家の古記録『管見記』影印版一〇五巻を編纂した。一九五一年三月立命館退職。著作に『姓氏家系大辞典』。キャンパスには二つの池があったが、西池は二号館の建設に伴い、東池は研心館の建設に伴い埋め立てられた。

(3) 西園寺公望／小泉策太郎筆記／木村毅編集『西園寺公望自傳』 講談社 一九四九年

(4) 『朝日新聞』 一九四〇年二月六日付

中庸とあるのは集韻か。「萬介亭」については、安藤徳器『園公秘話』（一九三八年）、小泉策太郎『隨筆西園寺公』（一九三九年）にも記されている。

(5) 立命館大学編『西園寺公望傳』別巻二「西園寺公望年譜」には、慶応元（一八六五）年、この頃等持院（現京都市北区）附近に別荘万介亭を構える、としている。

二. 一九三九年等持院学舎の開設と理工学部単独キャンパスの時代

(一) 立命館日滿高等工科学学校から専門学部工学科・理学科の時代

〈立命館高等工科学学校から立命館日滿高等工科学学校へ〉

一九三七年一〇月二日、財団法人立命館理事会は、京都帝国大学内に設置されていた私立電気工学講習所を継承して工科学学校を設置することを決議した。同年七月の日中戦争勃発に前後し、戦時体制下の技術者養成が急がれる状況のもと、時代の趨勢に敏感な中川小十郎総長の強い意向で翌年一月に工科学学校の設立を申請し、二月に「立命館工科学学校」を北大路校地に設立することが認可された。しかし認可直後再度

申請し、「立命館高等工科学学校」として三月三〇日に再認可、四月北大路学舎に開校した。当時北大路には立命館中学校（旧制）と立命館商業学校があり、開校はしたものの併設のため、校舎と運動場の確保が急務であった。

三八年四月二三日、理事会は高等工科学学校の校舎建設のため土地を購入することを決議し、同年五月一日に上京区（現北区）等持院北町の六筆計三、一一一坪を買収する契約をした。^①衣笠に校地を確保した最初の契約である。続いて六月一七日の理事会では、等持院から土地七〇坪を取得することを決議している。

高等工科学学校の用地を衣笠に求めた経緯については、『立命館学誌』二〇九号（三八年一〇月一日）に「立命館高等工科学学校では一層の発展を期し移転先を物色中であつたが、此程洛西衣笠山麓等持院北裏に景勝の地を発見、ここに移転することに決し」と記されている。^②

等持院から土地を取得する決議をした翌日六月一八日の理事会で、立命館高等工科学学校の校舎、木造二階建三棟、平家建三棟、延べ二、一六六坪余（約七、一四八平米）を建設することが決議された。

決定した校舎の建設が開始されたのは、翌年三九年三月二四日であつた。

土地（校地）の確保についてはその後、三九年三月、同年六月、同年一〇月、同年十一月、四〇年八月、四二年八月、同年一〇月と続けて取得し、四二年までに計一三、一八〇坪余（約四三、四九四平米余）の校地に拡張した。

これらの土地のほか、三九年一月、同年五月、同年一〇月、四二年十二月、四三年一月に借地をし、

四三年一月までに自己所有一三〇・一八〇・九一坪、借地八、七九二・七六坪、計二一、九七三・六七坪（約七二、五一三平米）の校地となった。^③

当初は高等工科学校用地として買収が進められていたが、三九年三月三〇日には、立命館高等工科学校を立命館日滿高等工科学校と改称することが認可され、四月一六日に開校となり北大路学舎で入学式が行われた。

立命館日滿高等工科学校は、募集人員満州国委託生一二五名、普通生二二五名に対して、入学試験に志願した委託生五〇六名、普通生二二四名、計七三〇名のうち、合格した委託生一二五名、普通生二〇八名の計三三三名が新人生として入学した。他に立命館高等工科学校から編入した学生が一五一名であった。

学科は、機械工学科・自動車工学科・航空発動機科・電気工学科・応用化学科・採鉱冶金学科・建築学科の七学科で、修業年限は本来三年であったが、時局に鑑み当分二年とされた。^④

〈等持院学舎の開設〉

三九年一月に校舎・実験実習施設が完成し、同月一八日に北大路学舎から移転して等持院学舎（当時はまだ衣笠学舎ではなく等持院学舎と称した^⑤）が開設された。翌一二月には日本刀鍛錬所も建設された。三月に買収していた土地には民家があり、この建物は「日滿相訪会館」と命名され、宿泊・集会施設として利用された。

四一年九月発行の『立命館日滿高等工科学校報告（第三回）』の付図「立命館日滿高等工科学校校舎配

置図」は、敷地面積一三、〇二二坪、建物総坪数延三、二六七坪（建坪二、六七二坪）としている。

内訳は校舎延一、〇五〇坪、実験室実習場延一、四一〇坪、寄宿舎六四九坪（未着手）、日満相訪会館延七二坪、日本刀鍛錬所四〇坪などであった。

しかしその立命館日満高等工科学校は実際には各種学校の扱いであったため、「興亜ノ中心人物タルベキ技術者並ニ中等学校ノ理科教員ヲ養成スル目的ヲ以テ」大学専門学部への昇格改組を図り、四二年二月に専門学部工学科・理学科に再編することが認可され、四月から開校した。立命館日満高等工科学校は翌年の三月三十一日をもって廃止された。開設から三年、等持院学舎に移転してから二年四ヵ月であった。理学科は、学徒出陣で広小路の学生がほとんどいなくなったため広小路学舎に移転した。

四二年九月の『立命館専門学部工学科報告（第四回）』の付図「立命館専門学部工学科平面図」では、これまでの敷地に、新買収地七、〇〇〇坪、新借地三、〇〇〇坪を加えて、敷地坪数二三、〇二二坪としている。

立命館専門学部工学科・理学科は、四九年に新制理工学部が開設されたことに伴い理工学部への編入生があつた一方で、そのまま専門学部に在学した学生もおり五一年に廃止されるまで続いた。

〈等持院学舎の立地〉

等持院学舎は、『立命館日満高等工科学校概況（昭和十五年度）』の「学校附近地図」によると、嵐電等持院駅から五五〇⁶、市電平野神社前から九五〇⁶となっている。この両駅を利用した学生や教職員が

どの程度いたかは不明であるが、教員の多くは京都帝国大学工学部から来ており、その登校のために市電千本今出川から学校まで馬車で出迎えたという。四三年には現在の清心門付近に正門が建てられ赤門と称したが、五三年の整備事業により新たな門に変わった。

現在の衣笠キャンパスには、当時の学舎を思い起こす情景がひとつ残っている。修学館南側のイチヨウ並木がそれである。このイチヨウ並木は、等持院学舎建設にあたって等持院との間の道路沿いに植えられたものである。⁸⁾

また、立命館日満高等工科学校の実習で使われた工具が今もある。BKCの理工学部工作センターには三九年の定盤や旋盤などがあり、今も実習で大事に使用されている。

(二) 新制理工学部の開設

戦後の教育改革・学制改革により、立命館大学は全国一二大学の一枚として国立大学に先駆け、いち早く新制大学設置の申請をした。その結果、一九四八年四月の開設が認可され、広小路学舎に法学部・経済学部・文学部の三学部が開設された。

続いて翌四九年四月、等持院学舎に新制理工学部が開設された。数学物理学科・化学科・電気工学科・機械工学科・土木工学科の五学科で、入学定員は一部三八五名、二部一九五名の計五八〇名の認可であった。初年度の学生数は一部二四〇名、二部一三五名で、別に旧制の専門学校理学科および工学科の学生が一、一二二名であった。

前年四八年七月の「理工学部増設認可申請書」は開設の目的・使命を、「一般教養の豊かな創造発展性のある技術者並びに応用能力の豊富な科学者を養成し併せて深く理工学の蘊奥を研究し以て文化国家の建設に貢献せん」と述べた。

同申請書によると、用地総坪数二三、三七〇坪（校舎敷地八、四〇〇坪、運動場一三、五〇〇坪、農場一、四七〇坪）で、校舎延面積二、四二七・八三五坪、その他建物五五八坪余となっている。

校舎は、現在の尽心館と修学館・学而館・図書館付近に主要な建物二二棟があった。すべて木造で四棟が二階建、他の建物は平家建であった。

立命館はいち早く新制大学として出発したものの、学園の運営には依然として戦前の体質が残っていた。「立命館大学拡充後援会」が進めようとする学園拡充計画は学園の運営をゆるがす大きな問題となり、就任までもない末川博学長が四八年一二月に辞任（翌年三月の公選制総長選挙で復帰）したのもその問題に因があったと言われている。拡充計画は、教学よりも施設設備を優先させ等持院学舎に総合グラウンドを建設しようとするものであった。この計画のうち立命館衣笠球場だけは四八年九月に完成し、学園の球場でありながら当時のプロ野球の試合も行われる球場として使用された。しかし不要不急といわれた総合グラウンド計画は、球場の完成のみであとは凍結されることとなった。

五〇年一〇月一五日には、衣笠球場において学園創立五十周年記念式典を開催した。

（三）理工学部の初期の発展

新制理工学部の開設から一九六五年の経済学部・経営学部の衣笠への移転までの間、等持院学舎の変遷は、同時に理工学部発展の歴史でもあった。

五二年四月には新制の大学院工学研究科が設置となった。修士課程応用化学専攻・電気工学専攻である。五五年三月には理工学研究科が設置された。工学研究科はその後、六三年四月に物理学専攻・機械工学専攻・土木工学専攻が増設され理工学研究科となった。六四年四月には二部理工学部を改組し、基礎工学科を設置した。大学院に博士課程が設置されたのは、六六年四月の物理学専攻・応用化学専攻・機械工学専攻であった。

この間、五四年三月に等持院学舎最初の鉄筋コンクリートの校舎である三号館、次いで西池（第一用水池）を埋め立てて建設し学部事務室・会議室・学部長室などを収容し、五六年二月に竣工した二号館⁹、五八年に現在の充光館付近に木造平家建ての理工学部学生会館、六〇年四月に原子核研



【写真1】西池（第一用水池）

現在の西側広場付近に1955年まであった



【写真2】東池（第二用水池）

現在の研心館付近に1978年まであった

究室（コッククロフト・ワルトン型加速装置を収容）および木造の物理学教室、六一年八月に電気工学科棟（一部機械工学科実験室）の四号館（現有心館）、六三年四月に機械工学科と化学科の実験室を収容した五号館が完成している。

経済学部・経営学部が移転した六五年以降の理工学部在校舎については、次項で述べる。

（１）「財団法人立命館理事会議事録」および立命館「土地台帳」（百年史編纂室所蔵）による。面積については資料により異なるが、本稿では当時の立命館「土地台帳」によった。

（２）中川小十郎のもとで立命館日満高等工科学学校の設立に関わった倉橋勇蔵（一九四四年に立命館専務理事）は、その著『酒徒ま



【写真3】理工学部旧正門

通称赤門、1943年設置
『理工学部六十五年小史』より



【写真4】理工学部正門

旧正門（赤門）に替り1953年完成
1954.3 理工学部卒業アルバムより

んだら』で、当時等持院の檀家総代をしていた中川総長が倉橋を伴い、衣笠山南麓の等持院附近を見に行き、茶畑やくぬぎ林、竹林、大小二つの池などを含めた三万坪を越える土地があることを確認し、「立命館日満高等工科学校」の用地として買収することとなった、と述べている。

(3) 立命館「土地台帳」および「財団法人立命館財産目録」(昭和十八年三月三十一日)による。

(4) 立命館日満高等工科学校の開設にあたっては、一九三九年に満州国政府より設立設備補助金五〇万円および委託生への給費、学校に対する委託費が支給された。

(5) 等持院学舎(または等持院キャンパス)の名称が衣笠学舎(または衣笠キャンパス)に変わった経過については、三の注(1)(307頁)参照。

(6) 報告書の名称は変更となったが、回数は継続している。

(7) 藤谷先生御退職記念会『立命館の風雪』 一九八六年

(8) 「理工学部増設認可申請書」 一九四八年七月

(9) 本学諸資料では、一九五四年三月に三号館、一九五六年二月に二号館が完成となっているが、一号館・二号館・三号館の名称が初めて資料に見えるのは、一九五六年度版「理工学部学修の手引」の「理工学部構内案内図」であり、この時期に同時に命名されたと思われる。

辻村寛元理工学部教授によると、三号館は完成当初は図書館と称していて、五六年二月に二号館が完成したとき学部の行政施設(事務室など)が旧一号館から二号館に移設されたのを機に一・二・三号館と称するようになったのではないか、とのことである。

三．一九六〇年代・七〇年代——衣笠一拠点化の志向から実現へ

（第一次・第二次長期計画の時代）

新制理工学部が衣笠キャンパスで徐々にではあるが施設設備の整備を進めていく一方で、広小路学舎の狭隘化が進み、学園をどのように創造していくかが課題にのぼってきていた。

一九五五年の「緑の学園」論争はその契機ともいえるものであった。緑の学園計画は中止されたが、この論争のなかから、五七年一〇月に「臨時調査委員会」が設置され、その議論を経て五八年二月に「学園振興に関する臨時調査委員会」が設置された。委員会の特徴は、教員と職員が委員に選任され、教学優先の、学園にとって初めてとも言える計画的な学園づくりがスタートしたことである。

（一）一拠点志向と経済学部・経営学部そして産業社会学部の衣笠移転

委員会は一九六〇年九月に答申「学園振興に関する臨時調査委員会答申書並びに関係資料」をまとめ、当面二拠点の長期計画を立てながらも衣笠キャンパスの利用について検討すべきことを提起した。この答申は教学と経営の統一に立ち、続いて新五カ年計画、更に六〇年全学協議会確認、新一二月原則へと学園振興の議論が展開された。

このことによって、衣笠キャンパスを含めた長期計画が全学的課題となったと言えるよう。

六二年四月には広小路学舎に経営学部が創設されたが、広小路学舎の狭隘化は極限状況に達しつつあった。

六三年六月、「学園振興基本要綱」はそうした学園の課題、広小路の状況を解決すべく学部単位での等持院（衣笠）移転案を提起し、今後の立命館の進むべき基本的方向を具体的に長期計画として位置づけた。即ち、「広小路六千坪、等持院二万七千坪の両キャンパスを総合する立地計画をたて、若干の学部を等持院に移して全キャンパスの合理的活用をはかり、これに施設建設長期計画に基づいて計画的に施設設備を整備して」逐次主力を等持院学舎に移していくことを提起したのである。

六四年六月二〇日の大学協議会では、それまで学内理事・大学協議会・学園振興懇談会で議論してきた内容をまとめた「学部移転に関するまとめ」を協議し、早急に体制をととのえて学部移転を進めていくことを申し合わせた。末川総長は、「経・営両学部の移転は等持院キャンパスに主力を移してゆく第一歩であり、一拠点を目指したから本学の力量・条件に応じて逐次推進して行く」旨発言した。⁽¹⁾

六五年四月に以学館が完成し、一部経済学部・経営学部は移転して新年度の授業が開始された。

経済学部・経営学部が移転した後の広小路学舎には、同年四月、産業社会学部が創設された。産業社会学部は経営学部が使用していた河原町通東側の恒心館を基本棟とした。

しかし六八年一二月からの大学紛争によって広小路学舎は封鎖・破壊が繰り返され、飛び地であった恒心館も翌年五月まで占拠されるに及んで、産業社会学部は衣笠への緊急移転を余儀なくされ、七〇年より衣笠においてその教学を展開することとなった。

長期計画は当初六三年から七二年の一〇年間を予定したが、七〇年には完成に至った。衣笠キャンパス周辺の校地は、六三年から七〇年の間に二三、三七二平米（六七七年の北グラウンド用地、七〇年の第二体育館周辺用地など）を取得し、他に柵野グラウンド用地一〇三、七五九平米、鷹ヶ峰の学思寮用地、蓬萊セミナーハウスの用地を取得した。

校舎は、六五年四月に経済学部・経営学部の基本棟である以学館、続いて理工学部化学科と土木工学科の基本棟となった六号館が六五年九月に、教員研究室棟の修学館（第一期）が六六年九月に、そして六六年九月には日満高等工科学校以来の旧一号館の西側部分を解体して理工学部機械工学科の新一号館および工場棟が出来た。

六七年九月には図書館が、六九年六月には体育館が竣工、更に七〇年一二月には産業社会学部基本棟となった学而館が竣工し、建築延べ床面積は四六、一五一平米に及んだ。²⁾

六二年一二月一四日には理事会で校舎敷地を拡大するため野球場を郊外に移転することが確認されていたが、六七年に柵野グラウンドが開設され、六九年六月に第一体育館が完成すると、衣笠球場は野球場としての使命を終えて中央グラウンドとなった。

六〇年代の長期計画の完遂により、七一年五月一九日には以学館において創立七〇周年記念式典を開催した。

六〇年代は衣笠キャンパスの展開とともに衣笠地域の開発も進行してきた。六二年五月にはキャンパス北東部の旧馬場跡の立命館所有地を京都市交通局に貸与し市バス操車場とバス停ができた。このことに

よって通学条件が改善され、地域の交通条件改善にも寄与した。翌六三年には衣笠山山麓とキャンパスの間に通称観光道路（市道衣笠字多野線）が開通した。観光道路の名称が示すように道路は金閣寺から龍安寺前を通り仁和寺から福王子方面へと至っている³。

（二）一拠点実現へ、文学部・二部全学部そして法学部の移転

一九七〇年四月の産業社会学部の移転により、学園は一拠点志向から一拠点実現へと向かうことになった。七〇年九月一九日、七〇年度長期計画委員会は「立命館大学の改革についての答申」を行い、衣笠キャンパスを中心とする学園を実現する基本的視点や具体化のための原則的問題を提起した。答申は全学で議論を重ね、七一年一月一八日の全学協議会において衣笠一拠点化の早期実現を確認した。

この全学協議会確認を踏まえて七二年度長期計画委員会答申が出され、更に学内理事会は七三年六月に「衣笠を中心とする一拠点実現の長期計画について」、七四年一月に「衣笠一拠点実現へむけての討議のために」、七四年八月『「衣笠一拠点」実現へむけての討議資料——一九七三年度長期計画委員会第二次答申』、教学部発行の七七年四月「衣笠を中心とする一拠点実現の長期計画について（新入生討議資料）」など全学での討議がされ、七〇年代のほとんどをかけてこの一大事業に全学の力を傾注した。

この間、校地・校舎は、次のように拡張し整備された。

校地については、七五年に氷室にグラウンド用地を取得し、七七年五月にグラウンドを開設した。八〇年には原谷グラウンド用地などを取得し拡張をはかった。また七〇年から八一年二月まで一〇年間で、グ

ラウンド用地以外の衣笠キャンパス近隣の土地の取得は二〇カ所、一二、三九五平米に及んだ。

校舎については、七二年三月に教員研究室棟である修学館第二期工事、七三年一〇月に学生会館（第一期）、七四年四月に志学館が竣工した。七六年六月には理工学部七号館（数学物理学科基本棟）、続いて七六年九月に木造の旧一号館（東側部分）および周辺の付属建物などを解体し、七七年九月に文学部基本棟の清心館を新築、同時に修学館（第三期）が増築された。七号館や清心館の建設により旧来の木造校舎は姿を消した。

七八年四月に学生会館増築、七九年一〇月には中川会館が竣工し学園本部が移転した。本部の移転に伴い、学園の所在地（代表住所）は、広小路から新しい中川会館の住所である北区等持院北町五六番地の一に変更となった。⁴

同じ一〇月に二部の基本施設研心館が竣工し、八一年四月に法学部の基本施設で広小路に引き続き衣笠キャンパスのシンボルともなる時計塔を設けた存心館、そして図書館書庫棟、第二体育館が竣工、また正門が設置されて、衣笠一拠点事業の主要な建物・施設が完成した。

衣笠一拠点事業の進捗につれてキャンパスの様相や地域環境も変化してきた。研心館の建設に伴い、日満



【写真5】等持院と間のイチョウ並木
(1967.3 経済学部卒業アルバムより)

高等工科学校以来キャンパス内にあった二つの溜池のうち残った一つの溜池（東池）が消えることになった。もともと等持院墓地参道の西側と東側に展開された校地・校舎であったがその等持院墓地もキャンパスの建物群に囲まれるようになり、八〇年一月には等持院と立命館の間で「等持院墓参道路に関する覚書」を交わし、キャンパス内の墓参道路の運用について申し合わせを行っている。

六三年の「学園振興基本要綱」から数えると、一八年の歳月を経て衣笠一拠点が完成したのである。八一年五月一六日には第一体育館において、学園創立八〇周年・大学衣笠移転完成記念式典が挙行された。

(1) 「第三二六回大学協議会議事録」。なお、等持院学舎（キャンパス）から衣笠学舎（キャンパス）にいつ名称が変更になったのか明確に示す資料は未見である。

理事会や大学協議会における呼称も、理事会が一九六四年五月より衣笠学舎と称したのに対し、大学協議会は同年六月まで等持院キャンパスと称している。教学部発行の「教学時報」は同年七月の第一八号では衣笠キャンパスと等持院キャンパスの両方を使用、『学生生活』は一九六二年度版より衣笠学舎をキャンパスの名称として使用している。

こうした使用例から、一九六五年の経済学部・経営学部の広小路学舎からの移転を前にして順次「衣笠学舎」（または「衣笠キャンパス」）の名称に変わっていったと思われる。

(2) 「立命館創立七〇周年記念事業実施概要」（一九七一年五月）

(3) 当時、バス停の名称は「衣笠」であったが、一九八六年三月に「立命館大学前」に変更となった。また観光道路は、一九九一年八月に「きぬかけの路」と愛称がつけられた。

(4) 学園の所在地は「北区等持院北町五六番地の一」としたが、キャンパスは行政区としては北区と右京区にまたがり、北区等持院北町、同小松原北町、同平野上柳町、右京区龍安寺御陵ノ下町などにわたっている。なお、一九五五年九月一日に上京区から北区が分区されたことにより北区となった。理工学部時代の衣笠キャンパスの所在地は等持院北町二八番地としていた。

四 一九八〇年代——拠点の完成から第三次長期計画の時代

(一) 第三次長期計画の策定

第三次長期計画は、衣笠一拠点が完成してまもない一九八二年三月三十一日、八〇年度・八一年度長期計画委員会の「第三次長期計画に関する答申(第一分冊)」提起を出発点とし、九〇年の学園創始一二〇年・学園創立九〇周年を目指した時期にあたる。国際化・情報化・開放化が目指されるなかで、国際関係学部と理工学部情報工学科の設置を計画し、情報工学科が八七年四月、続いて国際関係学部が八八年四月に開設された時代である。

答申では、キャンパス問題については学生数の漸減により条件が好転してきており他大学に比しても劣らないとして、当分の間「衣笠一拠点」を前提とすることとした。そのような状況下で施設整備の課題として四点があげられた。

①原谷グラウンドの整備と中心校地認定の実現、②キャンパス隣接・周辺の未活用の現有校地二千坪の活用、③近隣の土地取得の促進、④三号館・四号館・五号館問題の解決と西グラウンド・西部キャンパス

の有効利用、であった。

こうした整備課題は、答申に先立つ七九年全学協議会や、答申を経た八三年全学協議会の議論によって、具体的には国際関係学部棟や理工学部情報工学科棟建設のほか研究施設の充実や体育施設・厚生施設の充実を進めることとなった。

(二) 第三次長期計画期の施設整備

一拠点完成後の、第三次長期計画期の主な施設整備は次の通りである。

(1) 末川記念会館の完成

一九八三年一月には衣笠一拠点事業の特別事業として予定されていた末川記念会館が完成した。取得したキャンパス東隣接地に地下一階地上三階建てられ、末川博総長のメモリアルルームなどが設置された。二階には後の九八年四月に京都地方裁判所から陪審法廷が移設開設された。

(2) 原谷グラウンドの開設と尚友館の建設

キャンパス近辺でのグラウンドの確保も課題の一つであった。右京区鳴滝宇多野谷の地に七八、〇〇〇平米余のグラウンド用地を取得したのは一九八〇年であった。八二年九月にはグラウンド開設の竣工式を行い、更に八三年一〇月には当初借地として契約した二三、〇〇〇平米余も取得し、合わせて一〇万平米を超えるグラウンドを所有することとなった。行政上は右京区に所在するが、北区原谷に隣接するため原谷グラウンドと称している。

同地には、八四年一月に合宿所である尚友館が竣工し、更に八九年五月には第二尚友館を完成し、グラウンドとともに正課体育・課外スポーツ活動施設として使用している。

(3) 情報工学科の開設と新四号館の建設

八七年四月、理工学部 of 六番目の学科となる情報工学科が開設された。当初は電気工学科棟であった(旧)四号館(現在の有心館)を中心に使用したが、八八年三月に新四号館(現在は洋洋館)が完成し、情報工学科の基本棟となり、機械工学科の実習工場などの実験室・実習室も収容した。情報工学科の開設は理工学部教学の新しい展開のみならず、全学の教学分野の情報化を推進することにもなった。

(4) 国際関係学部の開設と西園寺記念館の建設

八八年四月には鹿苑寺(金閣)西側の氷室グラウンドに西園寺記念館を建設して、国際関係学部を開設し、全学の国際化を推し進めた。

氷室は七七年五月にグラウンドとして使用を開始していたが、国際関係学部の開設にあたって最終的に同地が選定されたものである。衣笠キャンパス内は法規制上建設が不可能であったことからこの地となった経緯がある。



【写真6】一拠点完成時の中央グラウンドと周囲の校舎

『大学案内 1982』より

(5) 研究施設の建設

八八年四月には存心館南側に隣接して尚学館が、八八年一月には旧来の原子核研究室（コッククロフト）に代わって放射線研究施設が完成した。

情報化に関連した施設としては、尽心館が八九年三月に完成し、計算機センターの基本施設となり情報工学科の開設とともに全学の情報基盤が整備されていた。

九〇年九月には修学館第四期工事が完成し、共同研究室・教員個人研究室の充実が図られた。

(6) 衣笠（仮設）セミナーハウスの開設

八三年三月にキャンパス東側の馬代通りに面した佛教大学の学生寮跡地を取得し、衣笠（仮設）セミナーハウスとして使用を開始した。また、原谷に合宿所が出来るまでの間、合宿所としても使用した。

(7) 明学館の完成

九〇年三月には六号館（現恒心館）南側に地下一階地上四階の明学館が完成した。明学館には大中小一〇室の教室が配され衣笠キャンパスの教室条件の改善が図られた。二階の大教室は定員一、〇〇〇名で衣笠キャンパス最大の教室であった。

また一階には国際地域研究所や理工学研究所（九四年にBK Cに移転）などの研究施設が配置された。

こうして第三次長期計画の施設設備の整備が完成し、一九九〇年一〇月三〇日には立命館創始一二〇年学園創立九〇周年記念式典を迎えるに至った。

五・一九九〇年代―第四次長期計画と第五次長期計画の時代

一九九〇年代は、前半期九一年から九五年の第四次長期計画期と後半期九六年から二〇〇〇年までの第五次長期計画の時期に分かれる。

衣笠キャンパスに直接関連した大規模事業は、第四次長期計画では九四年のBK Cへの理工学部拡充移転と政策科学部開設・衣笠キャンパスの高度化、第五次長期計画では九八年の経済学部・経営学部のBK Cへの新展開と衣笠キャンパスの高度化であった。

(一) 第四次長期計画の時代

(1) 第四次長期計画の策定

一九九〇年代前半期における第四次長期計画のもっとも大きな事業は、九四年の理工学部のBK Cへの拡充移転と政策科学部の開設であった。

『第四次長期計画第二次答申』（一九九〇年七月四日）は、理工学部移転後の衣笠キャンパスの在り方を提起し、続いて『第四次長期計画第三次答申』（一九九一年三月二〇日）は、理工学部の移転に伴う衣笠キャンパスの施設配置案について提起した。検討の前提として新学部の規模問題、二号館・三号館の取り扱い、国際関係学部の西園寺記念館から衣笠キャンパス内への移転の三点を検討の前提条件とした。

施設配置とキャンパスイメージの関係では、キャンパス中心部に研究ゾーンを置き、その周囲に各学部基本施設を配置し学習ゾーンとする。更に正門付近と末川記念会館、新セミナーハウスを合わせた社会交流ゾーン、学生の課外活動を展開するアクティビティ・ゾーンを設定した都市型キャンパスをイメージし、具体化が進められた。

また施設設備の必要性の議論にとどまらず、キャンパスのゆとりとアメニティの必要性がうたわれたのも第四次長期計画の特徴のひとつであった。

(2) 具体的整備

① アカデミア立命21の完成

第四次長期計画で最も早く整備された施設は、衣笠（仮設）セミナーハウスの地に建設したアカデミア立命21であった。アカデミア立命21は工事中近隣との関係で困難な問題があったが、九〇年八月に着工し、九二年二月に竣工した。キャンパスの東側、馬代通りに面した地下一階地上三階建て、国際平和ミュージアム、衣笠セミナーハウスが設置され、京都国連寄託図書館が平野会館より移設された。館内には平和の象徴であるわだつみ像が、また手塚治の「火の鳥」の陶壁画が飾られている。

② 政策科学部の開設と四号館改修による洋洋館竣工

政策科学部は、九四年四月に立命館大学八番目の学部として開設された。同年、衣笠キャンパス開設から五四年余にわたってその教学を展開した理工学部がBKCへと拡充移転を行い、その理工学部情報工学科・電気電子工学科・機械工学科などが使用してきた四号館を洋洋館へと改修し政策科学部の基本施設と

した。

改修工事は実質三カ月という短期間で、九四年三月に完成した。

③ 恒心館・諒友館の改修

理工学部化学科と土木工学科が使用していた六号館も理工学部の移転とともに改修工事に入り九四年九月に竣工し恒心館と改称、産業社会学部が移転して、後期から使用を開始した。数学物理学科が使用していた七号館も九四年八月に改修工事に入り九五年二月に竣工すると、諒友館と改称し、一階は食堂、二階以上は教室などとして使用することとなった。

④ 学而館・有心館・研心館・啓明館などの改修

学而館は産業社会学部の恒心館への移転に伴い大学院の改革が進められる中、研究者養成・高度専門職養成・社会人再教育の施設として改修され、九五年八月に竣工、研究活動の抜本的な高度化が期待された。旧四号館は、これも第四次長期計画の重要課題であった情報基盤の中核施設として九五年七月に改修工事が完了し、有心館と改称し、全学の教育研究、業務の一段の情報化推進に寄与することとなった。

研心館・一号館も教室条件の整備などのため改修が行われ、研心館は九五年九月に竣工、一号館は九六年三月に竣工し啓明館と改称、文学部人文総合科学インスティテュートや学芸員課程、考古学関連の教学施設となった。

(二) 第五次長期計画の時代

(1) 第五次長期計画の策定

一九九八年四月には、経済学部・経営学部がBKCに移転し新展開を進めた。六五年に広小路学舎から衣笠に移転をして三三年のことであった。

先立つ九四年一〇月一九日、新世紀学園構想委員会は、答申「二一世紀の立命館学園」において衣笠キャンパス、BKCの教学環境の高度化を提起し、続いて、『第五次長期計画第二次答申』（一九九五年九月二〇日）は、経済学部・経営学部移転後の衣笠キャンパス再整備計画を提起した。

九〇年代前半期の整備で残された課題として、①中央グラウンド緑地化、二・三号館跡の緑地化、以学館前の緑地化、②二・三号館撤去に伴う施設の移転、③学生会館改修、興学館への二部関連施設の移転、④学生サービス機能の集中化と学生部・就職部の研心館移転などが挙げられた。

こうした課題整理から、①以学館・志学館・東門周辺の活用、②キャンパス緑地化、③学生会館改修など課外活動の有り様を検討、④アメニティあふれる施設と空間づくり、⑤キャンパス・アクセスなどが検討されることとなった。

(2) 具体的整備

① 清心館・以学館・恒心館の改修

文学部の基本棟であった清心館の改修は九六年二月に着工し九七年三月に竣工した。心理学関係が啓明館に、文献資料室が修学館に、文学研究科大学院施設が学而館に移転することによって教室条件の改善や地理学関係施設の改善が図られている。

九九年八月、経済学部・経営学部移転後の以学館の改修が着手され、二〇〇〇年三月に竣工した。これまで恒心館を使用していた産業社会学部が移転し基本施設とした。

産業社会学部が移転した後の恒心館は再び改修に入り二〇〇〇年八月に竣工、氷室の西園寺記念館から国際関係学部が移転し、衣笠キャンパスの国際インスティテュートの中核となった。

② アート・リサーチセンターの完成

九八年には、国際センターと敬学館の跡地に文化芸術の研究機関「立命館アート・リサーチセンター」が開設され、その拠点施設として九九年三月に正門から南に入った場所に三階建の施設が完成した。九八年度に文部省の私立大学学術フロンティア推進拠点として指定されている。

③ 創思館の完成

二〇〇一年三月には、これも学術フロンティア推進事業である「対人援助のための人間環境デザインに関する総合研究」を推進する施設として四階建の創思館が中央グラウンドの一角に完成した。西側に時計塔をもつ直線的な存心館、北側に円弧を描く創思館が共になだらかな山稜の衣笠山を借景としている。

④ 中央ひろば（広場）の整備

創思館の完成とともにかつて衣笠球場であった中央グラウンドは緑地化計画が進み、二〇〇一年三月に中央広場として整備された。公園を思わせるような設計で学生・教職員のみならず校友や地域にも開かれた憩の広場となっており、創立者中川小十郎ゆかりの泰山竹（だいさんちく）が二〇〇二年夏に植えられた。

六、二一世紀の衣笠キャンパス

(一) 二一世紀の学園基本計画

一九九六年十一月に設置された衣笠新展開推進本部は翌九七年九月に「衣笠新展開グラウンド・デザイン（第一次案）」をまとめ、衣笠キャンパスを社会・人文系分野を重視した教学の高度化を進めるキャンパスとしてその基本方向を提起した。

さらにキャンパス整備の具体的課題として、九九年一〇月に「二〇〇〇年度以降の衣笠キャンパス整備計画について」において整備計画の概要を説明した。続いて同年一〇月の「二〇〇〇年度以降の衣笠キャンパス整備計画（その2）」では中央グラウンドの具体的整備計画を、更に二〇〇〇年二月には明学館および国際ゾーン、恒心館、修学館、中川会館の改修整備を提起した。

そして二一世紀の学園基本計画が二〇〇一年九月に、「新世紀学園構想第一次プラン」で二〇〇〇年代前半期の学園政策が提起され、早急に具体化すべき課題として大学院政策の展開と独立・専門職大学院の開設が計画された。具体的には、二〇〇一年四月に応用人間科学研究科、二〇〇三年四月に言語教育情報研究科と先端総合学術研究科が開設されることとなった。

研究政策の強化も推進され、二〇〇二年度から開始された文部科学省の二一世紀COE推進プログラムにおいて、衣笠キャンパスの関係では二〇〇二年度に「京都アート・エンタテインメント創成研究」が、

二〇〇三年度には「文化遺産を核とした歴史都市の防災研究拠点」が採択され、研究の高度化が進められた。

(二) 建設・改修された主な建物

こうした計画のもとで二〇〇一年度以降、衣笠キャンパスは以下のように整備された。

(1) ランゲージ・センター

二〇〇二年一月には修学館北部分にランゲージ・センターが完成した。言語教育を推進する施設で、大学院言語教育情報研究科と大学院生共同研究室がある。

(2) 敬学館

二〇〇四年三月、長らく正課体育やテニスコートとして使用されてきた西グラウンドの地に教室棟として建設された。地下一階から二階までに三〇〇名規模の教室が三室、四五名規模の教室が四六室、遠隔講義室が一室収容された。

敬学館の名称は、広小路キャンパスでの使用、衣笠キャンパス東側隣接地（現在アート・リサーチセンター）での使用に続き第三代となる。

(3) 西側広場と学生厚生施設

かつての二号館と三号館は二〇〇〇年八月に解体され、二〇〇四年一月西側広場として整備された。広場の北側部分には諒友館側から続く地下食堂が完成し、内部には立命館で初めて一階と地階を結ぶエス

カレーターが設置された。広場は憩いの場であるとともにイベントも開催できる広場となっている。

広場には高さ一八メートルのメタセコイア（アケボノスギ）が聳えている。この木は一九五二年三月の二部理工学部第一回卒業生による卒業記念樹で、当時日本ではまだ珍しく、京都大学農学部から苗木を譲り受けて育てたものである。場所は当初からは少し移動している。^①

(4) 歴史都市防災研究センター

二〇〇六年二月には衣笠キャンパスの東側（アカデメイア立命21の西側）の所有地に歴史都市防災研究センターが完成した。歴史都市防災研究は、二一世紀COEプログラム「文化遺産を核とした歴史都市防災研究拠点」を継承・発展させたものである。

(5) 至徳館

二〇〇六年九月に学園本部が朱雀キャンパスに移転すると、広小路時代から使われてきた本部棟・中川会館の名称は朱雀キャンパスで使われることとなった。^② 移転により内部を改修し、建物は二〇〇七年七月に至徳館と改称した。



【写真7】西側広場から恒心館・諒友館を望む

竣工パンフレット「衣笠キャンパス西側広場学生厚生施設」2004年12月

(6) 充光館

二〇〇七年四月、立命館大学に一〇番目の新学部が開設された。映像学部である。学部基本施設は中央広場の南西部分に同年九月竣工し、それまで至徳館などを使用してきた新学部は新棟充光館で教学展開を進めることとなった。

(7) 育友館

二〇〇八年二月、産業社会学部の小学校教員養成課程が開設されるに伴い、修学館北部分に育友館が完成した。施設には学校教育実習室、実習準備室がおかれた。また以学館東部分に産業社会学部の行政施設などが増築された。

(三) 二〇一二年度

校地（土地）については、キャンパスの東側に二、五〇〇平米余を取得した。建物施設は一二月、原谷校地に第三尚友館を完成し、一三年一月には、キャンパスを地下道（トンネル）で結び第二体育館と憩の広場研究棟の場所に新体育館「京都衣笠体育館」の竣工を迎えた。体育施設の整備に続いては、新図書館が計画され、また新学部の検討がされるなど、衣笠キャンパスは更に新たな展開を図ろうとしている。



【写真8】中央ひろば（広場）とその周辺の校舎

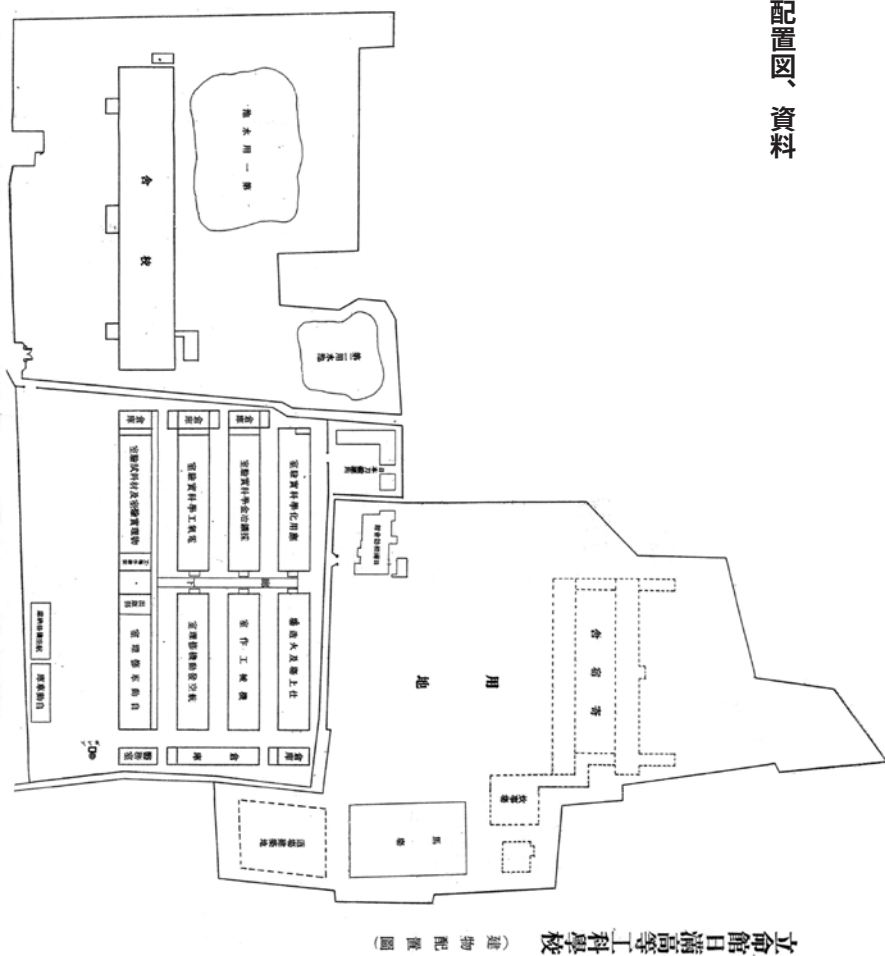
竣工パンフレット「充光館」2007年10月

- (1) 『理工学部六十五年小史』所収 大西永太郎「専門学校（理学科）時代から京都へ」 一九八〇年
- (2) 学園本部の移転により法人所在地は二〇〇六年九月、朱雀キャンパスに変更した。登記上は「中京区西ノ京榎尾町一番地の七」、通常表記を「中京区西ノ京朱雀町一番地」とした。なお、登記上の所在地は二〇一三年二月三日、「中京区西ノ京東榎尾町八番地」となる。

なお、漢籍の建物名称の由来については、『立命館百年史紀要 第二十号』（二〇一二年三月）の「立命館大学の建物名称について―広小路キャンパスおよび衣笠キャンパスを中心に―」を参照いただきたい。（ただし同稿に「アカデメイア立命^{ツーン}21」とあるが、公式にツーンとする資料は見当たらない。）

（二〇一三年一月 立命館百年史編纂室）

付
配置図、資料



立命館日清高等工科学校
(建物配置図)

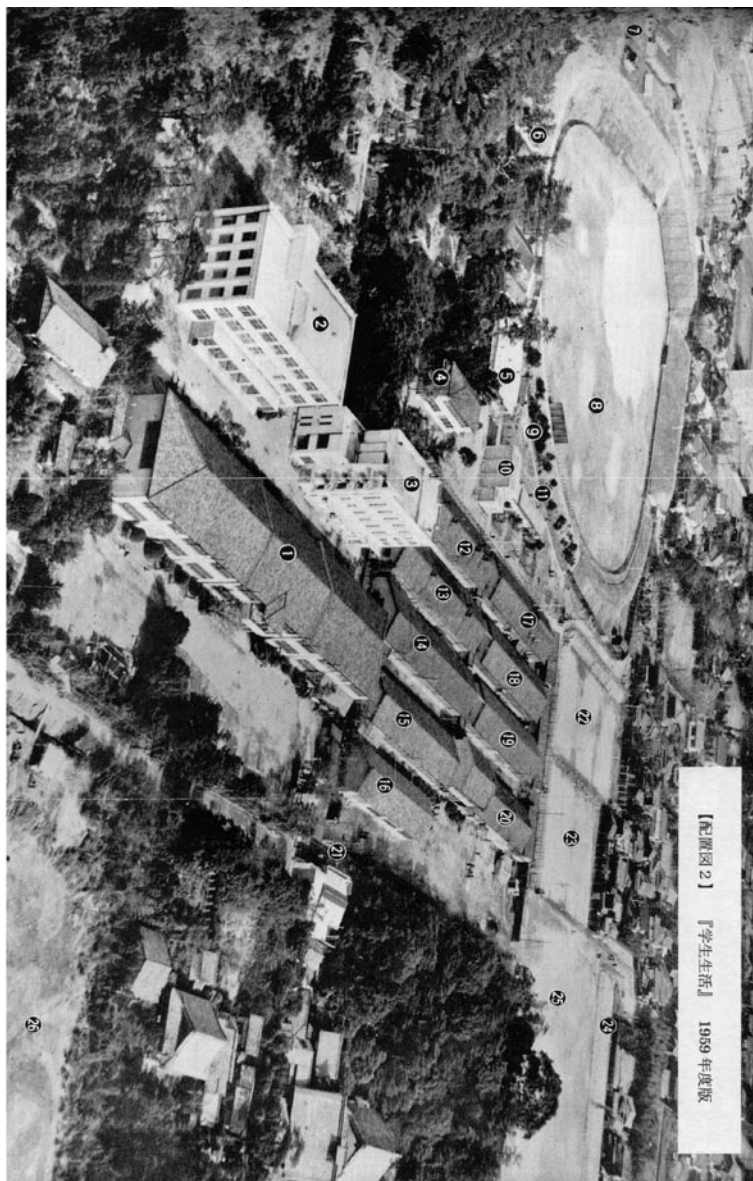
京都市上京区等持院北町

【配置図1】『立命館日清高等工科学校概況』

1939 (昭和14) 年11月以降1940 (昭和15) 年度か
衣笠キャンパス校舎配置図として最も早い時期のもの

— 理工学部学舎全景 —

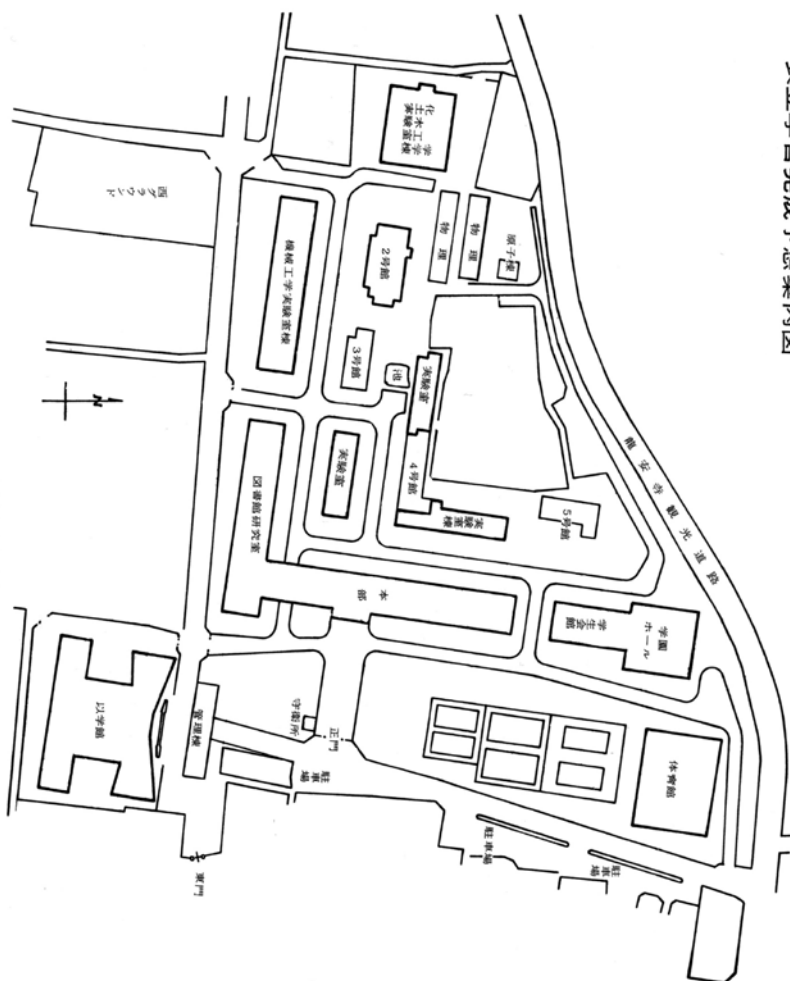
① 1号館(食堂、学生部、庶務室、売店) ② 2号館(教室、学部事務室) ③ 3号館(教室、図書館) ④ 化学実験室 ⑤ 化学 ⑥ 物理 ⑦ 生物 ⑧ 化学実験室 ⑨ 物理実験室 ⑩ 生物実験室 ⑪ 機械、土木実験室 ⑫ 正門 ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿



【配置図2】『学生生活』

1959年度版

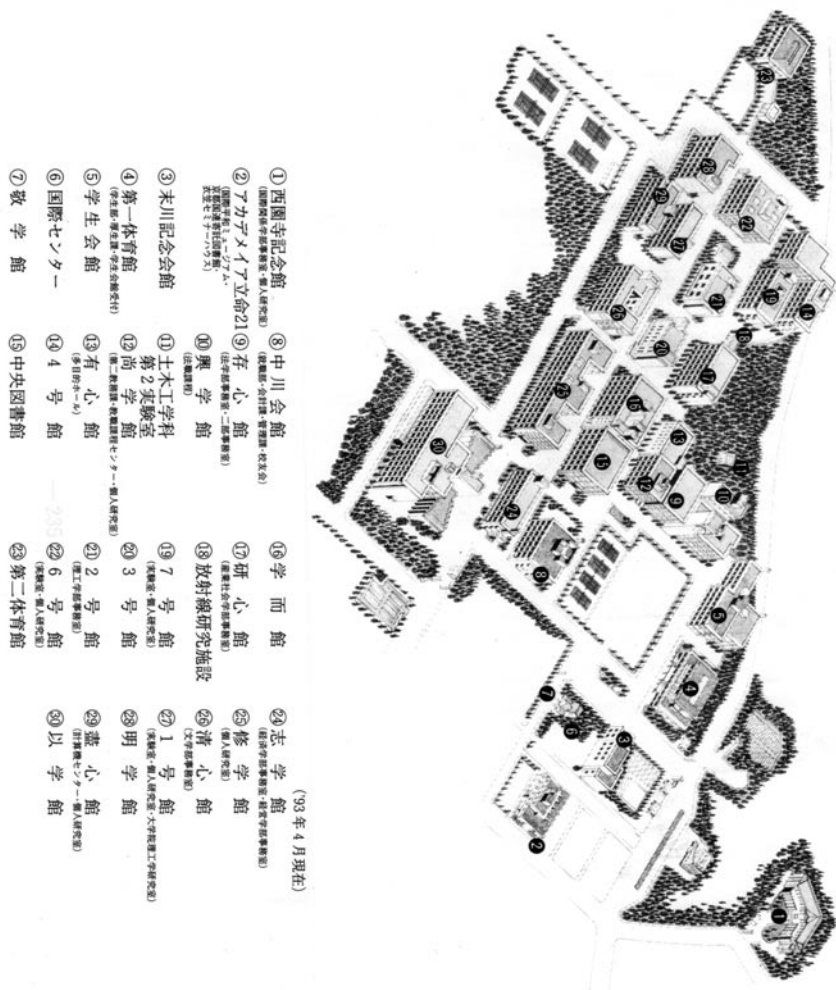
衣笠学舎完成予想案内図



【配置図3】『立命館大学衣笠学舎以学館新築竣工記念』パンフレット

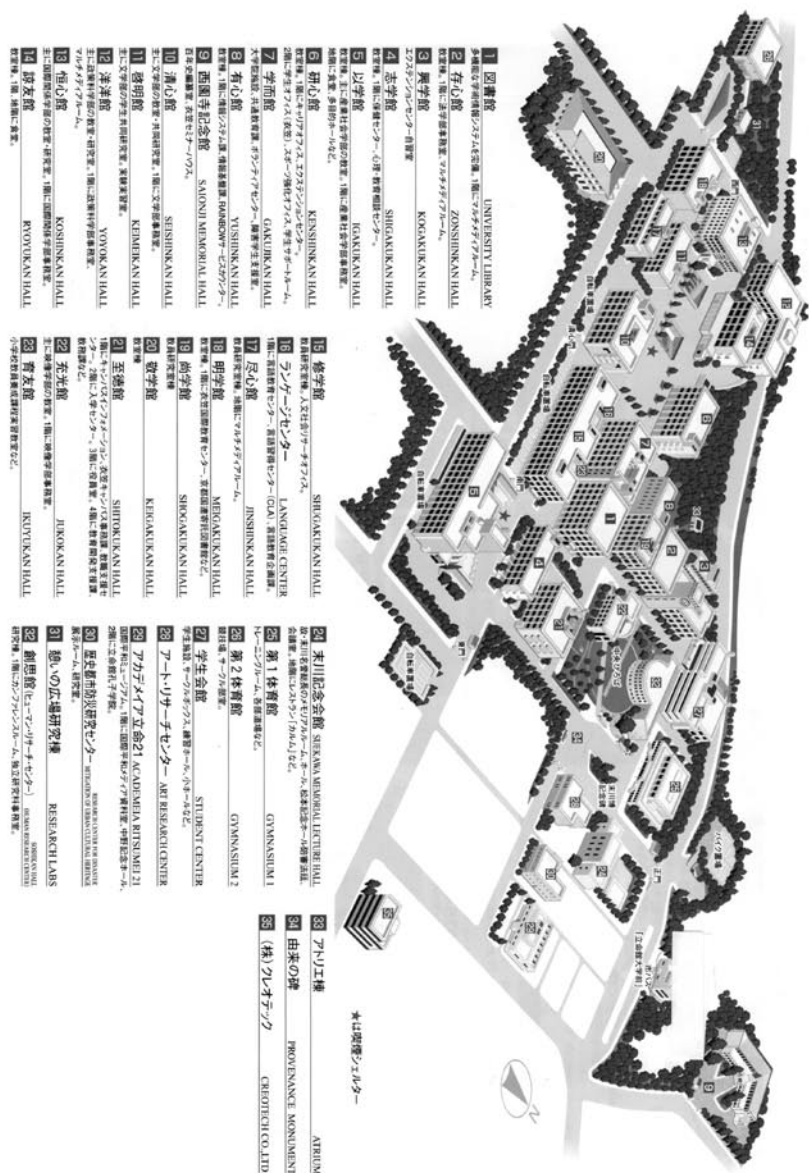
1965年4月19日

完成予想案内図である。その後計画は変更された。



【配置図6】キャンパスマップ「立命館大学'93 学生要覧(第一部)」

1993年4月(BKC拡充移転直前の衣笠キャンパス)



【配置図7】「立命館大学衣笠キャンパス Campus Map」

2010年3月

【資料1】衣笠学舎と広小路 /BKC との校地・校舎面積・学生数比較

2012.12作成

	校 地(m ²)		校 舎(m ²)		学 生 数(人)		備 考
	衣笠	広小路/BKC	衣笠	広小路/BKC	衣笠	広小路/BKC	
1943(昭和18)年度	43,382	5,411			1,346	3,649	理学科は43.12～47.5
1947(昭和22)年度	81,576	9,696	8,012	5,699	3,064	6,013	の間広小路
1950(昭和25)年度					1,815	7,541	
1955(昭和30)年度	73,781	12,896	13,550	19,016	4,190	12,005	
1960(昭和35)年度	78,872	20,714	14,405	30,921	3,954	10,429	
1965(昭和40)年度	91,323	21,494	36,463	36,589	9,457	10,525	経済・経営衣笠へ(65)
1968(昭和43)年度	102,503	21,495			9,542	13,560	
1970(昭和45)年度	102,147	18,276	60,557	30,123	11,914	10,199	産社衣笠へ(70)
1975(昭和50)年度	112,369	18,240	65,123	30,234	12,505	10,703	
1980(昭和55)年度	117,267	—	105,392	—	18,510	2,855	文・二部衣笠へ(78)
1985(昭和60)年度	123,052	—	110,232	—	19,805	—	法衣笠へ(81)
1990(平成2)年度	123,834	—	134,532	—	22,142	—	
1995(平成7)年度	124,061	572,454	144,499	85,617	22,915	5,234	理工BKCへ(94)
2000(平成12)年度	123,687	611,024	145,930	154,381	17,443	14,822	経済・経営BKCへ(98)
2005(平成17)年度	124,306	611,024	156,248	203,130	18,277	15,586	
2010(平成22)年度	126,189	611,078	164,142	225,802	18,195	17,804	
2012(平成24)年度	125,494	675,112	158,628	229,023	17,574	17,718	

- 注1. 出典は1943年度末から1980年度末までは『立命館百年史 資料編二』、1985年度は同年度「立命館学園広報別冊」、1990年度以降は各年度立命館学園案内による。1947年度の学生数は、1948年4月設置の「新制大学設置認可申請書」(控)による。
- 注2. 資料の基準日は、1943～1980年度の校地・校舎は各年度末、1985年度以降の校地・校舎および学生数は原則各年度の5月1日。
- 注3. 広小路学舎は81年2月まで、BKCは94年4月開設として扱った。80年度末(81.3.31)の広小路校地・校舎は売却により計上していない。
- 注4. 1990以降の原谷校地101,314㎡、校舎2,253㎡は上記衣笠に含んでいない。
- 注5. 2012年度の校地・校舎は2012.3.31現在、学生数は2012.5.1現在。出典はともに「Crossroads DATA FILE 2012」

【資料2】衣笠キャンパス建物一覧

2012.12作成

建物名(旧)	建物名(改称後)	構造(階のみ)	面積1(㎡)	面積2(㎡)	竣工または取得	備考
1号館	啓明館	5階建	3,118.08	3,118.08	1966.9 1996.3竣工	1996.4改称
機械実習工場棟		2階建	685.44		1966.9	1988.4解体
2号館		3階建	2,045.68		1956.2	2000.8解体
3号館		5階建	1,344.20		1954.3	2000.8解体
4号館	有心館	4階建	2,201.20	2,282.62	1961.8	1987.11改称 1995.7改修
4号館	洋洋館	地下1・地上6階		9,185.18	1988.3	1994.3改修・改称
5号館	興学館	2階建	724.58	724.58	1963.4	1987.4改称
6号館	恒心館	5階建	6,641.35	6,808.88	1965.9 1994.9改修	改称1994より 2000.8改修
7号館	諒友館	5階建	3,636.24	4,887.55	1976.6	改称1994より 1995.2増築改修
原子核研究室(コックロフト)		2階建	151.84		1960.4	1986.9解体
放射線研究施設	AVラボラトリー	地下1・地上1階		337.38	1988.3	
土木第2実験室	アトリエ棟	平家建	96.75	96.75	1967.10.27	
以学館		地下1・地上4階建 地下1・地上5階建	12,544.62	14,768.62	1965.4 2000.3改修	2008.2増築改修
修学館		地下1・地上5階建	9,265.85	11,734.00	1966.9(第一期) 1977.9(第三期)	1972.3(第二期) 1990.9(第四期)
図書館		地下1・地上3階建			1967.9	
図書館書庫		地下1・地上5階建	計7,651.31	7,651.31	1981.4	
第一体育館		2階建	4,714.91	4,754.15	1969.6	
学而館		地下1・地上4階建	6,627.39	6,886.99	1970.12 1995.8第二期改修	1988.2第一期改修
憩の広場・軽食堂	特別研究室	2階建	411.59		1978.10	2010.11解体
学生会館		5階建⇒地下1・地上5階建	7,028.30	7,465.74	1973.10(第一期)	1978.4(第二期)
志学館		地下1・地上4階建	2,937.99	3,060.03	1974.4	
清心館		地下1・地上4階建	7,384.60	7,384.60	1977.9	1997.3改修
中川会館	至徳館	地下1・地上4階建	6,134.58	6,091.19	1979.10	2007.7改称
研心館		地下1・地上4階建	4,339.32	4,339.32	1979.10	1995.9改修
存心館		地下1・地上4階建	9,737.27	9,909.77	1981.4	
第二体育館		地下1・地上1建	2,496.42	2,496.42	1981.4	改築中
末川記念会館		地下1・地上3階建	2,436.55	2,518.81	1983.11	2000.9改修
尚友館		2階建	1,676.71	1,676.71	1984.1	原谷
西園寺記念館		地下1・3階建		5,310.86	1988.3	永室
尚学館		地下1・4階建		2,134.00	1988.4	
尽心館		地下1・地上5階建		4,136.58	1989.3	
第二尚友館		2階建		576.00	1989.5	原谷
明学館		地下1・地上4階建		5,078.03	1990.3	
アカデメイア立命21		地下1・地上4階建		6,313.15	1992.2	
アート・リサーチセンター		3階建		1,257.60	1999.3	
敬学館		2階建	167.64		1987.4取得	1998.10取壊
敬学館		地下1・地上2階建		6,399.60	2004.3	
創思館		4階建		4,968.06	2001.3	
歴史都市防災研究センター		地下1・地上2階建		1,368.45	2006.2	
充光館		地下1・地上3階建		3,242.60	2007.9	
育友館		地下1・地上2階建		500.88	2008.2	
教職員会館		地下1・地上3階建		349.23	1986.8取得	
ランゲージ・センター		2階建		361.95	2002.11	
北グラウンド管理棟		平家建	187.80	187.87	1966.9取得	
永室グラウンド			6,633.56	6810.41	1977.5	
原谷グラウンド				101,314.00	1982.9	
中央広場整備				8,500	2001.3	
西側広場整備					2004.11	

注：①階高(塔屋略)および竣工日は竣工パンフレットによる。②面積1は1986年の、面積2は2012年現在の登記面積。

コラム 本学創立記念日について

昨年五月、創立記念日を迎えるにあたりその変遷について照会を受けた。改めてこの場を借りて整理をしておきたい。

現在、学園の創立記念日は五月一九日である。学校法人立命館教職員就業規則に五月一九日と定められている。

しかし本学の創立記念日が現行の五月一九日となるについてはいくつかの経過を経ている。『立命館百年史 通史一』では創立記念日について何度か変更されたことが記されている¹⁾。本稿では、学則・規則などにより改めて創立記念日の変遷について検討する。

《六月五日》

京都法政学校創立当初の創立記念日は、開校日である六月五日であった。第一回卒業生であった西村七兵衛氏の日記の一九〇二（明治三五）年六月五日に「創立記念日ニ付休講」とあり、同日記一九〇〇（明治三三）年六月五日に「仮開校式挙行」と記されていることから、この日を創立記念日とした²⁾。

《五月四日》

創立記念日が六月五日から京都法政学校設立認可申請日である五月四日となったのは、『通史一』では一九〇四年九月に京都法政大学と改称したことを機に一九〇五年から施行したとしているが、五月四日を創立記念日とするそれ以前の資料がある。

一九〇四（明治三七）年一月一八日付で発行された『私立京都法政専門学校一覧 第一回報』の京都法政専門学校規則第八条には「休業日左ノ如シ」として「本校創立記念日（五月四日）」とある。この記載からすると既に一九〇四年の五月四日は創立記念日であったことになる³⁾。以降五月四日の創立記念日は一九一三年度まで続く。

《一二月二日》

一九一三年、本学は財団法人立命館の設立申請をし同年一二月二日に認可、続いて一二月一〇日に私立京都法政大学から私立立命館大学への改称が認可された。翌一九一四年二月二八日発行の『立命館学報』第一号に掲載された「私立立命館大学規則」は財団法人設立認可日の一二月二日を創立記念日としている。この一二月二日は、一九二七年六月二五日発行の『立命館要覧（昭和二年版）』に掲載された「立命館大学学則」まで続いている。

《五月一九日》

この学則は翌一九二八年に改正された。同年二月

一五日付で発行された『立命館学誌』第一一一号には四月一日より施行する立命館大学学則の改正報告があり、第五条で「本学創立記念日（五月一九日）」としている。創立記念日を京都法政学校設立認可日の五月一九日とした最初の資料と思われる。

しかしこの五月一九日は、その後一九四〇年四月一日より施行（予定）の立命館大学学則（ただし資料は申請中のもの）までは記載されているが、以降戦後新制大学設置までその間の学則に創立記念日が記載されていない。時局に鑑み削除されたものと思われる⁴⁾。

戦後に創立記念日が復活することになったのは、一九四八年六月二二日の評議員会であった。末川総長は、立案中の就業規則に創立記念日を制定して休日とし、この日を明治三十三年五月十九日法政学校創立認可の日を以てしては如何との提案をし、全員賛意を表した。

これにより、同年一〇月五日施行の「財団法人立命館職員就業規則」に、本学園創立記念日（五月一九日）、と定められた。

以上にみてきたように本学の創立記念日は創立以降、六月五日（京都法政学校開校日）、五月四日（京都法政学校設立認可申請日）、一二月二日（財団法人立命館設立認可日）、五月一九日（京都法政学校設立認可日）と変遷を遂げてきた。

創立記念日もまた学園の歴史とともに変遷を遂げてきたことを紹介しておきたい。

- 1) 『立命館百年史 通史一』 一一三頁
- 2) 松本峻「西村七兵衛日記」『立命館・中川小十郎研究会会報』一九八二年
なお、同稿にも述べられているが、開校日を六月四日とする資料もある。
- 3) 一九〇一（明治三四）年三月二七日に申請した「私立京都法政学校規則改正願」には、休業日左ノ如シとし本校創立記念日を休業日としているが、月日は記されていない。一九〇二年には六月五日が創立記念日であったことから、六月五日から五月四日に変更したのは、一九〇三年度中のことではないかと思われる。
- 4) 一九四〇年七月一日施行（予定）の、同年六月一四日付「学則一部変更二付認可申請」は、休日、夏期休暇の短縮などについて変更申請をしているが、「文部省ノ垂示ニヨリ、同日付で三度の変更申請（控）が残っている。このうち最初の申請書（控）は「訂正ノタメ廃棄トナル」が「本学創立記念日（五月十九日）」ヲ削除ス、と記載されている。再提出の申請書は不認可であったが、三度目の申請書には既に創立記念日に関する記載がなく、この申請により創立記念日が削除となったと考えられる。
翌一九四一年四月一日より施行の「立命館大学学則」では休業日のために創立記念日はない。

中川小十郎の休暇観と立命館

田 中 有 美

はじめに

中川小十郎が立命館の創始に如何に尽力し、どのような教育方針をとったのかは、『立命館百年史』^①通史編によつてすでに明らかとされている。彼の記した論考や関係書簡についても、多くが資料編として翻刻・刊行されている。その一方で小十郎の論考の中には、未だ歴史学的に詳細な分析が行われていないものもある。本稿で取り上げる、小十郎の休暇に関する資料は、そのような論考の一つといえるだろう。

小十郎は昭和初期、『立命館学誌』^②や『立命館禁衛隊』^③の誌上で、夏期休暇や日曜日といった「休暇（余暇）」^④に関して持論を展開している。それらは勿論学生への訓示として発信されたものであり、総長としての小十郎の一面が読み取れる資料として興味深い。しかしこれらは、「小十郎の教育者としての顔」という表面的なキャラクターを捉える資料に過ぎない、という見方が主流であり、この内容を深化して検討した研究は皆無である。そこで本稿では、これらの小十郎の持論について、その社会的位置付けや

実際の立命館の教育課程と比較することとした。その過程で、小十郎の教育観をはじめ、小十郎がどのように立命館の教育課程に関わっていたのか、また立命館が教育機関としてどのような形を目指したのかを、断片的ながら明らかにできると考えたからである。小十郎や立命館に関する研究において、新たな一面に切り込むテーマとして、立命館における休暇が一定の意義を有していると考ええる。

一、大正・昭和期の余暇に関する言説

まず小十郎の休暇観に触れる前に、大正から昭和初期にかけての休暇に関する言説をまとめておきたい。休暇・余暇がいつから出現するかを概観すれば、それは近代において「時計」という概念が登場して、時間通りに行動する秩序が形成されていったことが通説的な見解であろう。西洋では一四〜一八世紀、教会・市場・学校など生活領域ごとに段階的に形成されたとされている。⁵⁾日本では、明治政府により西洋式の時間概念が導入され、明治二〇〜三〇年代には定着したとされている。つまり、前近代では不可分であった労働と休暇が、近代では時計の出現・労働形態の変化により、明確に分離し定着したのである。特に日本の場合、雇用型労働が増えた影響から、大正期に余暇産業への関心が高まり、余暇（当時は「娯楽」と表現している）研究が盛んになった。

小十郎の休暇論も、余暇研究が盛んになったあとに執筆されたものである。そこで同時代の代表的な余暇研究者の論を紹介し、小十郎の論の位置付けを探る糸口としたい。まずは中田俊造を挙げたい。彼は文

部省民衆娯楽調査委員を務めた、代表的な娯楽研究の社会学者であり、大正・昭和期の典型的な娯楽論者として位置付けられている人物である。⁶⁾ 中田は『娯楽の研究』（一九二四年）⁷⁾のなかで、次の二つの点を論じている。一つは、娯楽とは労働で疲れた人々の活力を回復するためのものである、という点である。これは「労働力の再生産」を狙った娯楽、と言い換えることができるだろう。中田の言葉を借りれば、人々の物理的・精神的疲労がつのるなかで、娯楽は「精神の疲労の回復」を行う「元気の泉」⁸⁾であるというのである。この認識は我々現代人にも共通するものであり、今日までレジャー産業が発展してきた所以でもある。中田もこの点を論じたうえで、娯楽の産業的有用性も論じている。

もう一点は、娯楽の内容に関する論点である。中田は演劇・芸術鑑賞・活動写真など「知的方面」¹⁰⁾である娯楽を興隆させることが重要と述べている。逆に、酒を飲むなどの低俗な娯楽は、「低級なる本能の横溢となり精神活動が卑賤になる」¹¹⁾ため、これを良質な娯楽へと改良することが重要であると指摘する。中田はこの改良により、不特定多数の人々を教化することも可能だとしている。このような論調も、大正期娯楽論の特徴の一つであり、「余暇善用論」と呼ばれている。¹²⁾ 娯楽を人々の労働・教化のための有用なツールとして捉えているのである。

中田のような大正期の一般的な娯楽論と一線を画したのが、権田保之助である。権田もまた、中田と同様に文部省民衆娯楽調査委員として娯楽研究を行っていた社会学者である。彼の論は、中田のような主流な言説を、特権階級が民衆のために都合よく捉えたものにすぎないと批判し、活動写真など、民衆が創造主体となる娯楽に着目して研究活動を行った。その特徴があらわれている論文として、「学生娯楽問題」

(一九三五年)⁽¹³⁾を取り上げたい。このなかで権田は、学生にとっての娯楽がどのようなべきかを論じているが、小十郎の論と比較するうえでも好材料である。

権田は、学生（ここでは高校・専門学校以上の、一六―二七歳程の若者を指している）が主体となつて生み出される娯楽には、「一種独得なる文化的意義」⁽¹⁴⁾があると評価している。学生は多くの時間を趣味娯楽に当てることができ、また学問に従事している点から、豊かな教養を持っている。その意味で、学生は「娯楽のパイオニア」⁽¹⁵⁾でもあり、経済的視点でも「有力な顧客」⁽¹⁶⁾と捉えることができると述べている。

また学生が娯楽に勤しむことは、人格形成にも良い効果があるとも論じている。権田は近年の学生の「峻険化」⁽¹⁷⁾や「左傾思想」⁽¹⁸⁾をやわらげるのに、娯楽が有用であると指摘し、学校当事者が娯楽に対して消極的である点を批判している。例えば、講堂や図書館などの学内施設は充実化するにも関わらず、食堂など休養の場として利用できる施設の充実化が図られていない点を批判している。集会所や娯楽施設を充実化させれば、学生が歓楽街で無統制な行動に出ることもなくなるとも指摘しており、学問に勤しむだけでなく娯楽に興じることも、教育現場には必要な要素であるのだとしている。

以上が大正・昭和初期の余暇に関する代表的言論である。中田と権田の論は、一見対極にあるかのように見えるが、余暇の充実化を図ることは、それが「上から」行われるか「下から」行われるかの違いがあれども、人々の労働意欲を高め市民の無秩序化を防ぐ効果がある、と指摘した点は共通する。労働のような社会的に重責を担う活動にとって、休養・娯楽はそれらを円滑に動かす源である、というのが彼ら社会学者の見解であった。そして、大正期からレジャー産業が発展することを考慮すると、当時の余暇

は「設けられることが良い」という論調が定着しつつあったと考えられ、余暇に時間を費やすことを否定することは少なかつたのではないか、と考えられる。加えてそれは労働者だけでなく、学生にも当てはめられていた。特に権田が指摘したような、学生生活における娯楽の有用性は興味深い。権田は学内の娯楽施設を充実化させることで、学生の人格形成にも良い影響を与えると論じている。「学問以外の時間」娯楽」が新たな文化を生み出すほか、教育的効果も期待できるとしているのである。

二、小十郎の休暇観

次に、小十郎の休暇論について、彼の論考から検討を加えたい。小十郎が休暇について触れた論考は、管見の限り三点である。以下年代順に紹介すれば、①「日曜の全休を廃止したい」⁽¹⁹⁾『立命館学誌』第一〇八号（一九二七年一月）掲載 ②「暑休の利用に就いて」『立命館学誌』第一二五号（一九二九年六月）掲載 ③「我輩の暑休を如何に暮したか」『立命館禁衛隊』第一号（一九二九年一〇月）掲載の三つである。いずれも学生に向けて発信されたものであり、小十郎の総長としての訓示という意味合いが強い文章である。

これらのなかで、小十郎は休暇についてどのように述べているのか。小十郎の言葉を借りれば、日曜日は全休を廃止すべきである、つまり自分は「半休論者」⁽²⁰⁾であり、日曜日も一部の時間を用いて労働（学生の場合は勉強）を行うべきだとしている。また暑休については「全廃論者」⁽²¹⁾であると述べ、夏期休暇は全

く必要ないとの持論を展開している。これらの持論は、小十郎自身もすぐに日本社会で実行し得ることではないと自覚しており、それゆえ「先づ之を我学園の問題としたいのである」⁽²²⁾と学生に訴えているのである。

ではなぜ、小十郎は休暇の廃止を考えるのだろうか。彼の論考で一貫しているのは、「休みは無駄である」という思想である。例えば①「日曜の全休を廃止したい」では、日曜日は「何等義務のない無条件の休日」⁽²³⁾であると断言している。日曜日は欧米の習慣であり、そこでは日曜学校など、休日を宗教的に活用する社会が成り立っている。しかし日本にはそのような習慣はなく、日曜日は無駄な時間となっている、と小十郎は主張している。また②「暑休の利用に就いて」では、夏期休暇の悪い過ごし方の例として、学生が「何の考慮もなさず、何の用意もなく、漫然として数十日を徒消空費し去る」⁽²⁴⁾、「遊戯三昧に耽る」⁽²⁵⁾ことを挙げている。さらには「健康向上を理由として、所謂避暑適地に漫遊を試むる」⁽²⁶⁾ことも否定している。これは日本の気候が欧米のように過酷ではないため、必要ないとしているのだ。

このように小十郎のなかでは、休暇は無駄そのものであり、加えて無駄は「損失」⁽²⁷⁾である、と位置付けられている。特に、休暇が仕事の能率を上げる効果を持っているという感覚がないことが興味深い。小十郎は、暑休は普段仕事や勉学に勤しんでいるものにとっては、「心身の疲労を休養することにつかはるるならば、暑中も結構」⁽²⁸⁾だとしている。しかし「平日余り勉強もせずのらりくらりやつてゐて疲労などしてゐないものが、暑中休暇だからと云つて、大手を振つて横行することに反対して居るのである。」⁽²⁹⁾と述べている。また人間の能力は「自分の仕事を自分の力で、自分の責任で、やる時に於て最高程度に發揮

する」⁽³⁰⁾から、その場合は疲労に鈍感になるものだ、とも述べている。よって小十郎としては、人間は極限まで、それこそ病で臥せるまで働くことが可能であり、それを防止するために休暇を利用することは想定していないのである。小十郎の指す「休暇をとる場合」とは、現代のいう「療養」に近い感覚ではなからうか。この小十郎の論は、大正期の社会学者のなかで沸き起こった「余暇の労働力再生産機能」とは対極にあつたといえるだろう。小十郎にとつては、「余暇」意味のない時間「損失」であつたのだ。それゆえ、小十郎自身の夏期休暇の話を持ち出す際には、自らの行動に強い意義付けがなされている。これは③「我輩の暑休を如何に暮したか」が好例であろう。このなかで小十郎は、休暇中の些細な出来事に、「このようなことを学んだ」というような意味付けを行っている。学生に対し、自らの休暇が「損失ではない休暇」であることを主張していると考えられる。

しかし、現実的には休暇を制度上廃止することが出来ないことを、小十郎は自覚していた。そのため彼は、休暇を「利用」⁽³¹⁾して勉強をすべきだと学生に提案している。小十郎は学生に、暑休の利用の心得について以下のように語る。「平生には出来かぬことをこの（暑休―括弧内は引用者による）期間を利用して為し遂ぐるようにせねばならぬ（中略）⁽³²⁾優者の地位に居らんと欲せば、（中略）暑休の利用の如きは朝飯前のお茶一杯の些事でなければならぬ。」⁽³³⁾普段取り組むことは出来ないが、社会に出た際に優位に立つには不可欠な知識を、休暇を用いて学ぶべきである、と小十郎は述べるのである。そしてその具体的な内容として、彼は外国語の学習を強く勧めている。その意識は、「私大は一般に外国語に於ては官大よりは後れて居る」⁽³³⁾という戦略的な部分にある。休暇を利用し外国語学習の向上を図ることは、小十郎の休暇観

に加え、「私学の權威を得んがため」⁽³⁴⁾という、学園の教育課程をも見越したものであった。

これを、前節で紹介した社会学者たちの論と比較してみると、小十郎の立ち位置が明確になる。同時代の一般的な余暇観は、労働（学生の場合は勉学）の効率化という視点に立っており、余暇の存在そのものを否定しているものではなかった。しかし小十郎は、余暇を労働の「余り」の時間とは捉えないのである。彼のなかでは、「労働を休む」ことが無駄そのものであり、例えば法的に休暇と定められた日があっても、労働や勉学に勤しむべきと考えている。そして現実的に見出されたのが休暇の「利用」という方法であったが、これも娯楽に利用するのではなく、自らの鍛錬のために用いなければならない、というのである。例えば、権田が提唱した「教育機関における憩いの場の拡充」は、小十郎の論とは真逆のものであるが、これは論者自身が実際の教育現場に携わっているかどうかの違いも影響するだろう。しかしながら、教育に従事した小十郎が窮極の効率主義とも呼べる休暇観を提唱していたことは、社会学者／教育者という分野を超え、余暇が定着しつつあった当時としては稀有な例であったことは指摘できるであろう。

三、立命館の休暇と小十郎

では、実際の立命館のカリキュラムにおいて、休暇はどのように扱われたのだろうか。また前節で述べた小十郎の休暇観は、カリキュラムにどのように影響したのだろうか。この点について、『立命館学誌』の記述から明らかにしていきたい。結論を先に述べるとすれば、立命館における休暇は①一九二八（昭和

三) 年 ②一九二九(昭和四) 年 ③一九三四(昭和九) 年 を境に、大きな変貌を遂げている。

まず①一九二八年の様子についてであるが、この年の四月、小十郎は立命館中学校の校長に就任している。^{③⑤}すると立命館中学校では、これまで利用されていなかった放課後や長期休暇を用いて、現代でいうところの「補習」を開催した。誌上で確認できる初めての講習は、五月六日に行われた国語・幾何の「特別講習」^{③⑥}である。その後、英訳・英作・国語・漢文・幾何・代数といった英数国の「特別講習」を週に一度のペースで開催している。この「特別講習」の規定によると、開催は「平日正科授業時間外、日曜日午前若クハ春季夏季並冬季休業時間」^{③⑦}とされており、通常授業期間のほか、日曜日や長期休暇といった休日にも開催されることが明記されている。これはまさに、前年に執筆された「日曜の全休を廃止したい」で小十郎が論じた理念を、中学校の場で実践したものといえよう。また、講習のクラスも目的別に二つに分けられていた点にも注目したい。「特別講習」クラスは、四年以上で進学を希望する者を対象とした補習が組まれ、学費は別途一〇円が必要であった。対して「普通講習」^{③⑧}クラスは三年以下で、教員が補習が必要とみなした生徒に命じて実施された。学費は無料である。これらの講習は、誌上では一九三三(昭和八)年まで確認できる【表】。中学校長として赴任した小十郎が、基礎学力の向上・底上げを徹底的に行うため、理念どおり休暇を「利用」しようとしたことが明らかとなった。

次に、この翌年である②一九二九年について見ていきたい。小十郎自身は、一九二九年三月に中学校長を退任している。^{④①}中学校の補習改革に成功した小十郎は、この年から大学の休暇でも同様のカリキュラムを採り入れようとするのである。七月には、「夏季施設の一として」^{④②}、大学の夏期講習を開始して

いる。その内容は、七月二五日から八月二四日の午前中に英語講習を、七月一五日から八月一四日の夜間にドイツ語講習を実施するというものであり、ドイツ語については初等科・中等科二つのクラスが設けられた。講習内容を語学の特訓としたことも、小十郎の「夏期休暇の利用」理念と一致しており、中学の英語・国語講習とも共通する部分であろう。休暇中の補習として基礎的学力の補填をすることが、大学でも行われていたということになる。しかしながら、この年の講習修了者一覧を見ると、修了者の約半数が学外からの参加者であることが分かる。なかには中学からの参加者の名もある。このことから、夏期講習の現実的役割としては、学内学生の学力向上というよりは、一般向けの語学講習を夏期に実施したもの、といえるだろう。しかし小十郎の意図は違っていた。「日曜の全体を廃止したい」の中で小十郎は、「新に文庫を建築し、図書を蒐集し、其閲覧室の設備も不完全ながら出来たのだが、之を利用する者は案外に少ない。況んや其日曜開館の希望など云つて来る人は未だ一人もない。」⁴³と学生の勉学意識の低さを嘆いている。正課以外の講義を設けるのは、学生の正課講義を減らさずに、さらに多くの講義を受けさせたいとする小十郎の思いの結果であるのだが、実際には、夏期講習の参加者は学外の者が多いという結果に至った。この点に関する小十郎の直接的な言説はみられないものの、学生が勉学にもっと勤しんでほしいと願う彼としては、不本意な結果であったかもしれない。学外学生が多いという傾向は翌年の一九三〇（昭和五）年も続いている。⁴⁴語学講習自体は、誌上では一九三二（昭和七）年まで確認でき、その間には漢文講習も加えられている【表】。

この語学講習に変化が現れるのが③一九三四年であった。この年から、夏期講習は語学特訓という内容

を一新し、法律学・経済学に関する専門講義を行うこととなった。期間は八月一日から八日と短くなっているものの、二時間一単位の単位制となり、聴講料が必要となった。⁽⁴⁶⁾ また八月一日から六日には文学・古典に関する講義も同様の形式で実施された。⁽⁴⁷⁾ この形式の夏期講習は、それまでの基礎学力重視から、専門分野の講義で専門的視座を身に付ける目的に変化したものといえよう。仮にこの形式を「講座」と呼ぶとすれば、講座実施は誌上で一九三七（昭和一二）年まで確認することができた【表】。

ではなぜ、「語学講習」から「講座」へと内容が変わったのだろうか。これは小十郎個人の意図の変化ではなく、立命館を取り巻く環境の変化が影響していると考えられる。「講座」が始まる前年の一九三三（昭和八）年には、いわゆる「滝川事件」が起きた。これにより、立命館は京都帝国大学から多くの教員を受け入れることとなり、学生により質の高い専門的講義を提供できるようになった。実際に「講座」を担当した教員には、京都帝国大学を追われた末川博・森口繁治・宮本英雄らが講師として名を連ねている。⁽⁴⁸⁾ 滝川幸雄もまた、「立命館大学囑託」という形式で講義を行っていた。⁽⁴⁹⁾ 「講座」の開始とは、これまでの「講習」を教員の質の向上により、学術的なものへ発展させるという意義があったのだ。

このような立命館の教員の質の向上は、学外にもアピールされ得るものであっただろう。「講座」の実施を宣伝する広告には、⁽⁵⁰⁾ 学内学生だけでなく他大学学生も大いに参加してほしい旨が述べられている。実際に聴講した佐々木惣一学長の回想では、⁽⁵¹⁾ 大学が研究機関として、その成果を学外や一般の人々に発信することができた点や、学生が、他大学の教授の講義を聴く機会を設けることが出来た点が評価されている。学術の場としての大学の機能をより発展させたものとして、この「講座」は画期的なものであっただろう。

そしてその出発点は、小十郎の「休暇の利用」論にあり、学内外へ大学の研究成果・知識を広める契機をつくったという点で、小十郎の休暇観は注目値すると考える。

おわりに

以上、小十郎の休暇観と、立命館における夏期休暇の利用について論じてきた。最後にその総括を行いながら、今後の展望について述べたい。

本稿で明らかとなったのは、小十郎が「休暇利用論」という独自の休暇観を持っていた点である。大正から昭和初期の社会学においては、娯楽による労働力再生産・娯楽産業への関心の高まりが指摘されている点から、少なくとも小十郎が当時としては異質な休暇観を持っていたことが窺える。この教育的な位置付けや分析は不十分であるが、小十郎の思想を説明する切り口として、休暇というキーワードが有用であることは確かであろう。またこれらの小十郎の独自の思想が、どのような背景から生まれたものなのかも今後検討する必要がある。本稿で一つ指摘するとすれば、小十郎が自らの努力・成功に対し大いなるプライドを持っている、という点である。彼は官僚・実業家・教育家として成功した人物であるが、それまでに苦学した経験がある。この自負が、「休みを惜しまず学問に励め」という学生に向けたメッセージとして現れているのではないだろうか。また同時に、立命館を官立大学に引けを取らない教育機関とするこ

これら小十郎が抱える学問への自負が、立命館中学校での取り組みを経て大学の夏期休暇利用へと発展した。そして最終的には、大学での研究成果を一般社会に還元する取り組みとして、夏期講座の開催に至った。この発展は、現在も立命館で開催されている「土曜講座」に繋がるものとしても意義がある。今後は同時期の他大学での取り組みと比較し、立命館の取り組みの位置付けを検討するべきであろう。しかしながら、小十郎の思想から生まれた、立命館のオリジナルな勉学を生み出そうとする努力の軌跡として、夏期休暇利用を捉えるとなると、小十郎の休暇観が立命館の教育において非常に大きな意味を持つてくるのではないかと考えられる。

中川小十郎研究会 田中有美（立命館大学文学研究科研修生）

【表】立命館の夏期講習

※出典は『立命館学誌』による。

※斜体字は参考事項。

西暦	和暦	月日	立命館中学校・商業学校の動き	立命館大学の動き	『立命館学誌』号数
昭和2	1927	11月	小十郎、1日曜の全休を廃止したいを『立命館学誌』に掲載。		108
昭和3	1928	4月	小十郎、中学校長に就任。		
		5月	6日・13日・20日・27日、中学で特別講習を開始。参加者は約140名。		115
		6月	3日・10日・17日に特別講習を行う。		116
		7・8月	特別講習を7月18日～7月31日、普通講習を7月18日～8月10日に行う。		117
		9月	23日・30日に特別講習を行う。		118
		10月	7日・14日・21日・28日に特別講習を行う。		118
		11月	平日の放課後に特別講習を実施し、講習時間を増加させることが決定。		120
		12月	4日・11日・18日・25日に特別講習を行う。		118
			2日・9日・17日・23日に特別講習を行う。		118
昭和4	1929	3月	小十郎、中学校長を退任。		
		4月	22日から、平日毎日放課後に特別講習を実施。		126
		5月	7日から、平日の放課後を用いて商業学校1年の普通講習を行う。		126
		6月	小十郎、「暑休の利用に就いて」を『立命館学誌』に掲載。		125
		7・8月	7月27日～8月5日まで、普通講習(3年以下)を行う。	夏期講習として、夜間にドイツ語講習(7月15日～8月14日)、8時～11時に英語講習(7月25日～8月24日)を開催。	126
		10月		『立命館学誌』上で、夏期講習修了者が発表される。ドイツ語初等科は47名、中等科は13名、英語部は34名の参加。半数は校外からの参加者。	127
			小十郎、「我輩の暑休を如何に暮らしたか」を『立命館学誌』に掲載。		
		7・8月		夏期講習として、19時～20時にドイツ語講習(7月15日～8月13日)、8時～11時に英語講習(7月25日～8月23日)を開催。この年の修了者の約半数も校外からの参加者。ドイツ語初等科は50名、高等科は25名、英語部は32名参加。	135
		7月	22日～31日に、特別・普通講習が行われる。	夏期講習として、国語漢文講習前期(11日～20日・57人参加)、ドイツ語講習(13日～？・69人参加)、商工経営講習(20日～？・47人参加)が行われる。	145
昭和6	1931	8月		22日に英語講習が終了。	146
		9月		国語漢文講習後期(1日～10日)が行われる。	146・147
昭和7	1932	7・8月	7月22日～7月30日に、英数国漢の夏期講習が行われる。	夏期講習として、ドイツ語講習(7月13日～8月10日)、英語講習(7月22日～30日)が行われる。	154
昭和8	1933	7・8月	8月15日から商業学校の4・5年生対象に特別講習が行われる。また7月20日には小十郎が中学校を視察、夏期休暇に関する訓示を行う。	ドイツ語・文科学科国語漢文の夏期講習が行われる。	163
昭和9	1934	8月		1日～8日の8時～12時に、法律学・経済学の夏期講座を開催する。1単位2時間で、聴講料が必要。夜間には無料の公開講演が開催される。	171
				1日～6日には、夏期国語講座が開催される。単位については不明。聴講料が必要であり、夜間に無料公開講座あり。	172
		9月		佐々木惣一「夏期講座を顧みて」が『立命館学誌』に掲載される。	173
昭和10	1935	8月		1日～6日、法律・経済学(140名参加)及び歴史学(78名参加)の夏期講習が開催される。	183
昭和11	1936	8月		1日～6日に法・経の夏期講座(107名参加)、1日～7日に国語国文学の夏期講座(147名参加)が開催される。国語講座は、2日に茶話会、5日に座談会が開催されている。	192
昭和12	1937	8月		1日～8日に法・政・経・商夏期講座を開催。また1日～7日には国語講座を開催。どちらも聴講料が必要。	201

〔注〕

- (1) 中川小十郎に関しては、立命館百年史編纂委員会編『立命館百年史』通史一（一九九九年、立命館）に詳しい。また諸史料は同資料編一（二〇〇〇年）に翻刻されている。
- (2) 一九一六（大正五）年から刊行された、立命館の学園誌。
- (3) 一九二八（昭和三）年に組織された、昭和天皇即位式の御所警衛を目的とする「立命館禁衛隊」の広報誌。一九二九（昭和四）年より刊行された。
- (4) 本稿では、小十郎が論じた夏期休暇・日曜日が「休暇」に該当する。またそれに準じるものとして、冬期休暇も調査の対象としている。加えて本稿では、「休暇」という語句について、「労働する以外の時間」という意味で、社会学における「余暇」と同義と捉えて論じているが、小十郎の用いた用語に準じ「休暇」を中心に用いている。
- (5) 佐藤裕紀子『大正期における新中間層主婦の時間意識の形成』風間書房、二〇一一年。
- (6) 佐藤裕紀子『大正期における新中間層主婦の時間意識の形成』。
- (7) 石井弘義監修『余暇・娯楽研究基礎文献集』第六卷（大空社・一九八九年）に収録。原典は帝国書院より一九二四年に出版された。
- (8) 中田俊造『娯楽の研究』一頁。
- (9) 中田俊造『娯楽の研究』五頁。
- (10) 中田俊造『娯楽の研究』九頁。
- (11) 中田俊造『娯楽の研究』三三一頁。

- (12) この点は、石川弘義「余暇の理論史」（石川弘義編『レジャーの思想と行動』日本経済新聞社、一九七三年）でも、大正期の特徴として指摘されている。

(13) 権田保之助『権田保之助著作集』第四卷（文和書房、一九七五年）に収録。原典は『大原社会問題研究所雑誌』一九三五年八月号に掲載された論考。

- (14) 権田保之助『権田保之助著作集』第四卷、二九二頁。

- (15) 権田保之助『権田保之助著作集』第四卷、三〇七頁。

- (16) 権田保之助『権田保之助著作集』第四卷、三〇七頁。

- (17) 権田保之助『権田保之助著作集』第四卷、二九六頁。

- (18) 権田保之助『権田保之助著作集』第四卷、二九六頁。

- (19) この論考は、同年一〇月一九日に小十郎が講演部にて講演した内容を、文章化して掲載したものである。

- (20) 「暑休の利用に就ひて」『立命館学誌』第一二五号、三頁。

- (21) 「暑休の利用に就ひて」『立命館学誌』第一二五号、三頁。

- (22) 「日曜の全休を廃止したい」『立命館学誌』第一〇八号、四頁。

- (23) 「日曜の全休を廃止したい」『立命館学誌』第一〇八号、三頁。

- (24) 「暑休の利用に就ひて」『立命館学誌』第一二五号、三頁。

- (25) 「暑休の利用に就ひて」『立命館学誌』第一二五号、三頁。

- (26) 「暑休の利用に就ひて」『立命館学誌』第一二五号、三頁。

- (27) 「日曜の全体を廃止したい」『立命館学誌』第一〇八号、三頁。
- (28) 「我輩の暑休を如何に暮したか」『立命館禁衛隊』第一号、三頁。
- (29) 「我輩の暑休を如何に暮したか」『立命館禁衛隊』第一号、三頁。
- (30) 「日曜の全体を廃止したい」『立命館学誌』第一〇八号、二頁。
- (31) 「日曜の全体を廃止したい」『立命館学誌』第一〇八号、四頁。
- (32) 「暑休の利用に就ひて」『立命館学誌』第一二五号、四頁。
- (33) 「暑休の利用に就ひて」『立命館学誌』第一二五号、四頁。
- (34) 「暑休の利用に就ひて」『立命館学誌』第一二五号、五頁。
- (35) 「立命館百年史」通史一、「立命館学園略年表（戦前・戦中期）」八頁。
- (36) 「立命館学誌」第一一五号、一九二八年六月、二二頁。
- (37) 「立命館学誌」第一一五号、二二頁。
- (38) 「立命館学誌」第一一五号、二二頁。
- (39) 「普通講習」については、夏期休暇中から開始されていると考えられる（『立命館学誌』第一一七号、一九二八年九月、二二頁）。
- (40) 『立命館百年史』通史一、「立命館学園略年表（戦前・戦中期）」八頁。
- (41) 『立命館学誌』第二二六号、一九二九年九月、一四頁。小十郎は「日曜日の全体を廃止したい」の中で、学内施設の不十分性を指摘しているため、他にも学内施設の拡充が行われている可能性がある。

- (42) 『立命館学誌』第二二七号、一九二九年一〇月、一四・一五頁。
 「日曜の全休を廃止したい」『立命館学誌』第一〇八号、四頁。
- (43) 『立命館学誌』第一三五号、一九三〇年九月、六頁。
- (44) 語学講習も引続き行われていた可能性もあるが、史料上確認はできなかった。
- (45) 『立命館学誌』第一七一号、一九三四年五月、目次下広告。
- (46) 『立命館学誌』第一七二号、一九三四年六月、一四頁。
- (47) 『立命館学誌』第一七一号、一九三四年五月、目次下広告。
- (48) 『立命館百年史』通史一、五一〇・五一頁。
- (49) 『立命館学誌』第一七一・一七二号、目次下広告。
- (50) 佐々木惣一「夏期講座を顧みて」『立命館学誌』第一七三号、一九三四年九月、五〇七頁。

中川小十郎研究会活動報告

山崎 有恒

はじめに

本研究会は、中川小十郎の生家にあたる中川家（通称「堀之内」）の資料（以下、生家資料という）が調査のために立命館百年史編纂室に寄託されたのをきっかけとして二〇一一年に発足したものである。最初に、『立命館百年史紀要』第二十号に掲載した報告と若干重複する内容もあるが、本研究会の立ち上げについて簡単に経緯を説明しておきたい。

文学部教授であり、日本近代政治史を専攻する山崎有恒が、二〇一〇年に百年史編纂室より生家資料の整理方針について相談を受けた際、以下の四点をアドバイスした。それは①生家資料についてまずは史料の性格に基づいて、いくつかのカテゴリー（書簡、写真、掛け軸など）に分類した後、史料一点ごとの詳細な目録作りを行うべきこと、②この機会に生家資料だけでなく、中川小十郎に関する史料全体について調査、情報整理を行うべきこと、③そうして集められた史料情報をベースとして、中川小十郎のライフヒ

ストリーについて多角的に検討を行うこと、及びくずし字史料の翻刻を進めていくこと、④そのためにできれば歴史学を専門とする研究者と大学院生を中心に、百年史編纂室の事務職員も参加する形で中川小十郎研究会を立ち上げることの四点であった。この提言に基づいて、百年史編纂室ではアルバイト数名を雇用して、史料群の分類整理作業、書簡などくずし字史料の翻刻などの整理作業を随時進行していった。

その間山崎は一年間の学外研究（韓国・高麗大学）を行うため日本を離れた。そしてその終了を待って、百年史編纂室と今後の研究活動についての打ち合わせが行われた。百年史編纂室における整理作業が一定以上進展し、本格的な研究を行ううる準備状況に達していることを受けて、二〇一一年末より正式に中川小十郎研究会を立ち上げることが決定した。

1. 研究会の実施概要

第一回の研究会が開かれたのは二〇一一年二月九日（金）のことであった。西園寺記念館の百年史編纂室会議室にて開催された第一回研究会には、研究会代表となる山崎に加え、歴史学研究者として藤野真挙（日本学術振興会特別研究員）、吉田武弘（立命館大学文学研究科博士後期課程三回生）、田村悠（立命館大学大学院文学研究科研修生・百年史編纂室アルバイト）の三名、そして百年史編纂室より佐々木雅美（百年史編纂室課長）、奈良英久（百年史編纂室課長補佐）の二名が参加して総勢六名で発足した。当

面の間、研究会の幹事は田村悠がつとめることとなった（後に田村が立命館契約職員（専門職）へ就職したことにより、幹事は田中有美へ受け継がれた）。

さて第一回研究会では、参加者の自己紹介の後、山崎より研究会の活動趣旨について説明を行った。次いで、百年史編纂室アルバイトとして生家資料の整理作業にあたってきた田村悠より、中川家文書全体の史料状況についての概要説明がなされた。

中川家文書の整理は、百年史編纂室が把握する限り、これまで三次にわたり行われてきた。一九五九年に学園に引き渡された京都市上京区塔の段の中川小十郎私邸（「白雲荘」）の資料などの第一次整理、一九八二年に中川小十郎養家より寄贈された資料群の第二次整理、そして二〇〇九年に中川小十郎生家より寄託を受けて百年史編纂室で整理を進めてきた資料群の第三次整理である。そのほかに、立命館大学衣笠キャンパス図書館の貴重書庫に保管されている資料群もあることがわかった。

ところがこれらの中川家文書については、その調査・整理をさす「第〇次整理」と保管区分をさす「中川家文書（第〇次）」とが対応しておらず混乱を招くことから、史料全体の整合性を図り、研究会や百年史編纂室の調査・整理における呼称など共有化を図ることにした（この点については、本『立命館百年史紀要』第二十一号収録の「『中川家資料』について——資料調査・整理報告——」参照）。

最後に、山崎より今後の活動方針として、しばらくは中川小十郎伝記資料（中川家文書（第一次）、同（雑）に含まれる伝記原稿および参考資料一式の総称）の中からテキストを選び、輪読していく旨の提案

を行い、テキストとしてこの伝記資料に収録されている中川小十郎の伝記（整理番号…二八八～二九六）を選び、今回の研究会ではこれを各自がレポートしていくこととなった。

第二回研究会は、二〇一二年一月一三日（金）に、立命館大学衣笠キャンパス啓明館一階、日本史共同研究室にて開催された。この回から日本近代史を専門とする田中有美（立命館大学大学院文学研究科研究生）が新たにメンバーとして参加した。

前回の研究会で割り振られた担当に基づき、中川小十郎伝記資料の報告を行った。報告順および担当テキストは下記の通りである。

- ① 山崎 二九六 養子、二九五 少年時代
- ② 奈良 二九四 上京
- ③ 田村 二九三 東京府第一中学および成立学舎時代、二九二 大学予備門時代
- ④ 藤野 二九一 文部局時代、二九〇 京都帝国大学書記官時代
- ⑤ 吉田 二八九 京都法政学校の設立
- ⑥ 佐々木 二八八 文部省参事官時代

各自の報告の結果、幼少期～京都帝国大学書記官時代（一九〇〇年代半ば）までの中川小十郎の略歴は、大学生時代を除いて、中川小十郎伝記資料におおよそまとめられていることがわかった。

今回の研究会では、テキストとして「三〇二第二編中川系図の研究」のうち、第三章、章不明分および反故分を用いることとなった。

第三回研究会は、二〇一二年二月一〇日（金）に、前回と同じく立命館大学衣笠キャンパス啓明館一階、日本史共同研究室にて開催された。この回から長谷川澄夫（百年史編纂室アルバイト）が新たにメンバーとして参加した。立命館大学日本史学専攻の卒業生である長谷川は、中川小十郎の出身地である馬路町の町史編集委員を務めた経験を持ち、百年史編纂室アルバイトとして中川小十郎関係資料の整理作業に従事している。

前回の研究会で割り振られた担当に基づき、中川小十郎伝記資料の報告を行った。報告順および担当テキストは下記の通りである。

- ① 田 村 系図研究の概略および馬路村について
第三章第七節、章不明分第二節、反故分
- ② 奈 良 章不明分第一節
- ③ 藤 野 第三章第三節
- ④ 山 崎 人見氏外伝（第三章第三節付属）
- ⑤ 吉 田 第三章第四節
- ⑥ 田 中 第三章第五節

⑦ 佐々木 第三章第六節

報告の結果、中川家の系図研究が中川小十郎の実父・中川禄左衛門の代から始められたこと、研究が始められた遠因として馬路村の成り立ちが関係している可能性が高いこと、論理や仮説の実証に、まま飛躍が見られることなどが分かった。また長谷川より現代の馬路町の様子について、補足説明があった。

次回の研究会では、テキストとして伝記資料のうち、中川小十郎の演説や訓話、論文、伝記原稿などから各自が興味関心に沿って選んだものを報告することとなった。

第四回研究会は、二〇一二年四月六日（金）に、立命館大学衣笠キャンパス尽心館の山崎の個人研究室にて開催された。この回から幕末維新期の政治思想史を専門とする奈良勝司（当時、立命館大学文学部非常勤講師）と日本近代の風俗史を専門とする寺澤優（立命館大学大学院文学研究科博士前期課程院生、百年室編纂室アルバイト）の両名が参加した。

この回では中川小十郎の伝記資料（論考・演説原稿など）の中から、各自が興味を持ったテキストに関して報告を行った。担当した資料は以下の通りである。

- ① 山崎 六七「先づ健康を」、71「私の食養生」
- ② 田村 五五「立命館学園の過去現在未来」、111「私の発見を発表する」
- ③ 田中 二六〇「我輩の暑休を如何に暮したか」、317「明治初年の致遠館と中川武平太」

- ④ 藤野 三〇「女子教育の拡充」、二八六「男女ノ文體ヲニスル方法」
- ⑤ 吉田 一八二「三党首の妥協」、一八三「新党の立場」、一八八「憲政擁護運動」
- ⑥ 長谷川 三〇七「前期戸長時代」、三一九「後期戸長時代」、三二〇「晩年の武平太翁」
- ⑦ 奈良英 五六「立命館大学の新築落成式と立命館禁衛隊の組織」

こうして第二回から第四回研究会にかけて、中川小十郎伝記資料をベースとして、中川小十郎の経歴、思想、性格などについて検討を重ねていったが、その過程を通じて次第に掘り下げていくべきテーマが見出されてきた。今後、現在の歴史学界における研究状況とも照らし合わせながら、以下の点に関して集中的に研究を進める必要があるのでは、という意見が出された。

- ・ 中川小十郎の人物像に迫ることのできる資料の発掘・評価。
- ・ 中川小十郎の女子教育観及び中央政界に対する評価や立場、今まで評価されていない新資料が文書の中にないか。
- ・ 幕末維新期の中川家、特に中川小十郎の養父である中川武平太について。
- ・ これまで『立命館百年史』等の中でどれほどの資料が紹介・評価されているのか。

これらの点については、引き続き各メンバーが調査し、随時報告を行うこととなった。

第五回研究会は、二〇一二年五月一八日（金）に、立命館大学衣笠キャンパス啓明館一階、日本史共同研究室にて開催された。

前回に引き続き中川小十郎伝記資料より各メンバーが選んだテキストについての報告を行った。各担当は下記の通りである。またこれまで行ったテキスト報告に基づき、今後各メンバーがそれぞれの専門として担当すべき分野を定めていった。

- ① 藤野…一八一「本願寺問題」【専門テーマ】中川教育観・言文一致に関する論考
- ② 吉田…一一「現下の政情」【専門テーマ】中川の政治観・西園寺公望との関係や立場
- ③ 田中…二六七「日曜日の全体を廃止したい」【専門テーマ】中川の休暇観と立命館の教育課程
- ④ 田村…一二六「富山房と私」、二五五「学園大体の現状」、二八四「専門学校開校式において」

【専門テーマ】中川の学園経営・人材育成観・学歴観

- ⑤ 長谷川…三一五「禄左衛門翁と歌」【専門テーマ】中川家について
- ⑥ 佐々木…六一「入試問題に就いて（新聞切抜）」【専門テーマ】立命館の教育方針
- ⑦ 奈良英…九七「禁衛隊予行演習における講演」、二七六「立命館禁衛隊の結成」、一二三「禁衛隊記念式に於ける訓示」【専門テーマ】中川教育観、訓示や談話の検討

- ⑧ 奈良勝…一三八七「人見・中川戊辰唱義録建立関係」【専門テーマ】幕末維新期資料の検討
- ⑨ 山崎…九九七「我輩の簡易生活」【専門テーマ】中川人物研究・生活観

この間、百年史編纂室ではアルバイトの長谷川により『立命館学誌』の論説一覧が作成されたため、これを参考資料としてメンバー間で共有した。

またこれまで継続して続けてきた中川小十郎の思想と行動についての研究に加え、今後の研究会で、生家資料の書簡史料を分担して翻刻し、報告を行う方向性が提案された。

第六回研究会は、二〇一二年六月二十九日（金）に、立命館大学衣笠キャンパス啓明館二階、日本史共同研究室にて開催された。

まずこれまでの研究会に引き続き、中川小十郎伝記資料をテキストとして各自の研究テーマに基づいた報告を行った。報告内容については以下の通りである。

- ① 山崎…一七九「最近の台湾」【専門テーマ】中川の人物研究、植民地研究（台湾・樺太）
- ② 佐々木…第五回研究会報告の六一「入試問題に就いて（新聞切抜）」の補足、五九「雑誌切抜（立命館高等予備校の教育方針に就いて）」【専門テーマ】立命館の教育方針
- ③ 田中…「暑休の利用に就いて」（立命館学誌より）【専門テーマ】中川の休暇観と立命館の教育課程
- ④ 寺澤…「大震雑感」【専門テーマ】関東大震災と中川、中川の都市計画観
- ⑤ 奈良勝…生家資料一三A一c二「元治元年六月両苗郷土之帰」記鑑、一三A一c三「覚」【専門テーマ】近世末の郷土、幕末の政局、人見中川両苗の活動

⑥奈良英・八「学生ニ対スル訓話（夜間部）」、九「学生ニ対スル訓話（昼間部）」【専門テーマ】中川
 の教育観・訓示や談話の検討

⑦長谷川・二六三「私の生家」、配布資料についての報告【専門テーマ】中川の家について

次に前回研究会で提案された今後の研究活動方針について再確認し、研究報告予定を確定した。その内容は以下の通りである。

- ① これまでのテキスト報告の中で定まった各自の研究テーマについて、長めの研究報告を行う。後期（第八回研究会）から、一回に一人程度のペースで行う。そのために夏季休暇期間中に百年史編纂室を訪れ、各自のテーマについて史料調査を行う。
- ② ①と同時に、生家資料の書簡について、内容や背景の報告を行うこと。そのために必要な書簡データは、CD二枚（翻刻が終わっている箱番号一〜三二までの書簡）にまとめ配布した。
- ③ 本年度の成果としては、『立命館百年史紀要』に本研究会の活動報告を行うとともに、①の成果についてコラムあるいは論文などとして掲載することを目標とする。

第七回研究会は、二〇一二年七月二四日（火）に、立命館大学衣笠キャンパス啓明館一階、キャンパスアジア事務室にて開催された。

まず前回に引き続き、各自の研究テーマに基づき、中川小十郎伝記資料をテキストとして用いた報告を行った。報告内容は以下の通りである。

- ① 吉 田…伝記資料二二「御大喪儀前の政情」【テーマ】大正～昭和期の中川の政局観・政治活動
- ② 奈良勝…生家資料一三A一c二、三、七【テーマ】幕末期の郷土・人見中川両姓と一橋慶喜
- ③ 寺 澤…テーマ報告 中川小十郎と関東大震災当時の都市論と中川の都市論
- ④ 佐々木…テーマ報告 夏期講習の実態と入学試験の推移について

次にその後の研究会活動の中心となる生家資料書簡報告にかかわって、生家資料に含まれる書簡の翻刻作業を担当してきた長谷川より「中川小十郎関係書簡の翻刻作業について」と題するこれまでの作業概要について詳しい説明がなされた。

そして次回の第八回研究会より、生家資料の書簡について、背景や翻刻修正の報告を行うことを決定した。二〇一二年度中には明治・大正期と判明している書簡（二〇三通）の読解を行うこと、そのために、一回の研究会につき一人三通を読解し、内容や背景の報告・翻刻の誤字脱字修正を行うことを目標にすることとした。その方針に基づき、報告の手順や順番・担当箇所を決定した。

書簡報告の担当者は以下の順番で、年代が古い順に三通ずつ担当することとした。

（田中↓寺澤↓田村↓吉田↓藤野↓山崎↓長谷川↓田中へ）

そしてこの書簡報告のために、書簡画像データ（後半）、修正した翻刻データ、修正した目録を配布した。

第八回研究会は、二〇一二年九月二八日（金）に、立命館大学衣笠キャンパス啓明館一階、キャンパスアジア事務室にて開催された。

まず研究テーマ報告が行われた。この回では、田中が「中川小十郎の休暇観と立命館」についての報告を行った。報告後、質疑応答を行い、報告内容が極めてユニークかつ充実したものであったことから、年度末に発刊予定である『立命館百年史紀要』にコラムとして掲載する方向で加筆修正を行い、百年史編纂室事務局会議にて確認を行うこととした。

次に生家資料の書簡報告が行われた。研究テーマ報告に引き続き、田中担当分の三通（一B五b一／六B二b三／一六B一四b三）について、書簡翻刻の修正、書簡の内容検討、書簡の背景説明などを行った。

第九回研究会は、二〇一二年一〇月二六日（金）に、立命館大学衣笠キャンパス啓明館一階、日本史共同研究室において開催された。

研究テーマ報告は、奈良英久「中川小十郎の教育観」（内容は時勢、時局によらない一貫した「勉学推奨」の姿勢）であり、報告後、質疑応答を行った。

次に生家資料の書簡報告が行われた。この回は吉田担当分の二通（三二B一九c八／一〇B二b三）であった。この回の書簡は中川小十郎の学生時代の素顔がわかる内容であり、なかなか興味深いものであった。ただ三二B一九c八の翻刻データが後半部分欠落しており、欠落部分を出席者全員で読み合わせて埋

めた。

また翻刻時の句読点の打ち方を含め、体裁の統一に関して今後統一を図ることが合意された。

第十回研究会は、二〇一二年二月七日（金）に、立命館大学衣笠キャンパス啓明館二階、日本史共同研究室にて開催された。

研究テーマ報告は、吉田「大正期における中川小十郎の政治活動とその構想」であり、報告後、質疑応答が行われた。その中で、『立命館・中川小十郎研究会会報』掲載の資料が用いられたが、これについてはその所在を確認する必要があることが指摘された。

また大正期に引き続き、昭和期の小十郎の政治活動についても、焦点を当てることが今後の課題とされた。

次に生家資料の書簡報告が行われた。この回は山崎担当分の四通（三B一d六／一B九e四／八B一c八／八B一b一）であった。書簡の読みについての修正や年代推定、内容の確認などについて参加者全員で検討した。

2. 研究会の二〇二二年度の成果

中川小十郎研究会の一年目は、様々な伝来経緯により五種類に分かれて所蔵されている中川家文書につ

いて、それぞれの性格をメンバー全員が熟知するとともに、その中でも特に中川小十郎伝記資料を主たる素材として、中川小十郎の思想と行動について多角的に検討することを主目的として進められた。

一年間の研究会活動を通じて、各メンバーから興味深い報告が積み上げられ、これまで比較的研究の及んでいない少年時代のエピソードや、中川小十郎の独特の休暇観、一風変わった食育健康法など、中川小十郎の知られざる性格や考え方が次々と明らかになってきた。メンバー各自の研究テーマも次第にその分野が絞られつつあり、今後様々な形でその成果を公開していきたいと考えている。本『立命館百年史紀要』第二十一号に収録された田中有美の中川小十郎の休暇観をめぐる論考も本研究会の成果の一部である。

あわせて本研究会では、これまで様々な分野で近代くずし字文書を読み込んできた経験あふれるメンバーが集まっていることもあり、生家資料に含まれる新出書簡群について、その翻刻作業を確定させ、年代推定を施し、また書簡の内容や背景などについて研究を進めていく作業ももう一つの大きな課題としてある。これについては二〇一二年秋頃より着手したが、二〇一三年度以降の研究会の二つ目の柱として（場合によっては書簡解読を専門とする研究会を別途立ち上げる可能性もあるが）、本格的に進めていき、ある程度その成果がまとまってきた段階で、順次「（史料紹介）中川小十郎関係文書の紹介」などの形で、成果を公開していきたいと考えている。

おわりに

本研究会の活動はまだ始まったばかりである。中川小十郎に関する史料は膨大にあり、その全容を把握し、そこに含まれた情報を消化していくにはかなりの時間と労力を要することは言うまでもない。しかし明治維新期に立身出世を目指して東京に進出し、文部官僚から植民地行政へと転じ、さらに高等教育機関の設立に尽力していった中川小十郎は、ある意味であの時代の若者が目指した「立身出世」を体現した人物であり、そうした人物にまつわる個人史料がこれだけ大量に残置しているのは極めて珍しい。これまで明治時代の歴史研究は、政治家の政策研究や派閥対立構造の解明を中心に進められてきたが、そうした政治家の下にあつて、実際に政策立案にあたり、その実現を支えたのは、彼ら明治の「立身出世」組であつた。政治家の政策研究が一段落した今、次なる研究対象は彼ら官僚層に移行しようとしている。本研究会の活動がその萌芽となることに参加者の一人として期待を抱いている。

また立命館の創立者である中川小十郎の研究が、学内の研究者だけでなく、職員も加わる形で進められていることにも大きな意義を感じている。百年史編纂室の佐々木課長、奈良課長補佐には慣れない研究活動への参加ということで、戸惑いを感じられたことも多かったのではないかと推察する。しかしながらお二人が精力的にこの研究会での活動に取り組み、興味深い報告をしていただいていることが、私たち研究者にとっても大きな刺激となった。こうして事務職員と、研究を専門とする教員とが手を取り合い、創立者への理解を深めていくという特色ある本研究会が、二〇一三年度も良き雰囲気の中で続いていくことを祈念している。

（立命館大学部文学部教授）

「中川家資料」について——資料調査・整理報告——

田中 有美・寺澤 優・長谷川 澄夫

一、はじめに

二〇〇九（平成二一）年一月、亀岡市馬路町にある学園創立者・中川小十郎^①の生家の資料が寄託され、二〇一〇（平成二二）年四月よりその調査・整理をおこなってきた。中川小十郎関係の資料は、この間数度の調査・整理の作業がおこなわれており、第一次整理は一九五九（昭和三四）年、京都市上京区塔之段の中川小十郎私邸（「白雲荘」）に所蔵されていたものが学園に引き渡された資料で、このほか立命館大学衣笠図書館などに保管されていた一群の中川家関係の資料も含まれる。第二次整理は亀岡市馬路町の中川小十郎の養家（養父の武平太家・通称「四辻」^{よっつ}）から一九八二（昭和五七）年に学園に寄贈された資料群で、「中川家文書」として百年史編纂室において調査・整理され、『立命館百年史』（通史第一巻・資料編第一巻）の編纂において活用された資料と、亀岡市史編さん室により調査・整理され、『新修亀岡市史』に活用された資料が中心である。第三次整理は二〇〇九（平成二一）年に寄託をうけた生家（実父の

禄左衛門家・通称「堀之内」^{ほりのうち}の資料の調査・整理である。したがって中川家関係資料はその名称や保管の状態は統一されていないが、左記の三つの部分から構成されている。

(1) 「学宝」や「図書館貴重書庫」の資料など「白雲荘」ならびに学園内の各所に保管されていた中川家に関する資料

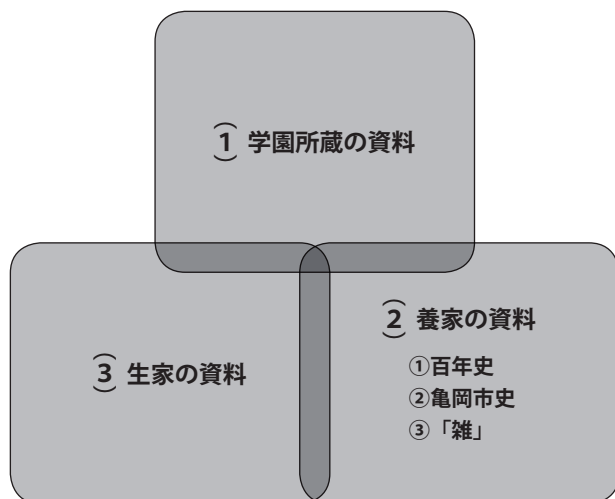
(2) 一九八二(昭和五七)年に学園に寄贈された養家の「中川家文書」(養家資料)

(3) 二〇〇九(平成三)年に百年史編纂室に寄託された生家の「中川家資料」(生家資料)

三つの資料群の相関関係は下図のとおりである。

百年史編纂室ではこの間、(3)の寄託された生家資料の調査・整理の作業とあわせて、百年史編纂室で保管している(2)の養家資料の再整理の作業をおこなってきた。

また、「図書館貴重書庫」に保管されている資料群のなかから中川小十郎および中川家関係資料の調査をおこなってきた。^②この間の生家資料の調査・整理と関連資料の再調査



の作業を通して、中川家の資料のほぼ全容が明らかになってきた。以下、これまでの資料の整理および保管状況をまとめ、この間の再調査についての報告をおこない、全体を通じての所感をまとめた。

二、中川家関係資料の整理および保管状況

(一) 学園所蔵の中川家関係資料

学園本部（朱雀キャンパス）や立命館大学衣笠キャンパス（衣笠図書館）など、学園内の各所に所蔵されてきた資料群がある。「学宝」とされる資料目録にも、弓箭組関係の資料（「鎮撫使絵巻」など）が記録され、大切に保管されている。^③京都市上京区塔之段の中川小十郎私邸（「白雲荘」）の什物や縁・襖などの一部は百年史編纂室で保管されている。衣笠図書館の「西園寺文庫」のリストには、中川小十郎の著書として『中川人見戊辰唱義録』と『歴代の内閣』の二冊がリストに掲げられている。「図書館貴重書庫」には、中川家関係の資料も存置されていたが、十分な調査はおこなわれていなかったようであり、一九九〇年に学内で西園寺文庫の整理の次は中川家文書の整理に着手すべきと提起されたことはあった（「中川家文書の整理について」部次長会議、一九九〇年一二月七日）が、実施にはいたらなかったようである。「図書館貴重書庫」に保管されていた中川小十郎や中川家関係の資料の来歴は不明なものが多い。^④また「貴重書庫」の資料には「郷土辞令」（山陰道鎮撫総督書状）など中川家関係資料も含まれており、いくつかの資料は軸装して丁寧に保管され、図書館主催の展示会に何回か出展されたようである。ま

た立命館高等学校にも「西園寺公爵伝」（中川小十郎草稿）や「中川小十郎訓示」（速記録）など多くの貴重資料が保管されていたが、一九八三（昭和五八）年、立命館大学図書館に移管されたとの記録がある。^④

また一九九七（平成九）年には、亀岡市史編さん室による市史編さんの調査に際して学園の所蔵資料のなかから図書館収蔵資料などの調査もおこなわれた。西園寺文庫の一部・学宝の一部・西園寺公望伝編纂室資料の一部・購入文書の一部（藤野斎文書）、鎮撫使の「従軍日誌」などのマイクロ撮影がおこなわれ、亀岡市史調査資料№四三四「中川小十郎関係資料」として亀岡市文化資料館に製本・配架されている。

（二）養家（四辻）の「中川家文書」（養家資料）

養家の資料は一九八二（昭和五七）年、中川家より学校法人立命館に寄贈された。亀岡市馬路町での現地調査をへて図書館に保管され、一九九二（平成四）年に百年史編纂室へ移管された。養家の資料は、養父武平太関係資料（明治初期の馬路村資料）、中川小十郎関係資料（家政関係および学園関係）、長男の中川幹太関係の資料が多く残されている。資料の保存状況は良好であり、中川小十郎によって整理・活用された形跡がうかがわれる。

養家の資料は、（１）百年史編纂室の調査・整理資料、（２）亀岡市史編さん室調査・整理資料、（３）未整理資料（「雑」資料）にわかれている。調査・整理においては便宜上、（１）と（２）をあわせて「中川家文書」とよび、「中川家文書」と（３）の「雑」資料によって養家の資料が構成されるという^⑤とらえ方をしている。以下それぞれの資料の概要と特色をまとめてみた。

(1) 百年史編纂室の調査・整理資料

『立命館百年史』編纂作業の一環として、中川小十郎や学園に係る資料を抽出し、整理作業がすすめられた。同資料の一群として、伝記作成のための資料の一部も含まれている。書簡類(約八〇〇点)、原稿類(約一、二三〇点)をはじめ、全点で約二、四〇〇点を数える本資料は、西岡成幸氏(元百年史編纂室課長)の地道な努力により「一点目録」が作成された。資料は通し番号と資料名を付した角二の封筒に納められ、『中川家文書(第一部) 仮目録』が作成された。^⑥現在では二三箱の段ボールに格納して、出納可能な状態にある。また、賞状・辞令・位記などもアルバム帳の体裁で保管されている。いくつかの資料は翻刻がおこなわれ、『立命館百年史資料編一』には「京都法政学校創立の事情」(一九四四(昭和一九)年)をはじめ折にふれてのさまざまな「総長講話」など、学園にとって貴重な六三点の文書が掲載されている。また妻・中川好栄宛の中川小十郎書簡についても翻刻がおこなわれ、西園寺公望や中川小十郎の動静をさぐるのに好適な資料が多く残されている。^⑦

(2) 亀岡市史編さん室調査・整理資料

一九九七年、亀岡市史編さん室によって、百年史編纂室所蔵の中川家文書の調査がおこなわれた。前記(1)の百年史編纂室の整理作業では抽出されず未整理分となった資料のうち、養父の中川武平太や近代の馬路村関係の資料の調査がおこなわれた。旧平野会館にあった百年史編纂室の事務所で出張調査

および写真撮影がおこなわれ、棚番号別の一括資料の形状をのこして「中川家文書調査概要報告書―亀岡関係分―」が作成された。⁽⁸⁾ 調査資料は「中川家文書目録 第二部」として資料目録が作成され、マイクロ撮影写真資料は亀岡市史調査資料No.三八四「中川家文書」として製本され、『新修亀岡市史』（本文編・資料編）の執筆に活用された。⁽⁹⁾ 調査された資料は、資料番号の付箋を挟み込み、紐括り一括の状態で箱番号二三―三七に「第二部 旧平野会館」と表記されたラベルを付して格納されている。資料は棚番号ごとに「一点目録」が作成され、現状を保全した形で整理されている。亀岡市史編さん室の調査・整理資料は、明治初年の村方資料が多くを占めている。養父の武平太が一八七四（明治七）年から一八八六（明治一九）年まで馬路村戸長を勤めていた関係から、明治初期の戸長役場の資料が豊富に残されている。

（3）未整理資料（「雑」資料）

養家の資料のうち、「雑」とラベルが付された段ボール箱番号三八―五三の資料がある。百年史編纂室や亀岡市史編さん室の調査の対象とされなかった資料群であるが、これらの資料は整理の都合上「雑」とされたもので、モノ資料など多様な資料を含んでおり、廃棄を目的としたものではない。アルバム写真や掛け軸などの資料のほか、中川家や立命館にとって貴重な資料が含まれている。例えば「伝記資料」の一群のほか、中川小十郎の勲章や禁衛隊のバッチなどが確認できる。写真資料についても中川小十郎関係資料から外されたと思われる樺太や南洋の写真アルバムをはじめ貴重な写真資料を含んでいる。詳細が不明な新聞の切抜き（スクラップ）や未使用の原稿用紙など「雑多」と思われるものも含め、種々の資料が混

在している。

(三) 生家（堀之内）の「中川家資料」（生家資料）

二〇〇八（平成二〇）年九月、亀岡市馬路町の通称「堀之内」と呼ばれる中川小十郎の生家の残された家屋（長屋門・納屋など）が解体され資料は処分されるとの情報を得て、百年史編纂室が立会い調査をおこなった。¹⁰ 残された家屋の保存についても検討されたが、ひとまず納屋および土蔵の資料を学園に寄託を受けた。二〇一〇（平成二二）年四月より概要調査をおこない、総点数の確認と含まれる資料の内容について調査をおこなった。資料をA（古文書）・B（書簡）・C（書籍）・D（写真）・E（軸物）・F（屏風・額装）・G（家具など）・H（その他）に大別して段ボール箱に収納し、「仮目録」の作成をおこない、資料点数にして約七、〇〇〇点を確認した。生家資料には、江戸時代の古文書や幕末維新関係の資料のほか、実父禄左衛門関係（歌道や武道関係、書画など）、摂太郎関係（禄左衛門の孫。馬路村長、立命館職員）の大正・昭和初期の馬路村関係資料が多くを占める。中川家に関係する資料のほか中川小十郎の書簡や立命館関係資料なども含んでいる。古文書や書籍類は戦後摂太郎によって整理された形跡がうかがわれる。また家財道具や書画などは主屋が解体された際に処分するつもりで土蔵や納屋に放置され、保存状態はきわめて悪く整理に手間取った。

調査した資料は電子データとして分類ごとにまとめ、角二の封筒に一〇点ずつ納め、AからDの分類ごとに段ボールに格納して出納の便をはかることにした。E・F・G・Hの物資料についてはデジタルカメ

ラ撮影の写真を付して整理した。概要調査の結果は、二〇一一（平成二三）年一二月「中川家資料概要調査報告書（中川小十郎生家資料）」として報告書を作成し、中川家及び百年史編纂委員会常任委員会に報告した。このほか番外として甲冑一両については修復をおこない、立命館中学校の教材として活用している。^①

三、中川家関係資料の再調査について

中川家関係資料は、個々の機会に、さまざまな機関・部署において、それぞれの必要に応じて調査・整理・保管されているため、その活用の便は良好とはいえない。今回、生家資料の概要調査と並行して、養家資料などについても統一した分類番号を付与し、資料検索の簡便をはかり、横断して検索できるよう再調査をおこなった。以下では、前記「二、中川家関係資料の整理および保管状況」であげた資料の順にしたがって、再調査・再整理の概要を報告する。

（一）学園所蔵の中川家関係資料の調査・整理作業

二〇一〇（平成二二）年一〇月より、中川家生家資料の整理作業と並行して、衣笠図書館内の「図書館貴重書庫」に収蔵されている九四点の資料が百年史編纂室に搬入され調査がおこなわれた。搬送に際して厳重に梱包されていたが、写真や額など多種の資料が混在していた。図書館作成の「搬送目録」に従って

概要調査をおこない、一点ごとの「概要目録」を作成した。文書や写真・書画などとともに、「資料番号七五」と付された木箱には、中川小十郎もしくは周辺の人物が選別・整理したと思われる七一点の資料が存置され、弓箭組や樺太・台湾関係の小十郎や中川家関係の資料が収納されていた。

多岐にわたる文書や写真などの多くは、図書館が主催した折にふれての展覧会に出品された資料ではないかと考えられ、写真は拡大してパネル仕立てとされ、書画は軸装されたものが多い。¹²⁾ また、「学宝」として図書館で保管されている「鎮撫使絵巻」については、二〇一一（平成二三）年四月、あらためて写真撮影をおこなった。¹³⁾

（二）養家（四辻）の「中川家文書」（養家資料）の再調査

（１）百年史編纂室調査資料の再整理

前記のとおり、百年史編纂室調査の養家の資料は『中川家文書（第一部）仮目録』として整理され、番号を付して封筒に納められているが、資料の分類番号がないため、その全容を把握し難い状況にあった。

資料活用の便をはかるために、二〇一二（平成二四）年度に電子データ目録の作成をおこなった。e-typlistという文書電子化ソフトを活用して、「紙目録」のスキャンをおこない、印字の校正とあわせて現物資料との照合作業をおこなった。同時に、生家資料の分類に倣い、それぞれにA、B、C、およびa、b、cの分類番号を付して、資料検索の便をはかるようにした。資料については、「目録番号」を尊重して従来の封筒に入れ直し、段ボール箱に納められている。

調査の結果下記の点が明らかとなった。

1、資料の点数について

目録にあつて現物資料のないもの（三点）、目録にはなくて現物資料のあるもの（六点）のほか、封筒に数通の関係資料が同封されているものも多く、資料点数は約三、〇〇〇点にのぼると考えられる。

2、資料の出納について

現在、資料は整理番号ごとに封筒に納められているが、『中川家文書（第一部）仮目録』が作成された際に整理番号が付されなかった資料がいくつか存在する。書籍類、賞状・辞令がこれにあたる。特に賞状・辞令は、中川小十郎やその家族の履歴を知る上での基本資料である。これらは「中川家文書」と同一の場所での保管ではなく、百年史編纂室資料室と、賞状の一部は養家資料のうち「雑」資料の箱番号四五に整理・保管されていた。目録上は『中川家文書（第一部）仮目録』に含まれていた資料であるが、状況としては別置されていたこととなる。これらはそれ以外の大方の資料のような、封筒と段ボールによる保管がなされておらず、出納が困難であった。そこで再調査を機に、書籍類と書状・辞令の所在確認をおこない、出納が確実におこなえる環境を整えた。

データをもとにあらためて資料の特色を検討すると、資料全体の特色としては、中川小十郎に関する書簡・文書、小十郎の家族関係の書簡・文書がその中心であり、モノ資料は全く含まれていない。再調査の過程で推察されるのは、ここでの資料群が「文書」というカテゴリーで整理されたものであるという点であり、それに関係するモノ資料があつても、それらは「雑」として整理されていたと考えられる。例えば、

賞状とともに授与された勲章が「雑」の箱番号四四として保管されていることが確認されている。今後は当資料と「雑」資料の総合的な調査・研究・保管が必要と考えられる。

(2) 亀岡市史編さん室調査資料の再整理

亀岡市史編さん室の調査資料については、亀岡市史編さん室作成の資料目録（「中川家文書目録二部」（亀岡市史調査資料文書群No.三九六）のコピーをもとに、他の資料群の目録との横断検索を可能にするなどの便をはかるため、二〇一二年度は目録の電子データ化をおこなった。入力データの点検・校正とあわせて、資料との照合をおこなうこととし、資料をあらためて小封筒に入れ直し、角二の封筒には亀岡市史編さん室作成の「資料目録」の番号を付して、数点ずつまとめて納めることとした。亀岡市史編さん室の目録作成時には、数十通を一点として一括された資料の一点ごとの資料目録の追加や、地名・人名の誤記の訂正、年代の確定などもあわせておこなった。資料の分類は生家資料の分類に倣い、それぞれにA、B、C、およびa、b、cの分類番号を付して、資料検索の便をはかるようにした。¹⁴⁾

資料の特色は『新修亀岡市史』編纂のための調査ということから、馬路村関係の資料が多く含まれている。特に養父の武平太が戸長を務めた時期のものが多く、村政に関する願書や近隣の村との関係書類、村の用務録など多岐にわたる。書簡のほか、中川小十郎の幼少期の学習帳や好栄夫人の華道免許なども含まれている。実父禄左衛門や養父武平太が西園寺公望率いる山陰道鎮撫の官軍の一員として従軍した折の資料も数点確認することができた。また太平洋戦争時のレコードなどのモノ資料も含まれていた。

(3) 未整理資料（「雑」資料）の整理

未整理資料の再整理にあたっては、「雑」として段ボール箱に納入された資料を、箱番ごとにおおまかな写真を撮り、「概要調査目録」を作成した。その結果、貴重な資料を多く含むものであることがわかった。生家資料の整理に倣って、書画などについては写真データの記録もあわせおこない、箱番ごとに「一点目録」の作成をおこなった。写真資料についてはアルバム（「樺太写真帳」など）を含め複写撮影をおこなった。

箱番のデータをもとに資料の特色を概観すると、「小十郎婚禮記」（一八九五〈明治二八〉年）や「小十郎七回忌芳名帳」など中川家関係の諸種の資料が含まれている。また勲章・徽章・バッジ（禁衛隊など）のモノ資料も含まれている。また「伝記資料」が一括して納められていたが、これらは直接に中川小十郎や学園に関係ないものとして、中川家や馬路村に關係する部分が別置されていたものと思われる。年度末に向けての作業として、生家資料の体裁にもとづく資料分類に倣って「一点目録」を作成し、養家の「中川家文書」と同様の体裁で、封筒に納め保管を図る予定である。

(三) 生家（堀之内）の「中川家資料」（生家資料）の活用について

生家（堀之内）の資料については、前記のように「中川家資料概要調査報告書（中川小十郎生家資料）」として報告書を作成し、概要調査の結果を中川家及び百年史編纂委員会常任委員会に報告した。今

後の資料の取扱いについて、中川家と相談をおこなっているところである。

二〇一一（平成二三）年一月に、本学文学部の山崎有恒教授を代表とした中川小十郎研究会が発足した。^⑮研究会で検討をおこなう内容の準備作業として、「中川家文書」（養家資料）のうち「伝記資料」の抽出をおこなった。研究会では写真データを共有し、その解読と内容紹介をおこなってきた。また中川小十郎は折りにふれ数多くの書簡を認めているが、生家資料のなかから、中川小十郎関係の書簡（二四五点）の撮影をおこない、翻刻の準備作業をすすめた。研究会では、書簡の翻刻・校正をおこない、新たな資料の紹介にもとづき中川小十郎研究がすすめられていく予定である。^⑯

四、中川家資料の保存と活用にもつて

以上、三年間にわたる、中川家の資料の調査・整理作業のあらましを述べたが、全体を通覧すると、①中川小十郎の家系調査など中川家関係資料、②山陰道鎮撫使や弓箭組に関する幕末維新関係資料、③中川小十郎関係の書簡資料、④立命館関係の資料などが共通しており、目をひくものとなっている。今回の整理作業を通して気づいたことを数点記しておく。

（一）中川小十郎による資料調査について

一九二二（大正一一）年、立命館は大学への昇格をはたすが、それを記念して中川小十郎は故郷の馬路

村に「戊辰唱義碑」を建立し、『中川人見両姓戊辰唱義録』を上梓している。⁽¹⁷⁾ 碑石建立に関しては、生家の
中川摂太郎が現地の折衝などを任せられ、その関係資料が生家・養家ともに残されている。⁽¹⁸⁾

百年史編纂室の書庫には、「西園寺卿西征北伐記ゲラ刷」と朱書された封筒があり、中には『西園寺公
山陰道鎮撫従軍記（校正刷・昭和一五年）』、『西園寺卿西征北伐記（校正刷・昭和三年）』とあり、校
正刷りまで仕上がりながら刊行されなかった草稿が残されている。⁽¹⁹⁾ それらに所載された幕末維新関係資料、
実父禄左衛門の日誌や同人宛の書状、北越に従軍した叔父百助の陣中日誌などは、養家資料や学園の資料
に含まれている。

学園所蔵の資料や養家資料には、家系調査や幕末維新関係資料など、もともとは生家に所蔵されていた
のではないかと考えられる資料が多く含まれている。「第〇号」などと墨書され、茶封筒に納められた一
群の資料が養家資料、生家資料のなかにともに残されている。茶封筒の墨書・ペン書きは中川小十郎、も
しくは太田亮（後述）の筆跡と思われる。唱義碑の碑文に弓箭組従軍関係者の名を刻むにあたって、中川
小十郎は生家の中川摂太郎に細々と指示を出し資料の収集を命じているが、生家の中川小十郎書簡を通覧
すると、一九二二（大正二）年頃から家系調査がはじまっていくように思われる。その後東京から系図研
究家の太田亮を立命館に招聘し、中川家の系図調査が精力的にすすめられていく。茶封筒に納められた資
料は家系調査や幕末維新にかかわる資料であるが、これらは西園寺公や実父禄左衛門・養父武平太の顕彰
をはかるため中川小十郎が生家や養家の資料のなかから抽出して活用し、一部は別置して手許に残された
ものではないかと考えられる。中川小十郎にとって、中川家の資料は生家と養家とをあわせて一体の資料

群として認識され、活用されたのではないかがわかる。

(二) 中川小十郎伝記資料について

養家資料には「伝記資料」と付箋がうたれた資料が多く残されている。一九八二（昭和五七）年に図書館によって「中川小十郎伝記資料目録」と題した冊子が編集されている。²⁰

「中川家文書」には、『立命館学誌』や『立命館禁衛隊』などの誌上に掲載された記事の草稿や、学園内外の各所での中川小十郎の講演や祝辞の草稿などの原稿を多く含んでいる。そのなかの幾点かは『立命館百年史資料編一』においても紹介されている。これに対して、実父や養父の功績など幕末維新を含む中川家関係の記録は、未整理の「雑」資料の一部として一括保管されている。「雑」資料の「伝記資料」の多くは、原稿用紙に清書されたさまざまな人物の筆による原稿で、校正のペンの入った資料も含まれている。「伝記資料」の草稿を見ると、中川小十郎は生存中から自らの回顧など伝記の準備作業をおこなっていたようにうかがえる。

中川小十郎は一九四四（昭和一九）年一〇月に亡くなるが、その没後、太田亮や松本仁が担当して、「総長伝記編纂事業」が本格的に取り組まれたようである。²¹「中川家文書」には石原莞爾宛中川小十郎書簡が二通含まれている。これらは石原が中川からの来信を一九四五（昭和二〇）年六月五日付で「故中川小十郎先生伝記編輯委員会」宛に送付したもので、戦時下にあっても伝記編纂事業が進められていたことがうかがわれる。²²「伝記資料」の原稿は当初学園内にあったとも推察できるが、他の中川小十郎関係資料

とともに養家に搬出され、一九八二（昭和五七）年に再度学園に移管されたものと考えられる。

（三）今後の調査と資料の活用について

分散・別置されていた中川小十郎の生家および養家の資料群の全容がほぼ明らかになってきた。ただ、それぞれの調査や保管はその都度の目的と方法でおこなわれてきたため、「資料目録」には統一的な書式と分類項目がなく、また保管についても同様である。百年史編纂室所蔵資料についても、段ボール箱に便宜的に納められている状態である。養家の立命館関係資料に関しては、学園創設を知るうえでの基本資料として『立命館百年史』編纂事業においても活用されてきた。しかし、未だ活用されていない中川小十郎の実業家時代の資料、樺太・台湾時代の資料など、貴重な資料が数多くある。学園史のみでなく、幕末の研究や教育史・村落史など歴史学研究のうえからも、今後幅広い分野での調査・研究に活用されるべき貴重な資料である。

今後、中川家にかかわる資料群を統一的な書式に整え、分類項目をたてて資料の再整理をおこなうことができる、諸研究に資するものではないかと考えられる。学園内や白雲荘にあった資料、養家資料の調査の経過もあわせて、中川関係資料の来歴や整理過程などについて関係者の聞き取りをおこない、記録しておくことも必要であろう。また資料の保管についても、湿気対策などを考慮して将来的には中性紙の文書ケースなどを準備するとともに、また諸研究に資する活用法なども検討課題である。『立命館百年史』編纂事業にかかわって収集された中川家の文書群を「立命館史資料センター」において扱う資料の柱とし

て位置づけていくことも必要だろう。

この間の資料調査・整理については、生家資料の整理計画は前任の齋藤重課長が企画・立案・搬入・燦浄などの諸準備を整えられた。初年度（二〇一〇年度）の生家資料の調査・整理作業は長谷川澄夫、寺澤優のほか宮崎愛、松平智史があたった。翌年度（二〇一一年度）には生家資料のほか「図書館貴重書庫」の資料や養家の資料「雄」資料の調査・整理に田村悠、長谷川が携わった。今年度（二〇一二年度）は、養家資料（整理済分・亀岡調査分）の電子データの作成と再整理を田中有美、寺澤が担当した。本執筆にあたっては、長谷川が原案を作成し、田中、寺澤と協議・分担した。資料搬入経過の概要などについて西岡成幸氏より、「メモ」を頂戴し、貴重な助言をいただくことができた。

【注】

- (1) 中川小十郎は、丹波国桑田郡馬路村の中川禄左衛門の子として生まれ、六歳の時、叔父（父の弟）の中川武平太のもとへ養子として送られた。禄左衛門、武平太の兄弟は維新に際して西園寺公望が山陰道鎮撫総督として赴くや「弓箭組」を率いて従軍した。生家堀之内中川家の家督は百助（禄左衛門の弟・小十郎の叔父）が嗣ぎ、摂太郎、進、彰と嗣がれている。小十郎の長子幹太は別家をたて、養家四辻中川家の家督は孫の重一が嗣ぎ、同家の子孫は「学實」として現在にいたる。中川小十郎については、松本皎「学園創立者中川小十郎の事績抄」（『立命館百年史紀要』第二号、一九九四年）に詳しい。

- (2) 「図書館貴重書庫資料・調査報告」（『立命館百年史紀要・第二十号』二〇一二年）

- (3) 『西園寺文庫目録』（立命館大学図書館、一九九〇年）には、学宝として「鎮撫使絵巻」（学宝一〇三・七―〇二）や「官軍制札」（学宝五八・七―〇九）、「大日本皇国国体要論」（小十郎の叔父中川周順著、学宝八五号）が紹介されている。
- (4) 柳田暹映「立命館70年余話（その9）學寶雜記」（『立命館学園広報』一九七一年六月二〇日号）には、一九四六（昭和二二）年の「理事會議事録」でGHQの指示により神道儀式行事などが禁止となり、従来学宝とされていた国清殿の聖像は梨木神社へ、ミネホール銃や刀剣類は処分されたとある。残りのものは五つの木箱に格納され中川家に移管され、昭和三四年中川氏未亡人から本学へ返還され、あらたに「学宝目録」が作成されたという。「立命館学園新聞・校友版」には、同年五月清心館で学宝五函（七三点）が一般の供覧に付されたとする。戦後の「公職追放」問題などの混乱の時期に、中川小十郎や学園関係資料の保管をめぐって混乱したことがうかがえる。この時期の資料は少なく、聞き書きなども時期を失しているが、今後の課題である。「立命館高等学校所蔵学園史資料目録」（一九八三年、立命館大学図書館）と「図書館貴重書庫」所蔵資料などとの照合はおこなっていない。
- (5) 資料の搬入に際して、「中川小十郎関係資料目録（仮）」（立命館大学図書館、一九八二年）が作成された。また、資料の寄託・寄贈については、中川小十郎の縁者で元立命館職員、評議員の中川保次氏の協力を得て、一九九五年には同氏から田上綽俊書簡など二七点が寄贈され、「中川保次氏旧蔵資料」として百年史編纂室に保管している。
- (6) 西岡成幸「史料紹介 中川家文書」（『立命館百年史紀要』第二号、一九九四年）
- (7) 松本皎「中川小十郎先生の書簡（2）——中川先生と西園寺公望——」（『中川小十郎研究会会報』（第二号、一九八八年）
- (8) 亀岡市史編さん室「中川家文書調査概要報告書——亀岡関係分——」（一九九七年）写真版は亀岡市文化資料館に架蔵・公開されている。なお立命館大学図書館においても「中川小十郎関係文書」としてマイクロフィルムでの閲覧が可能である。

- (9) 『新修亀岡市史』本文編第三卷（二〇〇三年）では明治初年の戸長役場日誌が大いに活用されている。資料編第三卷（二〇〇〇年）には巻頭に学宝の「鎮撫使絵巻」が紹介され、「西園寺家記 山陰之役」など四点の資料が紹介されている。
- (10) 生家資料は馬路町史編纂の過程でその所在が判明し、資料の現地調査に地域の皆様方の協力を得た。『我がまち馬路—ふるさと—の歴史をさぐる—』（亀岡市馬路町自治会、二〇一一年）には生家資料も多く紹介されている。
- (11) 長谷川澄夫「中川小十郎生家資料の概要調査について」（『立命館百年史紀要』第十九号、二〇一一年）、田村悠「中川小十郎（生家）資料・整理結果およびその特徴について」（『立命館百年史紀要』第二十号、二〇一二年）
- (12) 中央図書館一〇周年記念「立命館学祖展」（一九七七年）、「西園寺公望と立命館」（一九八四年）、「学宝展」（二八八六年）など
- (13) 「学宝」目録の「鎮撫使絵巻」の作者として、「竹越与三郎撰」・「根岸画」とあるが、根岸好太郎は大正時代の内務省官僚で各地の碑石文を残す書家である。作画人物は不明である。
- (14) 箱丁二四以降の資料については調査が不十分で、「括り一括」として記録され、文書名や点数不明のものがある。また「年代不明」とされた資料の多くは、再整理により年代の比定をおこなうことができると考えられる。
- (15) 山崎有恒「中川小十郎研究会の立ち上げについて」（『立命館百年史紀要』第二十号、二〇一二年）
- (16) 松本皎「中川小十郎先生関係書簡（一）」（『中川小十郎研究会会報』第八号、一九八〇年）には立命館高等学校所蔵の中川小十郎書簡などが紹介されている。勝田節子『暖流—先考中川小十郎書簡より』（一九九〇年、非売品）は小十郎の子の勝田重之助宛中川小十郎書簡が一一五通収載されており、普段着姿の中川小十郎をうかがう好適の資料である。
- (17) 『中川人見両姓戊辰唱義録』（一九三二年、非売品）

- (18) 資料は「中川家文書」一三八七や生家資料の小十郎書簡など、写真は生家資料31D2（田村悠「中川小十郎（生家）資料・整理結果およびその特徴について」『立命館百年史紀要』第二十号）
- (19) 『西園寺公望伝』第一巻（立命館大学西園寺公望伝編纂委員会、一九九〇年、岩波書店）第三章第四節一六一頁の（注1）において、これらの稿本は明治維新史料編纂会に提供されたものであるとのコメントが付されている。また、これらのゲラ刷りは図書館に保管されていたものが、百年史編纂室に移管されたものと思われる。
- (20) 「中川小十郎先生伝記資料目録」（一九八六年、立命館大学図書館）、松本皎「創立者・中川小十郎先生伝記編纂資料目録」一〇三～一〇五（『中川小十郎研究会会報』第一〇号、一九八三年）、同氏、前記『立命館百年史紀要』（第二号）では本「伝記資料」を活用されている。「伝記資料」の整理の所見は「中川小十郎研究会レポート」（田村悠作成）による。
- (21) 太田亮は奈良県出身、内務省嘱託を経て一九四一（昭和一六）年立命館教授、『姓氏家系大辞典』全三卷（一九六三年、角川書店）などをまとめた。松本仁は栃木県出身、立命館出版部勤務、立命館講師（国文学）。
- (22) 「中川家文書」一〇〇（一九四二年二月九日付）、「同」一〇一（一九四三年五月二六日付）

2012 年 7 月 10 日 百年史編纂室事務局会議

2012 年 11 月 1 日 部次長会議

2012 年 11 月 7 日 常任理事会

「立命館 史資料センター」（仮称）設置について

— 2013 年度からの「立命館 史資料センター準備室」による開設準備 —

I. はじめに

立命館史の編纂は 1953 年 3 月の『立命館創立五十年史』を嚆矢とする。その後、1981 年 7 月に立命館史編纂委員会が設置され、学園史資料集を編纂した。そして、1991 年 3 月立命館百年史編纂委員会が設置され『立命館百年史』の編纂事業が始まった。現在までの取組み状況は次の通りである。

組織/目的	年	月	発行誌
(五十周年)編纂委員会(1950/5設置) 「立命館創立五十周年記念事業」の一環として『創立五十年史』編纂を目的とした。	1953	3	『立命館創立五十年史』
立命館史編纂委員会(1981/7設置) 立命館史編纂室	1986	11	『立命館八十五年史資料集 第一集』
	1987	8	『立命館八十五年史資料集 第二集』
	1988	1	『立命館八十五年史資料集 第三集』
	1988	3	『立命館八十五年史資料集 第四集』
	1988	6	『立命館八十五年史資料集 第五集』
	1988	11	『立命館八十五年史資料集 第六集』
	1990	8	『立命館八十五年史資料集 第七集』
	1990	12	『立命館八十五年史資料集 第八集』
「80周年記念事業」の一環として『立命館戦後史』編纂を目的とした。 その後86/11に「立命館創始120年・学園創立90周年記念事業」の一環としての『立命館百年史』編纂を目的とした。	1990	12	『立命館八十五年史資料集 (第一～第八集)「目次」』
	1993	3	『立命館百年史資料集 第一集』
	1993	12	『立命館百年史資料集 第二集』
	1999	3	『立命館百年史 通史一』(1900～1945年を対象)
	2000	10	『立命館百年史 資料編一』
	2006	3	『立命館百年史 通史二』(1945～1980年を対象)
	2007	7	『立命館百年史 資料編二』
	2013	2	『立命館百年史 通史三』予定(1980～2006年を対象)
	2013		『立命館百年史 資料編三』予定
	2013		『立命館百年史 資料編三』予定
立命館百年史編纂委員会(1991/3設置) 百年史編纂室(1991/5設置)			
2000年の創立百周年にむけ『立命館百年史』編纂を目的とした			

立命館の史誌編纂が進められた 1980 年代後半から 90 年代は、全国の大学において大学史にかかわる事業や研究が取り組まれ、多くの国公立大学・学園が『百年史』『五十年史』等の編纂に取り組んだ。その後、これらの年史編纂事業が終了したいくつかの大学・学園では、蒐集した資料の整理・保存・活用・公開などのためにこれまでの編纂室や編纂委員会に代わって恒常的な資料センターや文書館などの機関を設置している（資料 1 参照）。

学園においても『通史一』を発刊した直後に「総合資料センター（仮称）の構想について（メモ）」（以下「センター構想」と略）を立命館百年史編纂委員会常任委員会（2000 年 6 月 30 日）において提起し、合わせて『立命館学園広報』UNITAS において『百年史』発刊完了後の有様についての提起を行った（『立命館学園広報』UNITAS No.329 号 2000 年 10 月 25 日）。

立命館百年史編纂委員会は、2012 年度発刊予定の『通史三』と翌年発刊予定の『資料編三』をもって所期の任務が終了することになり、「センター構想」の設置に向けて検討を開始する時期を迎えることとなる。

そこで「センター構想」を提起した 2000 年以後の学内外状況の変化を勘案しつつ、百年史編纂室の発展改組としての「センター」について改めて提案することとした。

なお、百年史編纂室の発展改組としているのは、「センター」の業務が先ずこれまで蒐集してきた学園創造の史資料の整理・保存から始まるので、これらに詳しい百年史編纂室があたるのが最も合理的、効率的と考えるからである。

Ⅱ. 「センター構想」の概要

「センター構想」で提起されているセンターの構想は次の通りである。

センターは、①歴史資料館的な「大学アーカイブズ」（文書館）と「資料室」の性格・機能を併せ持ち、②学園全体の歴史的資料に加えて、学園の管理・運営等に関する史資料も対象とし、③現用文書（業務遂行のために作成され、定められた期間、事務組織等で保存される文書）・非現用文書（保存期間が満了した文書）を収集するものである。

そして、その収集する資料は次のようなものとして示されている。

- ①学園政策・計画等に関する諸文書、関連資料等
- ②学園の管理・運営に関する公的文書、簿冊、事務記録等
- ③学園諸機関の議事録、答申、報告書、意見書等
- ④学園および関係機関・関係者の刊行する年報、要覧、雑誌、新聞、広報誌紙、ピラ等
- ⑤学園に関係する写真・アルバム・フィルム、テープ（音声・映像）等
- ⑥役員、役職者、教職員、学生、卒業生などの関係文書等
- ⑦記念品、門標、記章、旗、制服・印鑑等
- ⑧学園史に関する諸刊行物、伝記等
- ⑨歴史的意味をもつ研究・教育機器等
- ⑩その他、大学・高等教育政策等の全般的な諸資料

これはいわば、学園創造に関わる文書・モノ資料を現用・非現用を含めて収集し保存し活用するという、博物館にも似た機能をもつものとしてセンターを構想している。

Ⅲ. 2000 年度以降の学園内外の史資料等の取り扱いをめぐる動き

「センター構想」を提起した 2000 年度以降、史資料等の取り扱いをめぐる社会は大きく変化している。

例えば国内各法令等の整備では、「行政機関の保有する情報公開に関する法律」（いわゆる「情報公開法」）が 2001 年 4 月に施行され、国立大学に文書館が設置される動きが見られた。また、2011 年 4 月には「公文書等の管理に関する法律」（いわゆる「公文書管理法」）が施行された。「公文書管理法」では、現用文書の段階から、保存期間が満了した後に歴史資料として保存するか否かをあらかじめ判断することが求められている。

学園においても文書の取り扱いなどをめぐる諸規程が整備されてきている。「文書規程」（規程第 271 号 1993 年 4 月 23 日）はこの間数度にわたり改正されている。また、「学校法人立命館情報公開規程」（規程第 834 号 2010 年 3 月 17 日）が施行され、学園が保管すべき文書の種類や年限、公開すべき資料の特定をし、情報公開の社会的説明責任を果たそうとしている。とりわけ学園の社会的ネットワークの発展や教育研究の拡充とともに学園に関わる

ステークホルダー（父母・校友・企業・自治体・地域社会など）との関係もひろがり、何を、どこまで情報公開するのかという説明責任の問題は一層重要性を増している。

また、2004年4月1日、認証評価を義務付けた学校教育法の施行により、認証機関の受審のための自己点検・評価の項目に「建学の理念、教学の目的に向けた組織、活動を不断に検証し、その充実向上に努める」（「大学基準」財団法人大学基準協会）ことが設定されている。そして「新大学評価システム ガイドブッカー平成23年度以降の大学評価システムの概要―」（財団法人大学基準協会 平成21年10月）では、大学内部の質保証の項目として「大学沿革史の編纂」と「大学文書の保存と活用」が取り上げられている。

このように今日、沿革史の編纂や学園資料の収集、整理、保存、活用が一つの流れとなりつつある。

2006年度に制定された「立命館憲章」は、私学立命館の歴史とその社会的使命を宣言するとともに、「自由と清新」という建学の精神、「平和と民主主義」という教学理念に基づく歴史に培われた確信を学園アイデンティティとして位置づけるものであった。現在の社会の流れである学園史やその史資料はその具体的な内容をなすものである。

他方で、学園はAPUの開設（2000年度）、立命館小学校開設（2006年度）、立命館守山高等学校開設（2006年度）、立命館朱雀キャンパス開設（2006年度）を経て、2011年度現在2大学（15学部18研究科）5附属校となり、9つのキャンパスで4万9千名強の学生・生徒・児童が学ぶ総合学園となった。2014年度には長岡京キャンパスの開設と立命館中学校・高等学校の移転、2015年度には大阪茨木新キャンパス（OIC）開設と経営学部、政策科学部の移転も予定されている。こうした学園の発展を背景に「多拠点化における教職員・学生等の学園アイデンティティの形成」が課題とされている（2011年度、2012年度「事業計画書」）。

IV. 「立命館 史資料センター」（仮称）の目的と任務（案）

百年史編纂後の「センター」は、2000年の「センター構想」を基礎とし、「Ⅲ」でふれたようなこの間の学内外の動きに鑑みて、改めて私学立命館の社会的説明責任の観点と「立命館憲章」等に基づく学園アイデンティティ醸成の観点を加え、「立命館 史資料センター」（仮称）（以下「史資料センター」と略）として提起する。

「史資料センター」の目的と任務については次の3点である。

1. 学園創造に関する史資料を収集保存する

百年史編纂室はこれまでも学園史資料の蒐集保存を行ってきたが、これはあくまでも立命館百年史編纂の観点からのものであった。

百年史の編纂が完了した後においては、史資料収集の目的を学園創造に関する史資料の収集、整理、保存とする。これにより学園創造の歴史を記録するとともに、現在・未来の学園構成員・学園関係者に有益な利活用を図るための基礎とする。

対象となる史資料は、すでに整備されている各法令、学内規程との整合を経たうえで「公

文書」や「モノ」とともに、学園創造の営みを記録し組織力量の連続性に資することも意識した「学園創造の過程」を示す「諸文書」とする。後者の史資料を収集するのは、それが、教職員などの経験や教訓が反映された教育研究や業務改革・取組みの過程であり、現在、未来の教育研究や業務力量強化や改革の検討に資する資料となることがあるからである。

2. 「立命館憲章」等に基づく学園アイデンティティ醸成の取組みを支援し、発信する

学園創造の史資料は、学園史を知るためだけでなく、学園構成員・学園関係者の学園アイデンティティ醸成の取組みにとって有為なものとして利活用されるものでなければならない。

学園創造の史資料は、学生・児童・生徒にとっては、私学立命館の自校史教育において実物史資料など使いながら具体的に学習できるものとして利活用できる。

また教職員にとっては入職時の研修資料としてだけでなく、教育研究や業務の改革の検討の際にこれまでの取組みと問題点や課題の歴史的資料として利活用できる。

このように学園創造の史資料は、学生・生徒・児童は自校史教育を通じて、また教職員は教育研究あるいは業務の歴史的発展の学びや振り返りを通じて、学園アイデンティティ醸成の取組みを支援することができる。

さらに言えば、これら学園創造の史資料は学園構成員のみならず父母の学園への理解を促進するために、校友の学園への帰属意識を高めるために、企業を含めた社会全体の学園に対する信頼の形成のために学園の情報を発信する際に有為なものとして利活用することができる。

3. 史資料を一般公開し、学園の社会的使命に応える

学園創造の史資料は、私学教育史であり私大研究史でもあり、学園の発展史でもあって、日本の私学の歴史の一こまを形成している。

また、創始者・西園寺公望、創立者・中川小十郎、末川博名誉総長など学園の歴史にとり重要な人物に関する関連史資料も学園発展史であり、学園の歴史を形成するとともに、その学園の舵取りが日本の私学の歴史の一こまを形成している。

これら史資料を広く一般に公開することは、私学教育あるいは私大の教育研究の発展の歴史として、私学の自主性と公共性（私立学校法第一条）を具体の学園の歴史として社会に示すことであり、時々の歴史の時期における学園の社会的使命を示すことでもある。

合わせて、日本の私学の歴史研究にとって、また研究者や他大学教育機関等にとっても有為な社会貢献を果たすことにもなる。

このような学園創造の史資料の公開のためには、一定の公開原則を定めた上で常設の展示施設が必要となる。施設は、学生・生徒・児童の自校教育やアイデンティティ醸成のためだけでなく、父母、校友、企業などへの情報発信のためにも有為となる。

V. 「史資料センター」設置への3段階（案）

「史資料センター」の目的と任務を達成するために、百年史編纂室から「史資料センター」への発展改組は次の3段階を経て行うこととする。2013年度以降、「史資料センター」開設までの期間は、「史資料センター準備室」として開設準備を行う。

なお「史資料センター」の開設場所と施設設備等は、当面西園寺記念館の現在の百年史編纂室を改組・拡充することを想定するが、最終判断は今後のキャンパス整備計画による。

また、計画は遅くとも2015年度の「史資料センター」の設置（百年史編纂室の改組・拡充）と2020年度の一般公開施設開設に置いている。2020年度に一般公開としたのは、その年度が立命館創始150年・学園創立120周年にあたり、また学園中期計画R2020の完成年度であるからである。

1. 第1段階（設立準備期—運営方法確立と活用方法の試行—）

設立準備期は、『通史三』を発刊（2012年度）し、『資料編三』を編集発行する期間と重複させている。『資料編三』の発刊自体が『通史三』編纂時の史資料整理にも当たるからである。この期間には以下の取組みを行う。

- （1）史資料の収集・選別・保存のフローや各規程整備
- （2）現・収蔵史資料の整理（選別・廃棄）の実施
- （3）学園内各機関との史資料保存・活用のネットワーク整備
- （4）史資料の活用（教育研究・業務・学園アイデンティティ醸成など）に向けた試行
- （5）「史資料センター」施設・設備の拡充・整備
- （6）「史資料センター」の所属部門の検討（現在は法人部門）
- （7）準備期間であることを明示するため「立命館 史資料センター準備室」を掲出する

2. 第2段階（設立期—運営の安定と活用方法確立・安定と公開の試行・確立—）

設立期はおおよそ『資料編三』の発刊を終え、大阪茨木新キャンパス（OIC）を開設している時期を考えている。この時期には以下の取組みを行う。

- （1）立命館 史資料センター運営委員会（仮称）を設置する。
- （2）「史資料センター」を西園寺記念館に開設する（予定）。
 - * 西園寺記念館とするのは、①立命館創始者の名を冠した施設であること、②広小路キャンパスに次ぐ歴史を持つ衣笠キャンパスに立地すること、③現百年史編纂室が所在し、施設設備の流用が可能であることなどの事由からである。
- （3）史資料の活用方法を確立し、全学の教育・研究、学園アイデンティティ醸成への取組み支援を恒常化する。
- （4）史資料の公開について、公開原則と基準を定め試行する。

3. 第3段階（展開期—運営・活用・公開方法の安定化と一般公開—）

展開期は「史資料センター」設立後一定期間が経過した状況を想定している。

「史資料センター」は、いわゆる「大学アーカイブズ」の施設となるため諸条件が整いつつ次第「一般公開」を常態としたセンターとする。その時期は前述したように遅くとも2020年度には実施する。

<参考 工程表>

最短期間での展開の場合

	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021
	第1段階 設立準備期			第2段階 設立期	第3段階 展開期					
立命館百年史編集委員会 百年史編集室	通史三発刊	資料編三発刊	改組							
「史資料センター」運営委員会/室(仮称)				センター開設 規程改定	一般公開常設 施設					
運営方法	確立期			安定期						
活用方法	試行期			確立期	安定期					
公開方法			試行期	確立期	安定期					

最長期間での展開の場合

	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021
	第1段階 設立準備期			第2段階 設立期					第3段階 展開期	
立命館百年史編集委員会 百年史編集室	通史三発刊	資料編三発刊	改組							
「史資料センター」運営委員会/室(仮称)				センター開設 規程改定					一般公開常設 施設	
運営方法	確立期			安定期						
活用方法	試行期			確立期			安定期			
公開方法				試行期			確立期	安定期		

以上

添付資料：

<資料1>他大学の資料保存機関事例

<資料2>保存対象史資料（イメージ）

<資料1> 他大学の資料保存機関事例

2012/6/19修正

	機関名	担当部課室	開設年月日	所蔵資料点数	専任職員体制	設置の背景や前身組織等	
国立	東京大学	大学史料科室	1987/4	約10,000点	職員3	『東京大学百年史』編集過程で集積された公文書他史料資料を収集保存し、必要に応じて公開・利用に供するために設置	注2
国立	京都大学	京都大学大学文書館	2000/11	非現用法人文書(約5万点)、図書・刊行物(約2万点)、個人資料(約6万点)、写真(約1万4千点)	准教授1名、助教2名	2001年4月の情報公開法施行に関連し、保存期間が満了した文書の選別・保存するための組織整備が求められたことと、『京都大学百年史』が『2001年7月頃』に完成し、編集後の史料資料の保存・公開・活用が課題となったことが設置の背景である。	注1
国立	東北大学	東北大学史料館	2000/12	歴史公文書2,200点、個人文書35件	准教授1名、助教1名、教育研究支援者1名、事務職員2名	『五十年史』編集事業で利用した資料の保存・利用に供するための組織として、1963年に「東北大学記念資料室」を設置。2000年12月、国立大学法人化に向けた組織再編により、「東北大学史料館」が設置される。2001年4月からの情報公開法の施行も背景の一つ。	注1
国立	九州大学	九州大学文書館	2005/4	約4万点	教授1名、准教授1名、助教1名、テクニカルスタッフ2名、事務職員2名	九州大学七十五年史編集事業(1985～1992年)終了後の1992年に「九州大学史料室」が設置され、「大学文書館」につながった。設立当初は、法人文書資料室と大学史料資料室の二室が置かれ、2009年には百年史編集室も設けられた。	注1
国立	北海道大学	北海道大学文書館	2005/5		兼務教員3名、研究員(教員)4名、文書館員(専門)2名	共同教育研究施設として設置。北海道大学の歴史に係る各種資料を収集し、整理・保存・調査研究等を行ない、閲覧・公開等の利用に供することを目的。	注3
国立	大阪大学	大阪大学文書館設置準備室	2006/7			2012年現在設置準備中で史料収集を行っている。	注3
国立	名古屋大学	名古屋大学大学文書資料室	2004/4	約4万2千点	助教1名、事務職員(主任)1名	1985年、「名古屋大学史編集室」設置。部局史および通史刊行後、1996年に「名古屋大学史料室」へ改編。2001年4月に「名古屋大学史料室」が「大学史料室」へと改称され、2004年4月から「大学文書資料室」と改組、現在に至る。	注1
国立	広島大学	広島大学文書館	2004/4	約12万7千点	准教授1名、助教1名、専門職員1名、事務補佐員1名	1986年からの50年史編集事業で収集した史料を整理・保存するための機関が必要となったこと、1995年に研究会が結成された初代学長関係文書の資料を公開するための資料室の設置が検討されたこと、2001年4月からの情報公開法を背景に、2004年4月、学内共同教育研究施設として「広島大学文書館」を設置。	注1
私立	慶應義塾	福澤研究センター	1983/4	約65,000点	教員(兼担)22名、職員・図書担当3名	1951年6月、「塾史編集所」発足。「慶應義塾百年史」の編集事業開始(1969年に全6巻完結)。1969年4月、「塾史編集所」に代わり、「塾史資料室」発足。1983年、「塾史編集室」を発展改組し、「福澤研究センター」発足。	
私立	早稲田大学	大学史料資料センター	1961/1	非現用文書・個人資料 約30,000点 図書 20,000冊 写真 数万点		大学の歴史と創立者大隈重信および関係者の事蹟を明らかにし、これを将来に伝承するとともに、比較大学史研究を通じて本学の発展に資することを目的に設置	注2
私立	明治大学	明治大学史料センター	2003/4	約100,000点	事務職員3名(総務部総務課所属で大学史料)	『明治大学百年史』編集事業(1977～1994年度)が終了した後、歴史編集事業室の組織の存続について学内で検討した結果、センターとして残ることになった。	注1
私立	中央大学	大学史編集課	1980/9	約150,000点	専任職員1名 常勤嘱託3名 兼務職員1名	大学史の刊行を目的に設置「入学センター事務局」に所属	注2
私立	法政大学	大学史編集室	1976			一般公開せず。	注2
私立	立教大学	立教学院史料センター	2000/12		事務職員1名(課長)、学術調査員2名	『立教学院百二十五年史』編集業務が2000年3月で終了することから学院史料センターの設置に向けた動きが本格化し、2000年12月1日に設置。学校法全体の歴史を取り扱うが、法人事務局内ではなく、大学内に設置され、研究活動にも重点が置かれている。	注1
私立	同志社大学	同志社社史資料センター	2004/5	約3万点	参与1名、事務長1名、常勤社史資料調査員1名	1963年に「同志社社史史料編集所」を法人本部に設置。『同志社九十年小史』を発刊(1965年)。それ以前に収集・保存していた新島襄関係資料とともに社史関係資料を扱うことになった。1983年に「同志社社史資料室」と改称。1995年の機構改革で法人から大学の組織へ(人文科学研究所所属)、『同志社百年史』全4巻(1977年)などを発刊。2004年に「同志社社史資料センター」として人文科学研究所から独立、現在に至る。	注1
私立	関西大学	年史編集室	1975/4	約8,600点		年史資料の収集、調査、整理保存、展示公開を行い、周年史の編集、紀要の刊行活動を通して本学の歴史の継承・周知をはかることを目的として設置	注2
私立	関西学院大学	学院史料室	2000/4	約20,000点		1978年に「学院史料室」を設置。2000年4月より「学院史編集室」と名称変更し、学院史の調査・研究および年史編集を行うという目的をより明確に打ち出す。	
私立	学習院	学習院アーカイブズ	2011/4		事務職員3名 アーキビスト1名	1972年に「学習院百年史編集室」設置。『学習院百年史』全三巻を刊行(1980～1986年)。1981年には総務部総務課「院史資料室」(職員1名)が設置され、1994～2002年まで「学習院大学五十年史」の編集を行う。2009年に「院史資料室」併設の「学習院アーカイブズ準備室」ができ、2011年4月、「学習院アーカイブズ」設置(職員2名)。2008年に大学院アーカイブズ専攻開設。	注1
私立	日本大学	広報部大学史編集課	2010/4	不明	嘱託4名 課長1名 職員1名	大学編纂にかかわる史料資料収集、年表・紀要の発行を目的に設置	注2
私立	南山大学	南山大学史料室	2005/4		教育職員1名、事務職員1名	1983年、「南山学園史料室」を法人事務局内に設置。2001年に「南山大学五十年史」編纂。1999年から「南山学園創立75周年記念誌」編纂。2005年4月1日、大学アーカイブズの機能を併せ持つ施設として、2005年4月1日、「南山大学史料室」を設置。	注1

注1) 機関の開設年月日、所蔵資料点数、専任職員体制、設置の背景や前身組織等については、平成23年度 近畿大学学内研究助成金(21世紀教育開発奨励金プロジェクト)「近畿大学の大学アーカイブズ構築に関する基礎的研究」研究報告書(2012年2月15日発行)を参考に抜粋転載。

注2) 「日本の大学アーカイブズ」全国大学史料協議会編(2005)より抜粋引用

注3) は、各大学HPより抜粋。

＜資料2＞ 保存対象史資料（イメージ）

保存対象とする史資料は、文書規程に規定している文書を含め、今後の学生・生徒・児童の自校史教育や教職員の業務創造や振り返りに際して活用可能な史資料、他学園アイデンティティ醸成に利活用可能な史資料、学園の社会的説明責任や自己点検・自己評価にとっても重要な資料を保存することとしたい。

特に、教育・研究のために企画実施された各課業務などの内、単年度サイクルで廃棄されてしまい記録が残らないものなどは、意識的に可能な限り保存する。

保存する資料は例えば以下の通り（例示）。

法人業務関連史資料

長期計画等学園政策文書（提起・中間答申・答申等）

長期計画・学園政策に関わる文書（事務体制文書、教員組織整備計画、財政計画等）

財務関連文書（財政計画・予算書・決算書、財産目録、財政公開の資料、寄附・寄贈の履歴等）

人事関連文書（人事・研修政策、福利厚生、教職員役職等の履歴等）

施設設備（建設・施設改修計画、不動産売買・貸借関係履歴等）

キャンパスと地域の関係（地域懇談会や行政等との連携やアメニティの取組み等）

その他、各規程に定められた意志決定機関議事録・議案、各種委員会議事録・議案。

トップマネージャーの活動記録、学園のステークホルダーの記録

※機関決定文書は、提案－検討途中－決定－公開（あるいは内部資料）の各段階が必要。

入試関連史資料

入試関連政策文書（定期・中間答申・答申・補遺等）

入試政策に関わる各委員会の検討文書（答申に至る検討途中文書や各学部での検討文書等）

入試結果等のまとめ文書

大学案内、入試要項（RU、APU、附属校）

入試説明会（地方入試説明会やオープンキャンパス）の記録、入試広報、イベント発行物等

教学部関連史資料

＜諸発行物＞履修要項、講義概要、時間割、「時間割を作ろう」、受講登録要項、ゼミ募集要項、各プログラムの募集要項、各種イベントのチラシ、ゼミ論集、学会誌 ニュースレター等

＜機関会議の議事録・議案＞大協、教対、大学院委員会、他全学委員会、教授会、学部内の企画委員会や調査委員会等

＜方針と総括＞開講方針・総括、各学部事務系の方針と総括（入学式、オリエンテーション、受講登録、定期試験、成績発表、卒業式や単年度業務まとめ等）

＜改革等の文書＞全学や学部の教学改革検討文書・中間答申・下位委員会での検討途中文書・答申等

＜その他教学上画期となる諸事＞奨学金制度、単位互換制度、GP等補助金の事務局資料、各種プログラムの修了式、学部周年事業、特別講演会などの諸資料

＜全学協議会や学部自治、学生関連の資料＞全学協議会の検討経過資料、五者懇談資料、学部系学生団体の活動記録、ゼミ大会、卒業記念パーティなどの記録や記念品

学生関連史資料

機関委員会の議事録・議案

政策に関わる方針と総括（学生総合支援政策・スポーツ強化政策等）

政策立案に至る下位委員会の検討資料

学生団体の活動記録や発行物（大学新聞や立命スポーツ、学生生活ガイド、安全運転、飲酒・喫煙マナー、麻薬・マルチ商法対策）、学園祭や学生イベントの記録。自治会・校友会・全学協議会に関わる記録。

図書館関連史資料

機関委員会の議事録・議案

政策に関わる方針と総括（ラーニングコモンズに関わる資料等）

政策立案に至る下位委員会の検討資料

図書館企画の企画書・発行物・チラシ、学生スタッフの活動記録等

（RU・APU・附属校それぞれに）

情報システム関連史資料

機関委員会の議事録・議案

政策に関わる方針と総括（情報基盤整備計画等）

政策立案に至る下位委員会の検討資料

RAINBOW、RISING、RUNNERS等の経過記録、マニュアル・広報物類、学生スタッフや講習会等の活動記録 等

就職関連（キャリアセンター）史資料

機関委員会の議事録・議案

政策に関わる方針と総括（就職政策やキャリア教育や教職・公務員への対策方針等）

政策立案に至る下位委員会の検討資料

学部との連携や検討経過、エクステンションセンター、JAの取組みや企業説明会などの企画書・チラシ等

研究関連史資料

機関委員会の議事録・議案

政策に関わる方針と総括（公的資金獲得やリエゾン活動の政策等）

政策立案に至る下位委員会の検討資料

科研費や土曜講座、学内研究会の記録や発行物（紀要やニューズレター等）

学園の画期を担った著名教員の私物や研究ノート等

国際関連史資料

機関委員会の議事録・議案

政策に関わる方針と総括（G30や国際教育等）

政策立案に至る下位委員会の検討資料

異文化交流セミナーや留学生の取組み、学生スタッフの取りくみ等

社会連携関連史資料

機関委員会の議事録・議案

政策に関わる方針と総括（社会連携や寄付、ミュージアムの政策等）

政策立案に至る下位委員会の検討資料

父母・校友他イベントに関わる 企画書・発行物・チラシ・まとめ、モノ。

立命館アジア太平洋大学（APU）

上記立命館大学（RU）と同等業務に関わる史資料

附属校（一貫教育）関連史資料

機関委員会の議事録・議案

政策に関わる方針と総括（個別附属校の教学政策や生徒指導等）

政策立案に至る下位委員会の検討資料

修学旅行・学園祭などの学校イベントに関わる 企画書・発行物・チラシ・まとめ、児童・生徒の自主活動、研究発表、生徒会活動、クラブ活動に関わる記録

学園に関連する機関

教職員組合連合 方針・総括、機関紙、春闘等の取組み記録、サークルの活動記録

生活協同組合 方針・総括、機関紙（RUC）、卒業アルバム、入学アルバム等

㈱クレオテック 事業方針・総括

その他

立命館 HP 上の公開情報

学内の主要な刊行物や印刷物。複製された資料

大学内の非公開機関が発行した大学の歴史と深くかかわる諸資料

西園寺公望、中川小十郎、末川博他学園重要人物にかかわる学内外の諸資料。

以上

百年史写真展 「懐かしの立命館」

立命館百年史編纂室では、百年史写真展「懐かしの立命館」と題して、所蔵している資料、写真等の中から、テーマを決めてパネル等を百年史編纂室前に展示しています。これは立命館学園の児童、生徒、学生、教職員に立命館学園の歴史をより身近に感じてもらうことを目的としています。

第五回 「新入生歓迎祭典」 二〇一二年四月～八月

新入生の入学時期にあわせて展示を実施。

一九六〇年代の新入生溢れる広小路キャンパスでの新入生歓迎風景や、衣笠キャンパス中央広場にて行われた新入生歓迎祭典風景の様子。その後、会場をBKCキャンパスに移して行われる新入生歓迎祭典の様子を、写真にて展示。

第六回 「食堂今昔」 二〇一二年八月～十一月

大学生活において思い出の一つとなる食堂について、一九六〇年代から二〇〇〇年代

に至るまでの、キャンパスの移り変わりや新設（広小路、衣笠、西園寺記念館、BK、朱雀）とともに様変わりする食堂の様子を、年代を追って写真にて展示。

第七回 「学園祭・運動会」 二〇一二年十一月

一九〇九年の運動会の様子を収めた写真から、学園祭が登場するまでの運動会の様子を写真にて紹介。その後の一九六〇年代から二〇〇〇年代における学園祭の様子を、当時のパンフレットの写真とあわせて展示。

『年史』編纂等にかかわる留意点について

——『立命館百年史 通史三』の編纂等の備忘録から——

百年史編纂室（事務局）

『立命館百年史 通史三』（以下、『通史三』と略）は二〇一三年二月に発刊した。

そこで例えば学部などの機関や組織などが、その『年史』を『通史三』と同様に関係する教職員による分担執筆体制で編纂しようとする際の一助となるように、『通史三』の編纂や編集の作業経験から、事前に検討しておいたほうがよい事項や作業などの留意点について整理する。これらには細かいことが多いが、その細かいことによって点検や調整に相当の作業を必要としたり、手戻りが多く発生したりすることから本稿において整理するものである。

本稿は、次の三つの項目について箇条書き風に整理したものである。一つ目は正式な機関や組織が発刊する公的な『年史』の編纂、二つ目は教職員への分担執筆の依頼と執筆要領、三つ目は分担執筆した原稿（以下、草稿という）の点検、調整（加筆修正削除など）、校正の作業である。

一、『年史』編纂の基本方針、基本視点を明示する。加えて、成果や評価の記述の基本となる方針を明示する。

(一) 『年史』が正式な機関や組織のものであるなら、まず『年史』で何を明らかにしようとするのか、次にそれにはどのような視点が必要となるのかについて、機関や組織に『年史』の編纂(実務)について責任を有する編纂委員会など(以下、編纂委員会と略)を組織し、そこで検討して編纂の基本方針と基本視点を明らかにする。

作成した基本方針や基本視点は必ず機関や組織において議論し確認する。編纂委員会はこれを受けて確認された方針と視点に基づいて編纂作業を進めていくことになる。

*学部などを単位とする『年史』の編纂は、学部教育の拡充と改革、その成果となる学生の「学びと成長」と「進路・就職」に焦点をあて、事実の経年的統計資料を含めた「教育改革史」として書き上げることが重要であると考ええる。こうしたことを基本方針と基本視点とする『年史』の編纂は、「学費の重み」「学費への反省」に応える立命館らしい『年史』ということになるのではないかと考える。

(二) 編纂委員会は、基本方針と基本視点に基づいて、取り上げるべき、あるいは落としてはならない

政策や取組み、事実を検討し、一覧にまとめていく。

一覧にまとめる具体的な作業手順は次の通りである。

第一に、『年史』で明らかにしようすることを、基本的に年代を追った一つのストーリー（物語）となるように整理する。このストーリーが『年史』の一貫性、統一性を担保することになる。

第二に、このストーリーの流れの節目によつて『年史』の時期区分を行う。

第三に、それぞれの時期区分のテーマを設定する。このテーマは次の第四で書き上げるとしている政策や取組み、事実を記述する際にそれらの歴史的な位置や意義あるいは特徴などを整理する際の手がかりや基準となる。

第四に、時期区分毎に取り上げるべき、あるいは落としてはならない政策や取組み、事実を项目的に書き上げる。

第五に、書き上げた項目がそれぞれの主題となるように、時期区分毎に章節あるいは章節項を整理し、目次を作成する。この目次は「当初案」である。この「当初案」についても機関や組織で確認をとっておく。「当初案」は草稿の点検、調整、校正の過程のなかで必要に応じて加筆、修正、削除し、必要なら再編成する。こうして目次が固まっていく。

(三)

『年史』での政策や取組みなどの成果や評価の記述には二つの仕方がある。これは、公的な『年史』が研究者個人による独自の視点や観点から編纂したものではなく、正式な機関や組織が公的に

編纂したものとするための要件である。

一つは、まず成果や評価は当時のものでなければならないということである。この成果や評価は、『年史』が正式な機関や組織の公的なものであるということから、書き手の主観によるのではなく、機関や組織の「公的なもの」でなければならない。そして、「公的なもの」とは、成果や評価が機関や組織の当時の公的な文書や資料で裏付けられたものでなければならないということである。

しかし、相当に年代を遡るものであったり、裏付ける事実が記述されていない抽象的な評価であったりして、このような公的な成果や評価を裏付ける文書が無いことも少なくない。このような場合には、政策や取組みの起案文書に示されているその目的から、また、目標が示されていれば目標を基準にして、成果となる事実を経年的な統計資料で示して客観的に成果や評価を示すような工夫が必要となる。

さらに公的な総括文書が無かったり、経年的な統計資料を作成するための資料が見つからなかったりした場合、その成果や評価は政策や取組みの連続におけるそれらの発展の記述をもってそれに代えるという工夫も必要である。こうして政策や取組み、事実の当時の成果や評価を記述する。

もう一つは、政策や取組みなどに対する今日からみた成果や評価の記述である。それは、先の『年史』編纂の基本方針と基本視点に基づいて行うことである。基本方針と基本視点からみて、当時の政策や取組みなどとその成果や評価が、「歴史」であることから持つ制約を記述したり、「歴史」としての先見性や先進性を記述したり、「歴史」からの今日への教訓を記述したりして、「歴

史」としての意味や意義を明らかにすることである。これが『年史』に記載されている政策や取り組みなどについて今日からみた成果や評価の記述となる。

なお、対象となる政策や取り組みなどの「歴史」が今に近い「同時代史」や「現代史」となる場合には、その「歴史」としての意味や意義が定まっていけないので、現代における政策や取り組みなどの意味や意義の記述に留める（すなわち前者の仕方による記述）のが適切と考える。

（四）

成果や評価の記述にあたっては、記述の基本を明示して執筆者と事前に基本方針と基本視点からどのような政策や取り組み、事実を取り上げ、それらの成果や評価はどのように記述するのかをしっかりと意思統一しておくことが、編集作業上極めて重要である。

というのは、成果や評価の記述の基本の明示とその執筆者との意思統一が曖昧であると、執筆者はそれぞれの問題意識や執筆時の全学的な課題などからバイアスがかかったり、あるいはそれぞれの思い入れの強さから、善意ではあるが基本方針と基本視点そして記述の基本から離れて執筆者の独自の観点から記述したりするということになりかねない。

とくに『年史』あるいはその時期区分の時期が現在に近い場合には、執筆者がその政策や取り組みなどの事情や事実を具体的に知っていることから、執筆者個人の考え方や視点などに基づいて「歴史評価」を書くことができる。そうすると、執筆者毎に政策や取り組み、事実を取り上げる視点や基準、それらの軽重のレベルが揃わず、また成果や評価の観点や基準もばらばらとなりうる。しかも

執筆者はそのような視点や基準、軽重のレベルなどに基づいて草稿の全体の構成や論理を組むことになる。そのためこの草稿を基本方針と基本視点そして記述の基本から調整しなければならなくなる。この調整ほとんど書き直しに近い作業となる。

(五) 右記の(一)から(四)を『通史三』の編纂に沿って整理すると次のようになる。

『通史三』は、主に八〇・九〇年代を対象としている。八〇・九〇年代は学園からみれば「同時代史」であり「現代史」である。また『通史三』の発刊主体は常任理事会を主要なメンバーとする立命館百年史編纂委員会である。

そのため『通史三』の基本方針は、主に八〇・九〇年代の「学園飛躍の歴史」(『通史二』一、三三三頁)を明らかにするものとなる。そして基本視点は、第三次から第五次の長期計画に基づく学園創造であり、とりわけ学園規模問題を軸とする教学の拡充であり、総合学園としての発展の過程となる。取り上げる政策や取組み、事実は、時々の全学協議会確認(文書)や長期計画に提起されている課題にかかわるものとなり、常任理事会をはじめ学園の正式の機関で検討され公的な文書で提起されたものとなる。

『通史三』は学園飛躍の時期の学園創造の政策とその取組みを綴ったものである。その成果や評価は、学園創造の前進であり、教学の拡充であり、総合学園としての発展である。そして、これらの前進や拡充や発展の成果や評価のうち基本的なものは、経年的な統計資料の事実と学園の連続す

る政策や取組みの発展の記述によって客観的に記述されている。こうして『通史三』は公的な性格が担保される。

なお、『通史三』で記述されている政策や取組み、事実の歴史的な評価は、『通史三』の記述が学園にとつて「同時代史」でなくなり「現代史」でなくなった後世の時点において、それぞれの八〇・九〇年代の当時における社会的位置や評価とともに、後世の時点における『年史』の編纂の基本方針や基本視点からの「先見性」や歴史的制約などの記述として行われることになる。

二、『年史』の草稿の執筆依頼を丁寧に行う。合わせて依頼時に編纂委員会による草稿直し（加筆修正削除など）の一任を取り付ける。

以下に、作業手順や留意事項などを整理する。実務や作業の記述では編纂委員会と記しているが、実務にかかわる原案の作成や作業の多くは編纂委員会の事務局が行うことになる。

（一）執筆依頼は、時期区分ごとに担当の章節を設定し、次のような資料を添えてお願いする。合わせて依頼時に編纂委員会による草稿直し（加筆修正削除など）の一任を取り付けておく。できれば執筆者会議を開催し記述に関する基本的な意思統一をしつかり行う。

資料とは次のようなものである。

①『年史』編纂の主旨と、基本方針と基本視点

②成果や評価にかかわる記述の基本

③目次と時期区分ごとのテーマ

④草稿の組み立ての「モデル」（後述「(二)」）の提示

⑤用意ができるならば、担当する時期や担当する（章・）節・項の基本文書とそこで基本となる経年の統計数値（学生数、教職員数、志願者数など）や年表

⑥執筆要領と後述の「三」の留意事項などのお願ひ。とくに図表を掲載する場合には作成に使用した原資料等の典拠などの明示（特にいくつかの資料から作成した場合、後の校正の過程で事務局がこれらを探すのは困難なことが多いため、必ず明示してもらう。可能であれば原資料も合わせて提出してもらう）

(二) 草稿の組み立ての「モデル」を提示し、草稿間で構成や内容、それらの精粗などに大きな違いが出ないようにする。

「モデル」は次のような項目で構成されることが望ましい。しかし、執筆者がこれらの項目をどこまで書けるのかは公的な文書がどこまで揃っているのか、周知の事実がどこまであるのかに大きく依存している。

①導入部としてのこれまでの歴史的な到達点や課題など

② 取り上げるべき、あるいは落としてはならない政策や取組み、それらの意図、目的、目標、特筆すべき事実など

③ 政策や取組みのための組織・体制や制度、実際の取組みなど

④ 記述の基本に基づいた「成果や評価」（テーマに沿った他大学（他校）比較による本学の特徴となる先見性、独自性、先進性、特色、強みなどと社会的評価など）

⑤ その他、『年史』として書いておくべき、あるいは記録して残しておくべき事項

（三）

節項の項目はそれぞれに独自の様相や色合いを持つが、それらが個々ばらばらに書かれるのではなく、時期区分のテーマに位置づけられたり意義づけられたりしてテーマに収斂するように組み立てられ書かれることが重要である。この点検が編纂における草稿の調整の第一の仕事である。

というのは、『年史』のストーリーの流れが各時期区分のテーマとなっていることから、草稿がテーマに収斂することによって、一つには、前述したように『年史』の全体として一貫性、統一性を担保できることになるからである。もう一つには、個々の政策や取組み、事実の関連性、それらの継続性、発展性を明確にすることができるようになるからである。さらには各項目の独自の様相や色合いもテーマに収斂するように書かれることによって、政策や取組みの広がりや多様性を示すことができることになるからである。

こうして章のテーマが明確になり、各章のテーマによって『年史』のストーリーが浮かび上がり、

読みやすい『年史』となる。

(四)

執筆者が取り上げるべき、あるいは落としてはならない政策や取組み、事実の基本となる統計数値（典拠を明確にした用語の定義と数値の統一―学生数、教職員数、志願者数など）は事前に確定しておき、必要となる執筆者には事前に配布する。

事前に配布できない場合は、本文で使うあるいは資料として提示する経年の表や図は、典拠と用語の定義を明確にして元となる数値とともに原資料を執筆者から提出してもらえようをお願いをする。

というのは、編纂委員会で草稿を点検、調整し、出稿するのは執筆者が草稿を提出した後、早くて数ヶ月、『通史三』の場合は数年経っているので、執筆者が一校（草稿を出稿して戻ってきた最初の校正稿）を校正する場合に、この数字はどこから取ってきたのか、あるいはどの文書から持ってきたのかを忘れていることがあるからである。同じ事実について複数の執筆者が数値を記しているその数値が異なっている場合や出典や用語の定義が不明あるいは不明確な場合には、それらの数値を確定するだけで膨大な作業が必要になることがある。

(五)

同じことは執筆者が公的な文書を引用する場合にも起こる。正式な機関や組織が発刊する『年史』という公的な性格から、執筆は公的な文書や資料からの引用が多用されることになる。ここで

も数値と同様に公的な文書や資料を引用した箇所をマークして、草稿と同時に原資料を提出してもらうようお願いしておく。これは、引用が出典通りでなかったり、書き換えられていたり、孫引きであつたりすることがあるからである。また、引用文書の出典の明記がばらばらであつたりするからでもある。

この「(四)・(五)」が執筆者の草稿の点検を事務局が行う際の主要な作業となる。

(六)

執筆者の担当は、時期区分(あるいは章)を跨つて同じ内容となる節項(例えば就職、学生援助、教養教育や語学や専門教育、大学院など)は、可能であれば同じ執筆者に依頼するようにすることが肝要である。

それは執筆者が同じであると、時期区分を跨る文脈のながれ、内容の受け渡しや精粗、政策や取り組みの一貫性と統一性、その継続性あるいは関連性と発展性、文章の調子、語句の使い方と言い回しなどの整合を確保できるからである。

同じ執筆者に依頼できない場合には、執筆者間での調整のための打ち合わせが必要である。とくに時期を跨る政策や取り組み、事実については、時期区分の前と後ろでどのような表現でどこまで書くのかという内容の受け渡しについて調整しておく必要がある。また時間的に余裕がある場合には、時期区分の前の草稿を示して後ろの草稿を依頼するような段取りも必要である。

執筆者が同じ場合でも違う場合でも、時期区分を跨る同じ内容の節項の、文脈のながれ、内容の

受け渡しや精粗、政策や取組みの一貫性と統一性、その継続性あるいは関連性と発展性、文章の調子、語句の使い方と言い回しなどの整合の確保は、執筆者の草稿の調整の二つ目の仕事となる。

＊『通史三』では時期区分を跨る項目あるいは各時期にある同じ項目（例えば学生の厚生や就職に関わるもの）について異なる執筆者に執筆をお願いしたことから、それぞれの草稿でその導入の記述が同じ全学協議会確認（文書）や公的な文書から始まったり、それぞれの時期で独立したもの、あるいは完結した草稿となり、政策や取組みの一貫性と統一性、その継続性や関連性と発展性、内容の受け渡しなどの整合の確保に手間取ったりすることになった。とくに時期区分の前の草稿から後ろへの受け渡し部分と、後ろの草稿での前からの受け渡し部分の調整は思いのほか手間のかかるものであった。

（七） 執筆依頼時の不備は、草稿の点検（四）・（五）と調整の作業（三）・（六）の質量に影響してくる。この作業の負荷は『年史』の編纂期間を計画より短く、あるいは逆に長くすることに直結する。執筆依頼時にできるだけ周到な準備をし、丁寧に意思統一しながら依頼することが重要である。

三、執筆要領を作成する。それには草稿を書く際の留意事項も忘れずに明記する。

(一) 文章の書き方は『年史』の執筆要領(書き方の「作法」)を作成し、それに沿った記述をお願いする。

①『通史三』で使用した「校正要項」(略記の書き方や引用文献の引用や出典の示し方など)とその「別紙一覧表」(漢字・ひらがなの使用基準など)を文末に添付している。これらを参考に「執筆要領」を作成する。執筆者がこれらに基づいて書かれると後の草稿の書き方にかかわる点検作業は相当に軽減されることになる。

②参考に添付しているのは「校正要項」なので、執筆要領として次の点を追加する必要がある。

- ・ 小見出しのつけ方と表記(体言止めとするのかどうか)の指示
- ・ 年、年度、年月、年月日の使い分けの指示(二〇〇〇年三月は一九九九年度。西暦表記の場合には二桁で示すのか四桁で示すのかなど)
- ・ 学内の特有の用語の説明と「言い換え」(読み手を想定した変換)
- ・ 本文で学内の役職者を取り上げる範囲、学外者の役職の書き方、外国の方の名前の表記などの基準の提示

- ・ 主語と述語の対応。簡明な表現。句読点の打ち方の基準の提示
- ・ 章や節などの書き始めに前文的なものを入れるのかどうか
- ・ 学園・機関・組織など「が」を提起した(決定した)と「」が提起された(決定された)」、並びに「」である」(物語風に臨場感をもたせた現在進行形的な書き方)と「」であった」

（歴史的事実としての客観的な書き方）の使い分け（の基準）

- ・ どのような場合に担当の時期区分を超えて「その後」の動きを書くのか、どこまでの年度を「その後」とするのかなど、「その後」の基準などの明示
- ・ 「今日まで続いている」などの表現はその時期を明らかにする表現に変更すること
- ・ 出典や典拠の明示とその原資料の提供

（二） 執筆者が草稿を書き上げていく際の主な留意点には次のものがある。

①草稿に引用や参考されたりする公的な文書は、「案」段階の文書と「決定」された文書とを区別し、「決定」された文書を使用する。

②政策や取組みの成果は表や図による経年（期間の明示）の事実による実績として提示し、出典や典拠、定義（大学教員であればどの職名までを含んだものであるのかなど）、単位などを明示する。それらの評価が学園や学部などにおける歴史的なもの（「初」や「飛躍」など）であれば、あるいは他大学比較などから社会的に評価されるもの（「高い」や「初めて」など）であれば、それらの「高い」「飛躍的な」などの形容の内容をどのように「高い」のか、どのような「飛躍」のかなどを事実で示して書く。

③主な取組みや事実において特筆すべき、あるいは教訓とすべき学生や教職員などの奮闘があれば、歴史の事実として書く。

④草稿の記述を視覚化したり補完・補強したりする適切な写真の挿入を指示する。その際、写真のキャプションも記載する。また手元に写真がある場合は提供し、その撮影年月はできるだけ明示する。

四、草稿を点検し、調整（加筆修正削除など）し、校正して「二校」を通読する（「草稿」から「原稿」への移行）。

〔草稿の点検と調整（加筆修正削除など）〕

（一）「二」の『年史』の草稿の執筆依頼にかかわって、点検については「（四）・（五）」（数値と引用）で、調整については「（三）・（六）」（草稿のテーマへの収斂と時期を跨る草稿の統一性など）で指摘した。それ以外の点検と調整の作業について以下に整理する。

（二）分担執筆者から集まった草稿は、各執筆者の書き方の個性などについて各草稿を読み比べて違和感のないように調整する。冗長な記述は簡潔なものに改める。合わせて執筆者が関係者であったり担当者であったりすると、思いがこもった記述や過剰な評価になることが間々ある。これも『年史』という性格から過剰な思いや評価については調整し客観的なものとする。

（三）「三」の執筆要領の項目について点検する。

（四）草稿の修正は手書きの朱筆で行って出稿する。ここから草稿は原稿に移っていくのである。その

修正稿（「一校」と表記する）が上がった段階で朱筆通りに訂正されているかの点検を行う。その上で一校を読み、修正が全体の文脈に沿って違和感なく読めるかどうかを点検する。これは往々にして朱筆が前後のバランスや文脈を崩すことがあるので、朱筆の点検だけではなく「きれいな修正稿」（一校）を改めて読む調整作業は欠かせない。

「きれいな修正稿」（一校）での校正

（五） 「きれいな修正稿」（一校）を読むと、①文の流れの悪さや政策や取組み、事実の取り扱いの粗など章節の構成にかかわるもの、②文体のブレ、「てにをは」の不適切さ、主語と述語の対応などの文章にかかわるもの、③内容の精粗、成果や評価の記述の仕方、文脈に合わない引用などの内容にかかわるもの、④章節項目の表記の仕方など、「きれい」であるがゆえに目に付く新たな加筆、修正、削除の箇所がでてくる。これらを朱筆して返し、二校が上がってくる。こうした作業を繰り返して『年史』の原稿の精度や洗練度を上げていく。

（六） 数表については、その小計や合計、数値の取り方の基準のブレ（例えば大学教員は任期制や契約雇用の教員をどこまで参入するかなどと小数点以下の取り扱い）、出典や典拠と定義の明示、経年図表で途中の年度からの出典の変更などの注記などについて点検を行った上で、一校の校正の段階で確定する必要がある。同様に引用文、年月日の書き方、図なども点検し確定する。これら確定したものはそれ以降に朱筆しないようにする。図表、引用、年月日は校正の都度点検したのかどうか、

正確であるのかどうか常になくなるものである。そのために「確定した」ことを確認できる方法を申し合わせておく必要がある。そうしないと校正の都度に点検するという二度手間、三度手間となる。

〔二校での通読による点検と調整〕

（七） 二校が上がってくれば全体を通読する作業に入る。

これまで草（原）稿は独立した「論稿」であつたが、「きれいな二校」で通読すれば草（原）稿は章や節の前後のつながりのなかの一つの「書きもの」となる。そうすると前後のつながりの新たな点検と調整が必要となる。通読によって、「一―（二）」で整理した時代区分ごとのテーマがそれぞれの章や節の中で表現されているか、また、テーマがつながり全体としてストーリーが形成されているかを点検することが重要である。これらは通読しないとわからないことであり、必要な加筆、修正、削除を行う。通読の際には何がどこに書いてあるのかという詳細目次（小見出しまで含めた目次）、引用あるいは根拠とした文書の機関名と年月日のある一覧表、次に述べる「（一一）」の略年表を手元においておくと、通読時の前後のつながりなどの点検と調整に大いに役立つ。

（八） 通読時の主な点検項目の第一は、章節項の組立ての不整合や内容の「抜け、漏れ、重複」、章内の節間、節内の項間などの構成の不整合や内容の「抜け、漏れ、重複」などである。

これにより再組立てや再構成、章節項目などの内容の追加あるいは新たな節項目の設定の必要性が明らかとなる。新たな節項目が必要となった場合、その草稿は新たに執筆をお願いするか、場合によっては編纂委員会で執筆するかということになる。いずれにするかは、その時にどれほど草稿の執筆に時間がかけられるかによる。

(九)

第二は、章節などに跨って学生数、教職員数、志願者数などで数字が使われていることがあり、これらの数字の点検である。

これは執筆者によって数字の出典が違うことがあり、草稿に微妙に違う数字が使われていることがあるからである。「(六)」で示した通り一校の時点で正確な数字が記載されている出典を確定しておき、それで全体を統一的に修正する。そのような依拠する出典がない場合には編纂委員会で統一的に使う原資料を作成する必要がある。

本文のなかに使われている数字は必ずしも出典が示されず、また関係する表もない場合がある。これは先ず編纂委員会で調べるが、それでもわからなければ現在の担当部課に照会し、照会した数字を使って統一する。この場合にはこの数字の典拠を明確にし、それを『年史』の数字の原資料として確定する。たった一つの数字のことではあっても、これは『年史』の正確性にかかわる大きな問題なので十分な注意が必要である。

(一〇) 詳細目次も点検しなければならない。

一つは、目次間の表記のぶれの点検である。とくに執筆者がつけた小見出しは執筆者間で微妙に

書き方が違い、同じことが別の表記になっていることがある。

次に、詳細目次で節の組み立てと章の組み立てを追い、節や章が全体としてストーリーとテーマに沿って整合して構成されているかを点検する。この詳細目次の点検は、右記の「(七)」のように本文を読んだの点検ではなく、小見出し、目、項、節、章を項目とするフローチャートの点検に近いものであり、より筋あるいは流れがみえ、本文を読む点検とは違う観点から構成の不備や項目の「抜け、漏れ、重複」などに気づくことがある。詳細目次を軽視してはならない。

(二) 公的な機関や組織が発刊する『年史』ということであれば、略年表や年度毎の基本的な統計数値の一覧表が必要となる。略年表に関しては、二段階階の本文の記述から年月日の記載がある項目の一覧表を抜き出してこの材料とする。この材料は本文の記述の年月日の点検にも役立つ。この材料から取捨選択したものに必要となる項目を加え、それを修正加筆すれば略年表となる。新たに必要と判断して加えた項目は『年史』の本文には記述されていない項目となるので、適切な章節項に追記するか、必要な章節項の草稿を新たに作成する。『年史』の年月や年月日をめぐる誤りは『年史』という歴史の基本に関わる問題なので十分な注意が必要である。

(二) 通読は複数の者で少なくとも二回、できれば三回は必要である。実際に通読を行うと、草稿を調整し原稿としてここまで校正を積み上げているのに、なぜ、この時期にこのような誤りかという「新しい発見」をすることがある。しかもその数は相当多い。この段階では、PDFファイルによるテキスト検索などで点検できるようであれば、全体を通じた語句の統一や誤りの箇所の点検に大

いに役立つ。こうして一校、二校さらには三校が完成稿に近づいていく。

(二三) このような調整、点検、校正、通読は、主幹を置いてその指示、指導のもとに行う場合と、主幹を置かずに調整の作業部会のようなものを設置して行う場合がある。『通史三』は百年史編纂室会議を『通史三』検討会として置き直しそこで調整を行った。検討会の開催回数は七〇回を超えている。

〔各章に「はじめに」を置く場合、あるいは「序章」を置く場合の留意点〕

(一四) 各章に「はじめに」を置く場合には次のことに留意しなければならない。

一つは、「はじめに」の内容は各節の主要な事項を抜粋的に書くものとするのか、章の全体のストーリーを提示するものとするのかを決める必要がある。

もう一つは、節項の本文の字句訂正や加筆修正を行った場合、その章の「はじめに」と他の関連する本文の箇所との整合を図る必要がある。実際の作業では本文の節項の点検、調整、校正に気をとられ、それに合わせた「はじめに」と他の箇所との点検、調整、校正が抜けることがある。

(一五) 「はじめに」と同じことが、各章の主要な事項を抜粋した内容が含まれる「序章」を置く場合にも起きる。この場合にも本文の字句訂正や加筆修正を行った場合、各章の「はじめに」とともに「序章」とも整合を図る必要がある。

〔掲載写真の留意点〕

(一六) 三―(二)―④で執筆者が指示した場合を含め写真を挿入する際は、建物や冊子、モノなどは可能な限り現物を新規に撮影し、人物の場合は可能な限り高解像度の写真を用意することに留意する。ボケのある写真やパンフレット等からの転写は、解像度が低くなり『年史』の仕上りに影響を及ぼす。同様に掲載写真がカラーである場合、解像度の低い写真は色校正も困難となる。

〔現在も継続している事業や取組みを記述する場合の留意点〕

(一七) 年史等の記述において、現在も継続している事業や取組みを記述する場合には、その記述とりわけ評価の記述には特段の留意が必要である。

というのは、これらにかかわる記述は事実のみが確定しており、当事者や関係者の当時の立場や考え方、あるいは学園の課題や問題の認識と現在のそれらとが異なる等から評価に相違が生じる可能性があるからである。

このような場合は、当事者や関係者への配慮等を含め、どのように記述するか、あるいは評価するかは当該年史等の発行責任機関において審議し判断する必要がある。

以上

(文責 伊藤 昇)

『立命館自年史』通史第二巻

校正要項（別紙一覽表）（用例）

二〇一〇・七・二二

二〇一二・五・二二

【できるだけこれを使うこととし、×は使わない】

■あ

相次ぐ

明らか

効果をあげる

味わう

与える

新しい

辺り

当たる

幹旋（×あつせん）

集まる

く宛（×あて、宛て）

当てる（×あてる）

充てる（×あてる）

く余り

誤り（×あやまり）

新たな

改めて

あらわに（×露わに）

表れる

顕れる

在り方（×有り方）

有り様（ありよう）

あるいは（×或いは）

ある（×有る、在る）

合せて

併せて

■い

いい得る（×言い得る）

いう（×言）（彼は言った）

生き残る

いずれ（×何れ）

抱く

至る（×到る）

一応

位置づけ（×位置付け）

いち早く

一切（×いっさい）

一緒（×所）

いつそう（×一層）

一端（×いったん）

いったん（×一旦）

意味合い

いろいろ（×色々）

いわゆる（×所謂）

■う

うえて（×上で）

受け入れる（×受入れる）

受け皿（×受皿）

受け止める（×受止める）

うちに（×内に）

生まれる（×生れる）

生み出す

得る

■え

得ない

■お

おいて（×於いて）

負う

多い

おおむね（×概ね、×大旨）

置く

おく（×擱く、措く）

遅れる

行ろ（×行な）

起る（×起る）

恐らく（×おそらく）

同じく

覚える

思う

おもむろに（×徐に）

および（×及び）

及ぶ（動詞）

終わり（×終り）

■か

返る（×返える）

変える（×変える）

かわらねず（×拘わらず）

かわかる（×聞わかる、係る）

限り

重なり合う

数々（×かずかず）

稼ぐ（×かせず）

片付く（×片づく）

傍ら（×かたわら、傍）

かつ（×且つ）

かつて（×嘗て）

必ず（×必ずず）

かねて（×才て）

構える

代わる（×代る）

変わる（×変る）

聞して

■き

来るべき

気付く（×気づく）

厳しい

きゆうきよ（×急遽）

切り込む

切り開く

極めて

■く

くぐる（×潜る）

くぐらぬ（×くぐりぬ）

比べる（×較べる）

繰り返し（×繰返し）

繰り広げる

来る

詳しい（×くわしい）

■け

■こ

■に

■は

■は

■は

超える

越える

答える

こたえる（×応える）

こたへず（×事）

こたへず（×如く）

こたへず（×悉く）

異なる（×異る）

異にする（×殊に）

異にする

断る（×断わる）

このころ（×この頃）

■さ

際して

盛ん（×さか）

先立つ

先立つ

さきに（×先に）

避ける

支える

差し出す

授ける

誘う

さつそう（×襲撃）

様々

さらに（×更に）

■し

しかし（×併し）

しかも（×然も）

仕組み（×仕組）

次第に

従う（動詞）

したがって（×従って）

仕向ける

示す

占める

くしれない（×く知れない）

■す

据える

過さる

少ない

すぐ（×直ぐ）

優れた

進める

すでに（×既に）

すなわち（×即ち、則ち）

すべて（×全て、総て）

■せ

■そ

■そ

その（×其の）

それゆえ（×それ故）

■た

対する（×たいす）

絶えず（×たえず）

託す

確か

助ける

携わる

戦う

開く

たたし（×叩く）

たたし（×但し）

ただし書き（×但書き、但し書き）

たち（×直ちに）

たち（×く）

立ち入り（×立入り）

たつ（×終つ）

立つ（×たつ）

例で前

例えば（×たとへば）

辿りつく

たぐひに（×度）

ため（×為）

単なる

■ち

■ち

■ち

■ち

■ち

■ち

■ち

■ち

ついで

ついでに（×遂に）

通じて

次に

尽くす（×尽す）

作り出す

作る

造る

つくろ（×創る）

次く

■そ

勤める

勉める

常（×つねに）

■て

出会う

出来る（×出来る）

出来る（×出来る）

照らして

■と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

- な
くない(×無い)
なお(×尚)
なのなかで
半ば
なかんずく(×就中)
引き続き
なくす(×無くす)
など(×等)
並びに
並ぶ
何といつても
何よりも
何遍も(×なんべんも)
■ に
にわかに(×俄に)
■ ぬ
抜き差し
■ ね
根さす(×根差す)
■ の
残る
後に
延べ
述べる
のぼる(×上る)
乗り越える
■ は
場合
くをはじめ
図る
始まる
くの初め
始めて
始めて
始める
はず(×筈)
果たす(×果す)
- 早い、速い
払い下げ
はるかに(×遙かに)
■ ひ
引き合わせる
率いる
幸いる
引き出す
引き続き
引き抜く
引く
人々
何よりも
一つ
一通り
一人ひとり
ひもどく(×紐解く、繕く)
広く
- 免れる
間もなく
■ み
見いだす(×見出す)
見据える
自ら
見通す
皆
見なす(×看做す)
身につく
みられる
■ む
向かう(×むかう)
迎える
向こう(×むこう)
難しい
■ め
めぐって(×巡って)
目指す(×目指す)
目覚しい
目立つ
めど(×目処)
■ も
目する
目途
もしくは
用いる
持つ
もって(×以て)
最も(×もつとも)
もつとも(×尤も)
求める
専ら(×もっぱら)
もちろん(×勿論)
くのもと(×くの下)
もたらす(×齎す)
基づく(×基く)
盛り込む
漏れる
- や
やむを得ない(×止むを得ない)
やめる(×止める)
■ ゆ
ゆえに(×故に)
譲る
ゆだねる(×委ねる)
■ よ
くしてよい(×よくして良い)
ようやく(×漸く)
よって(×因って、依って)
呼ぶ
読む
■ ら
■ り
■ る
■ れ
■ ろ
ろうばい(×累抱)
■ わ
わが国(×我が国)
わかる(×分る、解かる、判る)
分かれる
枠組み
分ける
わたる(×亘る)
以上

注)1.「出稿」は百年史編纂室から大日本印刷への原稿渡し日

2.「入」はゲラ受取り,「返」は返却日

第八校		第九校		第十校		第十一校		第十二校		第十三校		第十四校		第十五校		第十六校		色校正初校		色校正二校		色校正第三校	
入	返	入	返	入	返	入	返	入	返	入	返	入	返	入	返	入	返	入	返	入	返	入	返
12.09.21	12.09.28		12.10.04	12.10.09		12.10.25		12.11.19	12.11.27	12.12.05	—								13.01.09	13.01.11	13.01.21	13.01.23	13.01.28
12.12.05	—																		13.01.09	13.01.11	—	—	—
																			13.01.09	13.01.11	—	—	—
																			13.01.09	13.01.11	—	—	—

12.08.30	12.09.27	12.10.15	12.10.23	12.10.30	—	—	—	12.11.29	—	—	—	13.01.09	13.01.11	—	—	—
〃	〃	〃	〃	〃	—	—	—	—	—	—	—	〃	〃	—	—	—
〃	〃	〃	〃	〃	—	—	—	—	—	—	—	〃	〃	—	—	—
〃	〃	〃	〃	〃	12.11.06	12.11.26	12.11.15	12.11.29	12.11.30	12.12.05	—	〃	〃	—	—	—

12.08.01	12.08.30	12.09.14	12.09.27	12.10.15	12.10.23	12.10.30	—	12.11.12	12.11.20	12.11.26	12.11.29	12.11.30	—	—	—	13.01.09	13.01.11	—	—	—
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	12.11.06	〃	〃	〃	12.11.29	12.11.30	12.12.05	—	—	〃	〃	13.01.21	—	—
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	12.11.06	〃	〃	〃	12.11.29	12.11.30	12.12.05	12.12.06	12.12.07	—	〃	〃	13.01.21	—
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	12.11.06	〃	〃	〃	12.11.29	12.11.30	—	—	—	〃	〃	—	—	—
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	12.11.06	〃	〃	〃	12.11.29	12.11.30	—	—	—	〃	〃	—	—	—
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	—	〃	〃	〃	—	—	—	—	—	〃	〃	—	—	—
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	—	〃	〃	〃	12.11.29	12.11.30	—	—	—	〃	〃	13.01.21	—	—
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	12.11.06	〃	〃	〃	12.11.29	12.11.30	12.12.05	—	—	〃	〃	13.01.21	—	—
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	—	〃	〃	〃	12.11.29	12.11.30	12.12.05	—	—	〃	〃	—	—	—
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	—	〃	〃	〃	—	—	—	—	—	〃	〃	13.01.21	—	—

12.08.01	12.08.30	12.09.14	12.09.27	12.10.15	12.10.23	12.10.30	—	12.11.12	12.11.20	12.11.26	12.11.29	12.11.30	12.12.05	—	—	13.01.09	13.01.11	—	—	—
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	12.11.06	〃	〃	〃	〃	〃	12.12.05	—	—	〃	〃	13.01.21	13.01.23	13.01.28
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	12.11.06	〃	〃	〃	〃	〃	12.12.05	—	—	〃	〃	13.01.21	—	—
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	12.11.06	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	—	〃	〃	—	—	—

12.08.01	12.08.30	12.09.14	12.09.27	12.10.23	12.11.06	12.11.20	12.11.26	12.11.29	12.11.30	—	—	—	—	—	—	13.01.09	13.01.11	—	—	—
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	12.11.29	12.11.30	12.12.05	—	—	—	〃	〃	13.01.21	—	—
12.08.30	12.09.14	12.09.27	12.10.15	12.10.23	12.10.30	12.11.06	12.11.12	12.11.20	12.11.26	12.11.29	—	—	—	—	—	〃	〃	13.01.21	13.01.23	13.01.28
〃	〃	〃	〃	〃	〃	—	〃	〃	〃	〃	—	—	—	—	—	〃	〃	13.01.21	13.01.23	13.01.28
〃	〃	〃	〃	〃	〃	—	〃	〃	〃	〃	—	—	—	—	—	〃	〃	13.01.21	13.01.23	13.01.28
〃	〃	〃	〃	〃	〃	12.11.06	〃	〃	〃	〃	—	—	—	—	—	〃	〃	13.01.21	13.01.23	13.01.28
〃	〃	〃	〃	〃	〃	—	〃	〃	〃	〃	—	—	—	—	—	〃	〃	—	—	—
〃	〃	〃	〃	〃	〃	—	〃	〃	〃	〃	—	—	—	—	—	〃	〃	—	—	—
〃	〃	〃	〃	〃	〃	12.11.06	〃	〃	〃	〃	—	—	—	—	—	〃	〃	—	—	—

	12.08.30	12.09.14	12.10.12	12.10.19	12.10.29	12.11.08	12.11.20	12.11.26	—	—	—	—	—	—	—	13.01.09	13.01.11	—	—	—
	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	12.12.05	—	—	—	—	〃	〃	13.01.21	13.01.23	13.01.28, 30?
	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	—	—	—	—	—	〃	〃	13.01.21	—	—
	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	—	—	—	—	—	〃	〃	—	—	—
	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	12.11.29	12.11.30	12.12.05	—	—	—	—	〃	〃	—	—	—
	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	—	—	—	—	—	〃	〃	13.01.21	—	—

12.08.30	12.09.14	12.10.12	12.10.19	12.10.29	12.11.08	12.11.20	12.11.26	—	12.11.30	—	—	—	—	—	—	13.01.09	13.01.11	—	—	—
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	12.11.29	〃	12.12.05	12.12.06	12.12.07	—	—	—	〃	〃	13.01.21	13.01.23	13.01.28
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	12.11.29	〃	—	—	—	—	—	—	〃	〃	13.01.21	—	—
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	—	〃	—	—	—	—	—	—	〃	〃	13.01.21	13.01.23	13.01.28

																13.01.09	13.01.11	—	—	—
--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	----------	----------	---	---	---

12.11.20	12.11.30	12.12.05	—													13.01.09	13.01.11	—	—	—
																〃	〃	13.01.21	13.01.23	13.01.28

12.12.05	—															13.01.09	13.01.11	—	—	—
12.12.05	—															〃	〃	—	—	—
12.12.05	—															〃	〃	13.01.21	—	—
12.11.15	12.11.27	12.12.05	—													〃	〃	—	—	—
12.12.05	—															〃	〃	—	—	—
12.12.05	—															〃	〃	—	—	—

																13.01.09	13.01.11	—	—	—
--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	----------	----------	---	---	---

『立命館百年史』通史三 校正作業進行記録

出稿	第一校		第二校		第三校		第四校		第五校		第六校		第七校	
	入	返 (CB)	入	返	入	返	入	返	入	返	入	返	入	返
前口絵	11.12.26	12.01.11	12.01.24	12.02.20	12.03.09	12.03.26	12.04.11	12.04.18	12.04.27	12.05.18	12.07.28	12.08.27	12.09.07	
序	12.04.27	12.05.10	12.05.15	12.05.19	12.07.20	12.08.01	12.08.30	12.08.30	12.09.27	12.10.23	12.11.06			
凡例	12.04.27	12.05.10	12.05.15	12.05.19			12.08.30	12.09.14	12.09.27	12.10.23	12.11.06	—		
目次	—	12.05.19	—	12.10.30		12.11.20	12.11.26	12.11.29	12.11.30	12.12.05	12.12.06	12.12.07	—	
序 章 一九八〇年代から二一世紀へ — 立命館学園の発展														
はじめに	10.07.22	11.02.18	11.07.21	11.07.29	11.12.26	12.01.19	12.02.21	12.03.02	12.03.28	12.04.04	12.05.19	12.07.20	12.08.01	
第一節 社会の変動	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
第二節 日本の高等教育政策 — 規制から競争促進へ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
第三節 一九八〇年代、九〇年代の立命館学園のあゆみ	〃	〃	11.07.25	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
第一章 一九八〇年代の学園政策 — 一九七九年度全学協議会確認から第三次長期計画の実施へ														
はじめに	10.07.22	10.07.29	11.01.26	11.02.23	11.05.13	11.05.30	11.07.08	11.07.28	11.12.26	12.01.20	12.03.09	12.03.28	12.05.02	12.05.19
第一節 新しい総合学園政策の策定	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
第二節 新しい総合学園政策の実施	10.07.26	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
第三節 一九八〇年代における教学課題への取組み	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	12.01.06	〃	〃	〃	〃	〃
第四節 厚生援助課題の変化と総合厚生援助政策	〃	10.07.22	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
第五節 新しい大学院政策の胎動	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	11.12.26	〃	〃	〃	〃	〃
第六節 研究政策への本格的取組み	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
第七節 教学施設、キャンパス条件の整備 — 本館 — 一点専攻の完成と一九八〇年代	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
第八節 立命館中学校・高等学校の校舎移転と附属校政策	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
第九節 第三次長期計画（一九八四～九〇年度）と財政	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
第一〇節 第三次長期計画から第四次長期計画へ — 学園管理運営体制の改革	10.07.16, 20	10.07.23, 26	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
第二章 一九九〇年代の学園政策（一） — 「学園規模問題」の抜本的解決を目指す第四次長期計画と第五次長期計画の推進														
はじめに	10.07.29	10.08.04	11.01.26	11.02.23	11.05.13	11.06.02	11.07.08	11.07.26	11.12.26	12.01.20	12.03.28	12.04.12	12.05.02	12.05.19
第一節 第四次長期計画の推進 — びわこ・くさつキャンパス (BK C) 開設と政策科学部設置を中心に	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
第二節 第五次長期計画の展開 — びわこ・くさつキャンパス (BK C) および衣笠キャンパスの高度化・新展開	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
第三節 第四次・第五次長期計画と財政運営 — 学園構成単位の財政的自立を基本に	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
第三章 一九九〇年代の学園政策（二） — 学園の質的高度化と社会的ネットワークの展開														
はじめに	10.10.22	10.11.04	11.04.08	11.04.26	11.07.19			11.08.02	12.01.24	12.02.06	12.04.04	12.04.17	12.05.02	12.05.19
第一節 教学の高度化に向けて	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
第二節 学生援助政策	10.10.27	〃	〃	〃	〃	11.08.02	12.01.24	12.02.06	12.04.04	12.04.17	12.05.02	12.05.19	〃	〃
第三節 大学院政策の新たな展開	〃	〃	〃	〃	11.07.08	〃	〃	12.02.06	〃	〃	〃	〃	〃	〃
第四節 研究の高度化と社会化	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	12.02.06	〃	〃	〃	〃	〃	〃
第五節 一貫教育と附属校政策の本格的展開	10.10.29	10.11.9	〃	〃	11.07.19	〃	〃	12.02.06	〃	〃	〃	〃	〃	〃
第六節 世界へ向けての平和の発信	〃	〃	〃	〃	11.07.08	〃	〃	12.02.06	〃	〃	〃	〃	〃	〃
第七節 株式会社クレオテックの設立	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	12.02.06	〃	〃	〃	〃	〃	〃
第八節 一九九〇年代の事務体制	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	12.02.06	〃	〃	〃	〃	〃	〃
第四章 立命館アジア太平洋大学の創設														
はじめに	10.08.19	10.08.23	11.03.25	11.04.04	11.06.17	11.07.01	11.07.08	11.07.26	11.12.26	12.01.23	12.04.18	12.05.19	12.08.02	12.08.20
第一節 本格的な国際大学を目指すAPU創設計画	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
第二節 社会的ネットワークによる新大学の創設	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
第三節 教育と研究のシステム構築	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
第四節 国際学生および国内学生受入れの取組み	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
第五節 新大学の開学に向けて	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
第五章 二一世紀の学園創造に向けて														
はじめに	11.02.04	11.02.18	11.05.13	11.06.25	11.07.19	11.07.29	11.12.26	12.01.26	12.04.27	12.05.10	12.05.19	12.08.02	12.08.20	
第一節 社会と世界に開かれた教育・研究創造	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
第二節 立命館アジア太平洋大学 (APU) — 開設の成果とニュー・チャレンジ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
第三節 社会的ネットワークの展開	10.03.04, 20	11.02.18, 21	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
結びに	12.04.27	12.05.10	12.05.15	12.05.19			12.08.02	12.08.30	12.10.12	12.10.19	12.10.29	12.11.06	12.11.20	—
あとがき	12.08.30	12.08.12	12.09.29	12.10.09			12.10.29	12.11.08	12.11.19	12.11.30	12.12.05	—		
引用・参考文献一覧		11.09.27	12.03.09	12.03.26	12.05.11	12.05.18		12.07.30		12.08.30		12.09.27		12.10.29
本文図一覧		12.05.14			12.08.02	12.08.30	12.09.14	12.10.26			12.11.08	12.11.15	12.11.30	12.11.29
本文表一覧		12.05.14			12.08.02	12.08.30		12.10.26			12.11.08	12.11.15	12.11.30	12.11.29
本文写真一覧		12.05.14			12.08.02	12.08.30		12.10.26			12.11.08	12.11.15	12.11.30	12.11.29
口絵写真解説	12.04.06	12.04.19	12.04.27	12.05.10		12.05.19	12.08.02		12.08.30		12.09.27		12.10.29	12.11.08
学生の功績	12.05.02	12.05.14			12.06.07	12.06.20		12.08.30		12.09.27	12.10.29	12.11.08	12.11.15	
立命館学園略年表	12.03.26	12.04.04	12.04.06	12.04.26	12.05.11	12.05.19	12.08.02	12.08.30		12.09.27	12.10.29	12.11.08	12.11.15	
奥付	—	12.05.14	12.05.19					12.08.30	12.11.29	12.12.05	—			

受入整理月	発行日	名称	発行元	形状	寄贈者・移管部課
	1929/00/00	『日本国民史の精髄』『欧米の産手と日本の茶代』（日本書院 大正15年刊の複製）			
	2006/09/00	『高木孝一社会学伝本集』一明治の社会学④『社会学雑誌』			
	2007/07/00	『高木孝一社会学伝本集』二明治の社会学⑤『社会学雑誌』			
	2007/07/00	『高木孝一社会学伝本集』三明治の社会学⑥『社会学雑誌』			
	2003/01/00	『川合康男』『近代日本社会学の展開』			
	1931/01/00	『大学文科部員の仕事について』『立命館学報』			
	1934/00/00	『鹿取余の進出』『立命館文学』			
	1935/11/00	『立命館の樹立を提唱す』『立命館50周年記念論文集・文学篇』			
	1929/00/00	『社会学の将来』『最近社会学の進歩』			
	1920/00/00	『中学修身書』			
	1920/00/00	『女子修身書』			
	1917/00/00	『欧米の社会と教育の新動向』『最近思想教育夏季講習録』			
	1906/03/00	『東京大学百年史』			
	—	『近代日本社会学』中 学制百年史（第1編 第2章 第4節1・2）			
	1908/12/15	『近代日本社会学』小伝（P135～141） 運動通告			
	1935/12/00	『六楼 第1号』			
	1895/02/00	『六楼 第2号』			
	1895/05/00	『六楼 第3号』			
	1895/12/00	『六楼 第4号』			
	1886/05/00	『学生間ニ於ケル勉強ニ付スル』			
	1886/07/00	『皇族巡拝記（巻下）』			
	1887/01/00	『皇族巡拝記（其の2）』			
	—	『新年を迎ふ』			
	—	『離別演説』			
	1888/04/00	『別を告ぐ』			
	1939/02/00	『六楼 第11号』			
	—	『六楼 第12号』			
	1994/00/00	『小林照朗先生伝 一明治・大正・昭和前期を生きた教育者・社会学者』（『参考資料』）②			
	1992/00/00	『日本社会学院年報』に諸論文			
	1914/00/00	『日本社会学院第2大会「開会」の辞』			
	1916/00/00	『社会学と教育学』			
	1916/00/00	『教育教授調査機関の必要』			
	1917/00/00	『社会学の実用方面に就て』			
	1918/00/00	『女子職業問題』			
	1919/00/00	『経済学者の社会観を評す』			
	1920/00/00	『研究報告教授問題 総説』特に女子教育行政に就て』			
	1921/00/00	『「実用社会学の樹立を提唱す」』			
	1922/00/00	『東亜の光』第9巻第9号「第1回万国人類会議演説 野田廣夫			
	1922/00/00	『東亜の光』第9巻第9号「第1回万国人類会議演説 野田廣夫			
	1911/09/00	『興学教育の印象』小林照朗著			
	1916/00/00	『欧米の社会と日本の社会』小林照朗著			
	1916/07/00	『帝國教育』第408号「我が国の体育科教育員殊に体育科女子中等教員に望む』小林照朗			
	1911/04/05	『ゾーヘル』第1巻第1号「社会と児童』小林照朗			
	1912/03/31	『文部省外国留学生会報』			
	1910/07/00	『和蘭誌』第168号（第14巻第7号）「自覚教育』小林照朗			
	1910/07/00	『東京女子高等師範学校60年史』第6章 東京女子高等師範学校時代（其の1）			
	1981/2/10	『お茶の水女子大学百年史』第3章 東京女子高等師範学校時代			
	1984/03/31	『海外山名名教授紀 念学術演説会紀要』日本及日本人 507号』			
	1909/04/00	『社会学研究』日本の社会』小林照朗著			
	1907/1/27	『小林照朗先生伝 一明治・大正・昭和前期を生きた教育者・社会学者』（『参考資料』）③			
	1929/02/00	『早川先生追悼録』中 川重三郎先生と立命館大学			
	1929/02/00	『立命館大学百年史』立命館大学			
	1935/00/00	『立命館大学百年史』立命館大学			
	2000/03/00	『立命館大学百年史』立命館大学			
	1997/00/00	『樋口直から香住丘へ』福岡県立女子専門学校			
	1973/00/00	『福岡女子大学五十年史』福岡県立女子専門学校			

受入整理月	発行日	名称	発行元	形状	寄贈者・移管部課
2013.01	—	2001年度(資金収支計算書・消費収支計算書・貸借対照表)	—		百年史編纂室(保管分)
2013.01	—	2002年度(資金収支計算書・消費収支計算書・貸借対照表)	—		百年史編纂室(保管分)
2013.01	—	2003年度(資金収支計算書・消費収支計算書・貸借対照表)	—		百年史編纂室(保管分)
2013.01	—	2004年度(資金収支計算書・消費収支計算書・貸借対照表)	—		百年史編纂室(保管分)
2013.01	—	2005年度(資金収支計算書・消費収支計算書・貸借対照表)	—		百年史編纂室(保管分)
2013.01	—	2006年度(資金収支計算書・消費収支計算書・貸借対照表)	—		百年史編纂室(保管分)
2013.01	—	2007年度(資金収支計算書・消費収支計算書・貸借対照表)	—		百年史編纂室(保管分)
2013.01	—	2008年度(資金収支計算書・消費収支計算書・貸借対照表)	—		百年史編纂室(保管分)
2013.01	—	2009年度(資金収支計算書・消費収支計算書・貸借対照表)	—		百年史編纂室(保管分)
2013.01	—	2010年度(資金収支計算書・消費収支計算書・貸借対照表)	—		百年史編纂室(保管分)
2013.01	—	2011年度(資金収支計算書・消費収支計算書・貸借対照表)	—		百年史編纂室(保管分)
2013.01	2013/01/15	未来学フォーラム 第12号	未来学フォーラム事務局	A4	
2013.01	2013/01/11	立命館大学看護学専攻 第14号【第14号】	立命館大学看護学専攻	チラシ	
2013.01	—	文学部教育人間学専攻 第14号【第14号】	文学部教育人間学専攻	チラシ	ハコ入れ
2013.01	—	2013年 中国語講座 2月1日(金)中込・市川南 退職記念講演「自立の人間学」	立命館女子学院	チラシ	
2013.01	—	初任入団(前)前外(中)外 本・音楽教室・音楽教室 2013/2/10日	立命館大学音楽部	チラシ	
2013.01	—	本学学生への入学生協各店2013年2月21日～11月2日 入生協期間 営業時間案内	立命館大学学生協同組合	チラシ	
2013.01	—	本学学生への入学生協各店2013年1月22日～2月3日 後期試験期間 営業時間案内	立命館大学学生協同組合	チラシ	
2013.01	2013/01/18	ニ子コッ制業の学生生活のために	立命館大学	スリット	
2013.01	—	安心で快適な学生生活のために	立命館大学	A4	
2013.01	2013/01/23	未来学フォーラム 第13号	未来学フォーラム事務局	A4	
2013.01	2013/01/22	衣笠キヤンパス生協各店2013年2月12日～3月31日 春休みの営業時間案内	立命館大学学生協同組合	チラシ	
2013.01	2013/01/22	衣笠キヤンパス生協各店2013年2月12日～3月31日 春休みの営業時間案内	立命館大学学生協同組合	チラシ	
2013.01	1979/11/00	ふたたび二部改革の経緯について	立命館大学国際平和ミュージアム	逐次刊行物	
2013.01	1990/02/15	二部改革の経緯について	二部協議会	冊子	
2013.01	1988/10/01	二部 各学部 定員・志願者・合格者・手続者・学生数等 推移表(理工・全学部 3-2)全9-8	—	二部改革経緯ファイル	
2013.01	1991/03/31	1990年度 二部改革のまとめと課題	立命館大学二部協議会	冊子	

二〇二二年度 立命館百年史編纂委員会関係委員等一覧

(二〇二二年八月一日 立命館百年史編纂委員会常任委員会承認)

顧問

谷岡 武雄
大南 正瑛
長田 豊臣
川本 八郎
岩井 忠熊
松岡 正美
芦田 文夫
坂本 和一

立命館百年史編纂委員会

委員長 川口 清史
委員 長田 豊臣
委員 服部 健二
委員 見上 崇洋
委員 渡辺 公三
委員 是永 駿
委員 本郷 真紹

総長

理事長

副理事長

副総長、立命館大学副学長

副総長、立命館大学副学長

副総長、

立命館アジア太平洋大学長

副総長

委員	モンテ	カセム	副総長
委員	村上 正紀		
委員	中村 正		常務理事
委員	國廣 敏文		常務理事
委員	森島 朋三		常務理事
委員	高橋 英幸		常務理事
委員	本間 政雄		常務理事
委員	川崎 昭治		常務理事
委員	位高 光司		理事
委員	北村 春江		理事
委員	薦田 守弘		理事
委員	金銅 幸夫		理事
委員	澤村 論		理事
委員	清家 邦敏		理事
委員	高木 茂太市		理事
委員	布垣 豊		理事
委員	村上 健治		理事
委員	山中 諄		理事
委員	分林 保弘		理事

委員	平田 純一	理事
委員	竹瀨 修	理事（法学部長）
委員	松原 豊彦	理事（経済学部長）
委員	中西 一正	理事（経営学部長）
委員	有賀 郁敏	理事（産業社会学部長）
委員	板木 雅彦	理事（国際関係学部長）
委員	上子 秋生	理事（政策科学部長）
委員	桂島 宣弘	理事（文学部長）
委員	大森 康宏	理事（映像学部長）
委員	坂根 政男	理事（理工学部長）
委員	八村 広三郎	理事（情報理工学部長）
委員	今中 忠行	理事（生命科学部長）
委員	今村 信孝	理事（薬学部長）
委員	田畑 泉	理事（スポーツ健康科学部長）
委員	ピシユバ ダバー	理事（立命館アジア太平洋大学 アジア太平洋学部長）
委員	横山 研治	理事（立命館アジア太平洋大学 国際経営学部長）
委員	松井 珍男子	評議員会議長
委員	甲賀 光秀	百年史編纂室長
委員	江原 武一	百年史編纂室副室長

立命館百年史編纂委員会常任委員会

委員長	川口 清史	総長
委員	甲賀 光秀	百年史編纂室長
委員	長田 豊臣	理事長
委員	川本 八郎	学園顧問
委員	服部 健二	副理事長
委員	見上 崇洋	副総長
委員	渡辺 公三	副総長
委員	是永 駿	副総長（立命館アジア太平洋大 学長）
委員	本郷 真紹	副総長
委員	モンテ カセム	副総長
委員	村上 正紀	副総長
委員	中村 正	常務理事
委員	國廣 敏文	常務理事
委員	森島 朋三	常務理事
委員	高橋 英幸	常務理事
委員	本間 政雄	常務理事
委員	川崎 昭治	常務理事
委員	平田 純一	理事（立命館アジア太平洋大学 副学長）
委員	竹瀨 修	理事（法学部長）
委員	松原 豊彦	理事（経済学部長）

委員	中西 一正	理事（経営学部長）
委員	有賀 郁敏	理事（産業社会学部長）
委員	板木 雅彦	理事（国際関係学部長）
委員	上子 秋生	理事（政策科学部長）
委員	桂島 宣弘	理事（文学部長）
委員	大森 康宏	理事（映像学部長）
委員	坂根 政男	理事（理工学部長）
委員	八村 広三郎	理事（情報理工学部長）
委員	今中 忠行	理事（生命科学部長）
委員	今村 信孝	理事（薬学部長）
委員	田畑 泉	理事（スポーツ健康科学部長）
委員	ピシュバ ダバー	
委員	横山 研治	理事（立命館アジア太平洋大学 アジア太平洋学部長）
委員	田尻 実	理事（立命館アジア太平洋大学 国際経営学部長）
委員	上田 寛	総務部長
委員	建山 和由	総長特別補佐
委員	江原 武一	総長特別補佐
オブザーバー		百年史編纂室副室長
坂本 和一		百年史編纂室顧問

二〇二二年度 百年史編纂室日誌 (抄)

二〇二二年

三月十三日 (火)

産業医職場巡視

一六日 (金)

株式会社東京光音より銅版写真デジタル化納品

二三日 (金)

図書館サービス課丸山浩史氏、蔵城一樹氏企画展示資料について打合せの為来室 (奈良)

二七日 (火)

追手門学院大学大学事務部・横井貞弘氏、天野利武教授に関する資料調査の為来室 (齋藤 応対)

二八日 (水)

図書館企画展示用貸出し資料搬出

二九日 (木)

『通史三』巻末資料掲載についてスポーツ強化オフィスと打合せ (齋藤)

四月 五日 (木)

新任職員研修にて百年史編纂室紹介、見学

六日 (金)

第四回中川小十郎研究会 (於・山崎研究室。佐々木、奈良、長谷川、田中出席)

九日 (月)

大日本印刷野口智久氏、契約課高橋千穂里氏、通史ならびに資料編在庫保管の打合せの為来室 (佐々木)

一一日 (水)

橋本弘之氏、資料閲覧の為来室

一六日 (金)

リサーチオフィスより土曜講座テップ移管 (久保田)

一九日 (木)

全国大学史資料協議会西日本本部会幹事会 (於・関西学院大学梅田キャンパス。佐々木出席)

二〇日 (金)

広報課岡本伸也氏、face book 写真選定の為来室

二〇日 (金)

山崎有恒文学部教授、中川家資料調査の為来室

二三日 (月)

秘書課より大学基準協会関係資料移管

二五日 (水)

肥塚浩経営学部教授、八重樫文経営学部准教授、「経営学部50周年記念誌」作成資料閲覧の為来室

二六日 (木)

西園寺記念館ロビー展示「広小路模型」にアクリルケース取り付け

二七日 (金)

一貫教育部陸山成利部長と『通史三』略年表について打合せ (佐々木)

二八日 (土)

岡尾恵市名誉教授、『立命館学誌』記載の陸上競技部について調査の為来室 (久保田)

二九日 (日)

広報課田中麻由氏、「創立記念日企画」の打合わせの為来室 (奈良)

五月 一〇日 (木)

肥塚浩経営学部教授、「経営学部50周年記念誌」掲載資料閲覧等、編集作業

一一日 (金)

資料収集の為、リサーチオフィス (BK C) 訪問 (奈良、久保田)

一六日 (水)

立命館生活協同組合三浦知宏氏、「生協五〇年史」作成資料閲覧の為来室

一七日 (木)

肥塚浩経営学部教授、「経営学部50周年記念誌」資料閲覧、編集作業の為来室

一八日 (金)

立命館中学校・高等学校事務室武田敦氏、資料閲覧の為来室

二三日 (水)

第五回中川小十郎研究会 (於・啓明館日本史共同研究室。佐々木、奈良、長谷川、田中出席)

二四日 (木)

中川家資料整理について打合せ (佐々木、奈良、長谷川、寺澤)

二五日 (金)

資料収集の為、リサーチオフィス (衣笠) 訪問 (奈良)

- 二九日(火) 全国大学史資料協議会西日本部会総会出席
(於・大阪市立大学。田尻部長、佐々木出席)
- 六月 一日(金) 「防災・防火マニュアル」説明会(於・至徳館三〇四会議室。佐々木出席)
- 六日(水) 公費助成連絡拡大代表者会議(於・至徳館三〇四会議室。奈良出席)
- 七日(木) 更衣ロッカー耐震補強施工
- 七日(木) アーカイブズ事業の取組みについて他大学調査出張(日本大学、東海大学、成蹊学園。高安)
- 一二日(火) 立命館小学校授業見学(奈良)
- 一四日(木) 『立命館百年史紀要』第二十一号への執筆依頼の為、平井英嗣学生部担当部長訪問(奈良)
- 一五日(金) アーカイブズ事業の取組みについて他大学調査出張(明治大学、上智大学、学校法人学習院。高安)
- 二〇日(水) 自衛消防組織F地区隊会議、消防施設・避難器具等巡回確認
- 二二日(金) アーカイブズ事業の取組みについて他大学調査出張(早稲田大学、神奈川大学、慶應義塾。高安)
- 二七日(水) アーカイブズ事業の取組みについて他大学調査出張(追手門学院。奈良)
- 二八日(木) アーカイブズ事業の取組みについて他大学調査出張(広島大学、広島女学院大学。高安)
- 二九日(金) 中川家生家資料について打合せ(佐々木、長谷川、田中)
- 七月 三日(火) 計画停電対応打合せ(於・至徳館三〇四会議室。
- 四日(水) 佐々木
- 六日(金) アーカイブズ事業の取組みについて他大学調査出張(関西学院大学。奈良)
- 九日(月) アーカイブズ事業の取組みについて他大学調査出張(福岡大学、福岡女子大学。高安)
- 十一日(水) アーカイブズ事業の取組みについて他大学調査出張(同志社大学。奈良)
- 一二日(木) 八重樫文経営学部准教授、「経営学部50周年記念誌」掲載写真閲覧の為来室
- 一三日(金) 浪江巖名誉教授、「経営学部50周年記念誌」寄稿用資料閲覧の為来室
- 一四日(金) 編集委員会常任委員会について川口総長、長田理事長、服部副理事長への事前説明(於・朱雀。甲賀、佐々木)
- 一八日(水) 全国大学史資料協議会幹事会、研究会(於・岡山県記録資料館。奈良出席)
- 一九日(木) 消防警察事前点検・打合せ(佐々木)
- 二〇日(金) 奈良勝司非常勤講師、中川小十郎研究会資料閲覧の為来室
- 二〇日(金) 自衛消防隊について本部隊との打合せ(佐々木)
- 二四日(火) 凸版印刷株式会社、「学園新聞」デジタル化作業(於・コートルーム) 三〇日(月) 『通史』に関する打合せ(佐々木、久保田)
- 二五日(水) 第七回中川小十郎研究会(於・キャンパスアジア事務室。佐々木、奈良、長谷川、田中、寺澤)
- 二五日(水) アーカイブズ事業の取組みについて他大学調

查出張（関西大学。奈良）

今宿男教育開発推進機構教授、「立命科」授業について打合せの為来室（佐々木応対）

中川家生家資料整理進捗状況について打合せ（佐々木、長谷川、寺澤）

北消防署による西園寺記念館消防査察（佐々木）

アーカイブズ事業の取組みについて他大学調査出張（桃山学院。奈良）

中川家生家資料整理進捗状況について打合せ（佐々木、長谷川、田中）

二〇一二年第一回立命館百年史編纂委員会常任委員会開催（於・朱雀キャンパス六〇一東会議室）

二日（木）

文書情報管理部会（於・至徳館三〇一会議室。奈良出席）

三日（金）

管理職研修会（於・朱雀キャンパス大講義室。佐々木出席）

九日（木）

国際平和ミュージアムとの将来の連携に関する打合せ（於・教育文化事業課。奈良）

文学部学生野間るりさん他一名、国際平和ミュージアム企画についての資料調査の為来室（奈良、宮崎）

早稲田大学教育研究科科長・湯川次義氏、早稲田大学教育総合研究所・木田竜太郎氏、新学制における女性の大学教育についての資料調査の為来室（佐々木、久保田応対）

二二日（水）

派遣職員鈴木杏里氏出勤

図書館保管資料収集について下見、打合せ（奈良）

二七日（月）

図書館保管資料収集について下見、打合せ（奈良）

三一日（金）

九月 四日（火）

良、久保田）岩井忠熊名誉教授、「百年史紀要」への（研究者より依頼を受けた）原稿掲載依頼の件で来室

五日（水）

文学部学生野間るりさん他、国際平和ミュージアム企画についての資料調査の為来室（奈良、久保田）

六日（木）

図書館より衣笠学舎模型移管搬入、西園寺記念館一階ロビーに設置
井上隆夫氏、佐々木惣一学長名卒業証書寄贈の件で打合せ（於・朱雀キャンパス第四応接室。百年史編纂室参与伊藤昇氏、佐々木）

一八日（火）

『百年史紀要』座談会関連「生徒実態」についてのヒアリング（立命館中学校・高等学校。奈良）

一九日（水）

帝京大学講師・小山俊樹氏、里見日本文化学研究所主任研究員・金子崇徳氏、里見岸雄関係資料調査の為来室（佐々木、長谷川応対）

『百年史紀要』座談会関連「生徒実態」についてのヒアリング（立命館山中学校・高等学校。奈良）

総務部研修（於・朱雀キャンパス多目的室）

二〇日（木）

二二日（金）

『百年史紀要』座談会関連「生徒実態」についてのヒアリング（立命館宇治中学校・高等学校。奈良）

二四日（月）

齋藤重課長、「百年史紀要」執筆用資料調査の為来室
救命講習会（於・以学館多目的ホール。佐々木参加）

- 二七日(木) 資料収集について図書館と打合せ(於・図書館、奈良、久保田)
- 二八日(金) 編纂室所蔵重複資料リストの整理に関する打合せ(佐々木、奈良、倉本、鈴木)
- 一〇月 一日(月) 第八回中川小十郎研究会(於・キャンパスアジア事務局、佐々木、奈良、長谷川、田中)坂本和「百年史編纂室顧問と『通史三』」について打合せ(伊藤部長、佐々木)
- 二日(火) 今尾古今堂様、寄贈資料表装の件で来室(佐々木、倉本)
- 三日(水) 編纂室内バーテーション移動
- 四日(木) 校友荒木敏氏と「衣笠寮」看板寄贈の件で打合せ(於・朱雀キャンパス校友会長室、佐々木、久保田)
- 五日(金) 『百年史紀要』第二十一号企画座談会「私立大学これまでこれから」開催(於・朱雀七〇三会議室、服部健二、鮎山恵、松宮孝明、桂島宣弘、田尻実、三並高志、石坂和幸、浅野昭人、甲賀光秀、事務局・奈良、久保田)
- 七日(日) 「開かれた教育の扉 西園寺公望と中川小十郎」先人に学ぶガリレアフォーラム(於・ガリレア亀岡、佐々木参加)
- 一〇日(水) 一一日(木) 大学史資料協議会総会・全国研究会(於・同志社大学、田尻部長、佐々木出席)
- 一四日(日) 『百年史紀要』第二十一号企画座談会「附属校これまでこれから」開催(於・西園寺記念館K二〇四会議室、上杉兼司〈深草〉、西川隆史、宇治、江川順一〈慶祥〉、小山寛一〈守山〉、甲賀光秀、事務局・佐々木、奈良)
- 一九日(金) 井上隆夫氏より寄贈の佐々木惣一学長名卒業証書について京都新聞との打合せ(広報課、百年史編纂室参与伊藤昇氏、佐々木)
- 二五日(木) 『通史三』関係予算執行について財務経理課と打合せ(於・朱雀キャンパス財務経理課、佐々木)
- 二六日(金) 二二六日(金) 自衛消防業務講習(於・京都市市民防災センター、佐々木出席)
- 二九日(月) 管財課竹田佳正氏、中川家紋章について調査の為来室(久保田)
- 三〇日(水) 第九回中川小十郎研究会(於・啓明館日本史共同研究室、奈良、長谷川、寺澤)
- 三一日(水) 編纂室レイアウト変更作業
- 二二日(金) 日本写真印刷株式会社田邊孝氏『百年史紀要』第二十一号の件で打合せの為来室(奈良、倉本)
- 二二日(金) パソコン利用説明会(於・至徳館三〇四東、佐々木、奈良出席)
- 二二日(金) 株式会社クレオテック大野木秀男氏、大井賢一氏、「学園史資料収集チラシ」作成についての打合せの為来室(佐々木)
- 二二日(金) 新任職員研修にて百年史編纂室紹介、見学(佐々木)
- 二二日(金) パソコン利用説明会(於・至徳館三〇四東、久保田、倉本、鈴木出席)
- 二二日(金) リサーチオフィス(衣笠) 書庫資料調査(奈良、久保田)
- 二二日(金) 川口総長、長田理事長と『通史三』に関する打合せ(甲賀室長、伊藤部長)
- 二二日(金) 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会全国大

会（奈良参加）

- 二二日（月） 中川家文書目録統一に関する打合せ（佐々木、長谷川、田中、寺澤）
- 一三日（火） 辻村寛名誉教授宅へ「ガラス乾板写真」の選定についての相談の為訪問（久保田）
- 一四日（水） 全学禁煙キャンペーン要員参加（奈良）
- 一六日（金） 京都大学人文科学研究所教授籠谷直人氏、¹²⁾台湾研究者来室の件で事前打合せの為来室（佐々木、長谷川応対）
- 一九日（月） 辻村寛名誉教授、「ガラス乾板写真」の調査報告の件で来室（久保田）
- 二〇日（火） リサーチオフィス（衣笠）学而館地下倉庫資料収集調査（奈良、久保田）
- 二六日（月） 事務パソコン入替え作業（於・西園寺記念館）国際関係学部より資料移管
- 二八日（水） 大日本印刷野口智久氏、和田文氏『通史三』製本にかかわる打合せの為来室（佐々木）
- 二九日（木） 全学禁煙キャンペーン要員参加（奈良）
- 二二日（月） 台湾より中央研究院台湾研究所謝国興所長、鐘淑敏氏資料調査の為来室（坂本顧問、佐々木、長谷川、田中、寺澤応対）
- 四日（火） 全国大学史資料協議会西日本本部会第四回研究会（於・京都大学。奈良出席）
- 七日（金） 第一〇回中川小十郎研究会（於・啓明館日本史共同研究室。佐々木、奈良、長谷川、田中）
- 一一日（火） 教職員証写真撮影（於・至徳館三〇四会議室）
- 一二日（水） 「R2020財政計画」についての説明会（於・至徳館三〇一会議室。奈良出席）
- 一三日（木） 大日本印刷、「学園史資料収集チラシ」作成に

二〇一三年

- 一七日（月） ついての打合せの為来室（佐々木）
- 二〇日（木） 『百年史紀要』中川家資料整理の執筆について打合せ（佐々木、長谷川、田中）
- 二二日（金） 小原輝三氏、ご本人寄贈資料の調査・閲覧の為来室（佐々木応対）
- 二五日（金） 校友父母課渡部徹氏、「二〇一二年度立命館大学校友会卒業五〇周年記念祝賀会」資料借用の為来室（奈良）
- 一月 七日（月） リサーチオフィス（衣笠）所管西園寺公望関係資料調査（於・学而館地下書庫。山崎有恒文学部教授、奈良、長谷川、田中）
- 一〇日（木） 新年祝賀会（於・以学館一号。佐々木、奈良、高安、久保田）
- 一五日（火） 新任職員研修にて及び百年史編纂室紹介、見学（佐々木）
- 一八日（金） 広報課蔵重暢宏氏、YouTube動画アップ映像について打合わせの為来室（奈良）
- 二五日（金） 教育文化事業課岸本菜穂美氏、文学部学生野間りさん他、国際平和ミュージアム企画についての資料借用の為来室（奈良）
- 二九日（木） 第一一回中川小十郎研究会（於・山崎研究室。長谷川、田中）
- 全学禁煙キャンペーン要員参加（奈良）

二〇二二年度 百年史編纂室事務局会議開催日

二〇二二年

四月一〇日（火）

第一回

二四日（火）

第二回

五月八日（火）

第三回

二二日（火）

第四回

六月五日（火）

第五回

二六日（火）

第六回

七月三日（火）

臨時

一〇日（火）

第七回

九月二五日（火）

第八回

一〇月二六日（火）

第九回

十一月六日（火）

第一〇回

二七日（火）

第一一回

二〇二三年

一月二日（火）

第一二回

二〇二二年度 『立命館百年史 通史三』 検討会開催日

二〇二二年

四月一〇日（火）

通算第六五回

再通読稿 第四章、第五章の検討

第一章～第三章「はじめに」短縮案についての検討
口絵写真の検討

二四日（火）

通算第六六回

第一章～第三章「はじめに」短縮案についての検討
結びにの検討

五月 八日（火）

通算第六七回

略年表（学園の動向、参考事項）の検討
略年表（学園の動向、参考事項）の検討

引用・参考資料一覧について

二二日（火）

通算第六八回

顧問、常任委員への最終確認用原稿発送についての
確認

「校正要項」、同「別紙一覧表」の確認

六月 五日（火）

通算第六九回

立命館総合資料センター（仮称）の基本方針につい
て

二六日（火）

通算第七〇回

常任委員の最終確認による意見集約状況について
総長名「序」の修正案について
常任委員会の開催に向けて

七月一〇日（火）
九月二五日（火）

通算第七一回
通算第七二回

常任委員会に向けた最終確認

編纂委員会委員からの意見集約の状況について

最終の「精読」作業による修正等の状況について

発刊スケジュールについて

あとがきについて

執筆者一覧表、執筆料について

修正の状況と発刊スケジュールについて

あとがきについて

執筆者一覧表、執筆料について

巻頭資料、巻末資料について

あとがきについて

『年史』編纂等にかかわる留意点について

口絵、あとがきなどについて

『通史三』発送について

『通史三』刊行記念祝賀会に向けて

『資料編三』作成の基本方針について

二〇一三年 一月二日（火）

通算第七六回

二七日（火）

通算第七五回

一月 六日（火）

通算第七四回

立命館百年史紀要 規程（案）

一．（目的）

立命館百年史紀要（以下「紀要」と称す。）は、立命館学園史に関わる資料の調査報告、研究成果、論文等を掲載する。

二．（編集委員会の設置、権限と責任）

- （一）紀要を編集するために、立命館百年史紀要編集委員会（以下「編集委員会」と称す。）を置く。
- （二）編集委員会は、執筆依頼、掲載順序、体裁および校正等の権限および編集責任をもつ。

三．（掲載内容区分）

掲載内容の区分は、論文、研究ノート、資料紹介、調査報告、その他とする。

なお、編集委員会が必要と認めた場合は、複数の掲載文をまとめた「特集」を組むことができる。

四. (編集委員会の構成)

- (一) 編集委員会は、百年史編纂室長、同副室長並びに室長が委嘱する委員で構成する。
- (二) 編集委員会委員長は、百年史編纂室長とする。
- (三) 編集委員会の事務は、百年史編纂室が執る。

五. (原稿)

原稿は、編集委員会の執筆依頼に基づき、執筆要領に従って記述する。

六. 本規程に定めなき事項、その他必要な事項については編集委員会で決定する。

七. 本規程の改廃は編集委員会が行なう。

附則…本規程は、二〇二二年八月一日から施行し、四月一日に遡及して適用する。

立命館百年史紀要 執筆要領

※ 執筆要領は執筆依頼時に送付する。

1. 書式

①本文：10.5 ポイント、縦書き、1 頁は 48 字×17 行=816 字

②数字は漢数字。ゼロの漢数字表記は次の通りとする。

1926（大正 15）年 12 月 22 日 → 一九二六（大正一五）年十二月二日

③図表は、図一、表二という形で、それぞれの図と表に一連番号を付し、図のタイトルは図の下、表のタイトルは表の上につける。

④本文の表紙にタイトル・執筆者名をつける。

⑤参考文献は本文の終わりに一括する。本文中該当箇所の右肩に一)、二) のように示す。

⑥参考文献の記述記載は次の通りとする。

単行本：著（編）著名『書名』出版社、出版年、頁

論文：著者名「論文名」『雑誌名』、巻、号、出版年、頁

新聞：新聞名、年月日、頁

ホームページ：著者名「資料の名称」（URL 最終検索日）

例：日本学術会議「日本の展望－学術からの提言 2010」

（[http//・・・](http://...) 2011 年 12 月 1 日）

⑦注記は本文の最後、参考文献の前に一括していれ、本文中の該当箇所の右肩に注一)、注二) のように示す。

2. 原稿の分量

一原稿あたりの分量は、本文・注・図表・写真・参考文献などを含めて A 4 版〇〇枚以内（目次を除く）とする。（執筆依頼時に相談する）

3. 提出時の様式

原稿はワープロ（.doc または .txt）とし、原稿の提出は、印刷物とデータ（メール添付 または メディア納品）とする。

本文中に添付する写真・表等は以下のフォーマットとする

①写真 .jpg または .pdf サイズは 500KB 以下。

②表 .xls または .pdf サイズは 1MB 以下。

③図 .ppt または .pdf サイズは 1MB 以下。

4. 校正

①執筆者校正は、原則として二校までとする。

②座談会等会話記録の筆耕原稿は編集委員会の責任編集とし、出席者の校正は原則として一校のみとする。

あとがき

(一)『立命館百年史紀要』第二十一号は『立命館百年史通史三』の発刊と時をほぼ同じくして発刊される。『通史三』発刊の意味や編纂の苦勞については、「これまで」と「これから」をキーワードとして巻頭言で述べられている。「あとがき」も巻頭言に倣って本紀要の「これまで」と「これから」を簡単に整理してみる。

(二)紀要の「これまで」については、すでに紀要第二十号に掲載の紀要の総目次をご覧いただければ自ずから紀要の学園史と『通史』編纂に果たした意味や役割をご理解いただけるものと思う。筆者が之急ぎで紀要の一号から二十一号までの目次から掲載されたもの(論稿)を集約すると、論文と研究ノート・試論や史料紹介などの論文系のものが約一二〇篇、座談会やヒアリングなどが約四〇篇、「立命館を築いた人びと」や随想、回想など個人に焦点を当てたものと個人の思い出的なものが約五〇篇近く、研究会や調査のまとめや報告と記録が約二〇篇、統計と年表が約一〇篇、百年史編纂に関するものやその他のものがあり、全体で二七〇篇を数えることになる。

(三)紀要のこれらの論稿、とくに論文系のは、それぞれが学園の歴史的事実を紡いでさまざまに歴史模様を織り上げている。それぞれの筆者はその学園観や歴史観によつて歴史的事実を紡いで解釈や説明をされ、歴史模様を織り上げられている。歴史模様には二つの意味がある。一つは、これらの歴史模様が学園の歴史を深め、あるいは豊富化することに

貢献してきたことである。もう一つは、読者が歴史模様からそれぞれの教訓を引き出されたことであろうことである。教訓は現在の問題意識から出てくるものであり、このことによつて歴史的事実が過去のそれとしてではなく、現在から未来へと繋がる課題へと転化することになる。こうして各論稿が現在から未来に繋がるものとなり、また、歴史の制約や限界を示すものとなる。学園に限らず社会の組織や機関の歴史は過去の記述ではなく、それを通して現在の問題や課題を克服し、未来への展望を切り開くものでなければならない。少なくとも紀要の論稿はこの役割を果たしてきた。「歴史とは常に現在の歴史である」とか「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」という名言の意味もここにあると考える。紀要は一九九三年三月の第一号より本二十一号までこの二つの仕事を地道に果たしてきた。

「『百年史』刊行を目指す調査・研究がスタートし」、論文をはじめとする『立命館百年史紀要』の二七〇篇に及ぶ論稿を「立命館百年史編纂の事業がこの紀要の積み重ねを一つの土台として」進められ、『通史三』が刊行されたことになり、『立命館百年史紀要』はその役割を終えることになる(引用は紀要第一号「序」(立命館百年史編纂室長 松岡正美))。

これまで学内外から紀要に貴重な論稿をいただいた筆者の方々はこの場を借りて深甚の御礼を申し上げる。

(四)紀要の「これから」については、本号に資料として掲載している「立命館史資料センター(仮称)の設置について」(常任理事会二〇二二

年一月七日承認）をお読みいただければ、同センターの学園アーカイブズの「紀要」として装いを新たにして発刊されることになるであろう。しかし、これがどのような形のものとなるのかは今後の検討を待たなければならぬ。いずれにしても『立命館百年史紀要』は「立命館史資料センター（仮称）」（以下「史資料センター」という）のもとで新たな使命と役割のもとに新たな装いで出発することになるであろう。

この「紀要」がどのようなものになるのかは、「史資料センター」が「立命館史資料センター（仮称）」の設置についてで提起された方向と内容をどのように具体化していくのかによる。また、このことは百年史編纂室の「これから」のことでもある。「史資料センター」は提起をさらに充実させ豊富にして立命館らしい特色や特徴のあるものとしなければならない。

(五) 最後に、百年史編纂の実務を担ってきた百年史編纂室が、年史編纂の「これから」に役立つ整理を本紀要で行った。それは資料「『年史』編纂等にかかる留意点について」「立命館百年史 通史三」の編纂等の備忘録からである。これは、『通史三』の編纂の実務に携わってきた百年史編纂室事務局が実務の視点から編纂にかかわる「これまで」の実務上のハウトゥなどについてのまとめたものである。たとえば、年代を跨って取り組まれている事業についての調整や点検などの過程で、どこか一つの記述や表現をそれまでのものと変えれば、それは年代を跨って影響し、その度に一から点検をやり直すことになる。年史の編纂の過程ではこのようなことがたびたび起こる。このような『通史三』の編纂

にあたって実務的に行きつ戻りつしたことや手戻りしたことなどの経験を、実務の手はずや事前の準備事項などとしてまとめたものである。学部などの機関がその『年史』を編纂しようとする際に参考にしていたければ幸甚である。

最後になりましたが、論稿を寄せていただいた方々、紀要の編集に尽力いただいた方々、読者の方々、そして百年史編纂にご協力とご支援をいただいた方々すべてに深甚の感謝を申し上げ、「あとがき」を終わります。

（百年史編纂室部長 伊藤 昇）

立命館百年史紀要 第二十一号

二〇一三年三月二八日発行

編集 立命館百年史編纂室

京都市北区等持院北町五六―一

電話(〇七五) 四六五―八二〇九

FAX(〇七五) 四六五―七八五九

発行 立命館百年史編纂委員会

京都市中京区西ノ京朱雀町一

印刷 日本写真印刷株式会社